

# シシーの世界

《私家版》評伝

私のオーストリア皇妃エリーザベト像

勝岡 只著



この書を故津田正夫氏に捧ぐ

# シシーの世界

〈私家版〉評伝

私のオーストリア皇妃エリーザベト像



勝岡 只 著

## はしがき

この歴史上の人物、オーストリア皇妃エリーザベト（愛称シシー）については、序章でも述べているように、最近では、一部の日本人のなかで知られるようになってきた。

この本が発行される二〇〇九年は、天皇成婚五〇周年であると同時に、ロミー・シュナイダー主演による映画「プリンセス・シシー」（参考(4)参照）の日本公開が同年であることから、同映画を上映した東宝が同じ五〇周年を記念してか、同作品のDVDを発売している。

本書はそれに便乗した即席の評伝ではない。筆者は、あとがきにも述べたように、エリーザベトの生涯について五〇年以上に亘って調べてきた。今回の執筆にあたって、上述の映画についても、バレリーナのシルヴィ・ギエムが述べている（参考(3)参照）ように、この映画がそれを見たヨーロッパ人にエリーザベトの本当の姿を正しく伝えていないと述べたこと、一〇年ほど前から日本でも上演されているミュージカル「エリザベト」（参考(3)参照）もまた、彼女の一面だけが強調されているにしか過ぎないと感じた筆者は、それらを是正させたいとの一念もあった。

エリーザベトに関する日本語による紹介は、すでに、エリーザベト伝記の第一人者であるブリギッテ・ハーマン女史の訳書（翻訳はドイツ語版、構成はハーマン女史本人による多少割愛した英語版に準拠している）をはじめ、ほかにも何冊（巻末の出典及び参考文献参照）がある。そのほか、日本の歴史小

説家藤本ひとみ氏による大部の著作（二〇〇八年。講談社）もある。

筆者は、オーストリアやドイツの古文書館等からエリーザベトやフランツ・ヨーゼフなどの当事者、エリーザベトを見聞した同時代の証言者及び新聞等の貴重な資料に直接当たって調べたハーマンのような術も機会もなく、その能力もない。そこで、同氏をはじめとする数多くのドイツ語の著作の一部（翻訳書も含む）を参考にさせてもらったに過ぎない。

また、藤本氏の著作との関連については、筆者は遥か以前から執筆を開始し、同書が発刊されるころにはほとんど九割以上筆が進んでいたこともあり、その影響はまったく受けていないが、本書上梓の時点まであえて意識的に一ページも目を通していないので、どのような内容なのか知らない。

本書の特色は、多くの資料をとおして語られているエリーザベトの内面に勝手に踏み込んで、筆者の主観からエリーザベトの心の世界を抉り出そうとした試みである。ロミー・シュナイダー主演の映画では甘い青春物語として軽く描いており、その他の多くの著作等の紹介のなかで全体的に言えることは、筆者の知る限りでは、批判の紹介を主体とした彼女の言動であったり、暗殺された悲劇性に同情したりしていることが中心で、最後には、読者や鑑賞者にその判断を委ねている。

それらは、伝記の常道といえるオースドックスな紹介であろう。それに対して、「評伝」と謳うものの、筆者のようにエリーザベトの内面を勝手に忖度することはむしろ邪道かもしれない。しかし、それが成功したかどうかについては別として、他の伝記作家があまり踏み込んでいない彼女の心の内面に、研究不足や見当違いがあったとしても自分なりに迫りたかったからである。あえてその愚を冒す筆者は身勝手なエリーザベト礼讃者と断じられようと覚悟の上である。

さてそれはそれとして、筆者は、その気持を率直にこの本の表題に凝縮したつもりである。メインタイトルは、一九九五年にベストセラーになったヨースタイン・ゴルデル著『ソフィーの世界』に、サブタイトルは、小林秀雄賞を受賞した二〇〇六年発刊の内田樹著『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書）にあやかっただけではない。内田氏が「はじめに」で述べている「これは私個人の知的関心に限定して書かれたユダヤ人論である」を多少言い換えて、「これは私個人の思い入れの過ぎたエリーザベト像である」というのがもっとも正直な気持である。それらのような経緯や趣旨から、これらのタイトルが本書にもっとも相応しいと思ったからである。

なお、章の立て方（すべて地名）から、本文全体が年月の順を追った編年体ではなく、必ずしもすべてが年月順でない記事本末体（内容を中心としてその始末をまとめてゆくもの）的な記述にしてある。そのため、一部同じ内容の記述が繰り返しとすることがあるが、ご容赦願いたい。また、その補完するものとして、参考②の「年表及びその歴史背景」をも参照してほしい。

また、筆者は、とかく、思っていることをすべて言うとか書くかしたくなる「たち」なので、脱線した箇所とか言わずもがなの箇所とかが多々あると思われるが、大目に見ていただければ幸甚である。

出典がドイツ語のものについてはすべて筆者の訳出であるので、訳文が未熟であることもお許し願いたい。

# 目次

はしがき..... 3

序章 蘇ったシシー..... 10

第1章 ポッセンホーフエン——伸びやかな生い立ち..... 18

(1) エリーザベトの出生 (2) バイエルン王国

(3) エリーザベトの血族 (4) エリーザベトの家族

(5) 故郷ポッセンホーフエン (6) 20世紀末のポッセンホーフエン

第2章 バート・イシユル——運命的な出会い..... 46

(1) ザルツカンマーグート地方 (2) ハプスブルク家の歴史

(3) フランツ・ヨーゼフの即位 (4) フランツ・ヨーゼフの見合い

(5) 運命的な出会い (6) バート・イシユル散歩

第3章 ヴィーン——性に合わない宮廷生活……………84

(1)結婚式 (2)花嫁としての悩みと苦しみ

(3)姑との確執 (4)四面楚歌

(5)爆弾を抱えた内政 (6)厳しい外交と戦争

第4章 ブダペスト——ハンガリーへの思い入れ……………122

(1)ハンガリーの歴史 (2)三月革命

(3)イーダとマリ (4)デアークとアンドラーシ

(5)ハンガリー建国千年祭 (6)ブダペスト散歩

第5章 マデイラ——療養と旅の始まり……………164

(1)温泉と療養 (2)マデイラ

(3)美容とダイエット (4)旅・旅・旅

(5)詩作と読書 (6)毀誉褒貶

第6章 ゲデレー——乗馬への情熱……………206

(1)エリーザベトと乗馬 (2)ゲデレー

(3)イギリスでの乗馬 (4)アイルランドでの乗馬

(5)乗馬との訣別 (6)その後のゲデレー



第7章 フュッセン——親族との関わり合い……………240

- (1) 又従弟ルートヴィヒ二世
- (2) シシーの兄弟姉妹
- (3) 父マックスと母ルドヴィカ
- (4) フランツィの弟たち
- (5) 義母ゾフィー大公妃
- (6) ルートヴィヒ二世の足跡

第8章 マイヤーリング——家族愛のすれ違い……………278

- (1) ルードルフ
- (2) マイヤーリング事件
- (3) ギーゼラとヴァレリー
- (4) 夫・父としてのフランツィ
- (5) 妻・母としてのシシー
- (6) よそ者シュラット夫人

第9章 コルフ島——漂泊の時代……………324

- (1) ヘルメスヴィラとアキレイオン
- (2) 散策と称する強行軍
- (3) 自然との対話
- (4) 心の世界と死生観
- (5) シシーの世界観
- (6) その後のアキレイオン

第10章 ゲンフ（ジュネーヴ）——永遠への旅立ち……………372

- (1) 最後の旅への出発
- (2) 歴史的瞬間
- (3) 家族の反応
- (4) オーストリアの反応

- (5)ハンガリー国民の追悼  
(6)1998年の没後百年祭

終章 シシーの生涯は何だったのか……………404

参考 (1)主な脇役たちのその後の生涯……………420

(2)年表及びその歴史背景……………428

(3)シシーを取り上げた芸術作品……………438

(4)映画に描かれたシシー……………454

あとがき……………472

注……………487

出典及び参考文献……………494

## 序章 蘇ったシシー

### 没後百年のエリーザベト展

もう一〇年一昔の旧聞に属することになるが、一九九八年春、オーストリア政府は、四月から翌一九九九年二月まで、皇妃エリーザベト没後百年祭を首都ヴィーンをはじめとするオーストリア各地で行うことを決定した。日本においては、同国の在日政府観光局及びにオーストリア航空が三月二六日に、朝日新聞朝刊紙上では見開き全二ページをカラー広告で飾る大キャンペーンを開始している。

この百年祭は、同国では、首都のヴィーンをはじめ、バート・イシュル、バーデン、その他皇妃エリーザベトゆかりの各地でさまざまな展示や催し物が行われた。また、それに呼応して、その他の国々でも各種の展示や催し物が発表され行われた。すなわち、ハンガリーの首都ブダペストとゲデレー、ドイツのシュタルンベルク湖畔、スイスのジュネーヴ（ドイツ語でゲンフ）とモントルーなどである。

これらの催し物等は、最長のヴィーンの四月二日から一九九九年二月までの長期的なものをはじめとして、春の一時期、夏の一時期、エリーザベトの祥月命日に当たる九月一〇日前後など特定の期間や期日に限定して各地で同時に平行して行われたものもあった。

そのため、日本に住む筆者がそれらのすべてを見ることは到底不可能であり、結局は八月中旬から九月上旬までの四週間で、オーストリアのヴィーン、バート・イシュル、バーデン、シュロスホーフと、

ハンガリーのゲデレー、スイスのジュネーヴのみを訪れることにした。

ところで、それでは、主人公であるエリーザベトとはどのような人物なのか。しかし、ここでは立ち入らないことにする。なぜなら、このエリーザベトの生涯を浮き彫りにさせることが、本書の主題であるからである。

展示や催し物が行われた都市や会場については、筆者が見聞したうちその一部は関連の各章で詳細に説明するので、ここではそれ以外の箇所の展示等についてのみ説明するにとどめたい。訪問しなかった箇所の特徴については、ブダペストのように行事が中止となったものもあるほか、変更となったものもあると思われるが、あえて確認せずそのまま手許にある資料の説明を拝借することにする。

先ずはオーストリアの首都ヴィーン。エリーザベトはオーストリア帝国の皇妃となったが、ヴィーンがその行事の中心となることは、あらためて説明するまでもない。

ヴィーンでの展示は、ホーフブルク宮殿、シェーンブルン宮殿、ヘルメスヴィラの三会場に分けて行われた。第一のホーフブルク宮殿は、リング（環）と呼ばれる環状線道路の内部にある市の中心に位置するオーストリア皇帝の市内の居城で、皇妃としての公的な役割と家庭生活における私的な不満とがなймаぜとなった人となりにも焦点を当てている。ここには、現在では個人の所有となっている、長い髪を胸元で結び前に垂らしたヴィンターハルター描く若き日のエリーザベトの上半身の肖像画と、黒い衣装をつけた一八九六年のホロヴィッツ描くコルフ島のエリーザベトの胸像画があった。

第二のシェーンブルン宮殿は、ヴィーンの中心から南西約五キロほどに位置する夏の宮殿として使わ

れていた離宮であり、ここでの特徴は、一八五四年に結婚してから一年間住んだ若き日のエリーザベトの印象を集めた展示が行われた。ここでの圧巻は、あのヴィンターハルターが描いた有名な絵画に登場する夜会服、髪飾りとして付けた二七個の星型のダイヤモンドの一つ、結婚式の前夜に着たというドレスの展示であった。

最後のヘルメスヴィラは、シエーンブルン宮殿よりさらに南西に位置するラインツアー・ティアガルテン（ラインツ動物公園）の敷地内にあるエリーザベトの別荘で、ここでは、エリーザベト自身の考えや彼女が書いた詩の分析をもとに、エリーザベトが自分をどのように見ていたか、どのように見られることを望んだのか、ということテーマに取り上げている。

そのほかにも市内で、主として外国人観光客を対象としたさまざまな催し物が行われたが、それらについては省略する。ただ、エリーザベトを含め歴代の皇帝・皇妃などが葬られている、カプツィーナー教会のカイザーグルフト（一二人の皇帝、一五人の皇妃を含む一四〇人の帝室廟墓）のエリーザベトの柩の前には、いつも以上に花輪が供えられていたことを付記したい。

第二のバート・イシュルは本章に譲るとして、第三にヴィーン郊外のバーデン。ここでも五月一六日から九月一九日まで展示が行われたが、筆者にとつてはそれほど特筆すべきものと思われるものは見られなかった。そのほか、エリーザベトを記念した速歩競馬（女性に対しては当時の衣装を着用するように呼びかけていた）が七月から八月にかけて行われたようである。

第四に、ヴィーンの東に広がるマルヒフェルト平野のほぼ東端、スロヴァキアとの国境に近くの下ナオ川の左岸に位置するシュロスホーフ（宮廷の中庭の城の意）。一九九三年に行われたエリーザベト展

では、エリーザベトを描いた数多くの絵画、愛用の遺品、暗殺された時に着ていた衣服など多彩であったが、この年にはめほしいものがほとんどヴィーンその他で展示されていたこともあつてか、エリーザベトの馬術関係の物の展示に限定されていたのはやむを得ないだろう。このなかで、エリーザベトが用した馬の鞍が目を惹いた。そのことについては別途説明する。

そのほかの国々として、先ず第一にハンガリーの二都市での催しが挙げられる。ハンガリーの催行箇所としては、当初、首都ブダペストで十一月一九日に「シシー舞踏会」を、ゲデレーでは六月五日から展示を開始し、八月二〇日に馬術競技、八月二一日と二二日に「智と美のコンテスト」、九月一二日には「記念ミサ」を行うことになっていた。筆者が日本を出発する前に照会した時点で既に、ブダペストの舞踏会は都合により中止されていた。第二のゲデレーのエリーザベトゆかりの城館については本章で詳しく述べることにする。

第二のドイツでは、ミュンヘンの南にあるシュタルンベルク湖畔の二箇所催し物が行われた。その一つは、南北に細長いこの湖の北端にあるシュタルンベルク町で、五月から六月にかけてと九月上旬との二回に分けて展示を行い、五月から一〇月にかけて断続的に同湖周辺のエリーザベトゆかりの地の二時間の周遊観光や、祥月命日には船上でのガラ・アーベントの企画も用意されていた。また、エリーザベトがよく宿泊した同湖西岸のホテル・カイゼリン・エリーザベトにおける九月九日から九月一二日までさまざまな催しや、対岸のベルクにあるホテルで七日間のエリーザベトの足跡を辿る企画などが行われることになっていた。しかし、筆者の旅行上のスケジュールと合わないため、これらの企画すべて

に参加せず見送ったので、詳細はわからない。

第三のスイスでは、国際都市ジュネーヴとモントルー。ジュネーヴはエリーザベトが暗殺された地である。これについては本章で詳述する。モントルーは、エリーザベトがジュネーヴからレマン湖を船で向かう目的地となるはずだった（実は乗船前に暗殺された）スイス有数の保養地である。筆者は時間的に訪れる余裕がなかったが、ここでも二箇所での展示と、祥月命日前後に舞踏会・コンサート・映画・ミサなどの催し物が行われたことになっていた。

## 日本人の知るエリーザベト

上述の百年祭で筆者が訪問した各地では、ヴィーンを除いては日本人はほとんど見かけなかった。現在では二千万人に届こうかという日本人海外旅行者のうち、オーストリアのヴィーンを訪れる旅行者も増えてきおり、一九八七年にはホーフブルク宮殿に、生誕一五〇年を記念した「エリーザベト博物館」なるものが設けられており、そこでエリーザベトの遺品その他を見た旅行者も多いと思う。しかし、それによっても特にエリーザベトの生涯に関心を寄せている人はまだ少ないのではないだろうか。

二〇〇九年は天皇の成婚五〇周年ということで、四月にはテレビで特集番組が生まれ、新聞や雑誌では特集記事が掲載されたことは、周知のとおりである。ところが、その五〇年前の同じ一九五九年に、それに呼応するかのように、ロミー・シュナイダー主演のオーストリア映画「プリンセス・シシー」が日本で上映された。これはエリーザベトがオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフと結婚するまでを描い

た青春映画である。ヨーロッパでは大好評で、第二部、第三部と続編が製作され上映されたが、日本には輸入されなかった。

また、フランスのクロード・アネの小説「マイヤーリング」で知られ、皇太子ルードルフの心中事件を描いた一九三五年製作のフランス映画「うたかたの恋」が、前記の映画の一三年前の一九四六年に日本で公開されている。七〇歳以上のオールド映画ファンならご存じであろう。しかし、ここでは、ルードルフの母であるエリーザベトは中心人物ではない。

さらに下って、一九九二年にヴィーンで初演されたミュージカル「エリザベト」が、記録的なロングランとなつて、一九九六年に宝塚歌劇で日本でも上演され、それ以降、宝塚や東宝で現在まで、何回か取り上げている。このミュージカルをとおしてエリーザベトの生涯の一端を知った方が一番多いのかもしれない。これらのほかに、バレエやオペレッタにも取り上げられているエリーザベトであるが、筆者の知る限りにおいて、巻末の「参考」記事として取り上げているので、ここでは詳しくは触れない。

二〇〇九年は日本とオーストリア及び日本とハンガリーとが、それぞれ修好一四〇周年に当たり、その記念として一〇月一六日に、ヴィンターハルター描くあの有名なエリーザベトの肖像画及びブダペストのエリジエベト橋が記念切手として発売されていることも付け加えておきたい。

さらに、巻末の参考文献にも取り上げたが、エリーザベトに関する読み物もかなり出回っている。それに対して本書は、当時のドイツとオーストリアをはじめ関係国の歴史的背景について詳しく述べたほか、舞台となった各現地の事情についても触れているのが特徴である。ご参考になれば幸いである。



## エリーザベトとシシーの表記

さて、エリーザベト (ELISABETH) の日本語の仮名文字による表記であるが、日本語に翻訳されている書物その他のほとんどが「エリザベート」と長音が「ベ」の後による表記が使われている。しかし、ドイツ語の発音記号では「リ」の後に長音がきているので、本書ではそれにしたがって「エリーザベト」と表記した。ヴィーンに長く住んでおられたことのある塚本哲也氏によると、現地でも「エリザベート」と発音することが多いと述べられている。それにも拘わらず、筆者は敢えて表記を変えないことにした。また、因みに、彼女にゆかりの深いハンガリー語による場合には、その発音にしたがうと「エリジエベト」(原語ではERZSÉBET)と表記することになる。

もうひとつの、本書の表題ともなっている「シシー」とは皇妃エリーザベトの愛称である。巻末のドイツ語によるいくつかの参考文献にも見られるように、このシシーの愛称名については「S I S S I」「S I S I I」「S I S S Y」と、それぞれさまざまな表記がされている。これら表記の違いは、いずれも、エリーザベトの家族の中では、文字で表す前に口頭による呼称が先行していたためによるものようである。ある書物に掲載されたシシー自身の文書のコピーによると、本人は「S I S I I」と署名している。

また、日本語でも、「シシー」「シシイ」「シシイ」「シイシイ」「シイシイ」「シシ」などと表記がさまざまである。日本でのドイツ語の教育では、「S I I」は「シ」ではなく「ジ」と濁って発音すると教えられてきたが、これはドイツの中部・北部における発音に基づくもので、南ドイツやオーストリ

アでは濁らずに「シ」と発音されることが一般的である。そのため、オーストリア第二の都市SALZBURGも、日本では「ザルツブルク」と表記されるが、現地では実際には「サルツブルク」と濁らないで発音されている。

さて、オーストリア皇妃であったエリーザベトが、単なる一皇妃としてのハプスブルク王家における脇役としてではなく、数多くの著作や芸術作品に単独で取り上げられるということは、公的にも私的にもさまざまな波瀾のあったそれなりの特異な人生を送ったからである。

その全貌は、本書で詳しく述べているので、それを一読していただくとして、巻末の参考文献にも見られるように、エリーザベトの伝記には、エリーザベトを形容する言葉として、その生涯を象徴する左記のようなさまざまな副題がつけられている。

Die seltsame Frau (風変わりな女性)

Kaiserin wider Willen (心ならずの皇妃。邦訳は「美しき皇妃の伝説」となっている)

Schwalbe, Lieb' mir deine Flügel (燕よ、私もおまえの翼が欲しい)

Glanz und Tragik einer Kaiserin (ある皇妃の栄光と悲劇)

Mythos und Wahrheit (神話と事実)

Das legendäre Leben einer Kaiserin (ある皇妃の伝説的な生涯)

The tragic empress (悲劇の皇妃)

Beaute et Tragedies (美貌と悲劇)

# 第1章 ポツセンホーフエン

——伸びやかな生い立ち——

## 第1節 エリーザベトの出生

一八三七年一月二日二時四三分、バイエルン王国のミュンヒェンで一人の女の子が生まれた。父はバイエルン王国のマクシミリアン公爵、母はルドヴィカ公妃。

女の子の名はエリーザベト・アマリエ・オイゲニー。

この夜は、クリスマスイヴ（ドイツ語ではヴァイナハツアーベントという）であり、しかも日曜日であり、ミュンヒェンのルートヴィヒ通りにある宮廷内の同公爵の邸宅には多くの人々が集まっていた。子供が生まれるかもしれないと助産婦が待機していたが、助産婦が出産したことを伝えた途端、ルドヴィカ公妃の部屋は立会人としての紳士淑女で埋め尽くされ、クリスマスの空からの贈り物である幸運児として祝福された。

代母（洗礼のときの母）となったルドヴィカの長姉であり、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム皇太子の妻となったエリーザベト皇太子妃が名付け親となり、新生児に自らの名を与えた。

家族内では「シシー」と呼ばれるエリーザベトの誕生である。

同皇太子は、三年後の一八四〇年にプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世、エリーザベトも同王妃となっている。先走って付け加えれば、同国王の弟で次期国王が、統一後の初代ドイツ皇帝となったヴィルヘルム一世である。

また、シシーの正式名に付けられた「アマリエ」は、母ルドヴィカの姉で、エリーザベト王妃の双子の妹で、のちのザクセン王妃となるアマリエの名を与えられたものである。

## 第2節 バイエルン王国

バイエルンは、現在ではドイツ連邦共和国の州の一つであるが、一九世紀はじめの当時は、ドイツはまだ統一された国としては存在しておらず、いくつもの領邦国家が存在していた。バイエルンもその一つであった。

この物語を述べるに当たって、その背景となる当時のドイツの政治情勢、ひいては遙か統一前のドイツ国家の形成にまで遡って説明する必要があると思う。

われわれが高校時代に習う世界史の教科書および付随的に使う歴史地図では、正式にはこの時代までは、まだ「ドイツ」という正式の国名が載っていない。それに代わって、オーストリア帝国、バイエルン王国、プロイセン王国などの国名のほかに、その他の諸侯領や帝国都市など、地図にも載せきれないほどの領邦国家と呼ばれるドイツ独特の多くの地方国家が割拠（一七世紀には三〇〇もあったという）していた。

ただし、日本の戦国時代のように必ずしもお互いに対立しておらず、この物語が始まる少し前の一八〇六年までは、これら領邦国家の連合体としての「神聖ローマ帝国」と呼ばれるドイツ国家が存在していた。

バイエルン王国の歴史を説明する前に、現在のドイツの歴史の中心となっていた神聖ローマ帝国について説明する必要がある。

この神聖ローマ帝国は、呼称はともかくさておいて、ドイツ国家の事実上の起源となる八〇〇年のフランク王国のカール大帝（フランス語でシャルルマーニュ）の戴冠まで遡ることができる。

フランク王国はその後、八四三年のヴェルダン条約により、現在のフランス、ドイツ、イタリア三国形成の基礎となる西フランク王国、東フランク王国、中部フランク王国の三国に分裂、さらに、八七〇年のメルセン条約により、西フランク王国と東フランク王国が中部フランク王国を分割併合している。しかし、このことからすでに、東フランク王国では貴族（諸侯）の勢力が強く、次第に権力が分散してゆく。

東フランク王国時代の諸侯の一つで、ザクセン王朝（当時の実際の支配領域はともかく、現在のドイツには、ザクセン州〈州都ドレスデン〉、ニーダーザクセン州〈同ハノーファー〉、ザクセン・アンハルト州〈同マガデブルク〉という三つの州がある）を開き、初代のドイツ王となったハインリッヒ一世のあとを継いだ同王朝第二代の王オットー一世は、九五一年と九六一年にイタリア遠征を行い、九六二年にローマ教皇よりローマ皇帝の帝冠を受けて、ここに実質上の神聖ローマ帝国が誕生した。

しかし、神聖ローマ帝国の名称が使われたのは十三世紀からで、十五世紀半ば以降から「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」(Das Heilige Römische Reich deutscher Nation)の呼称が一般化している。

ドイツの皇帝がローマ教皇から戴冠を受けるといふ仕組みは、ドイツの皇帝が現在でいうドイツ国内のほかに、領域内のイタリアの政策も行うことを強いられることとなり、ドイツ本国の統治に専念することができなくなったことを意味する。その結果、上述の領邦国家が力をつける分権的な傾向に拍車をかけ、ドイツの統一が遅れる原因ともなった。

神聖ローマ帝国の皇帝は、七人の選定侯(マインツとケルンとトリールの三大司教、プファルツ伯、ザクセン公、ブランデンブルク辺境伯、ベーメン(英語でボヘミア、チェコ語でチェヒ)王で、十七世紀にはバイエルン公、ブラオンシュヴァイク・ハノーファー公の二人が加えられた)の選挙によってドイツ国王を定めるといふ方法がとられた。特に、現在のチェコ共和国のボヘミア地方がドイツの中に包含されていることに注意したい。

この神聖ローマ皇帝の地位は、一四三八年から神聖ローマ帝国が崩壊した一八〇六年まで、一八世紀の四年間(この間はバイエルンのヴィッテルスバッハ家が在位)を除き、この物語の記述の中心となるオーストリアのハプスブルク家の独占となり、十六世紀の初めからは戴冠もなく、事実上形骸化した。神聖ローマ帝国とハプスブルク家との関係は次章で述べることにする。

バイエルン王国は、一二世紀に、ホーエンシュタオフェン朝で第二代の神聖ローマ皇帝であるフリードリヒ一世(その髯が赤髯であることからバルバロッサとのあだ名がある)が、一一八〇年にヴィッテ

ルスバッハ家のオットーをバイエルン大公に任命してから七〇〇年近くもの長い間、ヴィッテルスバッハ家がバイエルン地域を支配していた。一三世紀には領邦国家としてのバイエルンを確立し、一三二四年から四七年までの間、ルートヴィヒ四世が神聖ローマ帝国皇帝に選ばれている。

その後、二世紀半以上にわたって二つから四つの分国時代を経て、一七七七年に家系断絶の結果、同じヴィッテルスバッハ家でライン地方のプファルト選定侯がバイエルンの支配を継承している。その間の一七四二年から四五年の間にカール七世が二回目の神聖ローマ帝国皇帝に選ばれている。

ナポレオンのドイツ侵略に際しては、バイエルンはナポレオンに協力的で、一八〇三年以来、アンスバッハ、バイロイト、シュヴァーベンの一部、マイン・フランケンなどの地域を獲得している。一時的ではあるが、ティロールとザルツブルクをも所有していた。

この物語が始まる前の一八〇六年、フランスのナポレオンが盟主となり、プロイセンとオーストリアの二国を除くドイツの諸領邦が加盟したライン同盟の成立（これによって、神聖ローマ帝国は崩壊）によって、バイエルンは王国になった。

初代のバイエルン国王はマクシミリアン一世で、一七九九年から一八〇五年までは選定侯、一八〇六年から一八二五年の死まで国王となっている。エリーザベトにとっては母方の曾祖父に当たるが、それらの関係については次項に譲ることとする。

エリーザベトの父母の出自であるバイエルン王国のほか、次章で述べるハプスブルク家とともに、この時代のドイツ統一における雌雄を争う、前述したプロイセンのホーエンツォレルン家の歴史について

も、併せてここで述べておきたい。

中世初期に、バルト語系のプルッセン人（プロイセン人）が、現在のポーランド北東部の地に定住したのが、その始まりとされている。

一三世紀になつて、ポーランドのマゾフシエ公が、この地のプロイセン人を征服するため、十字軍で活躍したあとのドイツ騎士修道会（ドイツ騎士団）を招致、ドイツ騎士修道会はそれを遂げると領邦主権を確立した。さらに西部地域をも獲得すると、いわゆる東方植民と呼ばれるドイツ農民の入植を行っている。しかし、この地のポーランド貴族等の反発を招き、二つの戦争にも敗れると、東西両地域ともポーランドの支配下に置かれた。

その後の一六世紀前半にドイツ騎士修道会総長に選ばれたホーエンツォレルン家のアルブレヒトは、一五二五年にプロテスタントに改宗、ドイツ騎士修道会は解体され世俗公国として、騎士修道会領をポーランド王から封土として与えられ、ここにプロイセン公国が誕生した。

一七世紀初頭、プロイセン公国はブランデンブルク選定侯に引き継がれ、さらにスウェーデン・ポーランド戦争（一六五五年～一六六〇年）に乗じて、ポーランドの宗主権から離脱した完全な主権の獲得が承認されている。

プロイセン公国は、一七〇一年に始まるスペイン継承戦争の際に、オーストリアを支持する約束のもとに、オーストリア皇帝から王国に昇格する認可を獲得し、一七〇一年一月一八日に、ブランデンブルク選定侯フリードリヒ三世は、プロイセン王フリードリヒ一世として戴冠している。

第二代のフリードリヒ・ヴィルヘルム一世は常備軍の増強に尽力し、第三代のフリードリヒ二世（フ



リードリヒ大王)は、軍事ではオーストリア継承戦争、七年戦争、第一回ポーランド分割などで領土を拡大するとともに、啓蒙絶対主義者としての諸改革や、フランスの啓蒙思想家ヴォルテールとの交流を図り、ポツダムにサンスーシー(無憂宮)を建設するなど、開明的な君主としての一面も持っていた。

フリードリヒ大王の死後、プロイセン王国は後継者に恵まれなかったが、優れた大臣の指導によって社会改革、軍事改革、教育改革などが行われ、対ナポレオン解放戦争の主役を演ずることができた。

オーストリアのメッテルニヒ主導のヴィーン体制では、絶対主義的な政治体制をとり、一八四八年には、ベルリンにおける三月革命の嵐に見舞われる。

以降の歴史については、オーストリアとの関係において本論の中で触れてゆく。

### 第3節 エリーザベトの血族

一八〇六年に初代のバイエルン国王となったヨーゼフ・マクシミリアン一世は、二度妻を迎えている。まず、先妻であるヘッセン・ダルムシュタット家のマリー・ヴィルヘルミーネ・アオグステ公女との間に二男二女を設けている。

先妻との間の系図では、同王の没後、長男のルートヴィヒ一世がその後を継ぎ、さらにルートヴィヒ一世の長男のマクシミリアン二世が第三代の国王となっている。同二世の長男で、後年エリーザベトとゆかりの深い関係となるルートヴィヒ二世は、四代目の王に当たる。ルートヴィヒ二世については、第7章で詳述することにする。

初代王妃のマリー・ヴィルヘルミーネ・アオグステと死別したかどうか手許に資料がないので不明であるが、バーデン王国の公女から嫁いできた二番目の妻であるカロリーネは、五人の王女を生んでいる。そのうち、初めの二人と次の二人は共に双子という珍しいケースであり、五番目の王女がエリーザベトの母であるルドヴィカ王女である。最初の双子で長女となるエリーザベトはプロイセン王のフリードリヒ・ヴィルヘルム五世と、次女のアマリエはザクセン王のヨハンと、三女のゾフィーはオーストリアのフランツ・カール大公と、四女のマリーは次女と同じザクセン王のフリードリヒ・アオグスト二世と結婚している。

バイエルン家の家系図によると、年下でアマリエよりも後に嫁いだマリーの夫フリードリヒ・アオグスト二世の方が、結婚三年後に先にザクセン王となっており、先に嫁いだ姉のアマリエの夫のヨハンは結婚後三二年後にフリードリヒ・アオグストのあとにザクセン王となっている。ザクセン王家の家系図がないので分からないが、フリードリヒ・アオグストの方が、ヨハンよりも王位継承の順序では上だったのかもしれない。

エリーザベトの母であるルドヴィカの三歳年上で三女のゾフィーは、品位があり、信仰心が厚く、意思力に秀で、名誉欲においては他の王女よりも強いものを持っており、さまざまな点でルドヴィカとは対照的であった。当時では、国家としてはプロイセンより上位にあるオーストリアのフランツ・カール大公に嫁いだが、のちに自らの発意により夫を皇位に就かせず、ということとは、皇妃になることを放棄し、息子のフランツ・ヨーゼフに皇位を譲っている。

このゾフィー大公妃こそが、後にエリーザベトが悲劇的な生涯を送る原因ともなる、エリーザベトの

将来の姑その人である。

これを家系図的に別記すると次ページのとおりである。

以上に見てきたように、エリーザベトにとって、初代バイエルン国王のマクシミリアン一世は母方の祖父、ルートヴィヒ二世は二親等の又従弟に当たる。

エリーザベトの名をもらつたプロイセン王妃のエリーザベト及び将来姑となるゾフィー大公妃はいずれも伯母に当たることになる。

バイエルンでは、他の王家と比較すると、代々一風変わった人物を輩出してきたと言われている。王としての政治的手腕よりも、科学、造形美術、音楽、詩歌などそれぞれの嗜好を持っていた者が多かった。

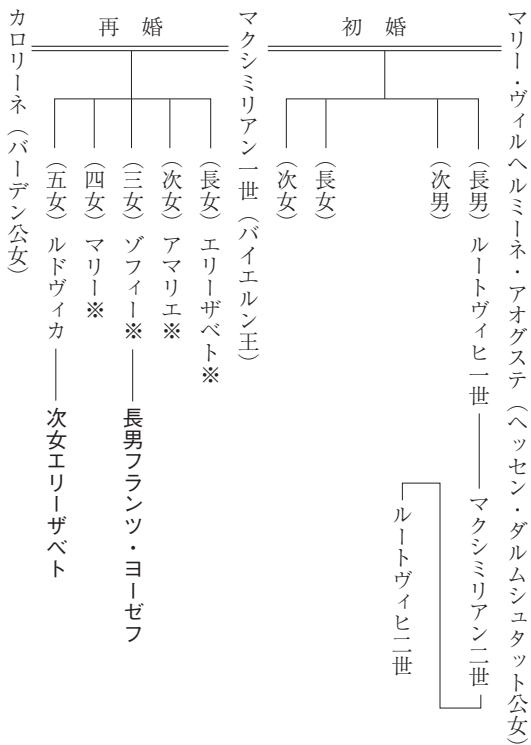
代表する例として、ルートヴィヒ一世は、茶目ついで機智に富み、芸術を愛好し、美人を好み、ヘレニズムに憧れるなど、無骨ではない文化的な面に長けていた。さらに時代を反映した国民的感覚なども備えていた。その反面、明るいかと思うと怒りっぽくなる気まぐれな性格でもあった。

美人好みとしてルートヴィヒ一世を有名にしたのは、多くの王女・女官・舞台女優などの美人画を集めたギャラリーを開設したことである。その中で、イギリスの舞姫ローラ・モンテスやギリシア美人のカタリーナ・ポツァリスの絵画は、特に象徴的である。

ローラ・モンテスは、一八四六年にミュンヘンにおいて公演を行った際、ルートヴィヒ一世のお気に入りとなり、伯爵夫人の称号まで与えられた。その権勢が国事にまで及ぶにいたり、ルートヴィヒ一

世の退位の原因にもなったほどの女性であった。

カタリーナ・ポツアリスの絵画には、ルートヴィヒ一世のギリシアに対する憧れと、ギリシアが独立



※長女エリーザベトと次女アマリエは双子、三女ゴファイーと四女マリーは双子

戦争の結果、一八二九年にトルコから独立を果たしたことに對する思いも込められており、それが、一八三二年に、イギリス、フランス、ロシアの合意のもとに、まだ一七歳であった次男のオットーをギリシア国王オットン一世として送り込むことにつながっている。しかし、オットン一世は一八六二年に、地方旅行中にクーデターを起こされて退位したあと、バイエルンに帰国している。

このほかに、顕著な例として、ルートヴィヒ二世及びその弟のオットーが挙げられる。

ドイツにおける幾多の王族の中でもバイエルンは、近親結婚の例が多いこと、特にルートヴィヒ一世やルートヴィヒ二世の特異な行動などから、変わり者が多いと揶揄的に批判されている。しかし、それを裏返して言えば、芸術に造詣の深い人物を生み出しているということができる。

同時に、時代は一八世紀末と少し遡るが、プロイセンのフリードリヒ二世や、ドイツのシユテッティンの貴族の娘からロシアのピョートル三世に嫁ぎ、後にロシアの女帝となったエカチエリーナ二世（私的な蒐集からのちにエルミタージュ美術館に発展）のように、一九世紀に入ってもなおまだ絶対君主制が残る時代に、開明的な芸術愛好の王や女帝が生まれるということは、多少行き過ぎた行動があったとしても、決して非難されるべきものではないことは言うまでもないことだろう。

ミュンヒエンにある世界的に有名な美術館アルテ・ピナコテーク（旧絵画館の意）は、マクシミリアン一世の発意により、バイエルン公家が所蔵していた絵画を一堂に集めて一般公開するために、次のルートヴィヒ一世により建設されたものである。

また、ルートヴィヒ二世は、リヒアルト・ヴァグナーのパトロンとなり、ヴァグナーの楽劇を専門に上演するため、バイロイトに祝祭劇場を建設しているほか、三つの宮殿、即ち、ノイシュヴァンシュタ

イン城、リンデルホーフ城、フランスのヴェルサイユ宮殿を模倣したヘレンキームゼー城を建設（未完成）し、バイエルン王国の財政を傾けるほどの国費をかけて造成している。

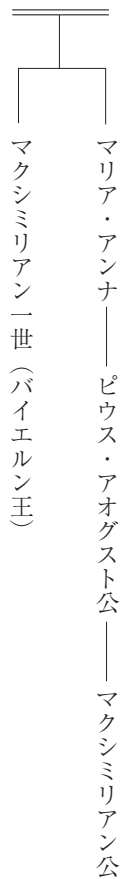
しかし、それらは、現在では、「エルベのフイレンツェ」（ドイツのエルベ河畔に開花したフイレンツェの意）とも呼ばれるドイツ東部の都市ドレスデンとともに、芸術の都と呼ばれるミュンヒェンはバイエルン州における観光都市ともなっている。

さて、一風変わった人物の中に、エリーザベトの父であるマクシミリアン公爵も含まれているようである。さらに、一部の批判者は、その血筋と近親結婚の弊を理由に、その娘であるエリーザベトも含まれたいということなのだろうか。

同時代の保守主義者はともかく、現代の自由主義的な時代にどっぷりと浸かっている批判者は、奇行及び奇癖を楯に、この先駆的なエリーザベトの思考や行動を軽視してよいのであろうか。

#### 第4節 エリーザベトの家族

エリーザベトの母ルドヴィカ公妃が、バイエルン王マクシミリアン一世と再婚の妻バーデンの公女カロリーネの娘であるのに対して、父のマクシミリアン公爵（通称マックス）は、同じマクシミリアン一世の姉で、バイエルンで最初の公爵となったビルケンフェルト・ゲルンハオゼン家のヴィルヘルムと結婚したマリア・アンナの孫であり、同い年のルドヴィカとはいとこに当たる。



ルドヴィカとマクシミリアンとの結婚は、二人が子供のときから決められており、一八二八年九月九日に行われた結婚式も、単純にそれぞれの両親の命令にしたがったものであった。

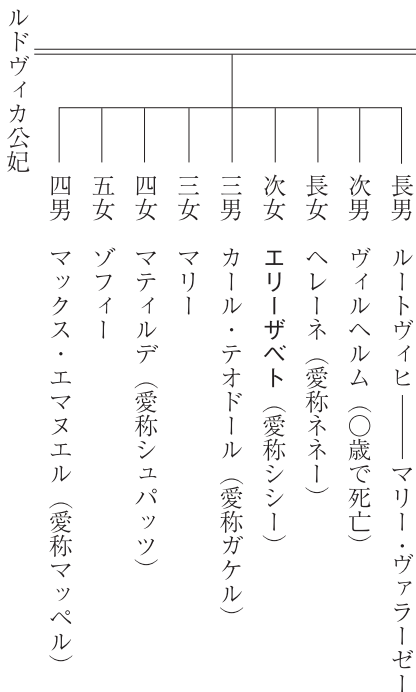
ルドヴィカも、姉のゾフィー大公妃と同様に、後年残された限られた写真で見る限りの顔だちとは異なり、若いころはかなりの美貌を誇っていたという。

ルドヴィカの姉が四人とも結婚して王妃や大公妃となっているのに対して、ルドヴィカだけが王位継承権のない「傍系」の公爵の妻という地位であったため、ルドヴィカは夫の地位について大いに不満をもっていた。

ルドヴィカは、夫に対して不満は持っているものの、マクシミリアン公爵との間に次ページのように四男五女の九人の子供を設けている。

マクシミリアン公は、傍系であること、支配者としての義務や配慮すべきことがないこと、さらに物質的にも金銭的にも心配のないため、気楽な生活を送ることができた。この生活感覚は妻のルドヴィカにも伝染し、ひいては子供たち、特にエリーザベトの性格付けにも大きな影響を及ぼすことになるのである。

マクシミリアン公爵



マクシミリアン公の趣味はいろいろあり、多岐にわたっていた。バイエルン王家の特徴ともいえる芸術的な趣味として、二万冊を超える蔵書を持つ熱心な読書家であり、文学にも造詣が深く小説や韻文詩や方言詩をものにした。

音楽に関しては、ツイターを弾き、民謡を歌い、後述のポッセンホーフエンに移ってから、小オーケストラを呼んできてコンサートを開いたり、ダンスパーティを催したりもしている。

また、駿馬<sup>しゅんめ</sup>愛好者として、ミュンヒエンの居城の中に天幕を張って曲馬場を設置して、曲馬団を招致



して興行するだけでなく、自らも乗馬の手本を示したり、馬にさまざまな技術を披露させるほどの腕前であった。この父親の影響からエリーザベトは、乗馬が最大の趣味の一つとなり、後年、高度な技術を駆使した馬術に打ち込むことになるのである。

そのほかにも、マクシミリアン公は、若いときからの習慣から、その他の趣味・道楽に打ち込むと同時に、城館に落ちつくことなくふらりと長旅に出ることも常態化していった。

マクシミリアン公は最初のうちこそ、新しく建てられたミュンヘンの居城で束縛される生活を送っていたが、結婚六年後の一八三四年に、夏の別荘として、ミュンヘンの南南西約三〇キロに位置するシュタルンベルク湖畔の、西岸北部のポツセンホーフエンに城館を建てた。

この城館はその後、マクシミリアン公の家族の生活の中心となり、子供たちもそこでの生活がそれぞれその後の人間形成に重要な役割を果たすことになる。仲間うちではこの城館を、地名を約めて「ポツシ」と呼ぶようになった。

また彼は、熱烈なギリシア愛好者でもあり、マクシミリアン二世の弟のちにギリシア国王となった甥のオットーの許にも立ち寄って、ギリシア国王と国民との間の関係についても興味を示している。

一八三一年六月二一日に長男のルートヴィヒが生まれた。その翌年に次男のヴィルヘルムが生まれたが、誕生日を迎えることなく亡くなっている。

長女のヘレーネが生まれたのは、一八三四年四月四日で、ポツセンホーフエンが建てられる数カ月前であった。その三年後にエリーザベトが生まれたが、その約一カ月後には、マクシミリアン公は、妻や

子を打っちゃったままオリエントへの大旅行に出かけている。

マクシミリアン公の子供たちは、そのすべてではないが、前述したように、何人かは愛称が付けられている。

エリーザベトのあとは、三男のカール・テオドルが一八三九年、三女のマリーが一八四一年、四女のマティルデが一八四三年、五女のゾフィーが一八四七年、四男で末っ子のマックス・エマヌエルが一八四九年に生まれている。

この九人の兄弟姉妹のなかで、エリーザベトとの関わりで比較的多く登場するのは、姉のヘレーネ、妹のマリーとゾフィーで、兄弟姉妹の成長後の生涯については、第7章で取り上げることにする。

家族は全員が、一年の大半をポッセンホーフエンで過ごすことが習慣となった。そのことは、ミュンヒェンの宮廷からも政治からも遠ざかることを意味するとともに、それらに煩わされずに、マクシミリアン家独自の生活が定着することでもあった。

マクシミリアン公は、権威とか因習的な儀礼などの何ものにも妨げられずに、自分のためだけに生きていた。このような性格が自ずとエリーザベトたちにも伝わっていったとしても不思議ではない。

ルドヴィカ公妃は、夫の放浪癖を嘆く代わりに諦めて、夫にはやりたい放題のことをやらせることにし、子供たちの将来についてのみ考えることにした。そのため、子供たちを束縛せずに、明るく自由に伸び伸びと成長させることを心掛けた。

その結果、子供たちは仲良く、冬はミュンヒェンで、夏はポッセンホーフエンで、好き勝手なことに

うち興じた。そのため、家庭教師は歓迎されず、教育はそっちのけの様相を呈していた。

また、ルドヴィカ公妃は、姉のゾフィー大公妃に比べると、信心深くなかった。このことも、エリーザベトに影響し、エリーザベトはヴィーンの宮廷における宗教行事に関しても興味を示さず、絶大な権力を握っている大司教の前でもたじろぐことはなかった。

このような生活習慣が、ヴィーン宮廷内での生活と大きな落差を生み、皇妃となってからのエリーザベトを苦しめ、苛めにあう原因の一つとなったが、ポツセンホーフエン時代のエリーザベトはそのようなことは一切知る由もなかった。

## 第5節 故郷ポツセンホーフエン

マクシミリアン公爵の城館はもちろんミュンヒエンにあつたが、家族は、冬はミュンヒエンで、夏はポツセンホーフエンで過ごすことにしていた。

ポツセンホーフエンの家は、城館というより別荘のような存在であるものの、この家族を語る場合、本宅のあるミュンヒエンよりもポツセンホーフエンでの生活が重要な役割を果たすことになるため、どうしてもポツセンホーフエンの方に話題が集中してしまう。

ミュンヒエンはバイエルン王国の首都であり、国王及びその他の親族が居住しており、特別の職責を与えられておらず、また王位継承権もないマクシミリアン公爵にとっては、その性格からも窮屈なミュンヒエンよりも、ポツセンホーフエンの方が遥かにのびのびと生活できたから当然であろう。

妻のルドヴィカ公妃にとつても、四人の姉たちに比べると恵まれた結婚ということではなく、ミュンヒエンでは肩身の狭い思いをしたであろうし、勢い、制約の少ないポッセンホーフエンの生活が合つていたのかもしれない。

そのためもあつて、マクシミリアンもルドヴィカもあまり細かいことは気にしない性格であつた。両親の育児方針といつても方針らしきものもなく、躾けも十分でなかつたし、子供たちをできるだけ自由にさせていたので、家庭内で行う教育も子供たちからはあまり歓迎されない反面、子供たちは伸がよく伸び伸びと育つていった。

マクシミリアン公の放浪癖に対して、留守番役とならざるを得ないルドヴィカは、子供たちの将来、すなわちより良き結婚に望みを託していた。

そのようなわけで、ポッセンホーフエンの家屋敷は、後年、エリーザベトが結婚したあと、ヴィーンの口さがない連中からは、家の中は雑然とし、乞食じみた暮らしふりと取り沙汰されており、一部の伝記作家も牛、小馬、犬などが我がもの顔で行動しているという記述もみられるが、それとは反対に、決して豪華ではなく、また時代遅れの感は免れないものの、清潔でござつぱりとした快適な生活が営まれていたという描写もある。

馬好きの父からその楽しさを教えられたエリーザベトは、このポッセンホーフエンで乗馬を大いに楽しんだ。この乗馬は、後述するように、後年、辛い思いをしたときに気分転換のために乗り回したり、曲馬術を習つたり、ハンガリーのゲデレーを始めとしてフランス、イングランド、アイルランドにまで

も遠征するほど、本格的な乗馬にまで発展した。

幼いときのエリーザベトは、美しくもなかったし、むしろ乗馬好きのお転婆娘といえる快活な女の子であった。おとなしく物静かで美人の姉ヘレーネとは対照的に、その明るさには人を惹きつける魅力があり、家のなかでは人気者であった。

しかし、その反面、感受性の強い一面をも持っていた。エリーザベトは少女時代からすでに、感じたことを密かにいくつもの詩に書き留めている。

一五歳になった一八五三年四月に、親友のイレエネ・パウムガルテンの弟ダーヴィトが肺炎で死んだとき、エリーザベトは「生命」の重大さに初めて気がついた。

さらに、同じ年に、公爵邸に雇われた若いリヒアルト・シャッテンシュタイン伯爵と会う機会があり、毎日会ううちにリヒアルトに魅了されていった。しかし、リヒアルトはしばらく見かけなくなったあと再び戻ってきたが、病気になっており、健康を取り戻すことなく亡くなった。

エリーザベトはこの死に打ちひしがれ、その悲しみを詩に残している。しかし、やがて若さがそれから立ち直させている。

そのあとにも、公爵邸に来た若いフリードリヒ・ローゼン伯爵に思いを寄せている。しかし、今回はその男性がエリーザベトを相手にすることがなかったので片思いに終わったが、エリーザベトの心の中は暫く満たされていた。この叶わぬ恋についてエリーザベトはロマンティッシュではあるが苦い恋として、何編かの詩に託して歌い上げている。

しかし、このエリーザベトの悩みについては、子供たちが多い両親は気がついていなかった。エリー

ザベトはそれを心の中に隠していたが、友人のイレエネだけは知っていた。

エリーザベトは、このとき体験した人の「死」について、将来における死生観にまで引きずってゆくことになる、筆者にはそう思えてならない。しかし、一方の失恋については、その直後の八月のパート・イシュル行きで癒されるのである。

多くの兄弟姉妹のなかでも特に、エリーザベトと父マクシミリアンは似た者親子とも言うことができた。エリーザベトはマクシミリアンに連れられて、農民の結婚式などで即興の音楽演奏をして小銭を稼いだ経験があった。そのときに得た貨幣を皇妃になってからも大事に保存していたが、これはエリーザベトが稼いだ唯一の金と言えるものだった。

この少女時代における父親の影響から、末席の立場とはいふものの貴族でありながら、しかも皇妃になつてからも、エリーザベトは、一九世紀半ばのこの時代の専制政治には関心がなく、このときからすでに、絶対主義的なオーストリアとは裏腹の共和主義的な考えが、萌芽ほづがしていたのである。

記述が一足飛びに、エリーザベトの結婚後に及んでしまい恐縮であるが、結婚後もエリーザベトはこのポッセンホーフエンに何度も里帰りしている。これは嫁姑が不仲であれば多々あることではある。

エリーザベトにとって、幼きころに過ごしたこの地は、やはり、嫁の逃げ場であり、懐かしき心の癒しの場である。エリーザベトは一八七〇年から最後に泊まることになる一八九四年までの二五年間に、実に二四回の夏を三週間から四週間もの間、城館の近くに建つシュトラオホ・ホテルに泊まるようになってくる。

このホテルは、一八七六年に第一級のホテルに改築しているが、エリーザベトが実家を避けたのは、皇妃として大勢の従者を連れるため、迷惑をかけないための配慮であったものと思われる。

しかし、後年、エリーザベトは両親とも仲違いしているの、後半はそれ以上の気まずい思いをしないうちでもあり、波風を立てないためでもあったとも考えられる。

このホテルのパンフレットによると、エリーザベトは、このホテルから一人で外出したり、あるいは集まった妹たちと外出したりするほか、フェンシング競技やシユタルンベルク湖での水泳やボート遊び、さらには犬を連れてのガラツハオゼンまでの散策などを楽しんだ。

ガラツハオゼンは、ポツセンホーフエンの南、同じシユタルンベルク湖畔にあり、兄ルートヴィヒの城館もある。エリーザベトは、この城館にも何回か長期間宿泊している。

なお、当時の所有者の名を冠したこのシユトラオホ・ホテルは、エリーザベトの死の七年あとの一九〇五年になって、ヴィーンの式部局からホテル・カイゼリン・エリーザベトと命名してよいと許可が与えられている。

## 第6節 20世紀末のポツセンホーフエン

筆者がポツセンホーフエンを初めて訪れたのは、エリーザベトの足跡を訪ね、併せてドイツやオーストリアの田園や山岳地方を駆けめぐるのが目的のドライブ旅行シリーズ（全一〇回）の第一回目となる一九八四年七月であった。

前夜宿泊したシュヴェービッシェ・ハルからレンタカーによるドライブ旅行で、ブルゲンシュトラールセ（古城街道）とロマンティッシェ・シュトラールセ（ロマンティック街道）の三二一キロを駆って、夏の明るさからヘッドライトも点けずに、七月一四日の夜の九時に「ゴルフホテル・カイゼリン・エリーザベト」に到着した。

筆者はそれに先立って、一九七一年にドイツに添乗旅行したときに、ミュンヒェンで土地登記所発行の地図「シュタルンベルク湖」と、既にコンパス・ハイキング用地図「シュタルンベルク」の地図を入手しており、上述のホテルもこれらの地図でその存在を知っていた。

後者の地図を頼りに、翌日徒歩で、ポッセンホーフエンの城館に赴いた。

この城館は、すでに述べているように、ヘレーネの生まれた年と同じ一八三四年に建築されたものである。筆者が訪問したときは建築後丁度一五〇年が経過しており、建設されて以降、バイエルン王国が消滅し、その後もドイツが第一次及び第二次世界大戦により敗戦を経ていること、さらに、訪問当時はドイツ連邦共和国（西ドイツ）のバイエルン州の所有に属している（？）ことを考えると、果して現在ではどのような状態となっているか不安はあった。

と言うのは、東京にあるドイツ政府観光局に問い合わせても、当時としては即答が得られなかったのではないかと懸念もあったからである。

しかし、上述のコンパス・ハイキング用地図は、発行年月が記載されていなかったものの、城のマークとともに「城」と併記されており、もう一方の土地登記所の地図には、「城」との文字だけであったがこちらは一九七一年発行とあるため、いずれも地図上にその城の存在がはっきりと記載されていた



ので、その存在に期待はしていた。

実際に行ってみると、地図上の城館が記載されているところには立派に修繕した建物が建っており、人々が住んでいる様子だった。どうやらアパート（いやマンション）に思えた。聞いてみようかとも思ったが、がっかりしてその勇気もなかった。

しかし、建物をぐるりとまわると、この城館を背景としてエリーザベトが馬に乗っている銅版画で馴染んでいた、四隅に塔のあるあの象徴的な建物が残っていたのだった。（四五ページ参照）

よく見ると、三階建ての正四角形の建物（屋根裏部屋らしい小窓がついた階も入れると四階のようである）の四隅に、四角状の塔屋が突き出ており、四階の屋上の上は見張り櫓のように凹凸の連続した稜堡で囲まれている。

四角錐の屋根の頂上にも稜堡状の冠をかぶり、その上には避雷針を兼ねた風見鶏が高々と空に向かって伸びていた。

この建物の一部を背景としてエリーザベトが馬に乗っている銅版画と、目の前の建物とを比べてみると、現実の建物の方があまりにも直線的であるが、このような鄙びた土地であることを考えると、二つの大戦で空襲にあったようにも見えないので、その後補修したように思える。なにしろ、一五〇年も前に建てられた建物であるから、そのようなことは十分考えられる。あるいは、銅版画の方が多少想像を加えて描いたのかもしれない。

いずれにしても、エリーザベト一家が住んでいたかつてのポツセンホーフエンの城館であることは間違いない。驚いたことには、この正四角形の建物は、鍵もかかっておらず、また誰もいなかったので、

無遠慮に中に入ってみた。

少し埃っぽい感じはしたが、落書きは一切見当たらず、壁も汚れてはいない。ただ、階段は絨毯はなく、階段の表面の化粧も落されており床も十分掃き清められていなかった。天井はオレンジ色に縁取られその中に花が描かれた化粧板が現存していた。壁か天井の一部から落ちた（落した）と思われるタイルがいくつか床に落ちていた。

あとから想像するに、おそらく近々に室内の改装をする直前の状態ではなかったかと思われた。そうであるとするれば、筆者が訪れたときは、部外者が中が見られる最終ぎりぎりの時期だったのかもしれない。

さて、この建物とそれに隣接した時計塔を上に乗せた小さな教会の建物とは二階建ての廊下で結ばれている。さらにその反対側の二階建ての廊下の向こうには、長くて大きなアパート式のL字形の建物が続いている。上述したように、この長い建物がアパートのような住戸になっており、一階の出入口から主婦らしき女性が出入りしていた。

一一年後の一九九五年に再び訪れたときは、完全に生け垣に囲まれて中を窺い知ることもできない状態だった。おそらく、象徴的な正四角形の建物もアパートの一部になったのかもしれない。

二〇〇七年になって、筆者が宿泊したことのあるゴルフホテル・カイセリン・エリーザベトに、第一次世界大戦後のポッセンホーフェンの城館の歴史的経緯を照会したところ、ホテルに代わって近隣のアントニック業者から回答があった。残念ながら詳しいことは記されていないが、ヴェイッテルスバッハ家とは関係のない私的なマイホーム群 (private Eigentumswohnungen) との存在があった。

しかし、これは筆者が推測したとおりの範囲内の回答で、実際はもっと詳しいことを聞きたいところであるが、貴族制度が崩壊してから百年近く経っており、その歴史を辿る資料も十分ではないと思われると同時に、地元の人にとってもそのような関心も薄れているようにも思えるので、やむを得ないこともしれない。ただ、現在では内部に入れないので、筆者が最初に訪れたときにあの特徴的な塔のある建物だけでも入ることができたことは「幸運」だったと付記されていた。

もう一つのガラツハオゼン城については、原書の伝記本には登場してくるものの、当時はまだその存在とともに場所の確認がとれなかったので、二回の取材旅行を通じても現地視察を見逃してしまった。

筆者が一九八四年と一九九五年の二回泊まった「ゴルフホテル・カイゼリン・エリーザベト」は、何故「カイゼリン（皇妃）・エリーザベト」ホテルなのかについては、前節ですでに述べてあるように、エリーザベトゆかりのホテルであった。

テラス状になったレストランから一〇段ほどの階段を降りる。階段の両側の手摺りに沿ってエリーザベトの大好きなバラが零れるように咲き誇っていた。庭に降り、綺麗に刈り込まれた芝生の上をまっすぐに突っ切ると、その奥の林に囲まれた空間に、大理石造りのエリーザベトの座像が建っていた。

足先まで隠れるような裾の長いゆったりとした衣装を纏い、右手を膝の上に置き、左手は背もたれに肘を掛けながら本を指先に挟んでいる。台座の正面には「エリーザベト、オーストリア皇妃、彼女の二五年のお気に入りの滞在の場所に」とあった。（写真は三三三ページ参照）

筆者は、その後もエリーザベトゆかりの土地をあちこち訪ねるたびごとに、例えばヴィーンのフォル

クスガルテン、ザルツブルクのヘルブルン城の公園、ブダペストのエリーザベト橋の袂、ハンガリーのゲデレーの公園、イタリアのメラノの公園等で、エリーザベトの石像または銅像を見たが、このホテルの庭園の像が、環境からしてエリーザベトが一番静かに憩っているように見えた。

テラス状のレストランで、暮れなずむシュタルンベルク湖を見下ろしながら、約一五〇年前に、幼いころから一五歳で結婚するまでエリーザベトが過ごしたこの地を、筆者は、エリーザベトの存在を知ってから二九年目にして初めて訪れ、感慨に浸っていた。

地図にはハイキングおすすぬコースがいくつもあり、そのうちのポッセンホーフエン―ヴォルフスシユルフト―フェルダフィングの一時間足らずのコースを歩いてみる。シュタルツェンバッハという小川に沿ったヴォルフスシユルフトは原生林のままのロマンチックな景観保護地域となっている。

道は適度に荒れていてそれほど多く通ったように感じられない印象だったが、一五〇年ほど前に、エリーザベトも何度も歩いて道なのだろうか。一九世紀半ばに戻ったような気がした。

一九九八年のエリーザベト没後百年祭の行事が、ここポッセンホーフエンでも行われたようであるが、残念ながら、ヴィーンその他の地で行われた行事に参加するのが日程的にも精一杯であったので、割愛せざるを得なかった。この節のタイトルが二〇世紀とあるのは、筆者は二一世紀にはまだこの地を訪れていないためである。

話は逸れるが、ミュンヒェンに「シシー博物館」がある。ヴェステンリッター通り二六番地にある、雑居ビルの地下にある一部屋だけの小さな博物館である。筆者は一九九五年にここを訪れている。毛皮

のコートから外出着や室内着の衣類、スリッパ、靴、日傘、ベッドなどが陳列されていた。

小物が多いこともあって全体的にこじんまりとしているが、エリーザベトの故郷ミュンヘンの博物館としては、あまりにも窮屈そうでエリーザベトに気の毒な感じがした。

地上に出たとき、上階にポルノショップがあると見えて、すれ違ったドイツの少年が筆者を見てニヤツとしたのがエリーザベトに対する気の毒な感をさらに強くした。「何故、こんなところにエリーザベトを押し込めているのか、と」。

その後再訪してないので、どのように変わったか、それとも全然変わっていないのか分からないが、地階ではなく、しかももっと環境のよい、広くて立派な博物館になってくれないものだろうか。



(旧ポッセンホーフェン城館。1984年・筆者撮影)

## 第2章 バート・イシユル

### ——運命的な出会い——

#### 第1節 ザルツカンマーグート地方

ザルツカンマーグートとは、ザルツ王侯の領地の意味である。その領域は、オーストリア第二の都市でザルツブルク州の州都でもあるザルツブルク市の東を東西に広がる地域で、ザルツブルク州、オーバーエーステルライヒ州（上オーストリア州）、シュタイエルマルク州の三州にまたがっている。

この地域には七〇以上の湖があるといわれるオーストリアの代表的な湖水地方で、大小さまざまな湖沼が点在する風光明媚な保養地・観光地として知られる。

ザルツブルク市からオーバーエーステルライヒ州の州都であるリンツに通ずるアオトバーン沿いにはモント湖やアッター湖、アオトバーンから少し離れてトラオン湖などの大きな湖がある。トラオン湖の中の島にはオルト城があり観光の名所になっている。

これらの湖の南側には、西端に位置する小さなフシユル湖、その東にはオペレッタ「白馬亭にて」の舞台として知られるザンクト・ヴォルフガング湖があり、さらにその東にはザルツカンマーグート地方の中心バート・イシユルがある。

パート・イシュルについては後述することにして、その南東には、アルトアオセー湖、グルンドル湖とその奥にはトプリッツ湖、南には、ハルシュタット湖があり、湖畔のハルシュタットは、先史時代に青銅器・鉄器文化が栄え、オーストリア文化発祥の地といわれている。

この地域の文化的景観は、「ハルシュタット⇨ダッハシュタイン・ザルツカンマーグートの文化的景観」として、一九九七年に世界文化遺産に登録されている。

そのうちの、ダッハシュタイン山を主峰とするダッハシュタイン山塊の西にはゴザオ湖があり、ダッハシュタイン山塊の景観が素晴らしい。その奥のヒンター・ゴザオ湖は小さい静寂な山の湖だ。

そのほか、一九七〇年に制作され日本でもひとところ有名になったアメリカ映画の「サウンド・オブ・ミュージック」は、このザルツカンマーグート地方でロケが行われており、使用された地や建物もあちこちで見ることができる。かつては、この映画の題名の付いた定期観光バスがザルツブルクから運行されていたが、今はどうか。

「ザルツ」とは日本語で塩のことで、その名のとおり地中に埋もれていた岩塩の産地である。ザルツブルク市の名もまさに「塩の城塞」の意であり、かつてはこの岩塩がこの地方の経済を潤わせた。ハルシュタットをはじめ現在でも岩塩が採掘されており、その岩塩坑も現在では観光の対照となっている。

ザルツブルク州、オーバーエーステルライヒ州、シュタイエルマルク州の三州のうち、ザルツブルクは、この物語が始まる寸前の一九世紀初期には、その所屬が二転三転している。それ以前から、ザルツブルクは、オーストリアのハプスブルク王家とドイツのバイエルン王家の中間に位置することから、両



国の緩衝国の役割を運命づけられた立場にあった。

ナポレオン戦争の結果、一八〇三年に君主国の資格を失うと、最初にイタリアのトスカナ公国に所属させられ、一八〇五年にはオーストリアに帰属した。しかし、後述するように、一八〇九年にオーストリア軍がバイエルンに侵入してフランスと戦い、オーストリアが敗れると、一八一〇年にザルツブルクを割譲している。ナポレオンの失脚後の一八一六年に再びオーストリアに帰属することになった。

バート・イシュルは、ザルツカンマーグート地方の中心的な存在の町である。

さて、このバート・イシュルは、「バート」（ドイツ語で温泉の意）の名のとおり、一八二〇年ごろに食塩泉の効用から温泉保養地として知られるようになり、まさにこれから始まるこの物語の舞台の一つともなるハプスブルク王家の別荘がある地として、一九世紀末までヨーロッパの社交界の中心地の一つであった。

町の中心地は、川幅はさして広くないが、山岳地帯を流れる河川のためかなり流れの速いトラオン川と、その支流となるイシュル川に挟まれた地域（イシュル川はそのすぐ下流でトラオン川に合流している）にあり、本物語の舞台となるカイザーヴェイラはイシュル川を渡った町の北側に位置している。

バート・イシュルが脚光を浴びたのは、バート・イシュルの塩水硫酸泉が大きな効用があることを知った皇帝家族が、湯治と保養のため同地を訪れたことによるものである。フランツ・ヨーゼフの祖父フランツ一世が兄弟たちとともに訪れ、治療にあたりその効果が大きかったことから、子や孫へと受け継がれていった。

ゾフィー大公妃は、エリーザベトに関する各著作に掲載されている写真で見える限りでは、中年以降の写真であるためも手伝って決して美人には見えないが、ミュンヘンのニンフェンブルク城に掲げられている若き日の彼女は、非常に美しかった（とはいえ、残念ながら筆者は、同城にあるギャラリーに掲げられている大勢の美女の中で特に彼女の肖像画は意識して見ていなかったのがつかなくった）といわれているけれども、華奢すぎた体質で子室に恵まれなかった。即ち、一八二四年に結婚したものの、一八三〇年に誕生の長男フランツ・ヨーゼフが生まれるまで、六年の間隔があった。

それが、皇帝家の侍医ヴェイル博士に勧められてから彼女の体質が改善されて、フランツ・ヨーゼフをはじめとして、四年の間に三児（四男のルートヴィヒ・ヴィクトールは三男のカール・ルドヴィヒの九年後に生まれている）に恵まれ、その後、それぞれパート・イシュルに連れてくるようになる。その結果、彼女の子供たちは「塩の王子たち」と呼ばれるようになった。

このようにして、ハプスブルク家にとってパート・イシュルは特別な存在となり、皇帝家の家族は毎夏訪れるようになっていった。そのため、周囲の目を眩ませるために密かにフランツ・ヨーゼフとヘリーネとの見合いの場所として選ばれ、結果的にエリーザベトと婚約した出会いの場となった。

このようなことから、パート・イシュルは、避暑その他の目的で訪れたヨーロッパの王侯貴族との接見の場ともなり、当時のヨーロッパにおける社交場としても知られた。プロイセンのヴィルヘルム一世やイギリスのエドワード七世、アメリカのグラント大統領などもこの地を訪ずれている。

パート・イシュルには、王侯貴族のほかにも、ワルツ王ヨハン・シュトラオス、ヨハネス・ブラームス、アントン・ブルックナー、オペレッタ（喜歌劇）の作曲家フランツ・レハール（主な作品は「メリ

ー・ウイドウ」。ドイツ語で「ルステイゲ・ヴィツヴェ」やカルル・ミレッカー（主な作品は「乞食王子」）などの日本人にもお馴染みの音楽家がしばしば訪れている。

このうち、フランツ・レハールは、バート・イシュルに別荘を建て、この地で亡くなっており、市の中心になっている地区からエリーザベト橋を渡った、トラオン川の対岸にあるその瀟洒な別荘は、現在では博物館になっている。

## 第2節 ハプスブルク家の歴史

この物語の主人公であるバイエルン王国の公女エリーザベトが、オーストリア帝国皇帝フランツ・ヨーゼフと結婚後、その生涯を翻弄され、不遇な一生を終える原因となる背景、すなわち、当時のオーストリア帝国及びその支配者であるハプスブルク家の歴史を遡って知ることは、欠くことのできない必要な知識であるので、その概略を辿ってみることにする。

ハプスブルク家は、現在のスイスの大都市チューリヒの北西に位置するアールガオ地方と現在のフランスのアルザス地方に所領をもつ貴族であった。

アルザスはそののち、ドイツとフランスが奪い合つ奪い返す争いとなることで有名になるフランスの北東部の2つの地方、アルザスとロレーヌ（ドイツ語ではエルザスとロートリンゲンと呼称）の一方である。もう一つのスイスのアールガオ地方の所領では、一〇二〇年にアアレ川とロイス川の合流点近く

にハビヒツブルク（ドイツ語で鷹の城の意）という城が築かれた。この城の名がハプスブルク家の語源であるといわれている。

一二五六年から一二七三年の一七年間（一二五四年からの一九年間とする説もある）の大空位（皇帝不在）時代のあとを受けたドイツでは、一二七三年にハプスブルク家のルードルフ一世を神聖ローマ帝国皇帝（ドイツ国王）に選んだ。当時のオーストリア地域はベーメン（英語でボヘミア）のオタカル王が領有していたが、ルードルフ一世はそれらの領地を没収し、このオーストリア地域にその領土的基盤を確立した。なお、オーストリアとは英語表記による国名、ドイツ語ではエーステルライヒで東の帝国の意味である。本書では、エーステルライヒとは使わずに、英語のオーストリアのみにて記述する。

これによりハプスブルク家は、ドイツ国家の東の辺境国（オストマルク。オストは東、マルクは国境地域の意）として根を下ろし、後に、チェコのベーメンとメーレン（英語でモラヴィア。チェコ語でモラヴァ）の斯拉ヴ民族（西斯拉ヴ族）、ハンガリーのマジャール民族を支配下に置き、他民族を抱えた国家を形成することになる。

その後、ドイツ国王および神聖ローマ皇帝の座は、選定侯により選ばれてナツサオ家、ハプスブルク家、ルクセンブルク家、ヴィッテルスバッハ家等によって占められることになる。しかし、一四三八年のアルブレヒト二世の即位以降、一八〇六年に神聖ローマ帝国が崩壊するまでの三六八年間、そのうち一七四二年から四五年までの四年間のみヴィッテルスバッハ家に皇帝の地位を譲ったものの、ハプスブルク家は同帝国の皇帝の地位を独占し続けたのである。

厳密には、ハプスブルク家は、一七四〇年から在位した女帝のマリア・テレジアがロートリンゲン家

からフランツ一世を夫に迎えたため、それ以降、ハプスブルク・ロートリンゲン朝と呼ばれ、系図上区別するようにもなっている。

ハプスブルク家がこのように勢力を伸ばしたのは、政略結婚によるものといわれている。その一つとして、一四九六年にフィリップ一世がスペインのファナ王女と結婚して、スペイン系のハプスブルク家を開き、フェリーペ一世としてカステイリヤ王に就いた。一五一六年にフィリップ一世の息子カール五世（スペイン王としてはカルロス一世）が、統一後の初代スペイン王として神聖ローマ帝国皇帝とを兼ねることになる。

カルロス一世は、政治的統一を欠くイタリアの支配権をめぐってフランスと戦って勝利を収め、ナポリをスペインの支配下に置く。一七〇〇年にスペイン王家をフランスのブルボン家に奪われることになり、その後のスペイン継承戦争の結果、一七一四年のラシュタット条約により、オーストリアはイタリアのミラノ、ナポリを支配する。

一八一五年のヴィーン会議以降、オーストリアはイタリアのトスカナ大公国（中心はフィレンツェ）を所有し、ロンバルド・ヴェネト王国（ミラノ中心のロンバルディアとヴェネツィア中心のヴェネト）を支配下に置いている。さらに、一八四八年のヴィーンにおける三月革命を機に、イタリアの諸邦は独立運動を起こすが、サルデーニャ王国（首都はピエモンテ地方のトリノ）を除いてオーストリアに制圧される。しかし、イタリア情勢は、オーストリア帝国にとつては不穏な爆弾を抱えたことになる。それ以降の対イタリアの外交的展開については後述する。

一方、カール五世の弟フェルディナント一世は、ベーメン・ハンガリー王家のアンナ王女と結婚し、

カール五世の退位後に神聖ローマ皇帝となった。彼はさらに娘のマリアをベーメン・ハンガリー王家のラヨシユ二世と結婚させて両家の絆を強くしただけでなく、一五二六年にラヨシユ二世がモハーチの戦いでオスマン・トルコに敗れたあと、オーストリアはその領土の北西部を自国の領土に編入している。

当初選定侯がドイツ国王を選ぶときは、ドイツ国王を懐柔できるように、あまり強国でない領邦国家を選ぶことにしていた。しかし、ハプスブルク家は選定侯の意図をかわし、ドイツ国王の地位を独占した。さらに、己が領土を拡張することに専念し、政略結婚等によりそれを実現したのであった。

その目的は果たされ、ヨーロッパの強国にのし上がり、かつ、東方諸民族の西方進出を阻止する役割を果たし、逆に東部および南部に領土を広げることができた。しかしその反面、それら諸民族を領域内に抱えるということは、後年、帝国崩壊の原因ともなる結果を招来することになるのである。

ハプスブルク家が、一二七三年にルードルフ一世がオーストリアの地に移封してから一九一八年の第一次世界大戦終了時まで支配した国々は、歴史上の国の版図と現在の国の版図はもちろん異なり、さらに現在の国々と対比するとその国の全部ないし一部とそれぞれさまざまであり、かつ、それらの国々への支配期間も短期あり長期ありでさまざまであるが、現在の国名に直すと、次のとおりである。

スイス、ドイツ、オーストリア、スペイン、イタリア、ベルギー、オランダ、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、ルーマニア

このうち、ハプスブルク家発祥のスイスの領地は、一六三五年に皇帝フェルディナント二世の時代に

同家の支配から離れている。

この大帝国は、名称からして明確とはいえないものであった。それについて、ここに矢田俊隆著『ハプスブルク帝国史研究』から引用したい。(注1)

ハプスブルク家君主の統轄する各所領は、それぞれ個別の制度をもち、長い間全体を一貫する組織がなかったばかりか、これら諸領土の集合体は、特定のはっきりした名称さえもっていなかった。ただ、一五世紀から、ハプスブルク家の全領土をおおうものとして、「オーストリア家」の名称が用いられることはあったが、正式のものではなく、一五二六年以降の三〇〇年間、それらの領地は「ハプスブルク家の諸地方」ないし「神聖ローマ皇帝の諸地方」にすぎなかったのである。一八〇四年に、最後の神聖ローマ皇帝フランツ二世がみずからオーストリア皇帝と呼び、ここにはじめて、諸領地の集合体には「オーストリア帝国」という名称が与えられた。やがて一八六七年、それは「オーストリア・ハンガリー」二重帝国に改組されたが、ハンガリー以外の西部諸地域は最後まで正式の名前をもたず、便宜上「オーストリア」とよばれたにすぎなかった。

このことは、ハプスブルク帝国のあいまいな性格とまとまりのなさを示すものであり実際ハプスブルク家の諸地方は、地理的にも民族的にも一つに結びつけられていなかったものであって、ここに他のヨーロッパ諸国と著しく異なる点があった。

さらに、ナポレオンが南西ドイツの諸邦を懐柔してライン同盟を結成させたことにより、神聖ローマ

皇帝フランツ二世は、オーストリア皇帝を呼称した二年後の一八〇六年に神聖ローマ皇帝の座を降り、神聖ローマ帝国はここに崩壊するのである。

このように、ハプスブルク家のオーストリアは、他の西欧諸国と比べて特異な国家であり、支配下の各民族が蜂起する一九世紀から二〇世紀は、オーストリア帝国は、まさに、解体の真っ只中に置かれたといつてよい。

### 第3節 フランツ・ヨーゼフの即位

一八〇六年にナポレオンによって神聖ローマ帝国が解体され、オーストリアのハプスブルク家が神聖ローマ帝国の皇帝の座から引きずり下ろされてから、フランツ・ヨーゼフの即位までの四二年間のハプスブルク家とその関連の歴史を簡単に振り返ってみる。

一八〇六年八月六日、ライン同盟を立ち上げその盟主となったナポレオンからの最後通牒を受けて、神聖ローマ帝国皇帝フランツ二世は退位を余儀なくされた。九六二年にオットー一世が戴冠してから八四四年間（大空位時代を含む）に及ぶ神聖ローマ帝国（オーストリア帝国はその帝位の半分近くを占めてきた）の歴史はここに閉じられ、フランツ二世はフランツ一世と改称して、ドイツの君主国の一つであるオーストリア皇帝に過ぎなくなってしまう。

それに先立つ七月二四日に、プロイセンとロシアが対仏大同盟を締結し、一〇月九日にプロイセンの



フリードリヒ・ヴィルヘルム三世がナポレオンに宣戦布告したが、一〇月一四日にはナポレオン軍がプロイセン軍を破り、翌一八〇七年七月七日にはティルジット条約により、プロイセンは領土の大半を失っている。

この年から翌年にかけての冬に、二年後にベルリン大学の初代学長となる哲学者ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテが、有名な「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演を行い、敗戦の同胞に対して精神的覚醒を訴え、自国民に文化への自信を与え、誇りと愛国心を喚起した。

一八〇九年四月一〇日に、オーストリア軍が親仏のバイエルンに侵入したことを受けて、フランスとの戦争が始まる。緒戦ではオーストリア軍は勝利したが、ドイツ諸邦の蜂起の呼応もなく、また、イギリスの資金援助もロシアの軍事援助も得られず、五月一三日にはフランス軍にヴィーンを占領されてしまう。さらに、七月六日にヴィーン東方約三〇キロにあるヴァグラムの戦いでオーストリア軍は決定的な敗北を喫し、一〇月一四日に、シェーンブルン宮殿で和約を締結することになる。

その結果、オーストリアは、ザルツブルクをバイエルンに、西ガリツィア（現ポーランド東部）をワルシャワ大公国に、南ティロールをイタリアに、イリュリア（現在のクロアチアとスロヴェニアにまたがる地域）をフランスに割譲させられた。

この和約の六日前に、前駐仏大使だったクレメンス・フォン・メッテルニヒが、三六歳で新外相として抜擢されている。メッテルニヒは、のちの一八一四年から一五年にかけてのヴィーン会議で、その手腕振りを遺憾なく発揮していることは周知のことであるが、彼の生涯における業績の善し悪しはここでは触れない。

メッテルニヒは、外相就任の翌年の四月二日に、敗戦による賠償その他でオーストリアに有利になるよう画策して、フランツ一世の長女である一八歳のマリー・ルイーゼを、皇嗣に恵まれないジョゼフィーナと離婚したナポレオンと結婚させたが、ナポレオンから賠償金の減額の譲歩を引き出すことはできなかった。

一八一二年にナポレオンはロシア遠征を行っている。しかし、これが冬將軍とロシアの焦土作戦に対する対策の不備及び誤算から、死傷、凍死、餓死などによって軍の大半を失い、自らも命からがらパリに戻るほどの大敗に終わった。

次いで、一八一三年一〇月一九日には、ナポレオンはオーストリア、プロイセン、ロシアの同盟軍にライプツィヒの戦いで敗れ、翌年三月には同盟軍はパリに進軍し、四月一日にナポレオンは退位、エルバ島に配流された。

一八一四年九月一八日からヴィーンで会議が開催されるが、出席国数が大小百数十カ国に及ぶため全会議は一回も行われず、それぞれの国々の利害関係も複雑なことから、会議は翌年六月九日まで続いた。それも、その間の三月二〇日に、エルバ島を脱出したナポレオンがパリに入場したため、臨戦態勢に入らなければならなかった。

それにしても、ナポレオンのパリ入場からヴィーン会議の終了まで、約二カ月半近くの時間があつたということは、ナポレオン不在の間にフランスの国内が王政復古していたことから、ナポレオン軍の再建にそれほど時間を要したことになる。

しかし、軍備を建て直したナポレオンは、六月一八日に行われたベルギーのワーテルローの大会戦で

イギリスとプロイセンの連合軍に敗れ、「百日天下」に終止符を打つことになる。六月二二日には再度の皇帝退位のあと、一〇月一四日にセント・ヘレナ島へ流刑され、一八二一年五月五日に五一歳の生涯を閉じた。

さて、ヴィーン体制を確立したオーストリアの宰相メッテルニヒは、一八四八年のヴィーンにおける三月革命で失脚した。

この三月革命は、フランスが王政を倒して第二共和制を成立させたパリの二月革命の影響を受けて、プロイセンのベルリンとオーストリア治下のヴィーン、ブダペスト、プラハでほぼ同時に突発した革命である。

先ずパリでは、選挙法を改正するために各政党によって各地で開かれた改革宴会を、国王ルイ・フィリップが二月二二日に禁止したことから、労働者、学生、中小ブルジョワジーによるデモに始まった騒乱が革命にまで発展したもので、国王が退位してイギリスに亡命したことにより、フランスの王政は崩壊して共和制が成立した。

それが、一月を経ずして、三月一三日にはヴィーンに、続いて一八日にはベルリンに波及した。異民族を抱えるオーストリアは、さらにチェコ、ハンガリー、イタリアにまで飛び火したが、そのなかで、特にハンガリーでの反乱は、後年のエリーザベトの活動と大いに関係があるので、章をあらためて説明する。

ヴィーンでは、パリでの状況を判断した結果、三月一三日に皇帝が請願書を提出する市民の団体と会

った。このときの皇帝は、一八三五年に死去したフランツ一世のあとを襲った、同皇帝の長男フェルデイナント一世である。

市民団の要求は、裁判の公開、検閲の廃止、出版の自由、立憲制度の確立などが主であった。かつては権謀術数をほしいままにしたメッテルニヒではあったが、高齢となりオーストリアにもひたひたと押し迫ってくる新しい時代の動きに対して、依然として保守的で正しい状況判断が伴わなかった。そこにメッテルニヒの限界があった。

代表団はメッテルニヒの退陣を要求した。その間、市内では労働者たちによる暴動が発生し、あちこちに放火の火の手があがった。死者も出た。さまざまな情報により、市民や下級の労働者が、皇帝に対しては反感をもっておらず、むしろ、国民に圧政を敷いてきたメッテルニヒの退位を要求していることが、メッテルニヒにも分かっていた。

軍隊の大半は、反乱鎮圧のためにチェコ、ハンガリー、イタリアに派遣されていた。まさかよりによってヴェーンで反乱が起こることを予測していなかったので、手薄になるとは考えても見なかったのである。

為政者側からは、市内の反乱に対して武力による強行案も出たが、メッテルニヒは最悪の場合、皇帝に退位してもらおうつもりでいた。と言うのも、自分が退任したあとのオーストリアを、果して誰がこの混乱から救うことができるのかを考えると、メッテルニヒにとっては自分の辞任は考えられなかった。

そこで、引き止められることを前提に考えて、皇帝に自らの辞任を申し入れた。それが意外にも皇帝に簡単に了承されてしまったのである。ここに及んで、メッテルニヒは自分が辞任せざるを得なく

なつてしまつた。オーストリアの最強の指導者の席が空席のまま、メッテルニヒは一四日にイギリスに向けて亡命したのであつた。

ただ、メッテルニヒは、皇妃 MARIA・アンナに、皇帝フェルディナント一世の退位を示唆し、その後継者として、皇帝の弟のフランツ・カール大公でなく、同大公とゾフィー大公妃の長男で、まもなく一八歳となるフランツ・ヨーゼフを推薦している。

メッテルニヒの退陣で一段落したものの、四月に入ると皇帝フェルディナント一世は、三月に約束した憲法制定会議の招集という約束を破り、強硬派に押されて欽定憲法を制定した。この憲法は、たしかに部分的には自由主義的であつたが、二院制の議会も最後に皇帝の拒否権が残されるなど、他の先進国のそれにはほど遠かつた。

これを不満とした労働者が五月一五日に再び蜂起したため、皇帝の側近は民衆の言いなりになるフェルディナント一世をヴィーンの外に避難させることを画策した。

そこで選ばれた場所がインスブルックであつた。皇帝夫妻が不安にかられると、皇帝の弟であるフランツ・カール大公及びゾフィー大公妃も、フランツ・ヨーゼフをはじめとする四人の息子を同伴して、一緒に都落ちをした。

皇帝不在のヴィーンでは、むしろ大きな穴がぼっかりとあいたような虚脱感が支配していった。そこで、急進派の改革には必ずしも同調していなかつた有産階級の市民が、再三再四インスブルックを訪問して、皇帝がヴィーンに戻るよう陳情することとなつた。その間にイタリア及びベーメンの暴動の鎮圧

を終えた軍隊が戻り、秩序が回復されたのを機に皇帝一家も八月一二日にヴィーンに戻った。

しかし、それだけでヴィーンの秩序が安泰となったわけではなかった。ハンガリー問題に絡んで帝国軍をハンガリーに増派すると、一〇月六日にハンガリーに同情するヴィーンの急進派による過激な暴動が起こった。一〇月革命である。

オーストリアの属領としてのハンガリーは、自らも、現在でいうクロアチア、スロヴェニア、セルビアなど異民族である南スラヴ族を支配していた。そこで、オーストリアは、クロアチアにけしかけて、クロアチア軍にハンガリーを攻撃させるとともに、オーストリア軍もハンガリーに派兵しようとした。ハンガリーへの進軍を知ったヴィーンの革命派はハンガリーに同情して、ハンガリーに向かうオーストリア軍を阻止しようと暴動を起こしたというわけである。

因みに、第一次世界大戦後に発足したユーゴスラヴィア連邦は、これら南スラヴ族による六カ国（前述の三カ国のほかボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、マケドニア）による連邦国であった。なお、ユーゴスラヴィアとは「南スラヴ人の国」の意味である。二〇世紀末近くの社会主義体制の崩壊により、これら六カ国はそれぞれ分離し、二〇〇六年に最後のユーゴスラヴィア連邦を形成していたセルビアとモンテネグロが分離したことにより、ユーゴスラヴィアという国名はなくなった。

そこで皇帝一家は再び避難することになる。今度はオーストリア帝国内のメーレン地方の都市オルミユッツ（現在のチェコのおロモウツ）に難を逃れた。

この暴動によりヴィーン市内は混乱に陥った。ヴィーン市民は今度という今度は皇帝に責任ありと、非難を浴びせることとなった。一一月一三日にはヴィーンからオルミユッツにシユヴァルツェンベルク

首相が代表として派遣された。

首相は、先ず皇帝フェルディナント一世の退位を、さらに、弟のフランツ・カール大公も同様な責任があると見做されるため即位を諦め、それに代わって一連の革命には直接関係なく、八月に一八歳になったばかりのフランツ・ヨーゼフを即位させることを、皇妃マリア・アンナ及びゾフィー大公妃に進言した。

当事者であるフェルディナント一世は元来精神薄弱であり、弟のフランツ・カール大公も意志薄弱で覇気に乏しかったため、しっかりものの皇妃及び大公妃に諮ったのである。皇妃マリア・アンナは状況判断から夫の退位はやむなしと決断したが、ゾフィー大公妃は正直のところ自分が皇妃になりたくもあつたが、夫の性格を考えて息子のフランツ・ヨーゼフを即位させてもよいとも考えた。まだ一八歳の息子であれば、自分が摂政として、夫よりも政治力ある自分が、政局を恣いままに操縦できるとも考えたからであつた。

しかし、ゾフィー大公妃が夫フランツ・カール大公に皇位継承権の放棄を要請したところ、意外にも強硬に反対された。大公も皇帝になりたかつたのである。それが結果的に放棄に同意したのは、前帝で父親のフランツ一世が大公の夢枕に現れ、息子のフランツ・ヨーゼフに継承権を譲れとお告げがあつたので、それに従つたというのであつた。

このようにして、一八四八年二月二日に、フェルディナント一世は避難先のオルミュッツで退位を宣言し、大公の長男で弱冠一八歳のフランツ・ヨーゼフを皇帝の地位につけることを決定した。

一八三五年の義父フランツ一世の死後、名君と呼ばれたフランツ一世に遠く及ばない義兄のフェルデナント一世や夫のフランツ・カール大公に代わって、着々と発言権を増してきたゾフィー大公妃は、あまり期待のできない夫よりも、若い息子に帝国の将来を賭けたものということができよう。

ところが、若きフランツ・ヨーゼフは、他の列強国に比べて経済・産業において後進的であり、絶対君主制による保守主義を墨守し、国内に多くの異民族を擁するなどの大きな課題をいくつも抱えている。大國オーストリアの船出の舵をとることになったのである。

#### 第4節 フランツ・ヨーゼフの見合い

フランツ・ヨーゼフは一八歳で皇帝になったが、ゾフィー大公妃には、帝国の将来を安泰にするために、息子の嫁はドイツ内における大國に求めるという意図があった。

当時、ドイツ国内では、由緒あるハプスブルク家の老大國オーストリアのほかに、伸張著しいプロイセンがこれに拮抗する状態にあった。

フランツ・ヨーゼフが即位してから結婚までの数年間、オーストリア皇帝としてのフランツ・ヨーゼフを取り巻く情勢には、いろいろな問題が持ち上がってきており、先にそれを概観しておきたい。

一八四八年と翌年のハンガリーにおける一連の動向については第4章に譲るとして、一八四八年のオーストリア支配下のイタリアの動向について述べると、ヴェーインの三月革命に触発されて、三月一八日にはミラノで反乱が起こり、二三日にはサルデーニャ王がオーストリアに宣戦布告している。



この二つの行動は、長く小国に分離して、フランス及びオーストリアに支配されていたイタリアの、独立と統一運動のきつかけとなった。しかし、オーストリアのラデツキー軍によって、七月二五日にはサルデーニャ軍とイタリア諸邦連合軍が破られ、八月六日にはミラノも占領されてしまう。

一八四九年に入ると、二月九日にイタリア青年党がローマ共和国を宣言し、三月二三日にはサルデーニャ王がオーストリアに宣戦した。ローマ共和国は七月一三日にフランス軍に敗れ、サルデーニャ軍も再びラデツキー將軍率いるオーストリア軍に八月六日に敗れ、イタリアのこの運動も一度は終息してしまふ。

因みに、現在、ヴェーンで毎年元旦に行われているニューイヤークンサートの最後の曲として演奏している「ラデツキー行進曲」は、この將軍の名誉を讃えた行進曲である。

しかし、このイタリア支配に対する独立運動は、オーストリア帝国フランツ・ヨーゼフ皇帝にとつては、ハンガリー問題とともに、六八年間の長きに互る治世の最初の段階における、正面から立ち向かわなくてはならない二つの大きな内政問題である。

一方のプロイセンとの関係においても、フランツ・ヨーゼフは微妙な立場に置かれている。まず、一八四九年三月二八日に開かれたフランクフルト国民議会によつて、オーストリアとドイツ統一の主導権の覇を競うプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世が、ドイツ皇帝に選出された。

このフランクフルト国民議会は、前年の三月革命のあと、五月一八日に招集されたドイツ最初の議会で、ドイツ統一の方式や憲法制定を論議し、二月にはドイツ国民の基本法を、翌一八四九年三月にはドイツ国憲法を制定している。

しかし、ヴィルヘルム四世は革命派からは王冠を受けられないと拒否したため、議会は宙に浮き、六月一日には反革命政府の武力弾圧により解散に追い込まれてしまった。

この議会では、ドイツ統一を、オーストリア主導の下に実現しようとする大ドイツ主義と、プロイセン主導の下にオーストリアを排除した小ドイツ主義とが対立し、紛糾した。

この問題は、オーストリアにとつても、プロイセンにとつても、後年、ドイツ統一に向けて、雌雄を決する両国間の戦争にまで発展する、国運を賭けた重大な問題であった。

一八五〇年九月二〇日に、ドイツのクールヘッセンにおいて革命的騒乱が起こり、オーストリア軍が鎮圧に当たってプロイセンとの関係が悪化した。一〇月二六日に、仲介に入ったロシアがオーストリアを支持したため、一月二九日にオーストリアとプロイセン間にオルミュッツ協約が成立した。プロイセンはドイツ統一を断念し、一八四八年の三月革命によって中断されていた、オーストリアを盟主とする三五の君主国と四つの自由市から成るドイツ連邦が復活した。

オーストリア国内ではその後、先に布告成立していた欽定憲法も、一八五一年末の大晦日勅令により廃止され、官僚国家体制が確立されてしまった。三月革命の成果はここで完全に葬られ、元に戻ってしまつたのである。

さてそのような状況のなかで、ゾフィー大公妃の考えとして、まだ統一国家が形成されていない領邦国家の連合体であるドイツの中で、オーストリアが、急速に台頭してきたプロイセンと覇を競う関係にありながらも、そのプロイセンを支配していたホーエンツォレルン家の王女アンナをフランツ・ヨーゼ

フの嫁にしたいという願望があった。ハプスブルク家お得意の政略結婚である。

そこには、この結婚により、両家の関係を修復し、ドイツ連邦内におけるオーストリア帝国の主導的立場を、さらに優位にするという計算が働いていた。カトリックのハプスブルク家が、プロテスタントのホーエンツォレルン家と姻戚関係を結ぶという、宗派の違いに関しては問題がなくなかったが、ゾフィー大公妃は結婚前に王女アンナをカトリックに改宗させればよいと考えていた。

一八五二年冬に、フランツ・ヨーゼフはベルリンを訪問し、プロイセン王の姪であるアンナに会い、一目で気に入ってしまった。しかし、アンナにはすでに婚約者があり、またプロイセンはオーストリアとの外交政策で相容れない状態にあったので、土台無理な話であった。

それでもゾフィー大公妃は、自分の長姉であり、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム四世の妻となっていたエリーザベトに執拗に仲を取り持つように依頼したが、結局はこの話は不調に終わってしまった。

ゾフィー大公妃はそのほかにも、次姉と双子の妹が嫁いでいるザクセン王国の王女にも当たったが、この王女は病気がちであるばかりでなく、フランツ・ヨーゼフはこの王女が気に入らなかつた。

また一方では、ヴィーンの宮廷では、ハンガリー系の宮廷伯ヨーゼフの美しく賢明な娘エリーザベトを皇妃として取り沙汰していたが、後述するように、ゾフィー大公妃が、一八四八年の革命以来ハンガリーを毛嫌いしていたので、この話がまとまることはあり得なかつた。

ゾフィー大公妃は、このような行き詰まりを打開するため、ドイツ国内ではプロイセンとザクセンという強国と並んで名門であり、自分の出身国でもある、オーストリアに友好的なバイエルン王家と姻戚

關係を結ぶことを画策した。そこで考えられたのが、バイエルン王家のうちでは傍系であり、身分的には格差がありすぎるものの、自分より三歳年下の妹であるルドヴィカ公爵夫人の娘に絞ることにした。

既に述べたように、妹のルドヴィカ公妃とその夫のマクシミリアン公爵の間には九人の子供が設けられた。ゾフィー大公妃とルドヴィカ公爵夫人は、三番目の子で長女のヘレーネをフランツ・ヨーゼフの嫁にするべく計画を練っていた。

一八五三年の春と夏には、二人はお互いに連絡を取り合っていた。この年、一八三四年生まれのヘレーネは一九歳になっていた。年齢的にも結婚適齢期にあり、当然のことながら、ヘレーネはすでにさまざまな花嫁修行をしていた。

ゾフィー大公妃とルドヴィカ公妃の姉妹は、既にハプスブルク家が毎年夏の避暑地として過ごしていたパート・イシュルに、しかもフランツ・ヨーゼフの二三歳の誕生日を迎えようとする八月半ばに密かな見合いの場を設けていた。フランツ・ヨーゼフはその計画をうすうす知っていた。

フランツ・ヨーゼフがヘレーネと初めて会ったのは、一八四八年六月のインスブルックにおいてであった。このときは、ゾフィー大公妃が息子を連れて革命の難を逃れてきたときであり、ルドヴィカ公妃もオーベルアンメルガオで有名なキリスト受難劇を見たあと、四人の子供を連れてインスブルックにやって来たのだった。

このときのフランツ・ヨーゼフは、まだ一七歳で皇帝に即位する六カ月前であるが、国難のことで頭が一杯であったため、一四歳のヘレーネと一〇歳のエリーザベトを、気にかけるような女性と見ることはなかった。

ただ、フランツ・ヨーゼフの下の弟で一三歳のカール・ルートヴィヒが、エリーザベトの可愛らしさに惹かれ、別れてからも手紙や贈り物をエリーザベトに送っている。しかしエリーザベトは、カール・ルートヴィヒの好意に感謝しつつも、恋には発展しなかった。

その五年後、両家の子供たちは、今度はバート・イシュルで再会するのである。

## 第5節 運命的な出会い

一八五三年八月一五日、エリーザベトは母ルドヴィカ公妃と姉ヘレーネとともに、ザルツカンマーグート地方の中心都市バート・イシュルにやって来た。母ルドヴィカ公妃と彼女より三歳年上の姉でオーストリアのゾフィー大公妃とにより、そこでひそかに見合いの計画がお膳立てされていたのである。

エリーザベトやヘレーネにとっては伯母に当たるゾフィー大公妃も、長男のフランツ・ヨーゼフを始めとする子供たちを連れて、この地で落ち合うことになっていた。

一九歳のヘレーネの見合いの相手は、ゾフィー大公妃の息子で、二三歳となったオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ。たまたま母と姉に同伴してきたエリーザベトは、姉のヘレーネよりも三歳年下であるが、誕生日が来ていないのでまだ一五歳に過ぎなかった。

この温泉地は、かつての大司教で大公であったルードルフがこの鉱泉で健康を取り戻し、以後、皇帝家の夏の保養地としていた地であった。同時に、狩猟好きのフランツ・ヨーゼフにとっては恰好の狩猟向きの場所でもあった。

お互いということということであり、一八四八年に会ったこともあり、子供たちも既に面識があった。しかし、五年間も会っていないかった。その間、お互いにどれだけ成長したか興味あることはたしかなようだったが、この会合の目的が何を意味するかは、前年の冬にプロイセン王女との見合いが不調に終わったフランツ・ヨーゼフだけは薄々知っていたが、ヘレーネとエリーザベトは知る由もなかった。いや、ヘレーネはルドヴィカ公妃から見合いが目的であると聞かされていたという説もある。

このときエリーザベトは、初恋の相手であったリヒアルトが死に、失恋の痛手を被っていたときで、結果的にはパート・イシユル行きは気分転換とはなったものの、子沢山で姉のヘレーネの結婚にかまけていた母ルドヴィカは、エリーザベトの悩みにはまったく気がついていなかった。

これもまた、ルドヴィカ公妃が、エリーザベトの悩みを癒すために同行させたとも、いや、フランツ・ヨーゼフの下の弟であるカール・ルートヴィヒをエリーザベトの将来の夫と擬して会わせたとも、はたまた、この会合が見合いであるということ極端に目立たせないために、双方とも、複数の子供を連れてきたのであるとも言われている。

その真偽はともかくとして、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフの妻となろうとは、誰が予測したであろうか。運命のいたずらであるとしか言いようがない。

見合いの場所は、現在ではカイザーヴィラ（皇帝の別荘の意）と命名されている建物であるが、そのときはまだハプスブルク家の所有ではなく、借りていたものだった。

それに対してルドヴィカの家族は、市内のイシユル・ホテルに宿泊することになった。このホテルは

現在ではイシュル市の博物館となっており、一九九八年のエリーザベト没後百年祭の際には展示品の会場として使用されていた。

さて、ミュンヒェンから来たルドヴィカ一行は、約束の時間よりも一時間半も遅れて到着した。遅れた理由は、バート・イシュルへ来る前に急に葬式に出席しなければならなくなかったからであるという。さらに悪いことに、別送りの荷物はまだ着いておらず、着替えをすることもできなかった。ルドヴィカと二人の娘はやむなく着たまの服装で、ゾフィー大公妃とフランツ・ヨーゼフ皇帝に面会しなければならなかった。

ここで服装について、エリーザベトの伝記に関する二大作家のうち、一九三四年に初版を出したコレティは旅行服と述べているが、現役で活躍しているハーマン女史は喪服と説明している。コレティ版について若干の批判を加えているハーマンの方が、新しい情報を入手していると思われるので、正しいものと思われる。ここではそれ以上は穿鑿せんさくしない。

それはともかくとして、ヘレーネとエリーザベトを観察したゾフィー大公妃は、その二人の眩いばかりの若々しさを見て取った。五年前に会ったときの一四歳のヘレーネと一〇歳のエリーザベトとを比較するならば、美しく成長した二人に目を瞠みはるのも当然のことであった。ゾフィー大公妃は、すぐさまヘレーネの許に女官を遣わしヘレーネの髪を梳くしけずらせた。皇帝のお見合いの相手は姉のヘレーネであるので女官はヘレーネの髪を梳つたのであるが、その間、エリーザベトは自分で髪を梳っていた。

そのあと女官は二人の公女について好意的な言葉でゾフィー大公妃に報告したが、この女官はエリーザベトの美しさと立派な髪とに魅せられている。

皇帝との対面では、ヘレーネとエリーザベトは対照的であった。自分が皇帝の見合いの相手であることを覚った（？）一九歳のヘレーネは、美しく、すらりとして、しつかり者であったが、硬さがみられる性格で、会った瞬間、困惑し打ち解けにくさが感じられた。

それに対して、生来の性格と自分が見合いの相手ではない気軽さからか、エリーザベトは好奇心から皇帝と姉とを観察する余裕もあった。その中で、エリーザベトは、皇帝が姉のヘレーネに関心が薄いことを読み取った。エリーザベトは今度は自分が皇帝から観察されていることに気がついたとき、顔を赤らめて視線を逸らせ、フランツ・ヨーゼフの弟であるカール・ルートヴィヒに向けた。

以前からエリーザベトに好意を寄せていたカール・ルートヴィヒも、兄の関心がヘレーネになく、エリーザベトに向けられていることに気づき、フランツ・ヨーゼフに嫉妬心を感じた。フランツ・ヨーゼフは、エリーザベトの魅力についてゾフィー大公妃に報告したが、ゾフィー大公妃は、エリーザベトがまだ一五歳の子供であることを理由に一笑に付して、婚約はまだ急ぐわけではないとして、取り合わなかった。

食事の際に、フランツ・ヨーゼフの視線を感じたエリーザベトは、どこを見ていたらよいか戸惑い、食事にもほとんど手を付けなかった。

少し長くなるが、ここでコレティの著から引用して、臨場感を出してみたい。(注2)

夕方の舞踏会の際、それが予定されていたように、また礼儀作法上必要であったとしたように、年上のネネとコチリヨン(筆者注：一九世紀にフランスを中心に流行したダンスの一種)を踊



るのではなく、シシーと踊ることがフランツ・ヨーゼフからの条件として出された。宮廷で踊ったことのある人は、それがどんな意味をもつか知っていることであつた。二度連続して同じ女性と踊ることは、ほとんど婚約を約束したようなものであつた。

夕方、二人の姉妹は母親に同伴されて舞踏会に現れた。立派な白い絹地の衣装を身にまとつたネーは、額をきつたで飾り、シシーは可愛い軽やかな白薔薇のモスリンの衣装で、波うつた金褐色の髪を額から後ろに留めている小さなダイヤモンドの髪飾りを付けていた。

シシーが入ってきたときに、皆の目は彼女に注がれ、彼女が皇帝を魅了していることを知つた。しかし、彼女はそれが重大なことであるとは依然として信じなかつた。(中略)

そうこうしているうちに真夜中となり、古臭いけれど陽気で美しい慣例に従つて、コチリヨンの前座の踊りにとりかかることになり、重大な瞬間がやつてきた。皇帝がシシーと踊る！ 今回の最右翼の参加者がまだそこに現れないことが、いまや明らかになつた。シシーは、フランツ・ヨーゼフがコチリヨンの花束と並んでいる花束を自分に渡すものと分かつた。それは、彼が義務上、彼と踊る誰か別の女性に渡されるべきであつたもう一つの花束であつた。シシーは、舞踏会が終わつたあとに「貴方はそれに気がつきませんでしたか？」と尋ねられたとき、「いいえ、私はきまりがわるいだけですわ」と答えた。

フランツ・ヨーゼフが、ゾフィー大公妃お目当ての物分かりがよく、大人びていて、落着きがあり、真面目なヘレーネではなく、まだ子供っぽい妹のエリーザベトを妻として選んだことに対して、まだこ

の時点では、ゾフィー大公妃はエリーザベトを毛嫌いしたり、対立するようなことはなかった。

たしかにこの婚約問題では、ゾフィー大公妃はフランツ・ヨーゼフに譲歩した。また、ゾフィー大公妃の内心に問題がなくもなかった。ただ、それが具体的に表面化しなかつただけなのかもしれない。いやゾフィー大公妃自身、それをまだ明確に意識していたわけでもなかった。それは、次の意識と行為で証明できる。

ゾフィー大公妃が双子の妹でザクセン王妃マリーに宛てた手紙では、シシーの飾り気のなさや羞じらいなど好ましく感じていると書き送っており、また自らの日記では、婚約の記念として出会いの別荘を買い上げて、皇帝一家が夏の保養に使う「皇帝別荘」として改装し、左右に翼部を建て増しして、エリーザベトのイニシャルである「E」の形にすること決めている。

いや、しかしその一方でゾフィー大公妃は、この時点において既にエリーザベトを頑<sup>がんぜ</sup>是<sup>ぜ</sup>ない子供と見下しており、その後の宮廷生活において自分がエリーザベトを毛嫌いしたり対立したりすることになるだろうと、予感していたかもしれない。

一方のヴィーンの宮廷では、この婚約に大きな問題を投げかけていた。というのも、ゾフィー大公妃とルドヴィカ公妃は姉妹であり、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトは、それぞれの子供で、お互いが甥と姪の間柄であった。姪であるエリーザベトは夫となるフランツ・ヨーゼフとは母側で二親等、父側で四親等という関係にあったからである。

それだけでなく、ハプスブルク家の親族は、ヴィッテルスバッハ家の親族とは長い間深い繋がりがあ

り、フランツ・ヨーゼフの結婚は、その二四番目に当たり、近親結婚の弊害が指摘される傾向が強かったこともその一因である。

両者にあつては教会法上により、また母側で二親等の関係は民法上により、それぞれ結婚の障害となつてゐた。しかし、ハプスブルク家ではローマ教皇に「婚姻の特免」を願い出た。そしてそれは簡単に許可された。

エリーザベトの新しい生活の物語はまだ始まったばかりであるが、この近親結婚による障害は、この物語の最後まで、いや、それ以降まで現れずに済んだ。

## 第6節 バート・イシユル散歩

エリーザベトの足跡をたどるために、筆者はバート・イシユルを四回訪れている。筆者のその直接の見聞のほかに、現地で入手したガウ著「皇帝家族の夏の居城」、市の観光局から入手した資料や照会して得た情報等も参考にしながら、歴史的、地理的なバート・イシユルを描いてみたい。(注3)

先ずは、カイザーヴィラについて。

市の中心部からイシユル川を挟んだその北側に位置するカイザーヴィラは、現在では、エリーザベトの三女マリー・ヴァレリーの次男フーベルト・サルヴァートルの子、即ち、エリーザベトにとって曾孫となる、マルクス・サルヴァートルの一家が居住している。

しかし、この建物の最初の所有者は、ヨーゼフ・エルツという医者で、当時流行のビーダーマイヤー様式に建てさせたものであり、後にヴィーン会議の主宰者ともなるメッテルニヒ宰相が同氏から借りたこともあった。

それをゾフィー大公妃が、一八五三年八月一八日のフランツ・ヨーゼフの誕生日に、フランツ・ヨーゼフがエリーザベトと婚約したことを記念して、その翌九月二四日にエルツ氏から三一四四〇グルデンで購入し、フランツ・ヨーゼフに贈っている。前述したように、ゾフィー大公妃はさらに、西と南に翼部を増築させて、現在のようなエリーザベトの頭文字「E」の形に仕立て上げた。

エリーザベトは、ヴィーンの重苦しい雰囲気を避け、幼き日を過ごしたポツセンホーフエンのような解放感に浸るために、毎年夏には子供たちを連れてはこのヴィラにやってくる。ともに、八月一八日のフランツ・ヨーゼフの誕生日は、主としてこのヴィラで行うことが恒例となっていた。

遙か後年のこととなるが、一八九〇年七月に行われたマリー・ヴァレリーの結婚式も、このパート・イシユルの教会で挙げている。この結婚式でアントン・ブルックナーは、パイプオルガンで、ハイドンの「国歌」の編曲とヘンデルのメサイアを演奏している。この国歌については後段で少し詳しく触れたい。

さて、カイザーヴィラの建物について一瞥すると、いくつかの部屋のなかで象徴的な部屋としては、ひとつは「灰色の間」と呼ばれるエリーザベトの私室で、彼女が最後の旅に出かけたままの状態に保存されている部屋である。もうひとつは、一九一四年の第一次世界大戦勃発の原因となったサライエヴォにおけるフェルディナント大公夫妻の暗殺に対して、フランツ・ヨーゼフがセルビアに突きつけた最後

通牒に署名したという質素な部屋である。館内では、フランツ・ヨーゼフが参戦のために国民に訴えた文章のコピーまでが売られていた。筆者も入手したが、関心ある人は入手するのもよいだろう。

カイザーヴィラはカイザーパーク（公園）内にあり、その背後は北に競り上がったヤインツエンベルクと呼ばれる標高八三五mの山に続いている。その公園を少し上がった丘の上には写真博物館がある。この建物は、エリーザベトが結婚後二年目の一八五六年に早々と隠れ家として建てさせた、チューダー様式の大理石づくりの小城館である。エリーザベトはここで詩作に励むなど好んで時を過ごしている。筆者の手許にある一九六九年のドイツ語版のミシュランのガイドブックによると、筆者が最初にパー・イシユルを訪れた一九八四年以前には、「コテージ・カフェ」として使用されていたようである。ヤインツエンベルクの頂上は、山々の眺望や溪谷の俯瞰が素晴らしいところのようであるが、筆者はそこまでは登ってはいない。その中腹は、第三者に注目されることを好まない人嫌いなエリーザベトが存分に好きなスポーツに打ち込むことができる恰好の場所であったという。

次に、市内とその郊外に目を向けてみよう。

市内の中心の一つであるクア（保養）公園には、華麗なクアハオスが建っており、オペレッタ等が上演される。筆者は、一九九二年に、フリッツ・クライスラー作曲のオペレッタ「シシー」（一九三二年初演）を鑑賞する機会を得た。この喜歌劇のあらすじは別途後述する。

トラオン川に架かるエリーザベト橋は、エリーザベトの名に因んで命名されたものである。川幅が狭いにもかかわらず、鉄を多用した無骨ともいえる頑丈な造りの橋である。戦争で破壊され建て替えた橋

のようにも思えたが、オリジナルの橋であるという。

川幅の大きさの違いもあるが、後述するブダペストのドナオ川に架かる同名の橋に比べると、エリーザベトの優雅さが見られないのが如何にも残念である。

市の話ではこの橋も、交通量が増えた関係で、いずれはより大きく（幅広く）もつと頑丈な橋に建て替えなければならぬようであるが、少なくとも桁や梁だけでも優雅なものにならないものだろうか。既述したフランツ・レハール博物館も近いので訪ねるのもよいだろう。

市の郊外にある標高五九九mのシリウスコーゲルと呼ばれる円頂丘の頂上からの町の眺望がよい。一九八四年に訪れたときは麓からリフトで登ることができたが、一九九八年に訪ねたときには、リフトは頂上のレストランに食料等を運ぶときのみに使われ、利用することはできなかつた。また、南にある標高一五四二mのカルティン山にはロープウェイが架かっており、南の山々を眺望することができる。

市の中心で、トラオン川に沿ったエスプラナーデ（城塞の取り壊しによって生じた空き地の意味があるが、現在は並木道通り）から郊外に向けて、十二本の散歩道が整備されている。筆者は試しに「エリーザベト森の道」を、小雨の降るなか約半分の道のりを歩いて見た。今ではほぼ平行に走っていると思われる道路がときどき散見され、散歩道のムードが削がれるのが残念であったが、昔はエリーザベトも歩いた山道だったのかもしれない。

その次は、パート・イシユルを取り巻くザルツカンマーグート地方のゆかりの地を。

フランツ・ヨーゼフは少年のころ、父フランツ・カール大公にこの地に連れてこられ、ハイキングや

狩猟を楽しんだことから、ザルツカンマーグートに広大な狩猟区を入手し、唯一の趣味ともいえる狩猟を楽しんでいる。フランツ・ヨーゼフはさらに、息子のルードルフを連れて来ているが、それは皇帝一家や親類縁者、さらには高貴な客までも仲間に加わるほどの楽しみとなっていた。カイザーヴィラには現在も、フランツ・ヨーゼフが仕留めた獲物の角付きの頭部の骨が階段の吹き抜けの壁面に、見事なほど所狭しと飾られている。

バート・イシユル周辺には、連なる山々やその麓に湖が沢山あり、夏にはハイキングや水泳を楽しむ姿が見られる。その中で、ラルフ・ベナツキーのオペレッタ「白馬亭にて」の舞台となったザンクト・ヴォルフガング湖は、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトとが水入らずで語り合ったところ。また、世界文化遺産に登録されているハルシユタット湖は、婚約後に二人が初めて散歩したところであった。

そのほかの湖や山もエリーザベトが歩いたと思われる。かなり歩かされるが神秘的なヒンター・ゴザオ湖（前述のミシユランのガイドブックで三ツ星）や、静かなアルトアオス湖、グルンドル湖などは是非訪れたいところである。また、山では、ロープウェイで登れ、雪の高原とも言えるキツペンシユタイン山の頂上から眺めるダツハシユタインの山々の眺望が素晴らしい。

バート・イシユルにおけるエリーザベトの没後百年祭について。

さて、一九九八年には、エリーザベト没後百周年の行事が、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、スイスのそれぞれエリーザベトゆかりの各地で開催されたことは既に述べた。

このバート・イシユルもその主要開催地のひとつであり、四月から一〇月まで長期間にわたってさま

ざまな催しが行われた。日本に住む筆者がその全期間に参画することは不可能であったので、その中心となる八月二二日と二三日に行われたパート・イシユルの「市の祭り」と九月四日から六日までの「エリーザベト皇妃フェスティバル」に参加した。

八月の「市の祭り」には、恒例の夏祭との抱き合わせの祭りであり、エリーザベトに関係のない行事も含まれていた。

夏祭の期間中は町中への乗用車の乗り入れは規制されており、初日の八月二二日は生憎夕方から雨となり氣勢をそがれたが、それでも大勢の人々が繰り出した。翌二三日は晴れとなり、ヨーロッパの各地からのバンドが何組も路上や広場のあちこちで演奏をし、屋台のような食べ物の出店に人々が群がり、連日大賑わいであった。

この二三日には、クアハオスの前の公園でエリーザベトのそっくりさんコンテストが行われ、エリーザベト没後百年祭の行事も盛り上がった。優勝者にはミスオーストリアから賞品が授与された。

驚いたことに、ある会場内に特設的に設けられたスリル満点の遊戯施設に、何と電飾で「K A M I K A Z E」と銘打たれたものがあつた。しかし、戦時中に国民学校の児童であつた筆者にとつては、何とも言えぬ割り切れない寂しい気がした。

これに対して、九月の催しは純然たるエリーザベトの百年祭の行事であつた。期間中、エリーザベトゆかりのシユタルンベルク湖から来た人々の音楽、ハンガリーから来た人々によるジプシー音楽、ギリシアのコルフ島から来た人々による音楽と踊り、地元の人によるエリーザベトやハイネの詩などの朗読のほかに、フランツ・ヨーゼフ皇帝が映し出されている当時の記録映画など、会場と時間帯を分けて、



それぞれが何回か行われた。

最終日の九月六日、それぞれの行事が終わったあと、市の騎馬を先頭に、吹奏楽隊、各地からの出演者などを乗せた馬車によるパレードがあった。

薄暗くなりかけたフェスティヴァルの締め括りは、市の吹奏楽隊の演奏であった。さまざまな曲の演奏の最後の演奏曲目は、ハイドン作曲の「旧」オーストリア国歌であった。筆者には、この曲を選択した演奏者の気持ちがよく分かった気がした。この曲について蛇足を述べるところである。

一八世紀末にイギリス滞在から帰国したハイドンは、イギリスの国歌に刺激されて一七九七年、当時の神聖ローマ帝国皇帝であったフランツ二世（のちにナポレオンに敗れて、神聖ローマ帝国が解体されたあとの一八〇六年からはオーストリア皇帝フランツ一世となる。フランツ・ヨーゼフの祖父）に捧げる皇帝讃歌「神よ、われらのフランツ皇帝を護りたまえ」（作詩はハシユカ）を作曲し、二月一二日に公開初演されている。

少し脇道に逸れるが、同じ年にハイドンは、弦楽四重奏曲作品第七六第三番を作曲しているが、この曲の第二楽章に上述の皇帝讃歌の主題を取り入れている。このことから、この弦楽四重奏曲は「皇帝」という副題が付けられた。

ある音楽書では、この弦楽四重奏曲は一七九七年六月以前の作とされているので、皇帝讃歌が先で弦楽四重奏曲の作曲があつたようであるが、それ以上のことは筆者の調べた限りでは不明である。

そしてこの皇帝讃歌は、第一次世界大戦敗戦の翌年の一九一九年まで（それに対して、ある音楽書では、一九一七年までであるとしている）の間、歌詞を変えてオーストリア国歌となったものである。あ

の往年のドイツ映画「会議は踊る」で、フランツ一世が入場するときに、この国歌が演奏された場面を思い出される方もおられよう。

その後、一九二二年に、第一節が“Deutschland über Alles”（ドイツユラント・ユーバー・アルレス＝「世界に冠たるドイツ」）の歌詞で始まる、ファーラーズレーベン町の教師A・H・ホフマンの作詞に変えられてドイツ国歌となっている。ホフマンはドイツ国歌に制定される前の一八四一年に先作詩しており、詩が曲とのずれがないことから、オーストリア国歌時代の曲を意識したうえで作詩していたであろうか。

しかし、それも第二次世界大戦でドイツが敗れたあとは、歌詞の第一節は相応しくないとして歌われなくなったものの、一九五〇年から第三節の歌詞により当時の西ドイツで国歌として歌われ、一九九〇年に東ドイツと合併して統一された以降の現在でも、ドイツ国歌（合併前の東ドイツには別の国歌があった）としてオリンピック（一時はベーター・ベンスの第九交響曲の第四楽章の「歓喜の歌」を国歌替わりにしていたこともあった）その他の国際競技などでも聴くことができる。

オーストリアにおいても、さらに一九二九年から四七年まで再び国歌として歌われていたという。その間の一九三八年から一九四五年の間、オーストリアはナチス・ドイツに併合されていたのである。しかし、オーストリアは、一九四七年からまったく別の新しい国歌を制定しており、国歌に関する両国間の帰趨は決着をみたのである。

さらに余談となるが、この第三節の歌い出しは、“Einkigkeit und Recht und Freiheit”（日本語訳にすると「団結・権利・自由」）で、この句は東西ドイツ統一の悲願として、ユーロが使用される前の西

ドイツ時代から鑄造されていた、ドイツ通貨五マルク貨幣の「厚み」の縁の部分のぐるりに刻印されており、その念願が叶った統一後もそのまま使用されていた。これは、ベルリンの壁ができた翌年の一九六二年に添乗でドイツを訪れた際に、五マルク貨幣をしげとげと見て気がついたもので、暗記していたドイツ語の歌詞を口ずさみながら東西に分割されていたドイツの痛みに同情したものであった。

以上のように、この曲はドイツ国歌としてだけではなく、弦楽四重奏曲の一部として聴かれた方も多と思う。さらに、皇帝讃歌としては、歌曲としてディートリヒ・フィッシャー・ディスカオが歌っている。ただし、筆者所有のレコードには、作品番号が記載されていないので、その面から、讃歌が四重奏曲よりも先であるかどうかは分からない。

#### 閑話休題。

さて、エリーザベトの没後百年祭の締めくくりとして吹奏楽隊が最後に演奏した曲は、「フランツ讃歌」でなく、かつてのオーストリア国歌でもなく、もちろんドイツ国歌のそれでもなく、また、弦楽四重奏曲「皇帝」の第二楽章の主題でもなく、フランツ・ヨーゼフ、いやエリーザベトに対する挽歌であり、ハプスブルク王家の終焉に対する悲歌（エレジー）であったのかもしれない。

夜のとばりが下りた町中は、町を歩く人々も疎らになり、日本の夏祭の提灯のように家々の軒に吊り下げられた、エリーザベトの胸像が描かれたワッペン状のお飾りも、九月の夜風に寂しくはためき、落ち葉が道路の隅に吹きよせられる中で、そのあとに打ち上げられた花火は、短い夏の終わり告げる区切りとしての号砲なのか、それともエリーザベトに対する百年後の鎮魂の号砲だったのであろうか。



(カイザーヴィラ。1994年・筆者撮影)

### 第3章 ヴィーン

#### ——性に合わない宮廷生活——

##### 第1節 結婚式

エリーザベトとフランツ・ヨーゼフは、結婚に先立ち婚姻契約を取り交わさなければならなかった。一八五四年三月、花嫁側からの夫婦財産契約が署名された。しかし、エリーザベト側からの内容がヨーロッパの皇室に嫁ぐにはあまりにも不十分であつたので、ハプスブルク家側、すなわち花婿側から花嫁側に持参金等が追加されている。

しかし、当時のハプスブルク家の財産は、まだ、ベーメンに亡命し退位したまま同地に住みついている前の皇帝フェルディナント一世のものであり、一八七五年のその死によつてはじめてその遺産がフランツ・ヨーゼフの財産となるまでは、フランツ・ヨーゼフ側においてもあまり余裕があるものではなかつた。

この持参金の内容を知つたヴィーン宮廷の貴族たちは、花嫁側の貧しさをあげつらい、玉の輿に対する妬みも加わつて、エリーザベトを苛めの恰好の材料としたのである。

エリーザベト側からの持参金の財産目録は、〈注1〉

持参金 五〇、〇〇〇グルデン

家財道具及び宝石類（説明省略）

銀製品 七〇〇グルデン相当

衣服類一式

舞踏会用衣装 〇四着、盛装着 〇一七着、礼服 〇一四着、絹製ガウン 〇六着、夏の衣

服 〇一九着、毛織物のオーバーコート 〇六着、短いマント 〇八着、小マント 〇五着、

帽子とベール 〇一七個

下着類

シャツ類 〇一四ダース、スリッパ 〇六ダース、ストッキング 〇一四ダース、下穿

き・化粧着・ネグリジェ 〇五ダース、編み上げ靴と短靴 〇六足、手袋 〇二〇対

それに対してフランツ・ヨーゼフ側からは、

持参金追加 一〇〇〇、〇〇〇グルデン

その他追加 一〇〇〇、〇〇〇グルデン（「シユペンナーデル現金」）

朝の贈り物 一二、〇〇〇ドゥカーテン

そのほかゾフィー大公妃からは王冠、首飾り、耳飾りが、フランツ・ヨーゼフからはダイヤモンドに覆われた髪飾りが贈られている。

シユペンナーデル金（シユペンナーデルとは「ピン」の意）と呼ばれるその他追加金とは、結婚に必要な衣装・装身具・施し物・その他の細かな支出のための費用である。

また、朝の贈り物とは、昔からのドイツの法に基づいて、結婚初夜の翌朝に、妻が処女を失った代償として、夫が妻に与える贈り物である。しかし、それが何かの品物であるか現金そのものであるかは、

明記されていない。

このうちグルデンは、いずれも一四世紀から一九世紀まで当時のドイツ及び近隣諸国で使われていた通貨の単位であり、グルデンは金貨又は銀貨である。余談であるが、発音は多少異なるものの、ユーロに統合される前のオランダの通貨単位ギルダー（フローリンとも呼んでいた）と同一の単位である。また、ドゥカーテンは、一三世紀から一九世紀までヨーロッパ内で通用した金貨である。

いずれの通貨も、現在のユーロ及び日本円と換算するといくらかとになるかということとは、適切な基準がないため表すことはできない。

ゾフィー大公妃からの贈り物のうちの王冠は、ゾフィー大公妃が結婚したときに身につけていたものであり、首飾りとイヤリングもエリーザベトが用意したすべての貴金属類の総額よりも遙に高価なものであった。

以下、結婚式前後の情景を日時の流れに沿って追ってみる。

出発の四日前のイースター（日曜日）にミュンヘンの王宮で開かれた大特別演奏会の席で、エリーザベトは外交団により祝福されたが、これから迎える新しい生活に大きな不安を抱いていた。

プロイセンの大使は、プロイセン王に当てた手紙のなかで、エリーザベトの美しさを褒めたたえらるとともに、エリーザベトが生まれ育った故郷と家族との別離をたらそうに感じており、エリーザベトの表情の中に微かな翳りを見て取った、ことを報告している。しかし、将来の実情までは予感していなかった。

エリーザベトは、出発前に、再度ポツセンホーフェンを訪れ、涙を溜めながら、愛着ある部屋や庭や周囲の自然に別れを告げた。

一八五四年四月二〇日、花嫁であるエリーザベト・アマリエ・オイゲニーの一行がミュンヒエンを出発した。一行は、陸路をほぼイザール川に沿って、ミュンヒエンの北東約一四〇キロに位置するドナオ河畔のシュトラオピンググに向かった。この日はシュトラオピンググに宿泊している。

翌二一日、そこから船に乗り、午後二時ころに現在のドイツとオーストリアとの国境の町パッサオに到着、さらにそこからドナオ河を下り、夕方の六時ころに現在のオーバーエーステルライヒ州（上オーストリア）の州都リンツに到着した。

花嫁を待ちきれないフランツ・ヨーゼフ皇帝は、お忍びで陸路ヴィーンからリンツに駆けつけ、エリーザベトを出迎えている。

第三日目の二二日、オーストリアからの特別仕立ての「フランツ・ヨーゼフ号」に乗船したエリーザベト一行は、この日のエリーザベトのために他の一切の船舶の航行が許されていないドナオ河を、ヴィーンに向かって航行した。

一九五五年に制作されたロミー・シュナイダー主演の映画「シシー」（日本語の題名「プリンセス・シシー」）では、エリーザベトは河岸で祝福している国民に笑顔で応えているが、実際ではエリーザベトはそのような心の余裕はなかった。

その間、フランツ・ヨーゼフは急遽ヴィーンに戻り、夕方四時ころにヴィーン郊外のヌスドルフの船着場に到着したエリーザベト一行を正式に出迎えた。このときエリーザベトは、並居る高位高官が出迎



えている目の前で、フランツ・ヨーゼフにキスされ、その他の市民を含めた大勢の観衆の歓呼を受けたとき、怯えかつ金縛りにあつたように、動けなくなつてしまつた。しかし、それは、幼き花嫁が今までしたことがないうら羞ずかしい経験だつたからであらう。

その夜、シェーンブルン宮殿で晩餐会が行われたが、それに先立ち、エリーザベトに同行してきたバイエルン側の二人の侍女たちはその場でお役御免となり、新しく女官長としてゾフィー・エステルハージー伯爵夫人、そのほか二人の女官が任命された。

同行してきた顔見知りの侍女から引き離され、まったくのひとりぼっちでヴィーン宮廷に乗り込まなくてはならなかつた、一六歳のエリーザベトは内心どんなに心細かつたか想像に余りあらう。おそらくその不安が的中したのではなかつたか。

エリーザベトは、初対面から、このゾフィー大公妃の腹心ともいふべき女官長に不信感を持ち、気に入らなかつた。このことは、何も知らない花嫁が、これから迎えるヴィーンでの生活において安心して話ができる相手を失い、ヴィーン宮廷内で孤立することになる最初の出来事であつた。

二三日には、皇妃のヴィーン入場のパレードが行われ、政治犯の大赦及び帝国各地域に祝い金が振舞われたが、反抗的なイタリヤのロンバルディア及びハンガリーはその対象外とされた。これも明らかにゾフィー大公妃による見せしめであつた。

それに対して、かつてカレル一世が神聖ローマ帝国皇帝にも選ばれたこともあるベーメンは、ゾフィー大公妃にとつては、ハンガリーとは対照的に心強い味方であつた。またメーレンも、一八四八年の一〇月革命の際には皇帝一家が領地内のオルミュッツに避難し、この時点で退位したフェルディナント

一世がのちにこのメーレン地域内で余生を送るといふ、好ましい関係にあった。

もちろん、エリーザベトは、その恩赦の対象外となったハンガリーとイタリアの二国との関係について、予備知識として知ってはいなかったはずであるが、後年、オーストリアのこの二国に対する対応の拙さに自らも巻き込まれ、オーストリア帝国の実情を知悉ちしつするのである。

この日、エリーザベトは、ホーフブルクで馬車を下りる際、馬車のドアの枠の上にテイアラを引っかけてしまい、外すのに苦労したというハプニングがあった。

続く一八五四年四月二四日、いよいよオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフとバイエルン王国公女エリーザベトの結婚式が、午後七時からヴィーンのアオグステイナー教会で厳かに執り行われた。

式はヴィーン大司教ラウシャー枢機卿によって進行された。指輪交換の瞬間には同教会の屋根から放たれた最初の祝砲を合図に、次々と号砲が鳴り響き、エリーザベトがオーストリア皇妃になったことをヴィーンの市民に伝えた。

この日の夜も祝宴が行われた。ヴィーン到着からこのかた、主賓であるエリーザベトは華やかではあるが意に沿わない行事に休む暇なく駆りだされ、疲労はその極に達していたことは想像に難くない。とにかく厳粛なる行事は一応終わった。

このように、到着した日のシェーンブルン宮殿までの行列及び宮殿におけるバルコニーでの答礼で、宮殿で行われた祝宴で、翌日の晩餐会で、翌々日のヴィーン入場パレードで、翌二四日のアオグステイナー教会での結婚式でと、もちろん、本来、晴れがましい祝福されるべき主人公のはずであるものの、エリーザベトにとっては、なんともやり切れない行事の連続にしか過ぎなかった。

しかし、まだ心は休まらなかった。いや、幼き新婦には次ぎなる地獄が待っていたのだ。

翌二五日の朝に、ゾフィー大公妃とルドヴィカ妃が、「ナーハシャオ」（「確認する」ことの意）と呼ばれる夫婦となったかどうかの確認のために、新婚の二人の部屋に入ってきたとき、エリーザベトは羞ずかしさに顔を赤らめた。

しかし、実際の初夜を迎えたのは三日後であり、これもたちまち女官たちの知るところとなった。

また、エリーザベトはハンガリー貴族の代表団から民族衣装を贈られ、同代表団を歓迎したが、これもゾフィー大公妃にとっては快からぬ小事件となった。これはハンガリーが、まだ政治色に染まっていない新皇妃に好印象を与えるためのひとつの贈り物であったが、この時点では、エリーザベトはおそらくゾフィー大公妃とハンガリーとの関係についてまだ知らなかったはずである。

二七日には、ヨハン・シュトラオス（父）の指揮により舞踏会が催され、さらに二八日にはプラターターでレントツ・サーカスが行われた。このプラターターは現在ではヴィーン市民の憩いの公園となっているが、当時は王室の狩猟地の一部であった。

自らが祝われる当事者であるものの、大勢の国民を前にした祝典・夕食会に出席して挨拶することや式辞を述べるのが苦手なエリーザベトにとっては、この堅苦しい一連の行事の中で唯一、このサーカス公演が一番気が休まる催しではなかったであろうか。

## 第2節 花嫁としての悩みと苦しみ

エリーザベトがフランツ・ヨーゼフと結婚した当時のオーストリア帝国は、議会も憲法もない正に専制君主国そのものであり、最高の権力者である皇帝が政治及び軍事の一切を掌握し、首相さえ置いていなかった。そのほかに大臣もいたが、かれらは皇帝の助言者にすぎなかった。

一八四八年に首都ヴィーンで起こった一〇月革命により、ハプスブルク王家の家族は支配下のメーレンのオルミュッツに難を逃れた。

神経に障害があつたフェルディナント一世がその地で退位宣言をしたが、ゾフィー大公妃は、既述したように、幾つかの経緯を踏んだあとに、フェルディナント一世の弟でありかつ自らの夫であるフランツ・カール大公を皇帝とすることなく、息子のフランツ・ヨーゼフを即位させている。

ゾフィー大公妃は、王権神授の思想、帝国の独裁支配、議会制度の否定など、専制君主支配の維持に躍起となつており、一八四八年の三月革命の反動があつてもなお、時代の流れに逆行する役割を演じようとしていた。

ゾフィー大公妃は、結果的には、フランツ・ヨーゼフ皇帝に代わる「事実上の皇帝」として君臨することになる。

このような大帝国を取り仕切るには、後述するような当時の内政と外交は非常に微妙であるばかりでなく厳しさが加わり、即位の五年後にエリーザベトと結婚したフランツ・ヨーゼフには重すぎるもので

あった。事実、ゾフィー大公妃に頭の上がらないフランツ・ヨーゼフは、皇帝として母の意に沿うべく早朝から夜遅くまで政務をこなすべく努力を傾注した。

真面目で愚直なフランツ・ヨーゼフ皇帝は、公私にわたって母親に対して取った唯々諾々の態度は、公務の忙しさと相まって、花嫁であるエリーザベトと甘い生活を満足に送ることもできず、また花嫁の要望より母親の指図に従わざるを得なかったところに、新婚生活の最初の第一歩から既に問題を孕んでいたのである。

フランツ・ヨーゼフ即位の半世紀ほど前の世界の歴史の流れを遡ってみると、遠い一七七六年のアメリカ合衆国の独立戦争を契機として、一七八九年のフランス革命により自由主義・国民主義が既に萌芽し、ナポレオン出現のあと、一八一五年のヴィーン会議で専制君主制への揺り戻しがあったものの、一八三〇年のフランス七月革命を経て、一八四八年にはフランスの二月革命、ベルリンとヴィーンにおける三月革命と続く、ヨーロッパにおける時代の大きなうねりに対して、多民族国家であるオーストリア帝国が安泰でいられることは実際には不可能に近いものがあった。

すなわち、当時のゲルマン民族のオーストリア皇帝は、現在のオーストリア国内の諸州のみならず、支配下に異民族であるマジヤール民族のハンガリー、西スラヴ民族のチェコのボヘミアとモラヴィア、スロヴァキア（ハンガリーの支配下）とポーランド、ラテン民族ではイタリアのロンバルディアとヴェネツィアのほかルーマニア（ローマニアとも記述するようにラテン系）、南スラヴ民族のクロアチアとスロヴェニア（ハンガリー支配下）、さらにはウクライナ等の王・伯爵・領主を兼ねていたので、反乱や抵抗は必至であった。（現在のそれぞれの国の全部乃至一部）

それに対して、ゾフィー大公妃は息子のフランツ・ヨーゼフに、その支配者としての威厳を高め、帝国内の属領をそのまま維持するための政務を最優先に、しかも忠実に実行させることを要求した。したがって、皇帝という職位と切迫した政治及び外交情勢から、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトとの蜜月は、最初から完全に脇に押しやられてしまったのである。

それと同時に、エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフに対して助言する役割をも与えられず、貴族をはじめとする諸官や国民、さらには支配下にある多民族の前において、宮廷儀礼に則った義務を遂行することのみを求められ、また、威厳を欠くようなことは一切認められなかった。

ゾフィー大公妃の立場からすれば、大帝国の皇妃にとつてはそのような拘束は当然の義務と言えるかもしれない。また、蜜月中とは言え、難局に直面しているフランツ・ヨーゼフの治世に支障を来すような事態にならないように、エリーザベトを遠ざけたいとの思惑が働いていた。

しかし、それにしても、まだ若くうぶな皇妃に対して、ゾフィー大公妃は義母としては余りにも思いやりに欠けていた。これが、ゾフィー大公妃と皇妃シシーの間に、生涯にわたる大きな亀裂を生む最大の原因となったのである。

フランツ・ヨーゼフとエリーザベトの新婚生活は、ヴィーンを中心から南約二〇キロに位置するラクセンブルク宮で始まった。しかし、フランツ・ヨーゼフは毎日ヴィーン市内のホーフブルク宮殿で執務するため、朝早く出発した。多くの政務を抱え、しかも真面目なフランツ・ヨーゼフが帰る時間が遅くなることもあり、エリーザベトは日中は独りぼっちの毎日となった。

ラクセンブルク宮には広い庭園もあるが、エリーザベトは皇妃として行動を制限され、しかもエステルハーギー女官長に監視される状態であったので、フランツ・ヨーゼフに同伴してホーフブルク宮殿で過ごすことを希望したが、ゾフィー大公妃はそれを許可しなかった。

もとリヒテンシュタイン侯爵の令嬢であったこの五六歳の女官長は、三七歳で夫と死別してから二〇年来子供のない未亡人で、ゾフィー大公妃はエリーザベトの役割について自らエリーザベトに指示するほか、エステルハーギー伯爵夫人を通じてシシーに守らせた。

さらに、エリーザベトのすべての行動は、エステルハーギー伯爵夫人をはじめとする、エリーザベトを取り巻く女官等によってゾフィー大公妃に逐一報告されている。同時に伯爵夫人は、貴族の陰口を報告するのが好きな女性でもあった。

エリーザベトにとっても、はじめからさまざまな負い目があった。すなわち、貴族の出自とはいえハプスブルク家との格式の相違に大きな落差があるだけでなく、父マックス公爵の奇行や奇癖の噂がもはやヴィーンに伝わっており、自分自身としても年齢で皇妃としては未熟であることなど。

それどころか、過去に育ってきた環境や流儀などから宮廷儀礼に縛られたくないという反発もあり、エリーザベトにとっては宮廷は最初から「監獄」であった。そのため、嫌というほど辛酸を嘗めることになるのである。

皇帝フランツ・ヨーゼフも難しい立場にあった。経験不足の若い皇帝は支配者としては未熟であり、母に皇帝にしてもらったという負い目があり、母の容喙ようかいを容認せざるを得ない立場にあった。

結婚そのものは、政略結婚という意に染まない相手とではなく、自ら選んだ皇妃であるため、もっと

新婚気分を味わいたい時期であるにもかかわらず、内政外交上の重大な問題が次々に発生してゆく。勤勉でありかつ従うことに慣れた性格から、なかなかエリーザベトとの自由な時間が取れない。

エリーザベトの結婚は、式が行われたその日から波瀾含みのスタートとなったのであった。孤独を紛らすために自宅から連れてきたオウムに話しかけたり、その他の動物を慈しんだりしたが、それがまた子供っぽいと見下されたり散々だった。そのためもあり、結婚一四日目にして内に閉じこもって詩作をしたり、郷愁に駆られたりしたが、その一方で、精一杯、夫と義母の間の気まずさの原因にならないよう控え目な態度をとるように努力はしている。しかしその反面、嫌なもの嫌いと、きっぱりとした意志と激しさで自由への熱望の気持ちも失っていかなかった。

しかし、新妻のエリーザベトに対する圧力や嫌がらせは、それだけでは済まなかった。

### 第3節 姑との確執

嫁と姑の確執は、古今東西、いつでもどこにでも存在する永遠の問題である。もちろん嫁と姑とがそれぞれお互いに相手を思いやり、仲良くしている家庭も数多くある。ゾフィー大公妃も、最初からエリーザベトに悪意をもって接していたわけでもなかった。

フランツ・ヨーゼフの結婚の相手が、当初考えていたヘレーネでなく、エリーザベトが選ばれたときには、ゾフィー大公妃もエリーザベトの長所をみ、好意を示していたことがあった。しかし、ゾフィー大公妃のエリーザベトに対するそのような好意は、結婚後は一気に消えてしまった。



そして、ハプスブルク家における二人の確執は、さまざまな要素が重なり合い、増幅され、一八七二年のゾフィー大公妃の死まで、ついに解消することにはならなかった。

それらの原因はいくつか考えられる。

先ずは、ゾフィー大公妃側の原因を挙げてみる。

その第一は、ヨーロッパが革命の嵐が吹きすさぶ近代化の時流の中で、専制君主国であるオーストリアを維持してゆくために、政務で忙しい皇帝の邪魔になると、新婚生活のほとんどの時間、エリーザベトを意図的にフランツ・ヨーゼフから引き離したことにある。

エリーザベトは初めから政務には関心はなかったはずである。しかし、フランツ・ヨーゼフは、朝早くから夜遅くまで都心のホーフブルクに「出勤」し執務しており、エリーザベトが同行することによってフランツ・ヨーゼフの執務の邪魔になる可能性はあるかもしれないが、条件付きで同行させてもよかつたのではないか。

それが認められないエリーザベトとしては、暇をもてあまして乗馬に興じていると、エステルハーギー伯爵夫人のご注進を受けたゾフィー大公妃に叱責されるのである。このように、夫不在中のラクセンブルク城におけるエリーザベトの振る舞いについて、ゾフィー大公妃はあれこれ注文をつけ、エリーザベトの神経を逆撫でしている。

第二に、フランツ・ヨーゼフが選んだ皇妃としてのエリーザベトがあまりにも子供っぽ過ぎる一方、皇妃の第一の義務である宮廷儀礼やしきたりを積極的に勤めなかつたことから、権威あるオーストリア

帝国の皇妃として厳しく教育するために、ゾフィー大公妃は、エリーザベトに対してぐざりとくるようなさまざまな嫌がらせや当て擦りの対応をして、ときにはエリーザベトを萎縮させ、ときには反発させるなど、実質的な国母として、若き皇妃に対する思いやりが完全に欠如していたことである。

帝国内で並ぶ者なき男勝りの権力者であるゾフィー大公妃は、意に沿わぬ他人の人格を叩きつぶすという非情な一面が、家庭内においても大きく作用している。

エリーザベトがゾフィー大公妃に、「S I E」ではなく「D U」で呼びかけたことに対して、不快の念を示し、フランツ・ヨーゼフをとおして、エリーザベトに注意させたことがあった。

ご承知のように、ドイツ語では、「あなた」という言葉のうち、S I Eは少し距離を置いた第三者に対して問いかける言葉に対して、D Uは身内のように親しみを込めた表現である。エリーザベトは、今までの家庭の中での表現と同じように、親しみを込めてゾフィー大公妃にD Uで呼びかけたのであったが、それが通用せず叱られる結果となった。それはそれとして、必ずしもゾフィー大公妃が意地悪で叱責したのではなく、エリーザベトが配慮に欠けていたことは間違いないが、もう少し思いやりのある注意の仕方があってもよかったのではないか。

また、家族内では、ゾフィー大公妃と一日置きに朝食を共にすることが義務づけられ、その席上でゾフィー大公妃は根掘り葉掘り問い詰めるような執拗さを見せた。それに耐えられなくなったエリーザベトは抵抗したが、フランツ・ヨーゼフの頼みに折れて従った。しかし、エリーザベトにとってそれは、針の筵の上に座るような気持ちであったことは間違いない。

第三に、ゾフィー大公妃は、エリーザベトが生んだ子供たち、すなわち自分にとっては孫たちに当た

るが、その出産さらには育児についても、その干渉は度を越し、母親であるエリーザベトから子供たちを取り上げ、何もさせなかったことである。そのようなことは何もハプスブルク王家だけの特殊な育児方法ではないこともないであろう。そのような姑に対して、東洋のある国の皇太子妃は前例を破って、自ら子供に授乳したことも最近明らかになっているのであるが。

しかし、子供たちを自分と同じフロアーの部屋に住ませたいというエリーザベトの願いについても反対し、もしそうするのであれば自分はホーフブルク宮から去る（言い換えれば政務から降りることを意味する）とまで威しをかけている。それには、ゾフィー大公妃にとつて、エリーザベトが子供たちを思うようにさせることは、すなわち政治的な意味も含めて、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフにまで影響を与えるのではないかと、疑心暗鬼に陥つたからであろう。それは、エリーザベトに首つたけのフランツ・ヨーゼフには考えられ得ることもあり、当たらなくもない。

それにしても、いかに皇室とはいえ、第三子まで母親の希望を無視してまで親子の対面にも制限を加え、しかも育児をしたことのない女官長に対応させるとは、母親であるエリーザベトとしてはなんともやり切れなさをとり越しており、母親本来の役割をまったく無視された行為である。

第四には、自分と帝国の将来を、自分に頭の上がらないフランツ・ヨーゼフ皇帝に託すことはともかく、子離れできないゾフィー大公妃は、フランツ・ヨーゼフが母親である自分ではなく、嫁であるエリーザベト側についてしまうことを恐れた母親の嫉妬も働いているはずである。そこで、皇帝を自分の味方に引き入れ、エリーザベトの言い分よりも自分の言い分をフランツ・ヨーゼフに認めさせ、エリーザベトには何としてでも宮廷儀礼という義務を第一に遂行させるように仕向けたことである。

次に、エリーザベト側の原因を挙げてみる。

ヘレーネと違ってまだ幼い面影が多く残ったエリーザベトとしては、自ら望んで皇妃になったわけではなく、フランツ・ヨーゼフに見初められ、皇太子妃からではなく、いきなりこのような大きな帝国の皇妃の祭り上げられたので、不慣れのため戸惑うことも多く、当初の時点では致し方ないだろう。

ただ、育ちの関係もあり、ゾフィー大公妃の性格や対応の仕方にも関係してくるが、また、自ら育った自由な環境から、嫌なものは嫌という態度は、決して悪いことではないが、皇妃という立場上、堅苦しい皇室典範やしきたりに直ぐ慣れる努力及び遂行する努力を怠ったことは、怠慢と非難されても仕方がない。ただ、この努力をしたところで、皇妃として嫁としての生活を改善してもらえないことにはつながらなかったことはたしかである。その是非はともかくとして、嫁と姑の関係は、修正できないほど悪化してしまった。

エリーザベトは、そのほかに何をすることができたのだろうか。

最後に、フランツ・ヨーゼフ側の原因を挙げてみる。

結婚したばかりの時点から、若き皇帝にとっては、公的には内外の解決すべき問題をあまりにも多くを抱え過ぎて、新婦と共に過ごす時間が十分とれなかったことは、同情に値することができるともいえない。もう一方の私的の面でも、精神的な個性の持ち主の母親に対して、皇妃のために敢然と立ち向かう努力に欠け、ゾフィー大公妃には殆ど抵抗できずに、愛するエリーザベトに苦渋を飲ませどおしだっ

た。

そのことは、エリーザベトから見れば、一縷の望みは託しながらも、愛する夫に、嫁と姑の問題を解決してくれることは期待できなかったのではなかったか。

以上見てきたように三者三様であるが、結論的に言うと、何といつても一番の大きな原因は、ゾフィー大妃の高圧的な性格・態度にあったと筆者はみている。宮廷生活に不慣れで、宮廷儀礼をも嫌がる幼き皇妃であっても、フランツ・ヨーゼフが選んだ以上、自らを初めとして、配する女官長以下の人選を含めて、もっと親身に対応すれば、もう少しましな結果となつたのではなかったか。

ゾフィー大妃の老獪さをもつてすれば、宮廷儀礼に関してエリーザベトに守らせることは守らせ、少なくとも育児に関してだけでも自ら譲歩すべきところでは譲歩するなど、懐柔することはそれほど難しいことではなかったことはたしかである。それによって、エリーザベトも妥協したかもしれない。それを、権勢並ぶべくもないゾフィー大妃は、力づくで押し切つた結果、窮鼠猫を噛むまでは行かないが、エリーザベトのゾフィー大妃に対する徹底的な不信感を生み、結果的には、生涯に亘つて、エリーザベトをゾフィー自らが望まない反対方向に押しやつてしまったことに気がつかなかつた。

ゾフィー大妃のこの心の背景には、オーストリアという当時最高の帝国・王家に嫁いだにも拘わらず、結婚としては決して恵まれていないことを嘆いていたことが原因と考えることができる。夫であるフランツ・カール大公とその兄で前の皇帝であるフェルディナント一世という性格的に欠陥のある二人の男性の中で、自分がやらなくては帝国を維持できないとの絶対的な信念のもとに、二〇年近くも自分

の思いどおりに事を運ぶことに慣れたことで、エリーザベトへの対応も修正できなかつたのである。

結婚した翌年、エリーザベトが一七歳の一八五五年三月五日に長女が生まれた。ゾフィー大公妃は、エリーザベトに何ら相談もなく、自分の名に因んで長女をゾフィーと名付けた。また、ゾフィー大公妃は、エリーザベトの分娩の際にフランツ・ヨーゼフを同席させ、自らは医師団等を指揮した。世継ぎが生まれるのであるから、結果的には女の子であつたとしても、フランツ・ヨーゼフの立会いは必要であることは分かるが、不仲のゾフィー大公妃が立ち会つたことは、エリーザベトに羞恥心と屈辱を生む結果となつた。

さらに養育係も既にゾフィー大公妃自らが選んでいた。養育係はカロリーネ・フォン・ヴェルテン男爵未亡人であるが、自らも子供がいなかつたため子供を育てた経験がなかつた人物である。エリーザベトは自分ひとりだけで子供の側にいることを許されず、エリーザベトが養育係に直接行つた指示は、翌日すぐさま取り消されている。

それに追い打ちをかけるように、長女ゾフィーはゾフィー大公妃の子供部屋に移され、エリーザベトが子供に会うときは、養育係と召使を同行させるとともに、ゾフィー大公妃が同席することになつていった。そのため、エリーザベトはゾフィー大公妃と争うことを避け、遂には子供の部屋に行くことを諦めることになつてしまつた。

それだけではない。エリーザベトが子供を連れてポツセンホーフエンの実家に里帰りしているときでも、これも恐らくゾフィー大公妃の指示であろうと思われるが、フランツ・ヨーゼフの願いから、エリ

ーザベトは、ゾフィー大公妃に子供に関する報告をしなければならないことになっていた。

長女のゾフィーは、一八五七年五月二十九日に、二歳で生涯を閉じた。

一八五六年七月一日に生まれた次女のギーゼラについても同じことがいえる。ギーゼラの名は、バイエルン公女でハンガリー初代の国王イシュトヴァーン（ドイツ語ではシュテファンと呼称）一世に嫁いだギーゼラ・エリーザベトの名に因んでルドヴィカ公妃により命名されたが、このギーゼラもエリーザベトはゾフィー大公妃に取り上げられてしまい、ゾフィー大公妃の子供部屋に移されてしまった。エリーザベトが子供に会いに行くためには、長女ゾフィーの場合と同じことが求められ、ゾフィー大公妃の言いなりになる主治医ゼーブルガー博士と意見が衝突した。ギーゼラから中一年置いた一八五八年八月二日に、三人目のルードルフが生まれたときは、女子二人のあとの待望の嫡子であるということから、ルードルフは、さらにエリーザベトから遠い存在となった。それは、ルードルフという名前からも窺える。

ルードルフの名は、大空位時代に終止符を打ち、一二七三年にドイツ国王に選ばれ、ハプスブルク家で初代の神聖ローマ皇帝となったルードルフ一世に因んで命名されたことでも分かるように、大切な後継者ということもあり、フランツ・ヨーゼフはさらにゾフィー大公妃寄りとなった。

ルードルフの育児及び教育については第8章で詳述する。四人目となるマリー・ヴァレリーが生まれて初めて、エリーザベトは母親としての喜びを満喫することができるのである。それは、前の三人の子供を育てることができなかった反動で、マリー・ヴァレリーを溺愛するのであるが、ルードルフと同様に、エリーザベトのその後の人生に大きく関係があるので、同じく第8章で詳述することにする。

## 第4節 四面楚歌

エリーザベトがヴィーンに着いてから最初に経験したことは、皇妃として新しく課せられた皇室典範の遵守とさまざまな儀礼的行事への出席である。しかもそれらはもちろん、皇妃たるものとして最優先にこなさなければならぬ本来の職務であった。

しかし、エリーザベトは、今まで自由に育ってきた環境から、皇室は厄介な儀礼の鎖につながれているが、その儀礼は見せ掛けがすべてであると断じ、決まりとはいえがんじがらめの宮廷儀礼に拘束されたくない、大勢の人々の前に出たくないという観念が強かったため、それらの職務を遂行することはやり切れない苦痛のものであった。

エリーザベトは、嫌いなものは嫌いとして、皇室典範や外交儀礼などに対して、いくつかの例外を除き、生涯を通じて極力避け、無視し、拒否し続けた。これが、宮廷内における軋轢あつれきを生み、国民の反発を買う、外国皇室特にイギリス皇室への非礼となり、自らの立場を不利にすることにつながったが、遂にその姿勢を一貫して変えることはなかった。

エリーザベトが、フランツ・ヨーゼフと婚約した翌日に、女性家庭教師のロデイに向かつて「やはり私はもう皇帝を愛しています。しかし、彼が皇帝でなかったらなあ！」と打ち明けたとき、エリーザベト本人がどの程度まで皇妃としての職務を理解していたか分からないが、自分の未来を予感していたようにも思えるのである。



結婚二カ月後に、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトは、帝国領地内の最初の訪問先としてベーメンとメーレンを訪れている。この訪問でエリーザベトは皇妃としての任務に目覚め、精一杯の努力をした結果、エリーザベトの美しさと優しさが現地民を感動させ、皇妃としての役割を果たすことができた。

それ以降も皇帝夫妻は、オーストリア国内はもちろん、帝国領地内の各地を訪問しているが、オーストリアと属領との間にたとえ統治上ぎくしゃくしていることはあっても、エリーザベトの美貌がそれを和らげる効果に大きなものがあつた。

若き美しき皇妃を一目見ようとすると、多くの国民や市民の熱狂的な歓迎や祝福という、それが自然の感情から生まれたものであれば、同じ義務であっても他の皇妃や王妃にとっては好ましいことには違ひなく、満面笑みを浮かべて応えるのが本来である。しかし、エリーザベトにとっては、それら大方の歓迎や祝福は、皇妃見たさの単なる好奇心にしか過ぎないものとし、これまた煩わしさが先に立つて、素直に受け入れることはなかつた。

話が繰り返しになり恐縮であるが、さて、エリーザベトが宮廷内に入つて直面した最初の試練は、結婚式の前々日にゾフィー大公妃によって、エリーザベトと四〇歳も年齢差のある老齡のゾフィー・エステルハージー伯爵夫人が女官長として任命されたことである。

エリーザベトは、まず、「やんごとなき公女エリーザベト妃殿下の公式の入居の際の儀式」のマニユアル書類を押しつけられ、翌日からのなすべきこと学ばなければならなかつた。さらに、翌日には別の分厚い二冊の儀礼に関するマニユアルを渡され、結婚式に備えなければならなかつたが、エリーザベトはそれらを憤然と女官長に突っ返した。

しかし、エリーザベトを子供扱いにしていたゾフィー大公妃は、エリーザベトに対し、皇妃として貴族をはじめとする諸官・国民、さらには支配下にある多民族の前では、がんじがらめの宮廷の儀礼に則って謁見等の行動することを求め、威厳を欠くようなことを一切認めなかった。

それらを守るために、ゾフィー大公妃自らエリーザベトに指示するほか、エリーザベトと同格に扱ったエステルハージー伯爵夫人を通じて、エリーザベトに守らせた。さらに、エリーザベトを取り巻く女官たちに、エリーザベトのすべての行動を、ゾフィー大公妃に逐一報告させている。エリーザベトが処女から女性となったのは、結婚後三日目であるということが、直ちに女官の間に広まった例でもわかるのである。

エリーザベトは、初対面のときからこの女官長に不信感をもって眺め、この家庭教師風の女官長が気に入らなかつた。貴族の陰口を報告するのが好きなこのエステルハージー伯爵夫人は、エリーザベトにとって身近なもつとも警戒すべき人物であつた。

ただ、一部後述するように、皇妃の義務の一つである戦時中の病院での傷病兵の慰問や、コレラ施設院・精神病院・孤児院の訪問など、社会的弱者に対する見舞いについては、バイエルンでは当然の義務として、エリーザベトも抵抗を感じず、嫌がらずにむしろ進んで行っている。同行の女官などがはらはらするような場面でも、嫌な顔をせず親身に見舞っていたことは、しきたりとしての義務感だけでは到底できる技ではなかつた。それは、空疎で形式的な儀礼とは別の、思いやりを込めることのできる真の職務であつたからである。

一方で、宮廷内で問題として取り上げられ、エリーザベトに対する苛めの原因となる、エリーザベトにとつての負い目が三つあった。これはエリーザベトにとつてはできない責任外の問題であった。

その第一は出自が低く、皇帝との身分上の格差であり、第二が興入れする貴族として財産が少ないことや嫁入り支度の持参金が少なかったことであり、第三に、父マクシミリアン公の性格や行動に関してである。

しかし、これらは、エリーザベトに対する妬みや羨望を持った暇に飽かす女官たちが、格の低い貴族として育ちが悪いとか、宮廷儀礼に欠けているとか、エリーザベトの人格に対する非難も含めて、中傷という恰好の糧として、エリーザベトを貶めたことであつた。

エリーザベトを嫌うゾフィー大公妃が支配する宮廷内での雰囲気から、それは単なる噂に留まらず、一斉にエリーザベトに対する苛めとして横行する有り様だつた。

さらに、後年のことになるが、フランツ・ヨーゼフの弟のフェルディナント・マクシミリアン公は、ベルギーの王女シャルロッテと結婚したが、ゾフィー大公妃は、エリーザベトへの当てつけとして、シャルロッテを美しく、知的であり、資産があり、家柄もよしと手放しで褒め讃えたため、その対照として、エリーザベトは性格及び出自も劣るとして、女官内でも引き合いにだされた恰好ともなつた。

そのため、エリーザベトは、自分とは対照的な自尊心と名譽心の強いシャルロッテと不仲になつたばかりではなく、さらに後年に息子のルードルフ皇太子と結婚した、同じベルギー王室出身のシユテファニー王女も好きになれなかつた。

これらは、ゾフィー大公妃が先頭に立ってエリーザベトを批判したため、エリーザベトの行動に対する批判も含めて、ほとんどの女官、いやそれだけではない、閣僚、侍従、武官、侍医なども、エリーザベトに非難の集中砲火を浴びせたのであった。

このように、一六歳の若き皇妃は、結婚したばかりの最初のときから、夫であるフランツ・ヨーゼフを除いて、宮廷内には支援する一人の親族も側近もいなかった。

いや、一人エリーザベトの理解者であり庇護者であったそのフランツ・ヨーゼフにしても、政務に忙しいことと、エリーザベトに批判的であった母ゾフィー大公妃に強く逆らえなかったことから、エリーザベトはほぼまったくの四面楚歌の中で敢然としてしきたりと闘ったのである。その重圧たるや想像以上のものがあつたであろう。

エリーザベトは、過去の家庭生活から考えれば、確かに洗練されていなかったが、噂話に明け暮れる宮廷内の貴族に比べれば、貴族たちのお喋りや噂話を軽蔑するだけでなく、遥かに勉強家であつた。

エリーザベトは、宮廷内における秩序や自分を批判する反対勢力に対して、徹底して無視するか無関心を押し通した。国家の代表者としての謁見、公式行事に対する出席、家庭内の行事や団欒など、皇妃として母として当然果たすべき責務すら、敢えて放棄することも多かつた。これらの行動は、宮廷内、国民、家族内特にゾフィー大公妃から痛烈な批判を浴びながらも、まげ枉げることはなかつた。これは、反発による依怙地いこじというより信念により取り合わなかつたということの方が正しいかもしれない。

この四面楚歌の立場は、その結果として、皮肉にも批判勢力によって鍛えられたたかさがあると

いうこともできると同時に、馬鹿な相手は取り合いたくないという気持ちと、重苦しい宮廷から距離を置くために逃避するという手段を選ぶことによつて、精神的防衛反応を高めていったのである。

しかし、ゾフィー大公妃の立場からすれば、彼女および彼女の取り巻きによるエリーザベトに対するこれらの行動は当然の行為と言えるかもしれない。ただ、若い皇妃に対して、思いやりに欠けていたことは否めないし、これが、ゾフィー大公妃と皇妃エリーザベトと間に大きな亀裂を生む最大の原因となつたのである。

## 第5節 爆弾を抱えた内政

一八四八年にフランツ・ヨーゼフが皇帝に即位したとき、ハプスブルク家のオーストリア帝国は、現在の国名に直すと下記の国々（その全部又は一部）を支配していた。当時の国名や地名及び領域や国境から見ると大きく異なり、それらを説明するとかなり複雑になるので、必要に応じてその都度説明することにする。

オーストリア（ハプスブルク家自体の領土のほかにいくつもの公国が世襲領となつていた）、ハンガリー、クロアチア、スロヴェニア、チェコ、スロヴァキア、ルーマニア、ポーランド、ウクライナ及びイタリアである。

二一世紀の各国の版図から見ても、当時のオーストリア帝国は、かなり多くの国、多くの民族を抱えた多民族国家であることがわかる。ヨーロッパで近代化が進行し、民族の自立が芽生えてきた一九世紀

の後半において、当時の列強であるイギリス、フランス、ロシア、それにドイツ民族が圧倒的な多数を占めるプロイセンに比べると、特にオーストリアが直面したこの多くの異民族を抱えたという、この難問が一気に噴出する直前の不気味な情勢のなかに、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトは、好むと好まざるとに拘わらず、放り込まれていたのである。

これらの傘下の民族のうち、帝国内で大きな爆弾としてハプスブルク家に揺さぶりをかけるのは、ハンガリー、イタリア、チェコの三カ国である。

ハンガリーについては第4章であらためて詳述するので、ここでは、当時、スロヴァキアはハンガリー王国の一部となっていたこと、クロアチア王国、スロヴェニア王国、トランシルヴァニア王国（現在のルーマニアの中央部と北西部を占める地方）、フィウメ市（現在のスロヴェニアのリエカ市）が、ハンガリー王国の属国となっていたことを述べるにとどめる。

イタリアは、四七六年に西ローマ帝国が滅亡したあと、東ゴート、ランゴバルトの支配を経て、フランク王国のひとつである中部フランク王国として継承されているが、現在のイタリア半島全体で見るとこの時点ですでにいくつもの小国に分裂している。

八七〇年に中部フランク王国が東西フランク王国それぞれに併合され、九六二年に神聖ローマ帝国が発足すると、イタリア半島はドイツとの結びつきが強くなる。以後、ローマを挟んで半島の北部と南部は別の道をたどることになる。

その後のルネサンス等の国内の歴史を割愛するとして、一六世紀にイタリアの覇権をめぐってフランスとハプスブルク家のオーストリアとの間で争われたイタリア戦争の結果、スペインの植民地（一五一

六年～一七〇〇年の間は、オーストリア皇帝がスペイン王も兼ねたため）と化したあとの一八世紀にオーストリアの支配下に入った。

その後、一時ナポレオンの征服を経て、ヴィーン会議の結果、北部のロンバルディア・ヴェネツィア王国（現在のミラノを州都としたロンバルディア州と県都ヴェネツィアを中心としたヴェネト州東部の地方）は再びオーストリアに帰属した。

チェコという国名は一九世紀初期の時点ではまだ一般的には使用されておらず、ベーメン王国とメーレン辺境伯領の二国に分かれていた。

チェコ人は、九世紀にモラヴィア王国（のちにハンガリーに滅ぼされ、第一次世界大戦終了までその支配下）を、一〇世紀にはボヘミア王国をそれぞれ建国したが、一一世紀以降神聖ローマ帝国の支配下に組み入れられた。一六世紀になってオーストリアの領地となる。

その間の一三四六年～七八年にかけて、ボヘミア王ヨハンの子カレル一世が、ドイツ系のルクセンブルク朝の第二代として神聖ローマ帝国の皇帝（皇帝としては、ドイツ語読みのカール四世）になっている。この時期にプラハを中心としたベーメンは中欧の文化の一大中心地となった。

これら三国のなかで、フランツ・ヨーゼフが即位した前後では、オーストリアにとってはハンガリーがもつとも危険な被支配国であり、続いて、オーストリアに対抗意識を剥き出しにしたフランスのナポレオン三世の協力を得たイタリアが、帝国の屋台骨を揺るがすことになる。たしかに、一八四八年の三月革命の際に蜂起したハンガリーとイタリアは、ゾフィー大公妃の力によって鎮圧されたが、力による

支配には限界があった。

それに対してチエコは、チエコ内に居住するドイツ系の国民によるドイツ語を公用語とする運動に抵抗するほか、次章で詳述するように、一足先に二重帝国を勝ち取ったハンガリーの優位性に不満を募らせたものの、ハプスブルク家にとって大きな脅威とまではならなかった。

それらの不穏な情勢の中で、国母としてのエリーザベトが、フランツ・ヨーゼフと一緒に最初に訪問した帝国内の領地は、一八五四年六月のメーレンとベーメンであった。このうちメーレンは、皇帝フェルディナント一世を始めとするハプスブルク家の家族が、一〇月革命の際に難を逃れた先が同領地内にあるオルミュッツであることから、帝国領地内の最初の訪問地選ばれたのだった。

エリーザベトにとって、この最初のベーメン訪問は印象の悪い結果となり、生涯その嫌悪感を拭い去ることができなかった。誇り高いベーメンの貴族は、エリーザベトが貧しい貴族の出自であり、しかも結婚のときの持参金も少なかったことを知ったことなどからエリーザベトを蔑あはんでおり、そのことをエリーザベトが知ったからである。

そのあとの一八五六年から五七年にかけて北イタリアを訪問したフランツ・ヨーゼフ夫妻は、イタリア貴族から屈辱的な報復を受けた。ヴェネツィアでは、最初、冷たい視線を浴びせられたが、滞在しているうちに、エリーザベトの美しさに見入られた市民とは少しは心が通うようにはなった。しかしその他の都市では、エリーザベトは、皇帝としてのフランツ・ヨーゼフが気の毒に思えるほど冷遇されていることを目の当たりにした。

特に、ミラノでは、皇帝夫妻臨席のスカラ座では、イタリアの貴族たちは召使たちを出席させて自ら



は出席しなかったし、市民も皇帝夫妻に敬意を表することはしなかった。そのような状況のなかでもエリーザベトはフランツ・ヨーゼフに同行して、時には涙しながら甲斐甲斐しくその役割を遂行した。

その後の一八五七年五月に、皇帝夫妻は最初のハンガリー訪問を行っている。しかし、この訪問は結果的にはエリーザベトは、悔やみきれない挫折感を味わったが、次章で詳述したい。

一八四八年と一八四九年と二度にわたってオーストリアに宣戦布告して敗れたサルデーニャ王国は、三たびオーストリアに立ち向かおうとしていた。一八五九年から六〇年にかけてオーストリアとイタリアとの間のイタリア統一戦争の勃発は、フランスのナポレオン三世とイタリアのサルデーニャ宰相カヴールとの、プロンピエールの密約が発端だった。

その密約とは、サルデーニャ王国が領域内のニースをフランスに割譲する代わりに、フランスはサルデーニャの対オーストリア戦争を支援するというナポレオン三世が持ちかけた約束であり、それを知ったオーストリアが先に戦争を仕掛けたのである。

当時のイタリアはまだいくつもの王国等に分裂しており、そのうちサルデーニャは独立運動の先頭だった国である。サルデーニャは、一八五三年から五六年にわたって行われたさきのクリミア戦争（ロシアとトルコの戦争。老大国オスマントルコの弱体化につけ込んで南下を目論んだロシアを阻止しようとしたイギリスが、トルコ側について参戦。フランスがそれに便乗）において英仏側について参戦したことにより、イタリア国内における諸邦領の中でも国際的評価が高まり、それがこのイタリア統一戦争において有利に働いた。

クリミア戦争時に拙劣な外交政策により中立の立場をとったオーストリアは、その後の国際的な地位に悪影響を及ぼす結果となった。

イタリア統一戦争でオーストリアは、司令官の指揮の拙さから撤退を余儀なくされ、その結果、フランツ・ヨーゼフが直接陣頭指揮しなければならない羽目となった。結婚六年目で二一歳であったエリーザベトは、既に亡くなつてい長女のゾフィーは別として、三歳の次女ギーゼラ、一歳の長男ルードルフの二人の母親であつたが、この二人の養育も姑のゾフィー大公妃が預かることとなつており、夫と初めて長期間別れて暮らすことになつたことに不安を感じていた。

前線で直接指揮を執るフランツ・ヨーゼフの安否に対する心配はもちろんであるが、愛児に愛情を傾けることができない立場に立たされ、なおかつ宮廷内で頼れかつ相談相手となる廷臣もなく孤立していたエリーザベトは、絶望的な毎日を送つていたことは想像に難くない。

エリーザベトは、夫の身の上を案じながら、戦線の夫に長い手紙を書き続けるよりほかなかつた。そして、フランツ・ヨーゼフと苦勞を分かち合うためにも、切々たる思い込めて、夫の本営に赴くことができるよう懇請した。しかし、それはもちろん許されるものではなかつた。フランツ・ヨーゼフも、エリーザベトの気持ちを慮おもんばかつて、愛情溢れる手紙で応じてはいたが、エリーザベトの気持ちを落ち着かせることにはならなかつた。

そこでエリーザベトは、フランツ・ヨーゼフの不在中は、乗馬でその気持ちを紛らわせざるを得なかつた。その行動がまた、宮廷内で非難を浴びる結果となつた。

サルデーニャの連戦連勝にサルデーニャの強大化をおそれたフランスは、一八五九年五月にオースト

リアと条約を結び、フランス軍を撤退させた。その結果、サルデーニャはロンバルディアを獲得した。一八六〇年に入ると、トスカナ（現在の同名州、州都はフィレンツェ）などの諸州がサルデーニャへの合併を希望した。サルデーニャは、ニースのフランスへの割譲と引き換えに、ナポレオン三世の合意を取り付け、一八六〇年三月にイタリア中部以北の諸州を統合した。

この結果、ヴィーンの宮廷内に大きな変化が起きている。即ち、イタリアを失ったことは、ゾフィー大公妃にとっては、大きな挫折であり敗北であった。それはまた、オーストリアのヨーロッパ内の政治的優越性が大きく崩れ去ったことを意味していた。そのため、フランツ・ヨーゼフは、母及びそれに共感をもつ廷臣の考え方と一線を画し、民主的で自由な考え方を持っているエリーザベトの考え方に徐々に近くなっていった。

エリーザベトは、当初から政治に関わることは許されなかったものの、ゾフィー大公妃が同意し采配を振るった国内政治や外交政策が不首尾であること、それがゾフィー大公妃の責任であること、そしてイタリアの各地方とハンガリーが、その支配に不満を募らせていることを重大問題として受け止めていた。さらに、帝国の将来や夫や子供たちの将来が危ういという気持ちを抱いており、そのことに神経質となり感受性がより強くなっていった。

一方でエリーザベトの妹でナポリ王妃となっていたマリーは、ガリバルディの侵攻によって戦意を喪失している夫のフランツ二世とは反対に、孤独な戦いに奮闘したが、他国からの支援もなく王妃の地位を失うことになった。

このイタリア支配と戦争に対するフランツ・ヨーゼフの政策と指導力の拙劣さは、オーストリア宮廷

内においても批判を呼び、フランツ・ヨーゼフの退位の声すら挙がったほどであった。

このあとに、次ぎなる支配国のハンガリー問題が浮上してくるが、次章で詳述したい。

一方、ドイツ国民が圧倒的に居住するオーストリア国内ではどうであったか。と言っても、現在のオーストリア共和国の領土は、必ずしもそのすべてがハプスブルク王家の直接の領土ではなかった。しかし、イタリアやハンガリーやベーメンやメーレンのような異民族が居住する地域ではないため、民族独立という問題は発生しなかった。

フランツ・ヨーゼフが即位する直前の一八四八年の三月革命において、オーストリア国内においても市民・学生・労働者は、憲法の制定、出版の自由、国民軍の設置などを要求している。この革命によって立憲制の基礎が確立されたが、その後の国内情勢により、自由主義的で連邦主義的な勢力と、保守的で中央集権的な勢力とが一進一退を繰り返した結果、一八六一年に公布した憲法により、オーストリア帝国の統一を強化し、オーストリア・ドイツ人の中央集権的立場を確固たるものにした。

しかし、この結果としてはオーストリア・ドイツ人からの反発はほとんどみられなかったものの、領域内のハンガリー人、チェコ人ほかの、領土内の多民族の反発は増幅されていったのである。

## 第6節 厳しい外交と戦争

帝国内の革命や反乱などで問題を抱えていたオーストリアは、その後、新しいうねりについてゆけな

いまま欧州の外交情勢に翻弄され、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフに嫁いだ一八五四年以来、一八七〇年代初期までの間に、帝国の屋台骨を揺るがされるような危機に何回も陥っている。

その最初は、一八五三年から五六年にかけて、ロシアとオスマントルコの間で戦われたクリミア戦争である。この戦争は、弱体化したオスマントルコを狙ったロシアが、バルカン半島の支配権を要求したのに対して、ロシアの南下を阻止するためにイギリスとフランスが反対し、イタリアのサルデーニャに参加を呼びかけ、オスマントルコ側について、ロシアに参戦したものである。

緒戦はロシア側が有利であったが、ロシアは英仏の支援を受けたオスマントルコに敗北し、領土のみならず黒海における艦隊保有権を失い、トルコへの干渉を禁止された。その結果、ロシアはその後進性を自覚させられる結果ともなった。

このときオーストリアは、プロイセンとともに中立の立場をとり、パリ講和条約締結の結果となるこの戦争の調停役を買ったに止まった。それに対してロシアは、一八四八年のハンガリー革命（詳細は次章参照）の際に、オーストリアの要請により援軍を出してオーストリアとともにハンガリーを鎮圧したにもかかわらず、このクリミア戦争においては、オーストリアがロシアを支援しなかったことに怒りを表し、以後離反することとなる。

一八五九年から六〇年にかけてオーストリアとイタリア間で勃発した既述のイタリア統一戦争を国内戦争と位置づければ、二つ目は一八六四年の対デンマーク戦争である。

その前年の三月にデンマークが、ユラン半島（ドイツ語でユトランド半島）南部のシュレスヴィヒ公国の併合を宣言すると、同公国に住んでいるドイツ人住民がプロイセンに援助を求めた。

プロイセンはオーストリアに協力を求めデンマークに宣戦した。結果は両国の勝利に終わり、デンマークは、北部のシュレスヴィヒをプロイセンに、南部のホルシュタインをオーストリアに割譲した。

しかし、プロイセンはホルシュタインの併合をもくろみ、その管理問題を理由にオーストリアを挑発した。それによって起こされたのが二年後の普墺戦争である。

一八六六年に開戦となった普墺戦争（プロイセン対オーストリアの戦争）は、オーストリアにとって は危急存亡ともいえるべき最も重要な戦争であったが、結果的には戦力の差をまざまざと見せつけられる一方向的な敗戦に終わった。

両国は当時の中欧における同じドイツ系の二大国家である。しかし、めきめきと国力をつけてきたプロイセンと、多民族を抱えた老大国のオーストリアとでは、最初から軍事力には大きな差があった。

さらにプロイセンは巧妙にも、イタリア、フランス、ロシアに中立を守らせたため、両国とも援軍なしの正に両国の実力そのものの差が表れた戦いとなった。七月三日のケーニヒグレーツ（サドヴァ。現在のチェコのフラデツ・クラロベ）における大敗北は、首都ヴィーンまでプロイセン軍が攻めてくることを覚悟しなければならぬほどの緊迫感が宮廷を支配した。結果的には七週間で足りがつかうというプロイセンの圧倒的な勝利に終わった。

プラハの和約では、プロイセンはオーストリアに領土そのものの割譲は求めなかった。これは、後に

オーストリアを敵に回さないためとの判断からであった。それに代わって、ホルシュタインをプロイセンに割譲することと、二〇〇〇万ターラーの賠償金が要求された。

この結果、オーストリアをドイツ国家から閉め出し、プロイセンを盟主とする小ドイツ主義が承認され、オーストリアを盟主として全ドイツを統一するというオーストリアの大ドイツ主義が敗れたことが明白になった。この戦いの前の対デンマーク戦争後のプロイセンの言いがかりは、普墺戦争のための口実であったと見るができる。そこにビスマルクの巧妙な外交政策が読み取れるのである。

大ドイツ主義が夢で終わったということは、一八〇六年まで神聖ローマ帝国に多くの皇帝を輩出し、長年中欧に君臨していたオーストリアが、ドイツ民族世界における主導権をプロイセンに完全に奪われたことを意味し、他の列強も小ドイツ主義を認める結果となったのであった。

また、この戦いのなかでのイタリア戦線では、敗北こそしなかったにも拘わらず、オーストリアはヴェネツィアを喪失。同地はフランスに委譲されたあと、国民投票の結果イタリアに帰属した。

この戦争の結果はとりもなおさず、ドイツ諸国に君臨することを夢見たゾフィー大公妃の政治的野望が挫かれたことを意味し、ゾフィー大公妃の誇り高き専制政治が瓦解したことを宣言するに等しいものであった。ゾフィー大公妃は再起できないほど打ちのめされた。

それに代わってエリーザベトが浮上した。ゾフィー大公妃はこの戦いを通して、エリーザベトの批判が正しかったことを認めざるを得なかったこと、及びエリーザベトが献身的に傷病兵を看護したこと、それ以上にエリーザベトがフランツ・ヨーゼフから離れずに妻として尽くしたことを、身に沁みて感じたのであった。

敗戦後の一〇月にフランス・ヨーゼフが、大戦の雌雄を決する戦場となったベーメンを訪問したが、終生ベーメンに恨みをもつエリーザベトは同行しなかった。また、フランス・ヨーゼフはプラハの国民劇場で暗殺未遂事件に遭遇している。このことは同時に、ゾフィー大公妃の強力な味方であったベーメンに対するオーストリアの影響力が落ちたことを象徴している。

エリーザベトは、例年であればどんな事情にも構いなしに、夏には保養地に出掛ける習慣があったにも拘わらず、この年は次々に入ってくる悪い情報を前にして、皇帝のそばで皇帝を激励し慰める役に徹している。それだけ国運を左右する重大な戦争であった。

ケーニヒグレースでの大敗の直後、エリーザベトがブダペストに行ったことは、帝国の建て直しにはハンガリーの協力（即ち、後述の二重帝国の成立）が必須であるとの判断からであり、結果的にはその目論見が功を奏したといえることができるのである。

一八七〇年に勃発した普仏戦争（プロイセンとフランス間の戦争）は、その直接の原因はスペイン王位継承問題であるが、普墺戦争の結果、オーストリアを破ったプロイセンが強大となることを認めようとしなかったフランスと、ドイツ統一を実現するためにはナポレオン三世と対決することが不可避であると判断したプロイセンとの思惑がぶつかったことがその背景にある。このときはオーストリアは中立を維持した。

開戦の結果プロイセンが勝利し、翌一八七一年一月にプロイセン王ヴィルヘルム一世が敵地のヴェルサイユ宮殿において、ドイツ帝国皇帝としての戴冠式を挙行了。これにより、大ドイツ主義のオース



トリアは、完全にドイツ諸邦から切り離され、ドイツから完全に閉め出されたことになる。

余談になるが、第一次世界大戦でドイツに勝ったフランスは、一九一九年六月に、同じヴェルサイユ宮殿でドイツとのヴェルサイユ条約を締結し、四八年前の屈辱のお返しをしている。

ドイツ皇帝の戴冠式の前にナポレオン三世が捕虜となり、フランスが共和制へ移行するのを目の当たりにして、ゾフィー大公妃、フランツ・ヨーゼフ、エリーザベトの三人の考え方の違いがはっきり出ている。

ゾフィー大公妃は、オーストリアの主導のもとでドイツを統一できなかったことが決定的になったことに対して打撃を受け、大きな挫折感を味わっている。また、フランツ・ヨーゼフは母への手紙で、プロイセンの勝利は、尊大さ、虚栄心、偽善による恥知らずであると断じているのに対して、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフへの手紙で、フランスの共和国誕生について何も驚くべきことではなく、むしろ遅きに失したことのほうが不思議であると述べている。

さらに、エリーザベトはその手紙の中で、フランツ・ヨーゼフに対して、共和制移行に伴いあたふたと逃亡したナポレオン三世の皇妃ウジェーニーの行方について心配している。他方ゾフィー大公妃は、ナポレオン三世によって次男のフェルディナントがメキシコ皇帝に祭り上げられ、非業の銃殺刑に処せられた結果、当然、ナポレオン三世に恨みを拭いきれないものの、失脚した同夫妻に対して深い同情を禁じえないのは、やはり同じ皇帝夫妻という支配者であるがためなのであろうか。

この一例も見ても、オーストリア帝国の最高の地位にある三者のうち、皮肉なことに、政治に関与させてもらえなかったエリーザベトが、もっとも時代の流れに対して正しい判断を下していることが見て

取れるのである。このときのエリーザベトは、自国オーストリアの共和制移行には触れてはいないものの、その他の機会に共和制の方が望ましいと発言していることから、オーストリアもそうなることを期待していることが窺われる。

一八七七年に行われた露土戦争は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ内のギリシア正教徒の反乱を契機として、ロシアとオスマントルコ間で行われた戦争である。ロシアとトルコ間でサンステファノ条約が結ばれ、ロシアはバルカン半島に橋頭堡を確保したが、イギリスとオーストリアの猛反対にあい、再度、当事国のほかイギリス、プロイセン、オーストリア、フランス、イタリアの五カ国が参加したベルリン条約が締結された。

その結果オーストリアは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方の統治権を獲得した。この獲得が、一四四年の第一次世界大戦の勃発に結びつくとは、フランツ・ヨーゼフはもちろん気がつくはずもなかった。

(中扉のエリーザベト像の写真は、ヴィーンのフォルクスガルテン。一九八九年・筆者撮影)

## 第4章 ブダペスト

——ハンガリーへの思い入れ——

### 第1節 ハンガリーの歴史

ブダペストはハンガリー共和国の首都である。ハンガリー語（マジャール語）ではブダペシュトと発音する。ブダペストは同国の中央からやや北部寄りに位置し、ドイツのシュヴァルツヴァルト（黒い森の意）に源を発し、ルーマニアで黒海に注ぐ国際河川ドナオ川（ハンガリー語でドゥナ川と呼ぶ）の流域で、北から南に流れるその東西両岸に跨がっている。

右岸（西側）の城下町であったブダ（ドイツ語でオーフェンという）地区及びその北に位置するオーブダ（古いブダの意）地区と、左岸（東側）で商業の町であったペスト地区の三つの別々の町が、一八七三年一月一日に合併してブダペストの名がついたが、この物語が始まる一八四八年ではまだ合併してはいない。

西側のブダ地区は、一四世紀にハンガリー王国の首都として王がこの地区に居を構えていたが、一五四一年にオスマントルコ帝国により占領されると、ハンガリー王国の首都は現在のスロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァ（ハンガリー語でポジョニユ、ドイツ語でプレスブルクと呼ばれていた）に移

されている。従って、それ以降一七八四年まで首都であった時代に、国王の戴冠式はブラティスラヴァの聖マルティン教会で行われていた。

東側のペスト地区は、ブダ地区に比べて新しく、河幅の広いドナオ川にはまだ二つの町を結ぶ橋がなく、当初は必要に応じて組み立てては解体する浮橋があるだけで、一七六七年に恒常的な舟橋ができた状態（固定された恒常的な橋の第一号は一八四九年に建設）で、ブダもペストも十九世紀に入るまではそれほど注目を浴びる都市ではなかった。

ブダ地区には王宮、歴代王の戴冠式が行われたマーチャーシュ教会、漁夫の砦など歴史的な建物が残っているが、現在町の中心は、国の政治・経済上の重要な建築物が集中しているペスト地区に移っている。オーブダ地区には、ローマ人の植民都市時代のアクウインクムの遺跡（一九九四年には博物館も設立されている）がある。

オーストリアの首都であるウィーンも、ブダペストよりも上流で同じドナオ川に面しており、現在では、そのドナオ川のヴィーンとブダペスト間に水中翼船が運航している。この水中翼船は、その中間にあるブラティスラヴァにも寄港している。

エリーザベトのハンガリーとの係わり合いについては、単にエリーザベト自身の個人的な興味だけではなく、政治上或いはエリーザベト個人の生涯について大きな役割を果たしているので、やはりこの物語に至るまでのハンガリーの歴史について簡単に振り返って見る必要がある。

ハンガリーの祖先であるマジャール人は、フィンランドやエストニアと同様に、ウラル山脈の西南部

を原住地とするフィン・ウゴール語系の民族で、ルーシ族（現在のロシア人の祖先）等に追われ、トルコ系のオノグール族と合体しながらドナオ川下流域に移動し、八九二年に首長のアールパードが現在のハンガリーの地に定着、八九六年にアールパード王朝を創設させた。さらに九〇六年に大モラヴィア王国（現在のチェコのモラヴィア地方）を滅亡させている。国名のハンガリーの名はこのオノグール族に由来するとされている。

一〇世紀の後半、ハンガリーの諸部族の大首長であったアールパード家のゲーザは、キリスト教を受容してカトリックに改宗し、諸部族を統合するため大首長の権限強化をはかった。その死後の九九七年に後継者となった息子のヴァイクは、他の宗教を奉ずる諸部族を打ち破り、イシュトヴァーン一世（ドイツ語読みではシユテファン）としてハンガリー初代の国王となった。

続いて、一〇〇〇年二月二五日にはイシュトヴァーン一世は、ローマ教皇シルヴェステル二世から王冠を贈られ、神聖ローマ帝国オットー三世の同意のもとに、正式にハンガリー王国の初代国王として戴冠している。

二〇〇〇年にはその一〇〇〇年の記念の行事が行われた。この行事は本国のハンガリーだけではなく、日本においても筆者も会員となっている日本・ハンガリーの友好団体の主催により、「ハンガリー・フェスティバル」として、四月には当時のゲンツ・アールパード大統領も迎え、一年間を通じていくつかの催し物が行われた。

ハンガリー王国は、そののち三つの大国に侵略されている。

最初の一四一年には、ヨーロッパに大遠征したモンゴルのチンギス・ハン（ジンギス・カン）の長子ジュチの子であるバトゥ軍の侵略を受け、モヒの戦いに敗れて国内は荒廃したが、幸いにも同年に、チンギス・ハンの後を継いだチンギス・ハンの第三子で第二代皇帝のオゴタイ・ハンが死去したことによってモンゴル軍は撤退し、ハンガリーはその支配を免れた。

次いで、一四四四年にブルガリアのヴァルナの戦いでオスマントルク帝国軍に破れ、さらに、一五二六年にはモハーチ（ハンガリー南部、クロアチアやセルビアとの国境に近いドナオ河畔の町）の戦いで、オスマントルクの名君スレイマン一世軍の攻撃を受けた。このときハンガリーはドイツとチェコの援軍を待たずに単独で戦闘に入った結果、国王ラヨシユ二世が戦死するとともにハンガリー軍は敗れ、ブダも占領されたがトルコ軍は支配せずに撤兵している。生き残った貴族たちはオーストリアのハプスブルク家に王冠を献上した。

この後の一五二九年には、ヴィーンもトルコ軍により包囲（第一次ヴィーン包囲）されたが、冬將軍の到来とともにオーストリアは事なきを得ている。これは通説であるが、この時に撤退したトルコ軍が放置したコーヒー豆を、それが何であるかを知っていたポーランド人の商人コルシツキーが安く払い下げを求め、煎ることを考えついて売り出したのがヴィンナ・コーヒーの始めであるとされている。

続く一五四一年にオスマントルク軍の再度の攻略を受けたあと、ハンガリーの中央部がオスマントルクの直轄支配下に置かれ、以後約一五〇年間、ハンガリーはオスマントルク帝国の属領となる。

さらに、一六八三年に、メフメト四世率いるオスマントルク軍が、あのスレイマン一世が寒冷と兵糧不足のため成し得なかった、第二回のヴィーン包囲を行う。今回はポーランド軍の救援を受けたオース

トリア軍の反撃を受けて、オスマントルコ軍は敗退する。しかし、オスマントルコによるハンガリーの支配はまだ終わっていない。

最後の支配者はオーストリアである。その後の一六八七年に、オーストリア軍とオスマントルコ軍の間で第二のモハーチの戦いが行われた。今度はオスマントルコ軍が敗退し、一六九九年のカルロヴィッツ条約により、ハンガリーはオーストリアに割譲され、この物語がはじまる一八四八年にはハンガリーはオーストリアの支配下にあった。

余談になるが、ヨハン・シュトラオス作曲のオペレッタ「ジプシー男爵」（ドイツ語では「ツイゴイナー・バローン」）。ツイゴイナーとはドイツ語でジプシーの意）はオスマントルコ軍が撤退したあとのテメシヴァル（現在のルーマニアのティミショアラ）地方がその舞台となっている。

その後、十九世紀前半におけるハンガリーの置かれた状況はどうであったのか。

ハンガリーは、先に見た王国時代に支配下に置いたクロアチア王国（現在のクロアチア共和国の大部分）、スラヴォニア王国（現在のクロアチア共和国の東部地方）、トランシルヴァニア王国（現在のルーマニア共和国の一地方）を抱えてはいたものの、国全体としては一六九九年にオーストリア帝国内に編入されてからは、ずっとハプスブルク家の領土の一部としてその支配下にあった。

すなわち、ハンガリーはオーストリアの支配下にありながら、上述のクロアチア王国以下の王国を支配下に置いていたのである。ということは、クロアチア王国以下の王国は、言うなればオーストリアから見ると「孫」支配国という立場にあった。

そのような状況の中で、一八四八年にヨーロッパ各地で革命が頻発する。

## 第2節 三月革命

この節の物語が始まる一八四八年には、すでに述べたように、まず二月にフランスにおいて、ルイ・フィリップ王が選挙法改正を求める改革宴会を禁止したため、これに反発した市民が二月革命が起こした。それが発端となってヨーロッパ各国に革命が波及した。

すなわち、それに呼応して、同年三月にはプロイセンのベルリン、オーストリアのヴィーン、その他ドイツ諸邦の各地、並びにハンガリーのブダに革命が起こった。しかし、他の革命が同一国民の権利の要求によるものが革命の原因である中であって、この一連の革命に乗じたハンガリー革命は、オーストリアからの民族独立運動であった。

オーストリアの支配下にあったハンガリーは、ベルリンやヴィーンと同じ三月、政治的改革をオーストリア皇帝に要求した。皇帝フェルディナント一世も状況を判断して止むなくそれを認め、ハンガリーに独立の内閣が成立した。

ハンガリー国内閣は、ハンガリー最古の大貴族出自のラヨシュ・バッチャーニュ伯爵が首相になり、蔵相にはラヨシュ・コシュート、法相にフェレンツ・デアーク、交通相にイシュトヴァーン・セーチェニ伯爵が就任し、四月一日にはオーストリアと対等の議会制立憲君主国として発足した。しかしその命運も長くはなかった。

なお、ウラル・アルタイ語族の一派のフィン・ウゴル語である東洋系のハンガリー語では、日本語



と同様「姓」が先で「名」があとになるが、オーストリアほかのヨーロッパ諸国の人名に合わせて、以下その順序を逆にし、「名」「姓」の順にした。

ハンガリーは、オーストリアからの独立を要求する一方で、ハンガリー領土内の被支配民族の独立は拒否したため、ハンガリーに支配されていたクロアチア人はハンガリーからの分離をオーストリア皇帝に要求し、これに抗議したパツチャーニュ内閣は辞職した。

パツチャーニュ内閣が崩壊したあと、オーストリアからの独立だけにとどまらず、ハプスブルク王家の廃位を宣言し、オーストリア帝国の打倒をも辞さないハンガリーの急進派は、翌一八四九年の四月一日にコシュートを首席とした臨時革命政府を樹立し、オーストリア軍と争うことになる。これは革命の域を超えた事実上の独立戦争である。このとき二六歳の青年貴族ジュラ・アンドラーシは、コシュートの使節としてトルコに駐在していた。

一方のオーストリアは、同年一月二日にフェルディナント一世が退位し、代わって弱冠一八歳のフランツ・ヨーゼフが皇帝の座に就いた。

一八四九年一月五日に、ハンガリー軍はオーストリア軍にブダ（前述したようにこの時点ではペストと合併していない）を占領されるが、反攻に出て一度はブダを再び奪還し、四月一日にはコシュート首班の臨時革命政府が成立した。しかし、八月一三日にハンガリー軍は、オーストリア軍とフランツ・ヨーゼフ皇帝の要請によりオーストリア側に立って参戦したロシア軍との連合軍の前に降伏した。

ハンガリーの敗因は、国内の被支配民族の自由を認めないという矛盾、政治的指導者であるコシュートと軍司令官ゲルゲイとの内訌<sup>ないこう</sup>、窮状を訴える国内の小作農民に対する迅速な対応の欠如、オーストリ

アがロシアに干渉を要請したこと等によるもののほか、経済力と軍事力が不足していたことであり、結果的には、一切の妥協を許さないコシユートの急進的な要求が、折角一度成立をみたオーストリアと対等の立憲君主国を水泡に帰せしめたのである。

その結果、ハンガリーは国土を分割され、オーストリアの帝国領地から一属領に転落した。急進派のコシユートに押し切られた穏健派の首相バツチャーニユは、その他の將軍とともに見せしめのために、一〇月六日に銃殺刑に処せられた。

自由主義的な穏健派貴族の首相を銃殺刑にと進言したのは、オーストリアのグリユンネ伯爵（事実上の国防相）であり、フランツ・ヨーゼフもゾフィー大公妃も異論をさしはさまなかったが、これが後年になってもハンガリー人のフランツ・ヨーゼフに対する怨嗟えんさとして残り、後年、フランツ・ヨーゼフもそれを失態と受け止めざるを得なかった。

コシユートと対立していた自由主義的な政治家であるデアークは、独立戦争時には既に故郷に隠退しており、この難を免れた。後の一八五四年には政界に復帰し、オーストリアに消極的抵抗を示しつつ、後述のアオスグライヒ（二重帝国）成立に貢献している。

妥協を認めず独立を主張する急進派の国民的指導者コシユートは、独立に敗れてからはトルコをはじめ、イギリス、アメリカと亡命先を転々とした。一八六三年に特赦されても帰国せず、アオスグライヒをも批判し、最後の亡命地となったイタリアのトリノで、一八九四年三月二〇日に九一歳でその生涯を閉じている。

また、穏健派であったセーチェニは、急進派のコシユートとの主導権争いに敗れ、さらに独立戦争の

危険に心痛した余り精神障害を起こして入院したものの、オーストリア政府の政策を批判し続けた。しかし、その罪を問われて、一八六〇年に病院内で六八歳で自らの命を絶った。

独立戦争時にコシュートを支援したアンドラーシは、死刑を宣言されたもののトルコからロンドンを経てパリに亡命した。一八五七年に恩赦を受け翌年に帰国している。この一八五七年に恩赦を受けたハンガリー人は、当然、その後もオーストリア官憲の監視を受けていた。しかし、アンドラーシは恩赦の前年に、幸いにもオーストリア宮廷内では政治的に非を受けることのない立場のハンガリー伯爵令嬢カティンカ・ケンデフィと結婚していることもあり、デアークと共に、後年、エリーザベトとの関係を密にし、この著作の中でも大きな役割を演じているが、詳細は後段に譲ることにする。

この経緯で分かるように、ゾフィー大公妃及びヴィーンの宮廷は、支配下の王国等の中で国土の広いハンガリー（オーストリア本国よりも広い）を最も嫌う結果となった。この逆を行ってハンガリーと親密な関係を結ぶことにより、エリーザベトはヴィーンの宮廷内での孤立から解放されることになるのである。ある意味では運命のいたずらとも言えよう。

さて、ここで初めてエリーザベトとハンガリーとの関係の話が始まる。

エリーザベトが、ハンガリーと関係を持つようになった最初のきっかけは、一八五三年にフランス・ヨーゼフと婚約したあと、オーストリア帝国の支配者の一員として、外交用語として必須なフランス語のほかに、統治下のチェコ語、イタリア語とともにハンガリー語を学ばなければならなかったことにある。エリーザベトは、翌一八五四年の結婚に備えて、バイエルンの自宅で、ハンガリー人の歴史学者ヨ

ハン・マイラート伯爵から、オーストリア帝国の歴史とともにハンガリー語の講義を受けた。

エリーザベトは、のちにハンガリーの地位向上に手を貸しただけでなく、ハンガリーに大いに肩入れすることになるのであるが、この時点ではまだ、ハンガリーに特別な関心を示してはいない。ただ、マイラートは保守的なハンガリー人として、自国の統治者であるオーストリア帝国の礼賛者ではあったものの、ハンガリーの立場に立った講義をしたことから、ハンガリーの将来とエリーザベトとの関係に影響を与えたことは否めないと思われる。

フランツ・ヨーゼフとエリーザベトの皇帝夫妻が、二人の娘、即ち長女のゾフィーと次女のギーゼラを連れてハンガリーを初めて訪問したのは一八五七年五月である。この時点では、エリーザベトは、ハンガリーの二人の有力な指導者のうちデアークとは親密な関係となっておらず、またアンドラーシは恩赦を受けていたものの、まだ帰国していない。

また、エリーザベトも、既に自分に敵対意識を露わにしていたオーストリア宮廷の貴族やベーメン貴族のみならず、ハンガリー貴族に対してもまだ気を許すことはしていなかった。

この訪問は、前年の一八五六年のイタリア訪問で屈辱を受けたあとに、内務大臣バッハ男爵の進言によるものであった。皇帝夫妻は五月四日にプダに到着した。この旅行でエリーザベトは、ゾフィー大公妃の反対を押し切って、満二歳を少し過ぎた長女ゾフィーと、生後一〇カ月となったばかりの次女ギーゼラを同行させることを主張し、何とか受け入れられた。

姑のゾフィー大公妃は、孫たちを手放したくないという気持ちももちろんあったが、二人の孫たちが

余りにも幼いため、健康上からも心配したことはたしかであり、あながちゾフィー大公妃のみを責めることは正しくない。むしろ、姑の手の届かない地で二人の娘と過ごしたいということを優先した、エリーザベトに強引さがあるようにも思われる。エリーザベトは、ゾフィー大公妃に育てられた二人の子どもたちとはしっくりとしなかったものの、久しぶりに子供たちを独占できた喜びで一杯であった。

この旅行でフランツ・ヨーゼフは、一八四八年の革命で処分させた亡命者などに恩赦を与えた。ただし、死刑執行者の遺族に対してはそれを認めなかった。政治的にはオーストリアに反抗的なハンガリー人も、エリーザベトの美しさも手伝って、貴族も市民もエリーザベトに好感をもっており、イタリア訪問のときのような冷たい反応もなく、謁見もスムーズに進行した。

ハンガリー人の心情としては、ハンガリー嫌いのゾフィー大公妃と仲の良くないエリーザベトの肩を持つ気持ちも含まれていたはずである。季節もうらかな五月であり、エリーザベトにとってもイタリア旅行と比較すれば、ハンガリーの印象は悪くはなかった。

しかし、まさにそのようなときに、エリーザベトに最初の最大の不幸が襲った。まず、次女のギーゼラが発病したが、幸い直ぐ回復した。しかし、今度は長女のゾフィーが同じような症状に掛かった。その後一旦は小康を得たため皇帝夫妻は地方に巡幸したが、その留守中にゾフィーはブダで息を引き取った。二歳二カ月二四日の命であった。

子供に死なれたエリーザベトは、悔やんでも悔やみきれない思いであり、自責の念に苛さいなまれた。同時に、ゾフィー大公妃の反対を振り切って連れてきたことによる結果であることも手伝って、姑の恐ろしさにもおののいた。

したがって、皇帝夫妻はハンガリー訪問を途中で打ち切らざるを得なかった。このようにエリーザベトのハンガリー訪問は、結果として断腸の思いの旅となった。しかし、ペーメン及びイタリア訪問のような、現地の貴族や市民の反発による苦い旅でなかったことに、救いがあったのではと想像できよう。その裏には、ゾフィー大公妃嫌いのハンガリー人のエリーザベトに対する好意、いや、むしろエリーザベトを利用しようという計算があったことも十分考えられる。それが、結果として、エリーザベトという突破口を手掛かりに、段階を踏んでオーストリア帝国の被支配国の中で、もつとも有利な地位を確立できたことは間違いない事実である。

### 第3節 イーダとマリー

エリーザベトがヴィーン宮廷内で孤立しているとき、エリーザベトと接触しているハンガリーの貴族たちは、三月革命後、ハンガリーがゾフィー大公妃に最も嫌われる存在であることを覚悟していた。同時に、エリーザベトがゾフィー大公妃と不仲であること、さらに古い政治制度に逆らっていることを知り、エリーザベトがハンガリーに対して力になることを期待し、エリーザベトに近づこうとしていたことは十分考えられる。

その一方で、エリーザベトはハンガリーに関心を示していることを自ら意識し、ハンガリー語を勉強することに目覚めた。それは、ハンガリー人がヴィーンの宮廷から嫌われていることを逆手にとって、ゾフィー大公妃の影響を受けない女官を、身边に置きたいという意思が芽生えたのかもしれない。

エリーザベトのハンガリーとの最初の出会いは、すでに述べたように結婚前のポツセンホーフェンでハンガリーの学者マイラートとの接触が最初であるが、その時点ではハンガリーの立場を理解する意欲も、ハンガリー語を勉強する意欲も起きていなかった。

その後、ルードルフ皇太子の乳母とハンガリー語で意思の疎通を図るのに苦労したことや、一八六〇年にマデイラ島に療養したときに、ハンガリー出身で従者のイレム・フニャディ伯爵（彼はこのときエリーザベトに恋してしまったことが公然となつてしまったが）からハンガリー語を習ったこと、さらに一八六四年の対デンマーク戦争中に、エリーザベトがヴィーンの軍事病院でたまたまハンガリー人の傷病兵士にハンガリー語で話しかけたことがあり、それらがハンガリー語を意欲的に勉強するきっかけとなった。

エリーザベトは、皇妃として他の外国語を覚えなければならない立場にあつたものの、周囲から語学に対して得意でないと見られていた。それが、ゲルマン系、ラテン系、スラヴ系の諸語と違い、言語系統の異なるウラル・アルタイ系のフィン・ウゴル語であるハンガリー語を習得することは、ヴィーン宮廷内でも難しいこととされていた。しかし、エリーザベトはその困難を克服して、ハンガリー語をマスターしたのである。

フランス・ヨーゼフから、エリーザベトがハンガリー語に上達しているとの手紙を受け取ったこともあつたゾフィー大公妃は、ある劇場で、エリーザベトがハンガリー貴族の女性が着用する帽子を被っているのを見て、観客の前であからさまに、不快の念を示していることを見せつけている。

さてここで、エリーザベトにとり、心を許せる最初の女官イーダ・フェレンツイが登場する。エリーザベトは、すでにハンガリー語の書物を読むことはしていたが、ハンガリー語を話し、信頼できるハンガリー人の女官が欲しくなった。そこで、アルマスイ伯爵夫人に女官探しを依頼した。エリーザベトとこのアルマスイ伯爵夫人との接点と同夫人の人となりについては、残念ながら紹介されていない。

アルマスイ伯爵夫人は、ハンガリーの高級貴族のリストをまとめ、最終的には自分の友人でありケチケメートに住むマリー・フォン・フェレンツイ夫人の弟の娘に白羽の矢を立てた。イーダ・フェレンツイである。イーダ・フェレンツイはエリーザベトより四歳下でこのとき二三歳。可愛い顔をしていたわけではないが、誠意があり、慎重しく、穏やかな女性であった。

ハーマン女史の研究によると、アルマスイ伯爵夫人の推薦でないという見方もあり、また、イーダ・フェレンツイはアルマスイ伯爵夫人の当初の推薦者には入っておらず、その後追加された推薦外の人物であったとも言われており、その経緯の真相は確かではないという。

エリーザベトは、事前に得た情報からすでに、イーダ・フェレンツイに好意を抱くことができる予感があった。女官長ケーニクスエツグ伯爵夫人が、イーダ・フェレンツイをエリーザベトに引き合わせた。エリーザベトは、イーダ・フェレンツイに会ってみると初々しく、人柄の良さが気に入り、ハンガリー語で「私はあなたが大いに気に入った。われわれは常に行動をともにしましょう」と言ったという。

一方のイーダ・フェレンツイも、エリーザベトの好意的な感触を知り、同時に押しつけられそうになった結婚から逃れることができるため、喜んで受け入れている。しかし、イーダ・フェレンツイは、エリーザベトが自分に何を求めているか、まだこの時点では予想できていなかった。



イーダ・フェレンツイの処遇については、下級貴族という身分の低さから女官にすることができなかつたが、最初にブルノ（現在のチェコの南モラヴィア州の州都）の参事会会員として処遇し、一八六四年一〇月に講書係として採用された。

エリーザベトは、最初に、イーダ・フェレンツイに対して、自分が語ったり行つたことについては、周囲の誰にも話さないよう固く口止めした。それは、四面楚歌のエリーザベトが、自分の不利となることをゾフィー大公妃に内通させないために、イーダ・フェレンツイを雇つたことが、本来の目的であつたからである。

早速、ゾフィー大公妃の側近からイーダ・フェレンツイに対して誘い込み作戦が始まつた。エリーザベトも最初のうちは、イーダ・フェレンツイがその誘いに乗りゾフィー大公妃側に付くことを警戒し、イーダ・フェレンツイに尋問するほどであつた。

しかし、イーダ・フェレンツイはエリーザベトの期待どおり、他の女官たちには一切馴染まず、さまざまな噂にも耳を傾けることなく、ゾフィー大公妃の誘いに乗らなかつたため、ゾフィー大公妃側から冷たくあしらわれたが、結果的にはそれは、イーダ・フェレンツイがエリーザベトに対する忠実な部下である証となり、エリーザベトの信頼を勝ち取つたことを意味した。それには、下記のような経緯から当然のことであつた。

というのも、イーダ・フェレンツイは、デアークの熱烈な支持者であつたばかりではなく実家をとおして個人的に知遇を得ていたといい、また、アンドラーシとも近い関係にあつたという。エリーザベトが、ハンガリー出身の女官を身邊に置いたことは、四面楚歌から脱却するためのエリーザベト自身の発

意であると思われるが、デアークとアンドラーシの策略であるという見方もできなくもない。イーダ・フェレンツイがエリーザベトの側近としてハンガリー国のために送り込まれ、結果として功を奏したことは、その後のハンガリーの立場を見てゆくと疑う余地はない。

エリーザベトに信頼されると、イーダ・フェレンツイはその役割を忠実かつ確実に遂行し、アンドラーシやデアークとエリーザベトとの間の重要な連絡役を果たしている。

ただ、イーダ・フェレンツイは、体力的に小柄で華奢であるほか、顕著ではなかったものの心臓に欠陥があったため、エリーザベトが大好きな遠出に同行することができなかった。また、イーダ・フェレンツイ以外にハンガリーの女官がいなかったころ、エリーザベトは、療養その他でヴィーンを離れている間、話し相手として信頼厚きイーダ・フェレンツイが側にいないことに寂しさを感じるとともに、その間にイーダ・フェレンツイが結婚しないよう要請するほど、その存在を頼りにしていた。

一八七一年三月一六日、エリーザベト王妃（一八六七年の二重帝国後はハンガリー王国の王妃ともなる。オーストリアその他の国々ではオーストリアの「皇妃」と表現するが、ハンガリーとの関係ではハンガリーの「王妃」と表現する。二重帝国については次節で詳述）がオーフェン（ブダのこと）に滞在したとき、クロティルデ大公妃が一人の女官を伴って挨拶にやってきた。

この女性こそは、エリーザベトがこのあと、生涯を通じて最も信頼を置くことになるマリー・フェシユテイチ伯爵令嬢（以下、マリー・フェシユテイチと略す）（注1）である。

一方のマリー・フェシユテイチは、エリーザベトとの初対面のこのときのことを、自らの日誌記録

帳で次のように述べている。(注2)

このように美しいお方を私はまだ見たことがないほど、王妃様はお美しくていらっしやいます。高貴さにあふれ、それに非常に魅力的で、声もお優しい。眼差しはなんと素敵なのでしょう！

マリー・フェシユテイチは、エリーザベトについて既に誤った評判を聞いていたが、後日の大宴会の席に現れたエリーザベト王妃を見て、ユリのように美しく、時には少女のように、時には夫人のようにも見えたという。

マリー・フェシユテイチは、二重帝国成立時にはハンガリーの首相となり、一八七一年にオーストリア帝国の外務大臣になったばかりのアンドラーシやデアークとも既に知遇を得ており、アンドラーシからエリーザベト王妃の女官になることを勧められていた。

マリー・フェシユテイチは、最初は乗り気でなかった。しかし、アンドラーシから祖国のために義務として尽くしてほしいと言われて、引き受けることとなった。

一方のエリーザベトも、アンドラーシに彼女のひととなりを聞き出した結果、一八七一年二月二日に、マリー・フェシユテイチを、七月に結婚のために退職したヘレーネ・タクシス侯爵夫人の代わりとして、ハンガリー人としては三人目の女官に任命した。

アンドラーシとしては、先に講書係に任じられたイーダ・フェレンツイ一人だけではなく、もう一人の重要な役割を担うハンガリー人の女官を、エリーザベトの許に侍らせたかったのであることは容易に

想像できる。そしてそれは首尾よく成功した。それはまたエリーザベトにとっても、もつとも心強い助言者を得たことにもなるのである。

マリー・フェシュテイチは、エリーザベトよりは二歳年下で、このとき三二歳であった。この日のフェシュテイチの日誌記録帳によると、エリーザベトは次のように述べている。〈注3〉

私たちはきつとお互いに慣れることと思います。私はアンドラーシから、貴女が誠実で純粹であると聞きました。私にもそうあつて欲しいとお願ひします。もし貴女が私に何か言いたいことがあるれば、正直にあからさまに話してください。もし、貴女が何か知りたいたいことがあるれば、他人でなく私自身に聞いてください。この宮廷の習慣で、私の悪口を言う人がいても信じないでください。

貴女は、暫くの間、誰とも親しくしないでください。貴女はイーダ・フェレンツイを完全に信頼することができません。貴女は女官ではありませんので、それらの人々と親しくしてはなりません。そういう人々は好奇心だけで近づこうとしているのです。貴女は特別なのです。私はアンドラーシをとおして貴女の性格を知っています。一二月二七日には出掛けましょう。貴女を連れて。

一八七二年のバート・イシュルでのマリー・フェシュテイチの日記では、三四歳のエリーザベトの美しさを次のように描写している。〈注4〉

王妃様と並んで歩いていても、後をついて歩いても素敵な気持ちです。お姿に接するだけでも十

分満足です。王妃様は愛らしさという概念を体現されたお方です。私は王妃様を一度は百合、次いで白鳥、妖精そしてエルフ（筆者注：森に住む妖精）と考えました。最後には、いや！王妃様なのです！頭のとっぺんから足の爪先まですべての点で優雅で高貴な王家の奥方様です！お喋りしたことが、私にすべてを思い起こさせます。そのことに羨望があるのかも知れません。というのも短く言えば、王妃様はうっとりさせる美しさと優雅さをお持ちの方なのです。しかしそのことがますます私の心を掴んで離しません。私には王妃様に対しての生きる喜びをまだ十分に感じ取っておりません。

王妃様には少女時代に顕著だった平穏さが漂っています！王妃様は穏やかで物静かな響きのお声で語られます。興奮して話されたことはほとんどありません。王妃様が語られるとき、ときどき人は無慈悲なお方のようにあいらいます。何を恐れているのでしょうか。人は、王妃様のような外見を、だれでも病人のように見るのでしょうか。

後年、エリーザベト本人に対してもしばしば直接辛辣な皮肉すら言う、洞察力が鋭い三三歳のマリー・フェシュテイチのこのときの観察が、たとえエリーザベトに雇われてからまだ半年しか経っていないため、エリーザベトのその美しさを見て褒め切ったとしても、あるいは、孤独なエリーザベトを鼓舞しようとする意図があったとしても、決してエリーザベトにおもねっているわけではない。

それは三四歳になったエリーザベトが、華美な宮廷内での美しさというより、むしろ自然のなかの妖精のような美しさを備えているということができないのではないか。

マリー・フェシユテイチは聡明で、批判的精神あるいは懐疑的精神が豊かで、才気に満ち溢れ、思ったことを腹藏なく話し、媚びへつらうことが全くなかった。その点においてエリーザベトは、講書係としてエリーザベトが最初に侍らせ、四面楚歌のなかで、気の置けない相手として採用した素直で誠実なイダ・フェレンツイとは別の意味で、マリー・フェシユテイチに最も信頼を寄せていた相手であるということができるのである。

その後にも、エリーザベトはハンガリー出身の女官を雇用している。正確には何人となるかわからないが、後述するように、エリーザベトお得意の強行軍とも言うべき散策（第9章第2節参照）に同行できる若さの持ち主であるサロルタ・マイラート伯爵令嬢（エリーザベトより一九歳年下）や、エリーザベトの最後の旅（第10章第2節参照）に同行したイルマ・スターライ伯爵夫人（エリーザベトより二七歳年下）など、エリーザベトはハンガリー出身の女官を多く起用した。

それは、ハンガリーが一八四八年に革命を起こしてオーストリア帝国に反旗を翻したことにより、彼女らがハンガリーを嫌うゾフィー大公妃の意のままにならない女官達であること、彼女らは祖国ハンガリーに対する愛国心に燃えていたこと、また、彼女らがエリーザベトに忠実に仕えてくれるため、エリーザベトにとっては周囲に対して疑心暗鬼にならずに済んだばかりではなく、友人のように気を許して話し合うことができたこと、などがその理由である。

さらに結果的には、オーストリアの属国であったハンガリーが、オーストリア帝国により忠実であった属国ベールメンですら得られなかった「二重帝国」（次節参照）の座をかち得たことで、帝国内でより

発言力を増したことという、エリーザベトとハンガリーにとって有利に働いたことに繋がって行く。

同時に彼女らは、ハンガリーという祖国のためとはいえ、ヴィーンの宮廷に仕えるオーストリアや他の被支配国出身の廷臣や女官と異なり、すべてエリーザベトのみに仕える身の上であったことから、エリーザベトひとりに対してのみ忠実であったばかりではなく、人間的に表裏もなく謙虚で慎ましい性格の女官たちであった。

#### 第4節 デアークとアンドラーシ

ハンガリー革命時及びその後の独立戦争時にとったデアークの判断と態度及び信念は、ハンガリーの上流階級及び下層階級から支持された。アンドラーシもそれに同調したが、この両者の立場は、ハプスブルク家からも受け入れられた。

というのは、オーストリアは、一八六〇年にイタリア統一戦争に敗れたあと、一八六四年にプロイセンと協力して対デンマーク戦争に勝利したが、ドイツ国内における主導権争いで、プロイセンとぎくしゃくした関係にあったからである。

そこで、フランツ・ヨーゼフはオーストリア帝国の統合を強化するために、ハンガリーを宥める必要を感じ、一八六五年一二月に単身でブダペストに向かい、ハンガリーに協力を要請した。イーダ・フェレンツイをおして、すでにエリーザベトがハンガリーに好意的であることを知っていたデアークとアンドラーシは、その要請に応じた。

皇帝よりも皇妃に信頼を寄せていたハンガリーの議員団は、友好的にフランツ・ヨーゼフを迎え、エリーザベトの誕生日（クリスマスイヴ）の祝福も兼ねて、ハンガリーの代表団をヴェーンに派遣することを願い出たが、エリーザベトは病気のためミュンヒェンに留まっていたので、ハンガリーの代表団は訪問を延期せざるを得なかった。

明けて一八六六年一月八日、ハンガリーの代表団がヴェーンのホーフブルクに現れた。アンドラーシがエリーザベトと初めて会ったのは、謁見の場とも祝賀会の場ともとれるが、両者は同一の場であったかもしれない。いずれにせよ、ここでアンドラーシはエリーザベトと初対面となった。

というのは、エリーザベトが第一回目の一八五七年のハンガリー訪問したときは、アンドラーシはまだ亡命のさなか（アンドラーシは、亡命中のパリで、美人の誉れ高いカティンカ・ケンデファイ伯爵嬢と結婚している）にあり、エリーザベトとはまだ面識はなかった。

この時点ですでに、ハンガリーの下級貴族の娘であるイータ・フェレンツイが、女官としてエリーザベトの許に仕官（二年前の一八六四年）しており、当然のことながら、そのイータ・フェレンツイをとおして、デアークもアンドラーシも、エリーザベトの人となりや、ハンガリーに強い関心を示していることを知らされている。（ただし、アンドラーシが、マリイ・フェシュテイチをエリーザベトの許に送り込むのはこの後の一八七一年であるが）。

アンドラーシは、オーストリア政府から一度死刑の判決を受けたが、一八五八年の恩赦を得て、一八六〇年半ばにはデアークの政治的職務を引き継ぎ、ハンガリー国内で政治家として返り咲いていた。アンドラーシは、戦術的な判断力というよりも戦略的な判断力に優れているタイプの英明さを持ち、独語



・英語・仏語に長けているが、反面、自惚れが強い性格ともいわれている。

この二人の劇的な初めての出会いのとき、エリーザベト二八歳、アンドラーシ四二歳であった。

アンドラーシはハンガリーの民族的軍服であるアッティラ服に身を固めた制服姿で、凛々しく颯爽として謁見したのに対して、エリーザベトはハンガリーの民族衣装を身につけて、完璧なハンガリー語で即興的なスピーチをした。エリーザベトは背の高い容姿と容貌に優れたアンドラーシの男らしさに魅せられ、また、アンドラーシはエリーザベトの美しさに立ち尽くした。

アンドラーシは抗しがたい魅力をもっている人物であるので、エリーザベトがハンガリーへの思い入れとともに、アンドラーシ個人に強い関心をもつことは、当然の成り行きでもあった。たしかに、アンドラーシの存在が、エリーザベトのハンガリーへの思い入れを、さらに増大させたことは疑いない事実である。

その時の両者の印象をコルティの著作から引用すると、アンドラーシは「絵に書いたような毛皮の縁を付けた貴族の制服、すらっとした背の高い容姿、上品で薄い髭に縁取られた容貌をした、ハンガリー貴族の完璧なイメージを示していた」(注5)。

エリーザベトは「女官長と八人の新しく任命されたハンガリーの女官に囲まれて、代表団を待ち受けた。彼女は、刺繍の施された白い絹の胸当て、ふんだんに紐をからげた縁なし帽、その上に光輝くダイヤモンドの王冠を付けたハンガリーの民族衣装を身につけていた。興奮した優雅な顔がバラ色に息づいて代表団を引見し、彼らを観察したが、その視線はアンドラーシの顔に釘付けとなった。エリーザベトは本当に目が眩み、最高に感嘆した表情でその顔を観察した」(注6)。

一方の「アンドラーシがこのときに初めて宮廷の祝賀会の際にエリーザベトの前に進み出たとき、この女性の計り知れない魅力と比較しようのない美しさに見とれて立ち尽くした」〔注7〕。

エリーザベトの服装の説明について、ハーマン女史の著作から借用し補足説明すると、「彼女はハンガリーの民族衣装を身につけていた。もちろん威厳のある装いである。ダイヤモンドと真珠であしらった沢山の紐で仕上げられている黒い胴衣を付けた真っ白な絹の衣装、白いレースの付いた前掛け、頭にはハンガリーの縁なし帽、それに額の上にはダイヤモンドの王冠。（中略）敬意を払うべき正にハンガリー王妃」〔注8〕となる。

何よりも、エリーザベトが完璧なハンガリー語で挨拶したので、その内容をも含めて、居並ぶハンガリーの代表団の面々は感激した。この一事によって、ハンガリーの代表団は、エリーザベトがハンガリーに対して、なみなみならぬ好意を抱いていることを実感したのであった。

今度は、ハンガリーの代表団は皇帝夫妻をハンガリーに招待した。同じ一月の二九日にはフランツ・ヨーゼフとエリーザベトは二回目となるハンガリー訪問に赴いた。第一回目では長女ゾフィーを失うという悲劇に見舞われたが、今回は熱狂的な歓迎を受け、ヴィーンでは嫌いだった式典や舞踏会にも出席するようになり、滞在期間も三月上旬にも及ぶ数週間の長きに亘るものとなった。

これ以来、ハンガリー国民のエリーザベトに対する尊敬の気持ちは変わっていない。後述するようにハンガリー建国千年祭のときも、エリーザベトの死のときも、二つの世界大戦を経て共産主義国となったときも、さらには現在でも。ブダペスト市内の通りの名に、地区の名に、橋の名に、エリーザベトの名を残しているのである。

当面の問題として、この出来事は、ヴィーン宮廷及び被支配国のなかでもっとも忠実なベーメンとメーレンに、大きな憤懣と不安を募らせることになるのである。

そのようなことから、ヴィーンでは、後年の一八六八年四月二二日にブダで生まれたエリーザベトの三女マリー・ヴァレリーが、エリーザベトとアンドラーシとの間に生まれた子ではないかと、まことしやかな噂さえ広まった。同時に、マリー・ヴァレリーが女の子でよかったと安堵の胸をなで下ろしたこともあった。

というのは、ルードルフがいるため第一位の皇位継承者とはならないとはいえ、もし男児であれば、ハンガリー人の名前を付けてもされたら困ると、恐れていたからでもある。しかし、実際には、マリー・ヴァレリーは、エリーザベトとアンドラーシとの子ではないことが証明されている。

エリーザベトは、そのような噂を意に介さず、ヴィーンの宮廷に対して更に嫌悪感を増大させて、二歳になつたばかりのマリー・ヴァレリーに早速ハンガリー語を教えている。

話を前に戻すと、二月一日に行われた両院の代表団との接見で、エリーザベトは、今までヴィーンその他で行われてきたよう単なる形式的な式典でなく、また儀礼的な挨拶でもない、心の籠もつた行為であることを身に沁みて感じ、ハンガリー国民の好意に感激した。これでやっと、大きな力となる味方を得たことを実感したのである。

それは、エリーザベトが、同年七月三日の普墺戦争の敗戦を決定づけるケーニヒグレートツでの戦闘に敗れた僅か六日後の七月九日に、最悪の事態を想定した皇帝及び官庁首脳の退避に先駆けて、ブダペストに退避（敗戦は八月二三日）し、二人の子供たちを呼び寄せる行動にも表れている。

その滞在中にエリーザベトは、フランツ・ヨーゼフに、デアーク及びアンドラーシに会うように説得している。エリーザベトは七月一五日にアンドラーシを接見したことをフランツ・ヨーゼフに報告し、それを受けて、一七日にはフランツ・ヨーゼフがアンドラーシを接見している。この際、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフに対し、ハンガリーとの二重帝国の必要性を強調している。

ヴィーンの宮廷では、このようなハンガリーに関するエリーザベトの一連の行動から、エリーザベトがアンドラーシをはじめとするハンガリー国民の言いなりになっているばかりか、フランツ・ヨーゼフがエリーザベトの要求に屈し、ハンガリーへのめり込んでいると見て、大きな不快感をもっていたことは当然であった。

たしかに、エリーザベトは、ハンガリーの立場に立つて、フランツ・ヨーゼフにすら譲歩をつきつけるような行動をしていた。しかしそれは、とりもなおさず、エリーザベトの行動を知っているハンガリーの貴族から平民までの国民に支持され、その統一体であるハンガリー国家の後ろ楯を得たエリーザベトが、ヴィーンの宮廷に対してより挑発的ともいえる態度をとることができるようになったということでもあった。

それにしても、オーストリア側から見れば、エリーザベトのこのときの行動は度が過ぎるものであったと批判されても致し方ないであろう。しかしそれが、エリーザベトが愁眉しゅうびを開くことになる唯一の手段であったとするならば、元をただせば、ヴィーンの宮廷が蒔いた種であるということにもなるのである。

そこには、ハンガリー側の計算され尽くした策謀が存在していたことも否定できない。その背後でア

ンドラーシは、自らはできるだけ表面に出ず、イェダ・フェレンツイを使ってエリーザベトに連絡を取り、二重帝国成立を推進させていることも確かであるし、ユダヤ系のミクシヤ・ファルクという新聞記者をとおして、エリーザベトをハンガリーの政治問題に深入りさせたことも与つて<sup>あずか</sup>いる。

一八六六年の普墺戦争に敗北を喫した結果、オーストリア帝国は領域内の属国の民族運動を抑えるため、翌一八六七年にハンガリーを取り込み、ハンガリー内閣に軍事と外交を除く全ての権限を与えた。すなわち、フランツ・ヨーゼフ皇帝をハンガリー国王として、オーストリア帝国の中に同君王国が成立した。これを“Ausgleich”(アオスグライヒと呼ぶ)ドイツ語の和議または妥協の意から、日本では同君王国または二重帝国の用語を使用している。またはそのまま、オーストリア・ハンガリー帝国とも称している。

このように、憲法に基づく外交と軍事面では、オーストリアとハンガリーとも必ずしも一致しなかったが、最終的には、ハンガリー王でもあるフランツ・ヨーゼフの決定にゆだねられていた。しかし、一八七一年一月から七八年一〇月までのほぼ七年間、アンドラーシがオーストリアの外相を勤めていたこともあり、一時的ではあるが、外交面でもハンガリーに不利はなかったといえることができる。

このアオスグライヒは、オーストリア・ハンガリー帝国が一九一八年に第一次世界大戦において敗北・崩壊するまでの五〇年間続いており、その評価については、現代においても歴史家の間で定まっていないとすることであるが、その点については本題とは離れているのでこれ以上触れないことにする。

歴史書には触れられていないが、この二重帝国の成立にはエリーザベトが大きく関わっている。この

成立の交渉は、最初はむしろ消極的であったフランツ・ヨーゼフが、最終的には、エリーザベトの強力な仲介に後押しされて、ハンガリー側の要請を受け入れ、オーストリア帝国の議会に関与させることなく、実現したものである。

一八六七年六月八日、二重帝国成立に伴うハンガリー国王の戴冠式が、マーチャーシユ教会で行われた。不在の宮中伯に代わって、それに先立つ二月一七日にハンガリーの初代首相になっていたアンドラーシが戴冠を行った。

ハンガリー生まれの作曲家フランツ・リストが、式典に先立ってそれに擬して作曲してあった「戴冠ミサ」も演奏されたが、自ら指揮することは許されなかった。また即位に伴い、ハンガリーの政治犯に大赦があり、差し押さえられた財産は返還し、さらには、ハンガリーの戦死者の未亡人・孤児・障害者に対する戴冠贈与が行われると、オーストリア帝国内の非ハンガリー国民の反感を買った結果となった。亡命中であくまでも独立を目指す急進派のコシュートは、大赦を受けていたにもかかわらず、この二重帝国の成立には反対で、生涯二度と祖国に帰って行くことなくイタリアで没したことはすでに述べた。

結果としては、ハンガリー問題を通して、二九歳のエリーザベトは、ハンガリー国の傀儡かいらいであったかどうかという議論は別として、皇妃として一二年目にしてはじめて、無勢ながらも、ヴィーン宮廷内を支配してきたゾフィー大公妃派に対する反対勢力として、オーストリア帝国内にしっかりとした自らの立場を築き上げることができた、ということが言えるのである。

それに反し、エリーザベトのハンガリー寄りの行動が、果して、ハプスブルク家やヴィーン宮廷にどれほどの不利な事態が生じたかということになると、保守勢力の立場はともかく、帝国の存続に関して

は当面、それほど顕著な結果が見えないのである。

ハンガリー国及びハンガリー国民を味方につけたエリーザベトは、ゾフィー大公妃を上回る反対勢力を作り上げていった。それに対して、ゾフィー大公妃は、前年の普墺戦争の敗北と、それに伴うオーストリアを排除した小ドイツ主義への足掛かりとなる北ドイツ連邦の成立、さらには愛息フェルディナントの銃殺刑による不幸な死（第7章第4節参照）など、二重帝国の前後に起きたさまざまな事件によりうちひしがれ、どうすることもできなかった。

ゾフィー大公妃に勝利したエリーザベトは、ハンガリーとの同君王国の成立を見たことで心身共に一段落をつけたためか、これを機会にオーストリア宮廷内及びハンガリー国に対する政治的関心を失い、政治の舞台から遠ざかっていった。

あとは、旅に、乗馬に、詩作に、ギリシア古典の勉強に、国家儀礼を排して、まったく個人的に好きなことをするだけであった。翌々年の一八六八年には、何と一年のうち約三分の二近くの二二〇日も、悠々とハンガリーに滞在している。ゾフィー大公妃がまだ生きていたというのである（ゾフィー大公妃の死去は一八七二年）。

エリーザベトは、デアーク、アンドラーシ、ファルクなどのハンガリー要人とは生涯にわたって交際を続けた。一八七六年七月二八日にデアークが七二歳で亡くなると、エリーザベトはデアークの棺台の前ですすり泣いたといわれ、自分が死ぬまでヴィーンのホーフブルク宮の自分の部屋のベッドの上にデアークの肖像画を掲げていたという。

さらに、あと一五日で誕生日という一八九〇年二月一日に、アンドラーシが膀胱ガンで六六歳でそ

の生涯を閉じた。二月二日にブダペストで埋葬されたが、エリーザベトはスズランの花冠を棺に捧げて、カティンカ夫人に悔やみを述べかつ励ましている。

アンドラーシを失ったことでエリーザベトは、「私は最後にして唯一の友人を失った」「助言者である友人がいないと心細さを感じる」(注9)と述べているが、本当に話し相手となる友人を失った悲しみが伝わってくるのである。

## 第5節 ハンガリー建国千年祭

この節は、章と節の立て方の関係でこのように早い順序のなかで取り上げているが、本来であれば第9章を読みおわたあとにお読みいただければ幸いである。

一八九六年、すなわちエリーザベトが暗殺される二年前に、ハンガリーで同国の建国一千年祭が行われた。

この年にコルフ島に滞在していたエリーザベトは、四月三〇日にブダペスト入りをし、五月二日に開催された展示会に皇帝と一緒に出席した。人を避けて孤独を頑かたくなに維持しようとするエリーザベトの行動を知っていたブダペストの市民は、それでも一目見ようと試みたが、エリーザベトは、この親愛なるハンガリー国民の晴れがましい祭典が開催されている間ですら、ルードルフの死後ずっととおしてきた黒の衣装を身に纏い、扇子で顔を隠した。

結局、この期間中にエリーザベトは公式の場に三回しか出席しなかった。それ以外の行事はフランツ



・ヨーゼフが一人で出席することとなった。しかも、このエリーザベトの黒づくめの服装姿や行爲は、エリーザベトに全幅の信頼を寄せているハンガリー国民にとっても少なからぬ衝撃を与えた。

建国千年祭という、ハンガリー国にとっては千年に一度の世紀の大祝賀会であるにも拘わらず、本来であればその国民の神経を逆撫でするような黒づくめの服装で、しかも心から祝福するような態度も見せない王妃ではあった。一度決めたことはいかなる場合でも、それを押し通すエリーザベトらしさがここにも如実に表れている。

五月三日にマジヤール・ヒルラップ (Magyar Hirlap) =マジヤール日刊新聞の意、紙に掲載されたエリーザベトの様子を記した記事によると、「黒づくめの女性らしい頭の飾り、別人となった未知の人のような、深い悲しみに沈んだ面差し、その笑みは精彩のない映像のように反応しているだけだった。王妃様の挨拶は好意的であったものの、無意識的であった。この面差しは、いわば完全に王妃様とは別人のものだった」(注10)とある。

しかし、ハンガリー国民は、ハンガリーに同情し、ハンガリー国民を愛し、同じくハプスブルク家に支配されているチェコその他の国を尻目に、オーストリア・ハンガリー同君帝国の成立に尽力したエリーザベトを、非難する者は一人もいなかった。

もうこの年代に入ると、エリーザベトは政治にもハンガリーにも関心はなくなってきたことは明らかだった。そのため半ば重い気持ちでのハンガリー入りであったが、別の言い方をすると、ハンガリーだからこそ、このような行事に出席したのであって、オーストリア内部の行事であれば、全く事情は違ったであろう。

この祝典の行事に関して、エリーザベトはマリー・ヴァレリーに内心を吐露している。

「昨日の開会祝典は非常に悲しかった。再び華美で晴れがましい姿で出席するなんて！ そうそう、最後に出席したこれと似たような祝典は、ナツィ（ルードルフの愛称）と一緒にだったマリア・テレジア記念碑のときだったわね。私は、昨日と全く同じだったその日のこと、歌のこと、国歌のことを思い出しています」（注11）。

この言葉は、ほとんど遠ざかっていたかかつての華やかな祝典を思い出したというより、当時その祝典に同席した今は亡きルードルフを、後悔の念を込めながら思い浮かべているように思える。

この祭典におけるエリーザベトとハンガリーの間のもつとも象徴的な光景は、六月六日にエリーザベトがその建設に尽力した王宮の新館が披露された翌々日の六月八日に、ハンガリー帝国議会において行われた一千年祝賀会で見られたものである。

このときに王妃エリーザベトがとった態度、その場に出席したハンガリーの高位高官の反応などの会場の雰囲気、六月一〇日のペステイ・ヒルラップ紙（*Pest. Hirap* = ペスト日刊新聞の意）が無署名記事として掲載している。この一文は筆者の手許にある三つの著書に掲載されているが、邦訳されている「皇妃エリザベトの真実」では描写が多少省略されている。

残り二書は、いずれもエリーザベトが死亡した翌日の一八九八年九月一日に、ハンガリーの著作家カールマン・ミクサートが、ヴァサーナピ・ウーイサーグ紙（*Vasárnap. Újság* = 日曜新聞の意）九月

二五日号で回顧しながら絶妙な筆致で描写しているものである。引用の注には「無署名記事」と断っており、さらにミクサート氏の名を明記しているので、邦訳された上述の文章に比べ、より臨場感を持たせた記事に仕立て上げたのかもしれない。

原文はハンガリー語であり、二冊のうち一冊はニーダーハオザー著「ハンガリー王妃エリーザベトの暗殺」であり、もう一冊はコルティ著「エリーザベト」である。この二つを比較するとそのドイツ語訳ももちろん微妙に異なっている。ニーダーハオザー氏は、コルティ氏より少し前の文章から引用している。少し長くなるが、ここではコルティ著から引用する。(注12)

エリーザベト王妃は、黒いレースを織り込んだハンガリーの衣服を身につけて王宮の玉座にお座りになっておられた。王妃は全体的に陰鬱であられ、黒っぽい髪から垂れ下がった黒のヴェールがゆらいでいる。ヘアピンも黒、真珠も黒、全てが黒で埋め尽くされていた。お顔は大理石のような白さで、名状しがたき悲しさを秘めておられる……。悲しき聖母。

ハンガリー国民の皆が魅力的な面影を知っている、以前と同じお顔。髪を手前に短く刈った率直で高貴な容貌、絹状に垂れ下がった髪の毛は額にまとわりつき、その上をたつぷりと編んだ髪とそして王冠。そのお姿は変わりはないが、心の苦しみをお顔に滲ませている。面影は以前と同じだったが、霧に包まれているようだった。

睫毛が王妃の活気ある愛らしい眸を覆い隠している。王妃は何も見えず何も聞こえなかったかのように、静かに無表情でそこに座っておられた。心だけが遠い彼方にさすらっておられるかのよう

に見えた。微動だにせず、何も見ることなく関心をお持ちにならなかった。王妃は精彩のない大理石像のようだった。

そのとき、国会議長のデジデル・シイラーギがゆっくりと、落ちついて、玉座に向かつて畏敬の念を込めて演説を始めた。国王は耳を敬そはだててその演説を聴かれておられた。一つの言葉、一つの考えが国王を魅了した。国王の眼差しはハンガリー国家の偉大な雄弁家の口許に注がれていた。しかし、王妃のお顔は何も読み取っておられなかった。王妃は青白いお顔をされたまま、何の動きも感ぜられなかった。

デジデル国会議長が王妃の名を口にしたとき、王妃は睫毛一つ動かされなかった。しかし、オーフェンの王宮ではまだ聞いたことのなかったような万歳が一度だけ沸き起こった。そのとき、会場のすべての人々の心の中から感情の嵐が迸はなはり出た。すばらしく崇高な音響が場内にたちこめた。その光景は筆舌に尽くし難かった。

この万歳には祈り、鐘の音、海の轟き、優しさ、感情、はたまた花の香りが漂っていた。今まで反応のなかった王妃が頭を動かされた。ほとんど分からないほどであったが、それは感謝の頷きであった。そこに、素晴らしい優雅さが感じられた。

万歳はまだはげしく轟き、何分も鳴りやまなかった。丸天井が小刻みに振動するほど、場内高く大音響をたてていた。出席者のほとんどがカルパツク（筆者注：ハンガリー驃騎兵の毛皮帽）を振りかざした。万歳は止まなかったので、演説者のデジデルは演説を中断せざるを得なかった。

王妃は頭を下げられた。雪のように白いお顔は生気を取り戻された。白いお顔は淡い桜色となっ

た。桜色の微光を放つ新鮮なミルク色から赤さを取り戻され、すっかり赤くなり、生気の赤になった。何と魅力的であられるのだらうか！ 今や王妃は、国王の隣で生氣を取り戻されて座っておられる。王妃の眸は見開かれ、昔の輝きを取り戻された。悲劇的な国家を元気づけるために、かつては微笑むことで魅了していたことを知っていたハンガリー国民は、涙で一杯になった。

この国民は王妃をどのように慰めるかよく理解していた。しかし、それも一瞬の間だけだった。高貴な王妃は目にレースの布地を当てて拭った。涙は乾いていた。演説者は再び語りはじめた。王妃のお顔から生氣の赤らみがゆっくりと引きはじめていた。再び国王の隣には悲しみに包まれた女性性が座っておられた。悲しみの聖母が。

そのときの厳肅さにエリーザベトが圧倒された。演説者がエリーザベトの名に触れただけで、このように、ハンガリー国民がエリーザベトを如何に敬愛しているか、という予期せぬ行動が展開されたのである。

エリーザベトは、内心ではもちろんハンガリー国民の心情に感激して受け止めていたはずである。ただ、ハンガリー国民に対しては感謝しながらも、彼女の感受性は、もはや、そのような儀式だったことには、耐えられなくなってしまうていたのだった。

そのあとすぐ、エリーザベトはヴィーンのヘルメスヴィラに閉じこもり、何週間も公の場に現れることはなかった。

もう、最愛のハンガリー人ですら、エリーザベトの心を安らげることではできなかった。それができる

のは人間ではなく、自然だけであった。五八歳のエリーザベトには、それも平穏な自然ではなく、人間の力を超越した荒々しい自然しかなかった。

## 第6節 ブダペスト散歩

この章の最初に述べたように、一九世紀までブダ地区とペスト地区の間には橋がなかった。この二つの地区の間のドナオ川に最初に架けられた橋は、一八四九年に完成した鎖橋である。この橋はラヨシユ・コシュートとともにハンガリー独立に大いに貢献した、イシュトヴァーン・セーチェニ伯爵の発想により建設されたものであり、ブダペストに建設された最初の大建造物でもあるという。現在ではその伯爵の功績を記念して「セーチェニ鎖橋」と呼ばれている。穏健派だったセーチェニ伯爵は、国内問題が解決していない時点では、独立戦争は時期尚早であるとの判断を下したが、コシュートらの急進派を押し返さることができなかつた。革命時にはすでに精神を病み、一八六〇年に自殺している。

この鎖橋のペスト側の袂にあるルーズベルト広場から、短いヨージェフ・アッテイラ通りに続いて、一八七二年に建設され、一八七六年に完成したアンドラーシ大通り（第二次大戦後の共産主義政権下では人民共和国通りと呼ばれていたが、以下の通りと同様にその後前の名称に戻っている）が北東に英雄広場まで伸びている。パリのシャンゼリゼ通りを模したといわれるブダペスト第一のこの通りは、その名のとおりジュラ・アンドラーシの功績に対して贈られた名称である。

この通りの途中にあるオクトゴン広場（その形状から八角形の意）で交差して南に伸びる環状通りにはエリジエベト通り（第二次大戦後は一時レーニン通りと呼称）、さらにその南に続いてヨージェフ通りと名付けられている。また、ヨージェフ・アッテイラの南側に接して、エリジエベト広場（第二次大戦後は一時エンゲルス広場と呼称）がある。

エリジエベトはハンガリー語でエリーザベトの意、それに対してヨージェフはハンガリー語でヨーゼフ（フランツ・ヨーゼフ）の意で、二人が同じ環状線で繋がっているのは微笑ましい。オクトゴン広場で交差しているアンドラーシ通りとエリジエベト通りを指して、筆者のハンガリー人の知人はこの命名について揶揄して言ったことがある。「エリジエベトとアンドラーシがブダペストで仲良く手をつないでいる」と。一九八〇年代末の共産主義崩壊後、たしかに二人の名が復活したのだ。

また一九世紀後半に戻るが、鎖橋完成後に、その上流側には一八七六年にはマルギット橋、下流側にはエリジエベト橋（一九〇二年完成。一九〇三年という資料もある）、フェレンツ・ヨーージェフ橋（一八九六年完成）の橋が建設されている。

フェレンツ・ヨーージェフ橋はハンガリー建国千年を記念しての建造で、フランツ・ヨーゼフ国王の名を冠したものと思われる。それに対してエリジエベト橋は、一八九八年に暗殺されたエリーザベト王妃のハンガリーの独立に功績のあったことを讃えて、エリーザベト王妃の名が命名されたものである。エリジエベト橋は、当時では橋脚のない橋としては世界一のものであったという。著者がたまたま出張先の山口市の古書店で入手した一九二九年発行の『世界地理風俗大系』（新光社刊）に掲載されている写

真を見る限りでは、エリジエト橋はほとんど装飾はないが重厚な作りであった。

残念ながら、ブダペストのドナオ川に架かる橋は、第二次世界大戦中、退却するドイツ軍によってすべて破壊されてしまった。エリジエト橋は一九六三年に再建されているが、かつての橋に比べるとより斬新でより単純な設計となっている。写真で見るとかつての橋と実際に見る再建された橋とを見比べると、筆者はかつての橋のままであつて欲しかったと思うが、封建的な君主国家の支配者の一員であるものの、共和国家に共感を覚えていたエリーザベトにとっては、新しい橋の方が気に入っていると思つていゝのではないだろうかと思像したい。もちろん、エリーザベトは二つの橋とも在世中には見てはいないのであるが。

かつてのフェレンツ・ヨージェフ橋は、第二次世界大戦後の橋の再建後のことであろうか、現在では「自由橋」と名前を変えている。これはおそらく共産主義体制下で通りや広場の名が改称されたあと、資本主義体制に移行後も旧称に戻さずに「自由橋」の名がそのまま残されたものと思われる。

一旦は改称されたエリジエト広場やエリジエト通りの名はともかく、共産主義体制下においても改称されなかったエリジエト橋は、それだけ市民いや国民が、エリーザベトに対して、尊敬の念を抱いていることの証左ではないだろうか。

それに対して、ブダペスト市の区名のうち、第七区（エリジエト環状通りの東側）がエリジエト区、その南の第八区がフェレンツ・ヨージェフ区（フェレンツ・ヨージェフ環状通りの東側）にその名が現在まだそのまま残されている。

さらに、エリジエト橋のブダ側の橋のたもとへのデブレンティ広場には、王冠をかぶり裾を広げたマ



ントを羽織つて座っているエリーザベトの銅像が立っている。何回かの旅行中に私が見てきたエリーザベトの大理石乃至銅像、すなわち、ヴェーリンのフォルクスパルクの一隅の大理石像、ザルツブルクのヘルブルン宮殿の庭の大理石像、あるいはイタリアのメラノの公園の大理石像、ゲデレーの円柱上の銅像、ポツセンホーフエンのエリーザベトホテルの中庭の大理石像、そしてコルフ島のアキレイオンの大理石像に比べると、それらのような細身の像ではない。(一六三ページ参照)

この銅像は一九三二年に製作されたものであり、現在の地には一九八六年に移設されたものであるという(ハンガリー政府観光局の話)。このエリーザベト像が現在なお揺るぎなく堂々とドナオ川の主流とそのほとりに建つ国会議事堂を眺めている姿を見ると、当初何処に設置されていたか不明である(同観光局)ものの、ハンガリーがその後第二次世界大戦と共産主義体制に組み込まれた二つの歴史的な転換期を経たにもかかわらず、このエリーザベトの像が葬り去られず、再び脚光を浴びたということは、現在のハンガリー人がいかにエリーザベト皇妃を愛していたかということが実感できるのである。

筆者が一九八九年にこの地を訪れこの像を見たあと、上流の地下鉄バツチャーニユ駅(別路線の第一号線は、一八九六年に建国千年を祝して建造されたもので、ヨーロッパではロンドンに次いで二番目に古い地下鉄、すなわちヨーロッパ大陸では最初の地下鉄である)までドナオの川岸を歩いたとき、よく精製されていないガソリンを使用していた自動車の排気ガスの強烈な匂いに悩まされたが、一九九八年にこの像を再び見たときには、ガソリンの精度が上がってきたのであろうか、そのような排気ガスの匂いは余り感じられなくなった。

エリーザベトの銅像は、排気ガスに汚染されることなく、『ドナオの真珠』と讃えられるブダペスト

をいつまでも見守っていて欲しいものである。

二〇〇三年に再々回ブダペストを訪れたとき、国立博物館に展示されている「エリーザベトの最後の服」を見た。この服は、一九九三年にウィーンの東方、スロヴァキアとの国境近くのマルヒフェルトにあるニードーヴァイデン城とシュロスホーフ城の二つの城で行われた「エリーザベト展」にも出展されていたもので再見となったが、その下には、ハンガリー語で次のような説明がなされてあった。

Erzsébet királyné vonzó személyisége Ferencz József és a Magyarország Ellenmondásos

Viszonyából eredően nemzeti kultusz, nemzeti érzelmektárgya lett.

Erzsébet királyné selyem ruhadereka, amelyben a halálos szűrás érte.

1898 Szeptember 10-én.

エリジエフト王妃の魅力的な人物像は、フェレンツ・ヨージエフとハンガリー人の矛盾した関係を背景に、国民的偶像、国民の愛着の的となった。エリジエフト王妃の絹のドレス、1898、9、10、の刺殺死の時。

この日本語訳は、筆者が、ハンガリー文化センターに定期的に詰めておられた、C大学非常勤講師のA氏に訳していただいたものである。

この説明は、第二次世界大戦後あるいは東欧諸国が共産主義体制から解放されたあとに記されたものであると思われるが、「フランツ・ヨーゼフとハンガリー人の矛盾した関係」とあるのは、フランツ・ヨーゼフと当時のハンガリー国民との間が、最後までしつくりしていなかったことを物語っているのではないだろうか。いや、そういう背景があった中での、という経緯を指しているのではないだろうか。

筆者が訪問したときを考えると、二一世紀のハンガリー国民も、エリーザベトに対しても、また、フランツ・ヨーゼフに対しても、そのように受け止めているのではないだろうかと思案していたところ、二〇〇九年は、日本とハンガリーの国交回復五〇周年に当たり、日本側では記念事業実行委員会が発足し、エリジエト橋をライトアップすることが決定された。

ブダペストに架かる橋のうち、一九三〇年代から鎖橋のみがライトアップされているが、エリジエト橋はそれに次ぐ二番目となる。ライトアップは、世界的に有名な照明デザイナー石井幹子氏により、二本の主塔、弧を描くメインケーブル、橋桁及び橋桁を吊り上げる垂直なケーブル群に照明を当てる。イベント時には、ハンガリー国旗（赤・白・緑）や日本国旗（赤と白）のイメージ演出するという。

さらに、一五ページで述べた記念切手には、鎖橋をさしおいて、エリジエト橋が選ばれている。

この記念事業として選ばれたのがエリジエト橋ということは、ハンガリー政府も、エリーザベトに対しても今も<sup>か</sup>渝<sup>か</sup>わることなく、愛着を感じていることが読み取れるのである。



(エリーザベト像・ブダベスト。1989年・筆者撮影)

## 第5章 マデイラ

### ——療養と旅の始まり——

#### 第1節 温泉と療養

エリーザベトが、長期間に亘り転地療養をしたり、長年に亘って温泉に入って療養したりするきっかけは、一八六〇年の秋にエリーザベトがフランス・ヨーゼフに病状を訴え、冬に暖かい南のマデイラに行きたいと希望したからであった。フランス・ヨーゼフは、メランなどヨーロッパ大陸の保養地を勧めたが、エリーザベトは大陸からどうしても離れたいという願望から、医師のすすめに依じて、大西洋上に浮かぶマデイラ島を選んだのであった。

その理由は、一つには精神面から来るもので、すでに述べたように、エリーザベトが煩雑な宮廷儀礼を嫌ったことをはじめとする宮廷内の人間関係の軋轢あつれき、四年間に三回も出産したことによる疲れ、わが子の育児をゾフィー大公妃から取り上げられたことに対する不満、その他の様々な理由によるゾフィー大公妃との確執、さらに宮廷内においてエリーザベトの味方になり心を打ち明けられる女官がひとりもいなかったことなど、対人的な心理面においてストレスが溜まったことがあげられる。

もう一つは、エリーザベト自身の身体的健康管理面に対する軽視が挙げられる。エリーザベトの嫌う

儀礼的な役割を除き、為政者としての皇帝の妻としての役割と子の母親としての役割を取り上げられたとするならば、自ずと自分の美しさに磨きをかけることに走るのは自然の成り行きであろう。美貌と細身の体型を維持したいがための極端な拒食症や上述したような精神的ストレスによって神経性食欲不振になったことなどの、身体面において障害を来したことが挙げられる。

結果的には、この二つの面が複雑に絡み合って、エリーザベトの心身を蝕んでいたということができ、特に、前者である心理的なストレスが大きな要素を占めていることは疑う余地がない。

そのうち、前者の心理的なストレスは、神経症といべきノイローゼ的なものである。エリーザベトのさまざまな特異な行動から、エリーザベトを精神障害者と見る向きもあったが、後述するように、ゾフィー大公妃やヴィーンの宮廷から離れる度ごとに、心身は癒され恢復している。しかし、ヴィーンに帰ると、またその神経症がぶり返してくるので、療養ないし旅は、エリーザベトにとっては次第に不可欠なものになってゆくのである。

次節で述べるマデイラ行きの転地療養はエリーザベトが結婚六年目の二二歳で、長女のゾフィーが死に、次女のギーゼラは四歳、長男のルドルフは二歳。溺愛することになる三女のマリー・ヴァレリーはまだ生まれていないとはいふものの、後ろ髪を引かれる思いはなかったとは言えず、やはり、姑のいないところで子供たちに会っている。

この転地療養で精神的には癒されたが、実家バイエルンの侍医であるフィッシャーによる診断を受けた結果、この療養では貧血が直らないと、バイエルン王国のバート・キッシンゲンでの温泉療養も勧め

られており、一八六二年から六五年まで毎年温泉療養に出かけている。

このほかにも、現在のドイツではバーデン・バーデン、ヴイースバーデン、バート・ナオハイム、オーストリアのバート・ガシュタイン、さらには、メランなどにも何回も療養に出かけている。

メラン（イタリア語でメラノ）はこの時点ではオーストリアのティロール地方の都市であり、第一次世界大戦でオーストリアが敗れた結果、イタリアに帰属することになった。筆者は、一九九八年のエリーザベトの没後百年の年にメラノまで足を伸ばしたとき、同所では記念の行事は行われなかったものの、パッシリオ川の左岸にあるパルコ・エリサベッタ（エリーザベト公園）の木立に囲まれた緑地にはエリーザベトが座った姿の大理石像が建っていた。作成年は確認できなかったが、周囲は綺麗に清掃されていた。公園名といい、また大理石像そのものが残っていることといい、おそらくこの都市には、現地に留まったオーストリア系のイタリア人が多いのかもしれないと思った。

また一八八四年には、座骨神経痛に悩まされたエリーザベトが、当時ヨーロッパで著名であったオランダのアムステルダム of 医師メッツガーの診療を受けている。エリーザベトを一見したメッツガー医師は、すぐ治療しないと身体障害者になりかねないほど重症であり、全治は保証しかねると診断したが、念のため呼び出された共同診療者であるハイデルベルクの整形外科医はメッツガーの診断は誤りであると結論づけた。しかし、このときエリーザベトは六週間の治療を受けさせられることになったが、その後、散策、乗馬、フェンシング等を行うことが許されている。

エリーザベトは、その後も治療を受けさせられてはいるが、何時間もかけて長距離を散策（というより強行軍。第9章第2節参照）したり、跳躍を試みたり、ときには何十キロも馬で遠乗りするなどの過

度の乗馬を続けるなど、従順な患者ではなかったことから、メッツガーには疎まれるようになった。その反面、身体的なマイナス面は別として、これらの行動に集中することによって、嫌なことを忘れる精神的な効果が得られたことも見逃せない。また、健康・美容のために室内で体操を続けている。

そのほかにも、例えば、ポッセンホーフエンの故郷に里帰りして、兄弟姉妹などと団欒するような場合は、病を感じさせることはなく、医者に頼らない心理的療養となっている。

その一方で、エリーザベト自身も、宮廷生活が長くなるにつれて精神面で強くなり、風評や非難や中傷を意に介さなくなり、次のような経緯からマイペースで好きなように行動するようになる。

先ずは、それと対照的に、ゾフィー大公妃は、内政問題及び外交問題の蹉跌、メキシコ王となった愛息フェルディナントの非業の死、普墺戦争による敗戦などによって、心身ともに弱くなつてくるにしたがつて、晩年にはエリーザベトに対しても強く出られなくなることになる。

さらに、姑のゾフィー大公妃が放棄したことになる、三女のマリー・ヴァレリーの育児に関しては、やっと思いのままにできるという安心感からか、エリーザベトは親馬鹿とも言えるほどにマリー・ヴァレリーを溺愛することにもなる。これも大きな心理的療養である。

そのほか宮廷内の立場に関しても、心を打ち明けることのできる女官については、前章で述べたように、一八六四年のイーダ・フェレンツイをはじめとするハンガリー出身の女官で周囲を固めることができるようになったことから、宮廷内におけるストレスは解消して行く。

それがやがて、転地や温泉での療養ではなくなり、気分転換のための滞在となり、乗馬狩猟のための



逗留になり、さらには一箇所に長く留まらないさすらいの旅につながって行く。それらについては、この章の次節以降及び第9章で詳しく足跡を辿って行くことにする。

以上のようなエリーザベトにとって心身上的のプラスの面の中で、唯一残されたマイナス面は、拒食症ないし神経性食欲不振についてということができよう。第3節の「美容とダイエツト」の項で述べるように、日常生活における美容に向けられたエリーザベトの異常ともいえる関心及び行動は、誰にも止められない、エリーザベトの暴走なのである。

## 第2節 マデイラ

この舞台となるマデイラ島は、アフリカのモロッコの西方約七〇〇キロメートルの大西洋上に浮かぶポルトガル領の同名の諸島で、マデイラ島はその主島である。現在でもヨーロッパ人に人気のある避寒リゾート及びマデイラ・ワインの産地として知られる。

一四九二年のコロンブスによる大西洋航海を嚆矢とする大航海時代、その先陣を切ったスペインとポルトガルが、早々とその二年後の一四九四年には両国間でトルデシヤス条約を締結し、太平洋上の西経四六度三〇分を東西に分けて、その西側をスペインが、その東側をポルトガルが、それぞれ獲得した植民地を領土とする植民地政策を開始している。上述の経度はブラジルのサンパウロがちょうどこの位置に当たる。したがって、ブラジルはスペインがポルトガルに先駆けて植民していたが、のちにこの位置を西に修正して、ブラジル全体がポルトガルの植民地として合意されている。しかし、マデイラ島は

それとは無関係に、それ以前の一一一四年にはすでにポルトガル人が到達し、一四三〇年にはポルトガル領となっている。

フランツ・ヨーゼフに招かれた医師は、エリーザベトをあれこれ診察したものの、はっきりした病因を見いだせなかったため、エリーザベトがしばしば訴えていた病因のうち、あまり重大でなかった首の痛みだけを治すために、マデイラ島へ転地させることにしたというわけである。

エリーザベトがマデイラ島に行くに際して、生憎とそのときマデイラ島に航行する適切な船舶がなかった。しかし、エリーザベトはそれを待てなかった。そこでイギリスのヴィクトリア女王の自家用の帆船「ヴィクトリア&アルバート号」と「オズボーン号」を借りて行くことになった。

ヴィクトリア女王は、ちょうどエリーザベトの生まれた一八三七年から六十有余年もの間英国の女王として君臨し、「ヴィクトリア時代」と呼ばれる大英帝国の黄金時代を実現させた女傑である。エリーザベトは、この帆船の借用を契機としてそれ以降もこの女王と関係が深まるが、後述するように、トラブルも発生し、決して好ましい関係とは言えず、両者は気まずい間柄となる。

皇室外交としては当然のことながら、ヴィクトリア女王は船舶の提供のほかにエリーザベトを招待することを申し出たが、エリーザベトは感謝したものの、お忍び旅行としてかたくなに招待は断った。エリーザベトは、船舶を借用する感謝の気持ちと招待の好意を分けて、後者は自分の譲れない意志として申し出を断ったのであり、ことの是非はともかく、そこに妥協の余地を残さないエリーザベトの意志の強さ、いや儀礼無視の頑固さが如実に表れている。

避寒地への旅行は一八六〇年一月一七日に始まった。出航したベルギーのアンベルス（英語ではアントワープ、オランダ語とドイツ語ではアントヴエルペン）からマデイラ島への航行中、同行の従者を尻目に、病人であるはずのエリーザベトのみが船酔いもせずに食事の時間に姿を現したという。この船酔いしないという体質は、のちの船舶による幾多のさすらいの旅でも実証されている。

マデイラ島への療養の効果は靦面てきめんに現れた。エリーザベトがヴィーンを離れた途端、元気が回復したのである。といっても必ずしも夫が鬱陶うつとうしなくなったわけでもない。ただ、夫が政務に追い回されて十分に相手になってもええないのであれば、やはり、離れて気楽に生活できる方が好ましいということである。いや、何と言っても一番の理由は、義母のゾフィー大公妃と顔を合わさないことに違いなかった。

マデイラ島の主都フンシャルに着くと、病気ではあるものの美しき皇妃を見るために多くの人々が集まったが、人々の期待に反して着飾った行列もなければ青ざめた皇妃を見ることもできなかった。フンシャルの住民は、エリーザベトにうまくはぐらかされたのである。

エリーザベトはポルトガル国王から提供を受けた別荘で療養することになった。別荘は、広々とした大西洋を望む熱帯的で魅力的な庭園のあるペランダ付の建物で、エリーザベトは、うっとりするような花々の香りに包まれた毎日を送っていた。しかし、単調な毎日が続き心にゆとりができると、エリーザベトは夫や子供たちへの郷愁を感じるようになった。夫との遠い昔の愛について考え、故郷の母や蜂起したイタリア軍に包囲され孤立している妹でナポリ王妃のマリーの消息に思いを馳せている。

マリーは、ナポリ王国を救えなかったオーストリアにいらだちを隠せなかった。それがエリーザベト

の神経を高ぶらせ、フランツ・ヨーゼフとの意見の衝突にも結びついた。そのうち、マリーは一八六一  
年二月一三日のナポリ王国の降伏により、法王の保護下の亡命の身となった。マデイラ島に滞在中のエ  
リーザベトは、マリーの生命の不安が消えたことに安堵はしたものの、その境遇に対する同情で自らに  
重圧を課すことになった。

しかし、二月には様々な花々が咲き競うとともに、エリーザベトの気持ちにも穏やかさを取り戻すこ  
とができた。それでも精神的に悩みを抱えて憂鬱なときには、食事を十分にとっておらず、外出も滞る  
こともあったが、反面、借り上げたポニーのそばで過ごすときは、少女期の欲びに立ち返って無邪気に  
遊ぶこともあった。

エリーザベトの健康状態の悪化は、確かに侍医の診断のとおり、美しさを維持するためのダイエツト  
による過剰な運動の欲求や拒食症が直接の原因であるが、これには神経の酷使がその主因であると見る  
ことができる。それは、エリーザベトが一八六〇年一二月にグリユンネ伯爵に打ち明けた次の手紙で如  
実に示されている。

貴方にあからさまに伝えますと、もし私に子供たちがいなかったならば、私が今まで務めて  
きた生活を再び受け入れなければならぬという考えは、堪えがたいものです。私はE……  
(Ezherzogn Sophie。筆者注……ゾフィー大公妃)に嫌悪感を覚え、私が彼女から離れることに  
よって、それがより一層不愉快に思い出されます。(注1)

後ほどのグリュンネの言動でわかるが、このときのエリーザベトは、グリュンネがゾフィー大公妃の側の人間だとは思っていなかったであろう。それはそれとして、健康恢復のためとはいえ、夫であるフランツ・ヨーゼフと二人の子供から離れ、皇妃としての公務も遂行しないエリーザベトの転地療養に對して、ヴィーンの宮廷内では夫婦間に危機を感じ、フランツ・ヨーゼフに同情的であった。しかしそれは杞憂であり、フランツ・ヨーゼフは半年後にエリーザベトとトリエステで再会している。

ゾフィー大公妃も、表面上は嫁の健康を気づかっているようにみせるものの、エリーザベトが夫と子供たちを置き去りにして長期間旅行することを嘆いてもいる。しかし、その反面、実質上の権力者であり、フランツ・ヨーゼフから子離れできない母として、また、孫たちの教育に關しては自由に裁量できるように、衝突しなくて済む反抗的な嫁の不在に、むしろ清々としているのかもしれない。

ただ、この旅行によってエリーザベトは、主導権を全面的に掌握したゾフィー大公妃と仲直りする可能性はなくなかったが、ゾフィー大公妃からの手紙に對して返事も出さなかったことから見ても、そのつもりは全くなかった。

エリーザベトがマデイラ島を離れるときがきた。約半年後の一八六一年四月二八日に主都フンシヤルを離れたあと、スペインのカデイスとセヴィリヤを訪れた。カデイスではお忍びで市内を歩きまわるこゝとができた。しかし、セヴィリヤではそれが許されず、スペイン皇室による意に沿わぬ接待が待ち受けてはいたが、それらを丁重に断つた上で闘牛を見ている。何と云うことか。

さらにジブラルタル海峡を越えてマルタ島に滞在したあと、五月一五日には、運命のギリシアのコル

フ島のガストゥーリに到着した。エリーザベトはガストゥーリの雰囲気が大いに気に入り、長く滞在したかったが、時間がそれを許さなかった。しかし、このときの訪問がきっかけとなって、後年、コルフ島はエリーザベトにとっては最も愛着のあるさすらいの安息地となるのである。

このあと、船はフランツ・ヨーゼフが待ち受けるトリエステに向かい、約半年余に及ぶエリーザベトのマデイラ島への旅は終わった。エリーザベトは、万人が瞠目する生氣溢れる爽やかさでヴィーンに戻ったが、また再び慇懃な宮廷儀礼に悩まされることとなる。

それだけではなかった。長期間にわたる不在のため当然のことながら、久しぶりに会う間もなく五歳になるギーゼラと同じく三歳に近いルドルフは、ゾフィー大公妃の息のかかった廷臣が面倒を見ており、さらに、教育についてもゾフィー大公妃の流儀で進められていた。

そこで、自分から母親としての役割を取り上げたゾフィー大公妃の仕打ちに、悪意すら感じ取ったエリーザベトは、ホーフブルク宮を引き払いラクセンブルク宮に移った。このとき結婚七年目で二三歳のエリーザベトは、まだ、イーダ・フェレンツィを講書係として召し抱える三年前であり、まだフランツ・ヨーゼフだけが頼りの四面楚歌の孤立した立場にあった。

このエリーザベトのラクセンブルク宮への行動がまた公務を放棄し、これからも南の地で保養するのではないかと世間の噂の種になった。さらに、巷間、色々な判断が飛び交った。エリーザベトの侍医が無能であるとか、エリーザベトはヴィーンにいと六週間も生きつづけていられなかったとか、何故保養地がオーストリア国内のそれでないのか、などなど。

やがてそれらのひとつが事実となった。六月下旬にはエリーザベトは、もつと長く滞在したがって

たコルフ島に到着した。地元の商人がガストウーリの別荘をエリーザベトに提供した。ここでは氣候の变化も作用し、すぐ侍医を必要としなくなるほど病状は恢復した。エリーザベトは、散歩をし、ヨットに乗り、海水浴もした。

しかし、ゾフィー大公妃が差し回したスパイともいえるグリユンネ伯爵の訪問によって乱された。上述したように、前年暮のマデイラではエリーザベトがグリユンネの立場を理解していなかったためか、ゾフィー大公妃に対する自らの心情を打ち明けた間柄のグリユンネ伯爵ではあったが、これ以降エリーザベトはグリユンネ伯爵に対して警戒を解いていない。

その間、エリーザベトの病状についての噂に心配した母ルドヴィカは、エリーザベトの姉でタクシス公爵に嫁いでいるヘレーネをコルフ島に訪問させた。これは二人とも結婚してから最初の再会で、フランツ・ヨーゼフとの婚約で不本意ながら争った結果となったこともあり、最初はしっくりしなかったが、それはそれ姉妹であることから、エリーザベトもヘレーネに本当の気持ちを打ち明けることができた。ヘレーネはヴィーンに立ち戻り、そのありのままをフランツ・ヨーゼフに報告している。(注2)

この判然たる皇帝と皇妃の別離は世間に様々な推測や噂を立てられ、それにさらに尾ひれが付いた。フランツ・ヨーゼフは、ハプスブルク家の権威に傷がつくことを恐れ、悩んだ。同時に、愛するエリーザベトとの別離そのものも堪えがたかった。フランツ・ヨーゼフはゾフィー大公妃の了承をとって、コルフ島にエリーザベトを訪ねている。ヘレーネの報告でエリーザベトの本心を理解したフランツ・ヨーゼフではあるが、嫁と姑との間の永遠の難問は容易に解決できるものではなかった。

エリーザベトはヴィーンに帰る気はないものの、子供たちに会いたがった。そこで、フランツ・ヨー

ゼフはゾフィー大公妃抜きで子供たちをヴェネツィアに呼び寄せ（この時点ではまだオーストリア領。一八六六年の普墺戦争後にイタリア王国に統合）、エリーザベトに会わせることができた。

しかしこの再会も、ゾフィー大公妃の命を受けていたエステルハージー伯爵夫人と、子供たちの処遇について平行線を辿ったままだった。そこでエリーザベトは、フランツ・ヨーゼフの協力を得て、エステルハージー伯爵夫人を解任し、ケーニヒスエッグハアオレンドルフ伯爵と結婚した旧姓パオラ・ベレガルデ伯爵夫人を任命した。さらにその夫の伯爵を侍従長に任命した。

その結果、エリーザベトにとっては、従来より若干、有利な立場に立つことができたのである。それはゾフィー大公妃の勢力に拮抗しうる橋頭堡を築く第一歩であった。

### 第3節 美容とダイエット

ポツセンホーフエン時代のエリーザベトはお転婆で、顔も体つきも洗練されておらず、幼いころは美しいというにはほど遠い存在であった。一五歳で失恋したあと、同じ年にバート・イシユルで姉のヘレーネがフランツ・ヨーゼフと見合いたとき、ヘレーネのためにゾフィー大公妃から差し向けられた髪結師が、隣で梳っていたエリーザベトを見て、その美しさを認めてくれたが、それはまだ後年の美しさとは違い、フランツ・ヨーゼフはエリーザベトの子供らしい可愛さに惹かれたと言うべきであろう。

エリーザベトの美貌は、二〇歳台後半の一八六〇年代にはすでにヨーロッパでは有名になっていたという。これはその間に四人の子供を産み、女らしさが増してきたことと、美容とダイエットに心掛け、



適正な容姿や体重の維持に努めた結果によるものである。

しかし、美貌については、昨今の整形美容もない時代であり、当時の化粧のみによって容貌を美しく変えることは容易ではなく、美しくありたいという努力や、心の優しさ高貴さを醸し出しながら、時間をかけて培われていったものである。

エリーザベトは、自らの美貌を十分意識していた。特に、男性からの評価を意識したことがないとも言えない。しかし、他人に対して美しさを誇る虚栄心とは無縁だった。むしろ、自らナルシズムに陥ることで十分だったのかもしれない。

それを証明するような出来事として次のような例があった。エリーザベトは美に対する意識として、その時代の様々な国の美人に関して興味が募ったと見え、世界の美女の肖像画や写真を集めることを外務大臣に要請し、それに対して外務大臣は、各国駐在のオーストリア大使にそれらの写真を集めさせている。それがたまたまトルコのイスタンブール駐在大使あてに、ハーレムの美女の肖像画の入手にまで及ぶと、外交官は外交上及び宗教上（トルコの政教分離は、第一次世界大戦敗北後、ムスタファ・ケマル・アタチュルクの改革による一九二五年）その入手の是非及び困難さに当惑していたが、予想に反して現地の大使は何とか入手することができた。

この写真蒐集の一件は、他愛ない少女染みた趣味であるが、そこにシシーの世界の美女に対する競合心ともいえるべき、執念が滲み出ているように思えるのである。

ヴィーンにおいて、エリーザベトの美しさに最初に気がついたのは、ヴィーン市民だったという。しかし、エリーザベトに反感を持っている宮廷内の貴族の令嬢たちは、妬みもあつてか当初はエリーザベ

トを美人とは認めようとしなかった。そのあてつけのため、一八五七年にフランツ・ヨーゼフの弟であるマクシミリアン大公が、ベルギー皇室からシャルロット皇女を迎えて結婚したとき、宮廷内ではシャルロットを「宮廷内一の美女」として選んでいる。しかしのちになって、エリーザベトが公の席に姿を現すと、通常はエリーザベトに批判的な宮廷の高貴な夫人ですら、エリーザベトの美しさを認めざるを得なくなっていくた。

一八六五年二月に、エリーザベトのすぐ下の弟カール・テオドルがザクセン王国のゾフィー公女と結婚した。この結婚式に出席するため二七歳のエリーザベトがドレスデンを訪れた際には、エリーザベトの美しさと愛らしさがザクセン人をかかつてないほどに興奮させたと、母ルドヴィカの四番目の姉であるザクセン王妃マリーが伝えている。(注3)

このようなエリーザベトの美しさを讃える例は、同時代の人々からさまざま報告されていることが記録として残されている。

エリーザベトの容貌の中で唯一とも言えるアキレス腱があった。それは歯並びの悪さであった。結婚した際の当時は、エリーザベトもゾフィー大公妃に、歯をよく磨いていないこととともに、そのことを指摘されていた。

当時は、歯並びを矯正する技術が開発されていなかったと思われるので、エリーザベトにとつてもこれだけではどうすることもできなかったであろう。そのことを意識してか、エリーザベトはできるだけ口を開けることを控えたのではなかったか。そのことを、口さがない宮廷の夫人たちからは、口を開かないのはあまり話したがない知性の低さの現れであると、勝手な評価を下される始末ともなった。

ハーマン女史が指摘するように、エリーザベトの写真集では、口を開けている写真は笑みをこぼしている僅か数枚しか見当たらない。

一八七一年にマリー・フェシユテイチが女官として初めてエリーザベトに仕えたとき、エリーザベトは三四歳になっていたけれども、マリー・フェシユテイチはエリーザベトのその美しさについて、以降さまざまな表現で記録に残している。

ハーマン女史は、マリー・フェシユテイチは、エリーザベトのもっとも身近に仕えた女官であるので、エリーザベトの美しさに対する評価が甘すぎると批判している。マリー・フェシユテイチが、それがたとえエリーザベトの美貌や優雅さから発せられる気品や人を惹きつける魅力について、最大級の美辞麗句を並べていたとしても、そしてその評価の甘さを割り引いたとしても、当時のさまざまな目撃記録なども考えると、エリーザベトの美しさが評判倒れでないことは間違いない。

たしかに、マリー・フェシユテイチがエリーザベトの虜になったことは間違いない。しかし、その見る目が曇ったことはなかった。

「皇妃様が好意的なことをお話になるとき、皇妃様のような表情を浮かべる人は、世の中にはおりません。そのようなまなざし、そのようなお言葉が、いつでも幸せにしてくれるのです」

(一八七三年二月三日の日記) 〈注4〉

一八七三年四月、次女ギーゼラの結婚式に出席したときの、マリー・フェシュテイチのエリーザベトに関する次のような描写も。このときギーゼラ一六歳、エリーザベト三五歳で、出席者の関心は花嫁のギーゼラではなく、エリーザベトに集まった。

「銀で刺繍を施したお衣装を身にまとい、下になびく仄かに光り輝く長い髪の上に頭飾りを乗せた皇妃様は、名状しがたくなんとお美しいのでしょうか。もっともお美しいことは、身体的なありようではなく、かもし出される何とも言えぬ雰囲気——優雅さ、高貴さ、愛らしさ、少女らしさ、しとやかさ、それらを超えた素晴らしさが、感動させるのです」（一八七三年四月二三日の日記）

〈注5〉

一八七五年一月に、エリーザベトがファッシング（IIカーニヴァル）の舞踏会に出席したとき、マリー・フェシュテイチのもう一つの描写。

「皇妃様は白鳥のようでした。また、白百合のようでもあり、ガゼル（筆者注：…動物。軽快で優美の象徴）のようでもありました。しかしまた、メルジーネ（筆者注：…フランス伝説の海の妖精とされる美女）のようでもありました。皇妃と同時に妖精、しかも女性としての資質を十分に備えておられ、素晴らしい美しさと子供らしさ、荘重さと、優美さと品位の良さ（以下略）」

（一八七五年一月一〇日の日記）〈注6〉

一八七三年五月一日から十一月二日まで開催されたヴィーン博覧会には、各国の元首などがヴィーンにやってきている。その中で特にペルシアのシャー・ナースルディンは、エリーザベトの美しさに魅せられた。

なお、シャーとは近代ペルシア語で支配者・国王の意。ペルシアは現在のイラン。イランと言う国名は、一九三五年にパフレヴィーが王朝を開いたときに呼称した国名で、インド・ヨーロッパ言語族の一族であり、現在のイランの地に定着した「アーリア」民族の名が訛ったものである。

この時のエリーザベトの衣装についても、マリー・フェシュテイチは、エリーザベトがこんなにも美しいと思ったことはなかったと述懐したほどであり、ペルシアのシャーがエリーザベトにご執心になるのは無理もなかった。シャーは叫んだ。

「アラーよ、彼女はなんと美しいことか！」〈注7〉

シャーは、さらに、エリーザベトを「女神」と讃え、アンドラーシにも次のように述べている。

「皇妃は、私が今までにお会いした方の中でもっとも美しいご婦人です」「気品、微笑み、氣立ての良さ！ いつの日にか再び来ることができたら、皇妃に私の敬意を示したいのです」〈注8〉

エリーザベトは、一七二センチの身長に対して、体重が四六〇キログラム、ウエスト五一センチの容姿を生涯にわたって維持するために、食事に関しては極端なほど気を使い、並々ならぬ努力と時間を費やした。一般の標準から見れば、この身長にしてはこの体重はむしろ少なすぎたが、それがエリー

ザベトの基準だった。

その瘦身体形の維持が拒食症を生み、神経過敏を高め、貧血の原因ともなるのであるが、周囲や医者の忠告にも拘わらず、エリーザベトは頑固にそれを是正しなかった。それが精神的にも悪影響を与え、療養との悪循環にも結びつき、心身とも蝕む自業自得の結果となった。しかし、エリーザベトは意に介さずそれで押し通した。

それらに関してさまざまなのが報告されている。即ち、あるときフランツ・ヨーゼフは、エリーザベトが食事の代わりにオレンジ付きの重アイスクリームだけを食べていると聞いて驚いた。また、エリーザベトが空腹を満たす代わりに断食をするなどという行為は、私には理解できないと言っている。さらに、エリーザベトのこのような行為は自分を悲しい思いにさせているが、このことについては目を瞑るしかない、フランツ・ヨーゼフは諦めている。

エリーザベトは、気に入ればもちろん一般の食事も摂ることはあるが、ミルクとオレンジだけのときもあった。それがさらに発展して、ヘルメスヴィラに独自に模範酪農場を造って雌牛を飼うことができよう、イーダ・フェレンツイに頼んでいる。それだけではない。航海に出る場合でも食料はヴィーンから調達し、新鮮なミルクを確保するために、初期には山羊をのちには雌牛を乗船させているが、船酔いした山羊や牛から乳が搾り出せなかったこともあったという。

またあるときは、ミルクと卵だけのときもあり、太りすぎだと思つくと、先ず蒸し風呂に入り、そのあとに七度の冷たい水で全身浴する有り様だった。

そのほかにも、一日の食事がたった六個のオレンジだけであつたので、鉄分を取りすぎて皮膚の腫れ

を増長させてしまい、歩行に重要なくなるぶしの箇所です。特に腫れが酷く、医者からは飢餓水腫の典型的な徴候である診断されたこともあった。

朝食後の体操のあと、体重計の結果を見て、その後の食事を配分するなどのほか、ときには一日に三回も体重を計ることもあるという徹底ぶりであった。

以上見てきたように、通常を考えれば、体力維持のために、運動を適度に控え、一般の食事を摂り、十分な睡眠を確保すれば、精神的にも安定するはずであるが、エリーザベトは正にその反対のこと行っているのしか見えない。

ただし、もし、エリーザベトに通常の食事を摂ることを無理強いしたならば、身体的なことよりも、精神的により耐えがたい結果となり、神経過敏を助長させるだけであった。エリーザベトにとって一番身近で、エリーザベトについて一番心配している最愛の娘マリー・ヴァレリーにとっても、エリーザベトのこの食餌療法は、最悪な事態を通り越して救いがたいと、絶望的になっていた。

死を豪毛も恐れないエリーザベトにとっては、人生にそれ以上の喜びはもはや存在しないため、美しい容姿を維持することは、他の何を犠牲にしても絶対に譲れないという、信念であったがためのものなのであろう。

エリーザベトは、美しさを維持するために、食餌療法以外にも、道具を使った体操についても毎日欠かさず行っていた。そのため、ホーフブルク宮をはじめ長期に居住するところには、平行棒、吊り輪、鉄棒、ブランコ、バレエ用の手摺りなど、エリーザベト専用のスポーツ用具が備えられていた。

エリーザベトの美容・ダイエットのための日課は、規則正しくかつ厳格なものであった。エリーザベトは、夏は五時起床で冬は六時に起床。冷水浴とマッサージをしたあと、体操とトレーニングを行ってから軽い朝食を摂る。

朝食のあとに、豊かな髪を丹念に好みの髪形に整える。これにはかなり時間をかける。そのあとは読書するか手紙を書くかハンガリー語（ハンガリー語が上達した後年はギリシア語）の勉強となる。さらには、乗馬かフエンシングに精を出す。

午後には、マリー・フェシュテイチやその他の女官を帯同しての散策、後年になるとギリシア語教師を伴うことにもなる。この散策は、時として長時間の強行軍になることもあった。

夕方には着替えと調髪を行い、七時には家族との夕食となるが、後述するように、夕食は一家団欒の楽しいひとときとはならなかった。むしろ、エリーザベト独自の特別メニューのためひとりで摂ることが多かった。そのあとのイーダ・フェレンツィやマリー・フェシュテイチなどとの談笑に花が咲くのだった。

祖母となり、五七歳になった一八九五年においてすら、エリーザベトは体操と訓練を欠かすことはなく、その結果として、その年齢からすると信じられないほどの身体のしなやかさを維持している。ある遠出の際に、人ひとりない場所で、同行の女官イルマ・スターライの前で、突然、体操の先生によるお手本ともいえるべき優美さを込めた体操の一部を披露したという。

一方の容色については、晩年になっても、散策と称する強行軍を日常のように行い、自らの身体を痛めつけるような嵐に身を曝し、さらに極端な食餌療法をとおして、肌をも痛めたのであるから、その衰



えは当然のことであつた。しかし、男性を惹きつける魅力は失わなかつた。

容貌が損なわれたといつても、マリー・フェシュテイチが言うように、それは実際の年齢以上に若く身体的な美しさを維持できただけでなく、それと併せて、精神的な美しさが全身から滲み出ていたからなのであらう。

エリーザベトにとって一番の自慢は丈なす髪であつた。そのため、髪の手入れはその他のすべての美容に優先させるほど重要な日課で、一種の儀式と言へるほどの時間と手間をかけたものであつた。

エリーザベトは、ヴィーン市内の劇場で舞台女優たちのヘアメイク係をしていたフランツィスカ・アングラーの評判を聞き、宮廷に侍女として召し抱えることにした。アングラーは、のちに結婚してファイアリク夫人となつたが、エリーザベトはフランツィスカを手放したくなかつたため、夫も召し抱えて最後には男爵の位まで与えている。この一事を見ても、ことほどさように、エリーザベトの髪の手入れがいかに重要視されていたかが分かると思う。

髪の手入れ方については、ファイアリクはエリーザベトの厳しい注文を守らなければならなかつたが、その他の点ではエリーザベトの前でも物おじしなかつた。エリーザベトがもつとも大事にしている髪の手入れを毎日長時間にわたつて担当することで、勢いエリーザベトと一緒にいる時間が長く、あの冷静なマリー・フェシュテイチでさえもその厚遇に嫉妬を感じるほどであつた。

ファイアリクはどちらかという要領のよいところが、そのうち威張る振る舞いをみせるばかりか、エリーザベトの代役として、エリーザベトになりすませてバルコニーに立つことまでした。それ

もエリーザベトが髪の手入れを美容の第一に位置付ける役割であったからこそ、そのようなことができただのである。ファイファリクは、美容師としてエリーザベトの髪の手入れを三〇年にわたって続けた。

エリーザベトの髪は美しいばかりでなく、髪を解くとガウン替わりにもなるような丈な長さになるので、その重さで頭痛を訴えることもあったほどであった。人生の最後にジュネーヴで暗殺され倒れたとき、この髪の色が多かったことから、頭を強く打つことから免れたのであったのだが。

髪の手入れの仕方をはじめ、エリーザベトの美容に関して詳細にわたって言及した原書及び邦訳された類書もあるが、本書ではそこまで触れることはしない。

#### 第4節 旅・旅・旅

エリーザベトの有名な言葉の一つに「私はカモメになりたい」という言葉がある。この言葉の中にはエリーザベトの本心が凝縮されている。

ミュンヒェン郊外のポツセンホーフエンで自由に育ったエリーザベトは、束縛されずに自由でありたいという願望は生まれついた資質であると同時に、ものの考え方にもしっかりと結びついている。

それが、閉鎖的な宮廷内の実生活における嫌悪感が募った挙げ句、そこから逃げ出すように、生涯にわたって数多くのしかも長期の旅行へと彼女をいざなっていたのである。そして、毎年、それだけ多くの期間ヴェーンを留守にしたのである。

ギーゼラやルドルフとの親子の絆がもつと親密であったとしたら、そしてフランツ・ヨーゼフが政

務にそれほど忙しくない立場にあったとしたら、これほどまでに度が過ぎた旅行三昧に浸ることはならなかったであろうが、それが可能であったとしても、エリーザベトの自由でありたい願望を止めることはできなかったのかもしれない。

エリーザベトの旅行は、おおまかに次の四つのタイプに分けられる。

その第一は療養のための旅である。これについては必要欠くべからざる旅行であるが、特定の温泉療養地に定期的を訪れる場合と、マデイラのように一回限りの長期の転地療養とに分けられ、その詳細についてはすでに本章第1節と第2節で述べた。

第二は、ゾフィー大公妃やヴィーン宮廷から精神的に逃避するための旅行で、ポツセンホーフエンの実家、兄ルートヴィヒの城館で同じシュタルンベルク湖南岸に位置するガラツハオゼン、ブダベスト、ゲデレー、コルフ島など、気分転換乃至ストレス解消を主目的に、反復して長期的に滞在するところに特徴がある。

ゲデレーについては、次の乗馬を目的とした旅行とも分類することができるが、ゾフィー大公妃をまじえない家族団欒も主目的の一つであることから、この中に入れてもおかしくはない。また、コルフ島にはもともと深い別の目的があったと言わなければならない。ゲデレーについては次章で、コルフ島については第9章で取り上げる。

第三には、乗馬を主目的とした旅行であるが、これは最も熱中できる趣味としての旅行で、これとともに水泳も楽しんでいる。前述のゲデレーのほか、フランス、イギリス、アイルランドのこれまた度重なる長期の旅行である。これについては第6章で詳しく取り上げた。

最後の第四は、観光を中心とした移動しながらの旅行で、これも取り上げてみれば非常に数多くの観光地を訪れている。本節ではこの第四の旅行を取り上げるが、これも単なる観光や遺跡巡りだけではなく、ほかにも目的があったということができ、これも第9章でも説明してゆきたい。

これらの旅行は公務でないエリーザベトの私的な旅行であっても、当然のことながら皇妃という立場から大勢の従者を同行させている。すなわち、侍従長、マリー・フェシュテイチなどの女官や侍女、書記官、髪結い、料理人、御者などで、海水浴の場合は水浴係、狩猟の場合には厩舎の世話係、マリー・ヴァレリーが同行する場合は家庭教師と養育係、犬好きなエリーザベトが犬を連れて行く場合は飼い犬係など。(注9) 上述したように、船で乳牛を連れて旅行する場合は、その係も同行させたことは間違いないであろう。

ときには総勢六〇名もの団体になるといわれる旅行(注10)では、各地の王侯貴族の城や別荘を借り切ることもあるが、ホテルに宿泊する場合でもかなり多くの部屋を確保しなければならない。野次馬など人に会いたがらないエリーザベトではあるものの、美人の誉れ高くしかも高貴な佳人であればなおさら、さらに、宿泊先に籠もってしまうだけならまだしも、そうでなく外に出て積極的に行動するため、旅行の先々で嫌でもその滞在や行動がすぐ知られてしまうことには困ったことであつたらう。

これら旅行の旅行地のすべてやそのなかでのエピソードをすべて取り上げる必要ないであろうし、それらの幾つかはそれらと関係する他の章節でも述べているので、ここでは顕著な例のみをいくつか紹介してみたい。旅行は主に列車を利用する場合も多いが、ヨットを利用しての地中海の沿岸都市もかな

り足を伸ばしている。

ヨットを利用する場合は、その出発地はアドリア海に面したオーストリア帝国の海の玄関口であるトリエステである。このトリエステは、のちの第一次世界大戦でオーストリアが敗北したことによりイタリア領となったが、第二次世界大戦で今度はイタリアが敗北すると一時英米軍の占領するところとなったことがある。現在ではイタリアの都市である。

トリエステの郊外には「ミラマレー」という城館がある。往時の写真をみると波静かな海岸に建っている。この城館はフランツ・ヨーゼフの弟フェルディナント・マクシミリアン大公のために、一八五六年から一八六〇年にかけて建てられたものであり、フランツ・ヨーゼフ夫妻も出航及び帰港の際にはここに宿泊している。と言っても、エリーザベトが単独で旅行に出かけることが多いため、フランツ・ヨーゼフはどちらかという、見送り及び出迎えのため宿泊することが多かった。

当初、皇室専用のヨットがなかったときは、イギリスのヴィクトリア女王のヨットを借りることが多かったが、のちには専用のヨットで航海に出られるようになった。その常用するヨットのうちのひとつの名も「ミラマレー」という。ミラマレー号は、一八七二年に進水し、乗組員は一七九名、二〇〇〇馬力の外輪船のヨットであり、エリーザベトの愛用のヨットでもあった。〈注11〉

このヨットに関して記述したコンスタンティン・クリストマノスの日記を、ブラシユルビビラーの著作から要約して引用すると、ミラマレー号の建造に当たっては、エリーザベトの希望に配慮した造りになっている。〈注12〉

すなわち、エリーザベトは、ヨット内では、健康によいとされる海水の風呂に入ることを原則として

いるので、海水を採るために船員がボートで漕ぎ出して海水を樽に詰めてもらい、それを使用したという。また、眺望の利くところに円筒状のガラスのパビリオンを造り付けて、そのなかに回転式の椅子を配し、調髪させながら海を眺めるとか、嵐のときには転がり落ちないように椅子に身体を縛りつけて荒れた海を眺めていたという。そのほかにも、凧いだ海やそれと対照的な荒れ狂う海だけをじっくりと眺めるため、後ろ甲板の場合でも、ブリッジの場合でも、ヨット自らの船体が見えないようにという工夫までもしている。

鉄道旅行についても、エリーザベトはオーストリア皇室専用の車両を使用してヨーロッパ内を旅行している。皇室用のサロン車両は一八七三年から七四年にかけて製造されている。筆者の手許にはエリーザベトが使用した豪華なサロン車と寝台車の写真がある。サロン車（寝台車もか？）は、ヴィーン市立交通博物館に所蔵されているとのことであるが、筆者はヴィーンを一二回も訪れていながら残念なことに見えていない。

ヨーロッパ内の主な旅行先を見ると、ドイツとオーストリアそれに領域内のハンガリー、ベームン、メーレンを除くと、フランスではパリ、マルセイユ、カンヌ、コルシカ島など、イタリアではミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ボンペイ、ソレント、カプリ島、リヴィエラ、シチリア島のメッシーナ、パレルモ、シラクサ、スペインのマドリッド、バルセロナ、グラナダ、セウタ、マヨルカ島、ジブラルタル（実際には一七一三年から現在までイギリス領）、ポルトガルのリスボン、オポルト、マデイラ、地中海上のマルタ、スイスのジュネーヴ、チューリヒ、ルツェルンなど、その行動範囲が広いことがわかる。このほかにも、乗馬で訪れているイギリス、アイルランドの各地がある。

後年、エリーザベトはヴィーン留学の何人かのギリシア人留学生から古代と現代の両方のギリシア語を習い、ギリシアの文物や遺跡にも高い関心を示している。そのうちの一人が前述のクリストマノスであり、一八九五年から九六年にかけて一〇カ月も旅行に同行させているマリナキーである。ギリシアの文学等の文物については次節に譲る。

エリーザベトは、一八七六年にコルフ島からの帰途にアテネに立ち寄っている。現地駐在の外交官により同市内の案内を受けたが、近代的な文物に対してはまったく興味を示さないものの、古代アテネの栄華を極めたアンティークな文物であると、それが原型を止めていないものであっても、深い関心を示したという。マリー・ヴァレリーの「一八八八年二月三日の日記によると、エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフに、「ギリシアは私の未来の故郷だと思っている」(注13)とまで述べ、自分の肩に錨の刺青をさせている。

そのほかにも、エジプトのカイロ、トルコのイスタンブール、スミルナ、トロイ、モロッコのタンジール、アルジェリアのアルジェとオラン、チュニジアのチュニスやカルタゴなど、地中海沿岸諸国にも多く旅をしている。伝記作家の著作には現れていない、もっと多くの都市や観光地にも訪れていると思われる、当時としては桁外れの観光旅行者ということもできるのではないだろうか。

それぞれの旅行の長さや一箇所での滞在期間の長さは異常とも言うべきものがある。

一八九〇年代にはヴィーンには年に数週間しか居住していなかったという。長い例をいくつか挙げる  
と、一八六〇年のマデイラへの療養旅行は七カ月にも亘るし、一八六九年には兄ルートヴィヒの居城が

ラツハオゼンには六カ月も滞在している。一八七〇年にメランに滞在したときには、義妹の葬儀で一時中断したものの、その期間も合わせると九カ月にも及んでいる。

このように、長期滞在地の場合でも狩猟旅行の場合でも、さらには移動を伴う観光旅行の場合でも、一回の期間が半年程度の長さになることが多い。いずれの場合もことほどさように徹底的にヴィーンを敬遠したことになるが、その結果として、ヴィーン宮廷内の諸官はともかく、ヴィーン市民も見放されてしまい、批判が起きるのも致し方ないことであろう。

さらには、一八七四年八月一五日に母ルドヴィカに宛てた手紙には、自由な共和国に対する憧れからか、「暫くアメリカに行ってみたい」「海は私が眺める度毎に誘ってくれるのです」（注14）とも漏らしている。ここまでくるともうヴィーン宮廷無視の極言と言うべきであろう。

## 第5節 詩作と読書

エリーザベトは少女時代から暇を見ては詩作に手を染めており、エリーザベトの伝記の著作者のほとんどが、その著述のなかでエリーザベトの詩作を、著述の内容に合わせてその都度かなり豊富に取り入れている。訳詩に自信がない筆者は一篇だけしか取り上げていないが、これからの課題と思っている。

その詩作の巧拙はともかくとしても、そのときそのときのエリーザベトの気持ちに詩に託されている意味で貴重である。さらに、エリーザベトの作詩のみを年代を追って辿ってみることにしても、エリーザベトの率直な考え方をすることもできるであろう。



エリーザベトは、八〇年代に入ってから詩作に打ち込んでいた。それらは、一八七二年にゾフィー大公妃が亡くなってからかなりの日時が経過しているためもあってか、失敗した自分の結婚や皇妃になりたくなかったなど実体験を歌い込んだものではなかった。

この頃になると、身体的にきつくなつたこともあったため、乗馬にも興味が薄れてきたことも手伝つて、趣味の主体を乗馬のような動的な趣味から、静的な趣味に方向転換したという捉え方もできよう。さらに、一八八六年にはいとこのルートヴィヒ二世が非業の最後を遂げると、内容的にはその多くは、人生の無意味さと孤独への憧憬など、人生の意味について述べたものがほとんどであった。

後年になって、エリーザベトは、秘密裏に手文庫の中に詩集を保管しており、それらを一度刊行したかった。そこで、イーダ・フェレンツイに頼んで、直ぐ下の弟カール・テオドルに届けるように手筈が整えられていた。

それらの詩を、二冊の小冊子にまとめて印刷、自分の死後の一九五〇年に公表すること、その印税は政治的囚人の子供へ配分するように指示までしている（注15）。それらの詩が公表に値するほどのものではないとの評価もあるが、約七〇年後の世界がどのような政治体制になっているかを想像しながら指示し残したところに、よりよい世界であるようにとの願望と憧憬が読み取れるような気がする。

エリーザベトの願望がどのように生かされたのかは、筆者にとつては不明であるが、現在、エリーザベトの詩による日記集も出版されている。筆者の手許にも、一八八五年から一八八八年にかけての三部作の詩集「北海の歌」「冬の歌」「第三の本」をまとめた「詩作日記」がある。（注16）そのボリュームも四百ページに近く、筆者も通読する機会をいまだ持っていないが、いずれは吟味しながら読んでみ

たいと思っている。

エリーザベトは一八八〇年代後半になると、次第にハイネに心酔するようになった。これには、エリーザベトの少女時代にハイネの詩を愛好した父マクシミリアン公爵の影響もあったと思われるが、この年代に入ると、ヨーロッパ大陸内では列強間での戦争がないことも手伝って、一方の現実的な世界に対して、政治も戦争も考慮することのない空想の世界に浸り熱中することは、エリーザベトにとっては必要なことだったのである。それはまた、孤独の世界に深入りすることでもあった。

しかし、そこにはひとつの大きな問題があった。それは第一にハイネが貧しい商人の生まれのユダヤ人であったからである。

ユダヤ人の歴史を振り返ってみると、ユダヤ人は、ユダヤ教の戒律を守るために強大な古代ローマ帝国に反抗し、一三二年から一三五年にかけて第二次ユダヤ戦争を起したが敗れた。その結果、ユダヤ人はイエルサレムの地への立ち入りを禁止され、国を追われて流民化せざるを得なくなっていた。

そのため、ユダヤ人はヨーロッパをはじめ世界各国に寄生することになったが、その国に同化せず結束するとともに、ユダヤ教を固守するため、各国ともその存在に脅威を感じるなど無視できなくなる状況に及んで、嫌悪乃至排斥される傾向にあった。

ハイネはドイツのデュッセルドルフ出身の詩人であるが、折しもナポレオンによる解放に目覚めて、ドイツの旧体制を批判するジャーナリストとしても活躍している。のちに特派員としてパリに赴いたあと、フランスに亡命し、同地で一八五六年に死去している。

ドイツに在住していた一八二〇年代には「ハルツ紀行」や「歌の本」などの散文や詩などを発表し名

声を高めたが、一八三〇年以降には、ドイツ革命の必然性を予言するような作品を発表するなど、もちろん故郷のドイツから好意的な評価はされていない。

エリーザベトはオーストリア皇妃として、そのような状況を十分理解していたはずであるが、それはそれ、エリーザベト一流の我儘から、ドイツとオーストリアとの国家関係等にも配慮することもなく、恣意的な行動をとっている。

それらのいくつかの例を挙げると、エリーザベトはホーフブルクやシェーンブルンはもちろんのこと、長期滞在するすべての城館にハイネの肖像画や彫像を設置したり、ヴェーンにハイネの甥が住んでいることを知ると招き寄せて、ハイネの遺産のうち何か所有しているかどうか聞いたばかり、ドイツのハンブルクにハイネの妹が住んでいるのを聞くに及び、この婦人を同地に訪ねている。

上述したように、ハイネが亡くなったのは一八五六年の五八歳のときであり、年齢がちょうど四〇歳も若い当時のエリーザベトは結婚二年目の一八歳で、次女のギーゼラを出産するところであったので、もしそのときにすでにハイネに心酔していたとしても、パリまで行って会うことにはならなかったであろう。

そのほかにも、エリーザベトはデュッセルドルフにハイネ像を建立する計画を立てた。この計画はドイツにおけるハイネの立場と、建立場所がオーストリアでなくドイツであることから止むなく中止になったが、エリーザベトは、称賛する立場や誹謗する立場のいずれにも与<sup>くみ</sup>せず、あくまでも個人の問題として、その立場を貫いた。

もうひとつは、後述するように、後年、ギリシアのコルフ島に別荘アクレイオンを建設したときに、

その公園の中庭に立てたペリスタイルと呼ばれる古代ギリシア・ローマ帝国時代の様式の円形の列柱廊の真中にハイネの胸像を設置した。これは自分の別荘の敷地内であるがため実現できたが、この別荘そのものをエリーザベトが手放したあと、一〇年後の一九〇八年にドイツの皇帝ヴィルヘルム二世が購入したため、プロイセンを嫌ったハイネの像は撤去され、エリーザベトの立像に取り替えられて現在に至っている。

そのほかではエリーザベトは、ことのほかギリシア彫刻の美しさに魅せられた。その結果として古代ギリシアの著作を読み、ヴィーンで勉強するギリシア人留学生何人かを講師として宮廷に招いて、古代ギリシア語と近代ギリシア語との双方を学び、さらにはギリシアを旅することに繋がっていった。すなわち古代ギリシアへの憧憬である。

エリーザベトは、古代ギリシアの詩人ホメロスの二大叙事詩「イリアス」と「オデュッセイア」も共に読んでいるが、イリアスよりもオデュッセイアの方が好きだったという。その理由はイリアスの戦争の場面に反感を覚えたからだというが、それでも、イリアスで登場するトロヤ戦争の英雄アキレスは好きな人物であり、後に詳述するコルフ島の別荘アケレイオンに、「アキレスの勝利」という絵画と「瀕死のアキレス」という石像を飾らせている。また、エリーザベト自身が後年、オデュッセイアのようにさすらいの旅に出ていることから、この二つの叙事詩による影響も非常に大きいものがある。

エリーザベトはまた、古代ギリシアの随一の女性詩人サップフォーを愛読したという。美しいものが好きなエリーザベトは、この詩人の愛の女神アフロディテへの祭祀や祈禱の詩に惹かれたのか、それとも

自分の身につまされた別離や惜別を表現した詩に共感を得たのだろうか、はたまた、優雅な乙女らの姿を賛美・憧憬した詩に若き日の自分を重ねたのだろうか。

エリーザベトが雇った何人ものヴァイン大学の留學生のなかで、すでに取り上げたコンスタンティン・クリストマノスについて、特に、もう少し触れなければならぬ。

彼はせむしの小柄な学生であったが、エリーザベトにギリシア語を教えるかたわら、エリーザベトと共に旅行もしている。もちろん、ともに旅行したギリシア人留學生は何人かいるが、そのなかでもコンスタンティン・クリストマノスは、エリーザベトとの交流について貴重な記録を残しており、エリーザベトの多くの伝記著書のなかでかなり引用されていることで、エリーザベトの日常を知るうえでは欠かすことのできない重要人物である。

彼は、一八九一年五月から一八九二年四月までエリーザベトに仕えたときの日記集を發行し、また、一八九三年から一八九四年の四カ月にエリーザベトの近くで仕えたときに纏めた日記集を、エリーザベトの死後の一八九九年に二版に分けて刊行している。(注17)

彼の日記集は、いささか誇大な記述とセンチメンタルで饒舌なところがあるといわれているが、晩年のエリーザベトの言動を窺い知ることができる貴重な資料である。必ずしも日付が入っているものばかりではなく、滞在したさまざまな場所ごとに纏めて詳述している。前者については著者も所持しているが(注17)まだ通読していない。そのため、本書において彼の日記集から引用した他伝記作家の叙述に負うところが大きい。後者は、クリストマノスが纏めた日記集を、宮廷内の執筆者が事前に買い取っているので、市販されていないという。(注17)

エリーザベトは、そのほかにも、「ハムレット」「リア王」「あらし」などのシェークスピアの作品を古代ギリシア語や近代ギリシア語に翻訳すらしている。

ここで筆者が疑問に思うのは、エリーザベトは何故ギリシア哲学に興味を示さなかったのか、ということである。強引なこじつけかもしれないが、古代ギリシアの悲劇や喜劇の文学はともかくとして、強いアキレスのみならずオデュッセイアのさすらいの境地に共感を覚え、晩年には自らもさすらいに心の安寧を求めることになるエリーザベトにとっては、「無知の知」を自覚させるソクラテスの哲学が必要だったのではないかと思われるからである。哲学を知ることによって、晩年のエリーザベトは、「死」を賛美するのではなく、「人生とは何か」「己とは何か」を肯定的に考えることによって、生きる活路を見いだして、少しでも希望に満ちた生涯を送ることができたのではないかと思う。

エリーザベトは、さらに、シェークスピアの「真夏の夜の夢」にも傾倒し、自らその中の主人公である妖精の女王ティタニアに、そしてフランツ・ヨーゼフを妖精の王オベロンに擬している。物語はティタニアとオベロンが仲違いしたあと、オベロンが眠っているティタニアに悪戯ごとをする。しかし、その企みが失敗に終わり、二人は仲直りをし、めでたしめでたしとなる。

エリーザベトを愛してやまないフランツ・ヨーゼフではあるが、エリーザベトのこのような遊び心は真面目なフランツ・ヨーゼフには通じず、エリーザベトにとって夫としてのフランツ・ヨーゼフは退屈そのものであったようである。政務に専念するほかは狩猟以外の趣味に興味を示さないフランツ・ヨーゼフは、教養や趣味をとおしてエリーザベトと心を通わせる手段を用意しない頑さから、エリーザベト

の心は、フランツ・ヨーゼフから離れて行くばかりであった。

音楽に関してエリーザベトは、ハンガリーひい鼻唄びいからジプシー音楽しか好きでなかったとも言われているが、その反対に、父マクシミリアン公爵の影響からツイターの演奏もできるし、ピアノも上手であったとも言われている。しかし、エリーザベトが音楽に深入りしたことは聞かえて来ない。

これら教養とも言えるエリーザベトの知識は、そのようなことに興味を抱かない宮内内の貴婦人たちの軽薄な教養との落差を生み、ここでもまた溝をより深める結果ともなった。

## 第6節 毀誉褒貶

今まで見てきたように、さらに以降の章でも述べるように、エリーザベトに対する毀誉褒貶は、同時にエリーザベトに直接接したり見聞したりした証人の記録等により、さまざまに述べられている。

そのうち、残念ながら「毀」と「貶」の記述が圧倒的に多い。

それをもとを正せば同根であるが、大きく分けて二つある。一つはエリーザベトが公人である皇妃として国儀の公務を遂行しなかったこと、もう一つは、私的にも、エリーザベトの行動がいわゆる社会における一員としての個人として常識的でなかったことが挙げられよう。しかし、後者については、時代やそれぞれ置かれた地位や立場によってもそれぞれの尺度が異なるので、あながちすべてが責められるべきものではない。

これらをもう少し分析すると、まず国儀についてはさらに三つに分類できると思う。一つは為政者と

しての宮廷儀礼であり、二つ目は対外国との外交儀礼であり、三つ目は支配者としての国民に対する期待に應えることであり信頼されることである。

しかし、筆者には、第一の宮廷儀礼は果してすべてを全うする必要があるものだけであるのかと疑問に思えるのである。それらの中には、多分に形式的なものであり、時代遅れになったものであり、ある意味ではそれらを打ち破るべきものであつて差し支えないのではないだろうか。それは国家体制に大穴をあけることにも繋がり、もちろん周囲に容認されるものではないし、ものすごい抵抗や反抗があるものの、必ずしも非難されるべきものではないものと思う。

次の外交儀礼の欠如は、国家相互間に軋轢を生じさせることに繋がり、相手国に非がない限り、決して好ましいことではない。もちろん、一般的には、国どうしお互いにさや当てもあり、意識的にそのような行動に出ることもあるが、相手が好意的に出た場合は失礼にならないよう配慮すべきであるが、エリーザベトにそのような言動を期待できなかったのは、明らかにエリーザベトに問題があると受け取られても仕方がないであろう。

第三の被支配者としての国民や第三国の国民に対する期待に添えないことは、やはりエリーザベトにとってマイナスに働いたことは間違いない。ただ、ハンガリー国民に対してのみは例外であつたわけではあるが。

以上については、公人の立場のエリーザベトが、旧弊に拘束されずに、自由でありたいという姿勢を崩さなかつたことによる反動としての毀であり貶である。

それに対して、国儀を離れた私的な個人としては、二つの面から考えられる。一つは出自の格の低さ



や特異な行動から、援軍なく集中砲火を浴びたこと、及び二つ目は妻として母としての役割を果たさせてもらえず、かつ、その幸せを与えてもらえなかったことに起因した、エリーザベトの行動に対する毀であり貶である。

前者は、格や格式を重んじる宮廷内では、王侯貴族のいずれも格や格式に支配され、不釣り合いとか格下とかの上下関係は、格好の攻撃材料となる。これは満足に公務を遂行せず、時間をもてあました腐り切った上流社会の通例である。田舎者・無教養ものと扱き下ろし、毎日無為に過ごしている上級貴族の方が、エリーザベトと比較にならないほど、どれほど無教養か。エリーザベトはそれらの貴族を相手にしないことは賢明であった。しかし、それに対する批判はなまなかのものではなかったであろう。

後者の妻及び母は、家庭に入った女性の本来的な役割であり幸せである。為政者としては、皇太子に對する帝王学のみならず、皇女に對しても母親以外の乳母に育てさせ、育児に関して姑が容喙してくることは、通例としてあり得ることかもしれないが、それらすべてを取り上げ、国儀のみに専念させるには、あまりにも人間としての皇妃を無視したものであり、皇妃が、乗馬に、美容に、旅行に、ハンガリーに逃避することは、ゾフィー大公妃が蒔いた種の当然の帰結である。

ここまで述べてしまうと、エリーザベトの人生の前半を総括したことになるが、後半は後段に譲るとして、毀誉褒貶の顕著な一部を述べて置く。

前述したように、一八七三年にヴィーンで万国博が開かれた。期間は五月一日から一月二日まで。もちろん、主権国の最高の主権者であるため、皇帝及び皇妃は各国から来る賓客に対応しなければなら

ない。各国の王侯貴族の中には、エリーザベトの美貌を伝え聞いて知っているので、一目でも会いたいと胸踊らせてやってきている。ところが、肝心のエリーザベトはガストグーベリン（ホステスという呼び方は日本ではあまりよい意味に受け取られていないので）としての役割を放棄して、仮病を使って雲隠れしてしまう。これがさまざまな方面から非難の対象となった。

これが、自己顕示欲の強い皇妃であったとしたらば、こぞとばかり積極的にさまざまな会合に姿を現し、婉然と愛嬌を振りまき、殿方を魅力の虜にしたであろうに、男性に興味が無いエリーザベトはそんなことには関係なかった。もつとも、開催期間も長いのですべての行事に対応していたならば、体力的だけでなく精神的にも参ってしまうことは想像に難くない。もちろん、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフにも休養を取ることを勧めている。

ただそのなかで、ペルシアのシャーは諦めずにエリーザベトに会い、その美しさを褒めたたえていることはすでに述べたとおりである。

この期間中には、一方ではコレラ騒ぎもあり、もう一方ではこの開催を当て込んで多くの市民が投資をしたはよかったが、株価暴落によって貧乏人が多く出たというおまけもついた。数年前のNHKテレビがドキュメンタリー番組で、この万博で日本も日本庭園を作庭したことを報じ、そのときに関わった大工が柱や板を鉋で削ったときに出る鉋屑が珍しがられたことに触れていた。

もう一つは、宮廷歌劇場のこけら落としの際の欠席がその象徴的な一例である。

今まで市の中心を囲んでいたリング状の城壁が一八五八年に取り壊され、翌年五月一日に幅員五六メートルのリング・シュトラッセ（環状道路）が開通した。現在では、この環状道路の両側にはホーフブ

ルク、国会議事堂、ブルク劇場、美術史博物館、自然史博物館、市庁舎、フォルクス庭園、王宮庭園、市立公園などが並んでいる。

そのなかで、現在ではヴィーン随一の繁華街であるケルントナー通りの入口となる所に建てられているのがヴィーン国立歌劇場である。この歌劇場は一八六一年に建設に向けて着工され、一八六九年五月二五日にオペラ「ドン・ジョバンニ」の上演により開場された。それに先立ち市では、ブダ滞在のエリーザベトの都合に合わせるため、エリーザベトの事前の応諾を得た上で、一旦決定したこけら落としの日を延期までしている。しかし、エリーザベトはヴィーンに戻ってきていたにも拘わらず、当日の開演寸前に体調不良を理由に欠席を決め込んでしまった。本当に体調不良かどうか分からないが、これではヴィーン市民には決して容認しがたかったことであろう。（注18）

この新劇場は一九一八年に改称される前はヴィーン宮廷劇場と呼ばれていた。余談になるが、リング建設を機に取り壊されるまでほぼその位置に建っていたケルントナーホール歌劇場（ケルントナー門歌劇場の意）は、一八二四年五月七日にベートーヴェンの第九交響曲が初演された劇場であった。

ハーマン女史は、エリーザベトの好ましくない評判をその著書の中で、数多くの証言その他の引用を交えて、様々な表現で列挙しており、また、女史自身もエリーザベトに対して厳しい批判をしている。曰く、性格として「人間嫌いである」「心の向くまま行動する」「交際嫌いである」「性的である」「落ち着きがない」など。また、病癖として「言動が異常である」「メランコリーである」「同行者に対する思いやりがない」「野次馬に後をつけられると極めて常軌を逸した反応を示す」など。さらに、

常識の欠如として、「平気で他人の家に上がり込む」「予告なしに他国宮廷に現れる」「旅先でも礼儀作法を嫌う」など。〈注19〉

また、マリー・フェシユテイチも、エリーザベトの欠点について、「気ままである」「安逸である」「自分の非に対して口実をつくる」などと、日誌のうえで認めてはいる（注20）が、またハーマン女史は、マリー・フェシユテイチのエリーザベトに対する評価は甘すぎるとも言い、マリー・フェシユテイチの記述にもあまり信用を置いていない。

新聞などでも批判は絶えないが、「強度の神経症」「精神病」「精神錯乱の初期段階」などの症状と決めつけたりしているが、「風変わりな女性」と取り上げた新聞の報道に対して、フランツ・ヨーゼフは、やんわりと個人や家庭の生活に干渉しないよう申し入れている。

たしかに、エリーザベトの行動の結果を見ると、女史の指摘どおりであろう。しかし、それらは、基本的にはエリーザベトが生まれ育った環境からくる本来的な性格によるものであるが、それに加えて、ゾフィー大公妃の指導、フランツ・ヨーゼフの性格、さらには陰湿な苛めも、そのような行動を増幅させたことが疑いないことも、付け加えておきたい。

さて、エリーザベトに対する批判の大合唱はそう受け止めるとして、側近中の側近であるマリー・フェシユテイチの観察にも耳を傾ける必要がある。マリー・フェシユテイチはエリーザベトを、「正しい本能と鋭い観察力と卓越した知的才能を持ち合わせている」（注21）と述べている。

マリー・フェシユテイチはエリーザベトの誤りについて決して盲目ではなかったし、エリーザベト

のある種の怠惰を受け入れることはしていない。あるときは手厳しく批判している。マリー・フェシュテイチのエリーザベトに対する観察については、後の章節でも触れてゆくことにする。

エリーザベト皇妃様は少しも平凡なお方ではありません。(中略) 皇妃さまは精神的な仕事、概してさまざまな制約に対してもものすごいような自由を欲求する癖があります。(一八七二年三月一七日の日記) (注22)

皇妃さまは愛すべきよいお方です。しかし、皇妃さまはすべてにおいて、ご自分を辛くしておられるのです。他人にとっては泉は清らかな喜びですが、皇妃さまにとっては泉は居心地が悪いのです。私の前では皇妃さまは妖精の国から来た子供のよう現れ出てくるのです。そこには優しい妖精たちがきて、皇妃さまのゆりかごに美しい贈り物を置いてゆくのです。

美しさ、魅力的なこと、優雅さ、気品あること、質素さ、気立てのよさ、気高さ、機知、茶目っ気、洞察力、思慮深さ。(以下略) (一八七九年九月一四日の日記) (注23)

最後に、エリーザベトの弱き立場の一般市民に対する無償の愛について一つだけ例を挙げておく。

一八七四年一月八日に、バイエルンのレオポルド皇子に嫁いだ次女のギーゼラに女の子が生まれ、エリーザベトは三六歳で祖母となった。エリーザベトはミュンヒェンに住んでいるギーゼラを産院に見舞ったが、たまたま同地ではコレラが流行っていた。

初孫が洗礼を受けたあと、エリーザベトは突然市内のコレラ病院を訪問すると言い出した。もちろん

伝染の危険性があるため医者を除き随行者なしの計画だった。それを聞いたマリー・フェシユテイチは、事が事だけに驚くと共にもちろん引き止めた。しかしそれは無駄だった。この諫言であつさり中止するエリーザベトではなかった。

これぞ中途半端でないエリーザベトの真骨頂と言うべきところであろう。マリー・フェシユテイチは随行を願ひ出た。それでもエリーザベトは病院の前でマリー・フェシユテイチを帰らせようとしたが、彼女も抵抗して残った。

エリーザベトは、精力的にベッドからベッドに患者を見舞った。なかでも瀕死の重症患者にやさしい言葉をかけ、ついにはその患者の最後を看取った。帰宅後、エリーザベトは着ていたものをすべて脱いで着替えた。そのあと、気分がすぐれない日があつたが、幸い身体上に何事も起こらなかつた。エリーザベトのこの勇氣ある行為は、全ミュンヒェン市民の語り種となつた。〈注24〉

ただし、これにも文句がつけられそうである。この一件はオーストリア皇妃としての公務ではない。また、エリーザベトが精神病院に見舞いに行くこともあり、これもエリーザベトが個人的に精神病患者に関心があるからだ、穿つた見方をされていることも見逃せない。

どこか、現代のヨーロッパと東洋の島国の皇太子妃と同様、その深層が理解されないまま、その基となる原因はさて置かれて、その言動が常に表層的に話題にされることは、立場上避けられない宿命であることには間違いない。

## 第6章 ゲデレー

### ——乗馬への情熱——

#### 第1節 エリーザベトと乗馬

エリーザベトの乗馬歴は古く、まだ年端も行かないころに、姉のヘレーネが乗馬の手ほどきを受けていた乗馬仲間に入つて、乗りはじめたのが初めである。エリーザベトは小さいころからお転婆で、しかも父親似であったことから、乗馬に恐怖心を持たず上達が早く、先んじて教わっていた姉を尻目に、姉を追い越してしまつた。

さらに、多趣味な父マクシミリアン公が、ミュンヒエンの城館の中にサーカスマがいの円形の馬場を造っていたことも手伝つてか、そのころから曲芸に近いような乗馬も試みていたのではないかとも思われる。もちろん、ポツセンホーフエンの城館の周辺も乗馬に相応しい環境であり、乗馬を倦むことを知らなかつたことは容易に想像できる。

エリーザベトが一八五四年にフランツ・ヨーゼフと結婚した際、結婚式を祝う行事の一つとして、プラーターでレンツ・サーカス団の公演が行われた。もちろん、乗馬に目のないエリーザベトは、宮廷儀

礼とは違うレンツ・サーカスの曲芸を満喫している。このときが、レンツ・サーカスとの初めての出会いだったのか、エリーザベトはその後も同サーカスと接触を続けるようになった。

プラーターは、ドナオ川とドナオ運河にはさまれた地域を囲った皇室の狩猟場であったものを、一七六六年に啓蒙君主ヨーゼフ二世がヴィーン市民に開放した公園である。筆者も二度ほど訪れたことがあるが、現在ではその一部に遊戯施設などがある遊園地となっており、第二次世界大戦終了直後の一九四九年の映画「第三の男」のロケ地となったことでも有名になった。

新婚早々からエリーザベトは、日中は市中のホーフブルク宮に通う政務で忙しいフランツ・ヨーゼフと別れて、郊外のラクセンブルク城館に一人残って、何もすることなく時間を潰す悶々たる日々を送っていたとき、乗馬を唯一の楽しみにしていた。

筆者が訪れた前世紀の八〇年代は、ラクセンブルク城は国際応用システム分析研究所の代表部として使用されており、城館の中には入れなかったが、宏大な庭園は解放されていた。

エリーザベトの新婚当時は、もちろん一般市民は庭園にすら入ることができなかったと思われるが、これまた、エステルハージー女官長を通じてゾフィー大公妃の知るところとなり、市民の見えるところに乗馬などとは皇妃としてはあるまじきことであり、乗馬よりも皇妃としての義務を遂行するために努力するようにと、馬に乗ることまでも制約される始末であった。それでもそのほかにすることもないため、エリーザベトの乗馬熱は止むところを知らなかった。

一八五七年のハンガリー初訪問の際には、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフと共にハンガリー軍の閲兵式に臨んだが、エリーザベトの馬捌きを見たハンガリー人は、その巧さに驚嘆の声を挙げる程だっ



た。しかし、それを見た同行の侍従長のクレンヴィユ伯爵は、それは皇妃の威厳にそぐわないと嘆いている。(注1)

一八七五年にエリーザベトは、一団を引き連れてヴィーンにやってきたレンツ・サーカス団と再び接触し、宮廷内に小さなサーカス用の馬場をつくり、同サーカス団の創設者であるヤーコブ・レンツ座長の娘エリーゼから曲芸を習っている。特に、馬の鞍の上で両膝を曲げて座するという芸もマスターしている(注2)。そのほかにも、並んだ二頭の馬のそれぞれに片足を乗せて走らせるという芸当もマスターしたようである。

この時にはすでに、エリーザベトの不倶戴天の敵とも言うべきゾフィー大公妃はすでに亡くなっているため、身分の低いとされるサーカス団の座員と接触することも、サーカス用の馬場を設置することも反対されることがなかった。三七歳のエリーザベトは、熱心に訓練に励むと同時に、娘のマリー・ヴァレリーを伴って連日のようにサーカスの公演も見に通っている。

筆者は、一九九八年のエリーザベト没後百年祭で、オーストリアでの展示会場のひとつであるマルヒフェルトにあるシュロスホーフ(城館)にも訪れた。マルヒフェルトはヴィーンの東に広がる地域で、北から南に流れるマルヒ川の向こうはスロヴァキアであり、ドナオ川との合流点近くには、スロヴァキアの首都ブラティスラヴァがある。このシュロスホーフ城にはそれ以前の一八九三年にもエリーザベトに関する展示会を見に訪れたことがあった。

そこで展示されてあったエリーザベトが愛用していた女性用の横乗りの鞍を見た。この鞍は、馬体と

同じ方向に向いた「エ」の字型になっている。すなわち、通常の鞍の上にT字型部分の突起が付いているのである。彼女の何枚もの乗馬姿の絵画や写真にも見られるように、それらの絵や写真はすべてスカート姿であり、スカートの裾の流れが同じ左方向なので、この「エ」字型のこの鞍に右足を絡めて、両足を左方向に並べて鞍の上に座る乗馬姿勢となっている。

馬の右側部分をこちら側に向けた乗馬姿はすべて鞍しか見えない。ところがそれが、馬ではないが、イーダ・フェレンツイとマリー・フェシュテイチが乗ったロバの右側から撮った写真でも、右足は見られず鞍だけしか見えない。ということは、当時の上流階級の女性はすべて同じような乗り方をしていたのか。しかし、その他の写真がないので、すべての女性がそうしていたのかまではわからない。

現在では、女性の騎手であっても乗馬ズボンを穿くことによって、馬の背の両側に足を下ろした乗り方をしているが、この左側に両足を揃える乗馬姿勢では、特にギャロップのときなどで、果たして身体のバランスを大きく崩さないものかと、気になったものである。あるいは、激しい動きのない場合には片側に揃え、狩猟や障害物を飛び越える激しい乗り方の場合には、乗馬ズボンを穿き跨がるように乗っていたのか、はたまた、絵画に描くときや制止の場合の写真撮影の場合にはすべて片側に揃えているようにと注文をつけたのか、筆者はそれ以上は調べていないので分からない。

以下に述べるように、エリーザベトは体調に支障を来してから乗馬を断念するまで、乗り続けたのである。それは、単に乗馬に対する横溢な情熱だけでなく、技術や体力においても、乗馬仲間の男性をすら凌駕するほどの実力を備えていたのである。

それも、皇妃という立場を利用して、皇室儀礼の合間というのではなく、それらを一切無視してま

で、オーストリア国内のみならず、草原の広がるハンガリーやフランス、特権階級のスポーツとして発達したイギリスの原野での狐狩り、さらには荒野の広がるアイルランドでの乗馬など、長期にしかも広範囲にわたっている。普通では考えられないほど乗馬の機会や範囲を広げていったのである。

## 第2節　ゲデレー

ゲデレーは、ハンガリーの首都ブダペストの東約三〇キロに位置する人口約三万の町である。この町は、エリーザベトの生涯にとって心休まる重要な町であった。

エリーザベトは、最初にハンガリーを訪問して以来、乗馬に適したゲデレーの地を気に入っていた。そこで、フランツ・ヨーゼフにこの地にある城館を買い取るとを所望したが、フランツ・ヨーゼフはこのときはまだ皇室の私有財産を相続していなかったため、財政難を理由に断られていた。

それが、一八六七年のアオスグライヒ（二重帝国）の成立により、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトがハンガリー王及び王妃となった戴冠記念として、ハンガリー政府が所有者から買い上げ、国王一家の夏の離宮として改装し、献上されたのである。

ハンガリーにおける王と王妃の公式の居城は首都ブダの王宮であったが、ハンガリー側から王及び王妃が私的に休息する場所が必要であるとの配慮もあり、また一方の王及び王妃にとっても、ゲデレーはブダからそれほど遠くない位置にあること、野趣に富むこの地はフランツ・ヨーゼフの狩猟やエリーザベトの乗馬に相応しいため、まさに恰好の場所であったのだ。

さらにこの離宮は、エリーザベトのみならず、フランツ・ヨーゼフにとつても、ヴィーン宮廷内の煩わしさから逃れる、絶好の避難場所ともなったのである。

と言うことは、同じ皇帝一家の保養地であるバート・イシユルはオーストリアの本国内にあり、しかも当然のことながらゾフィー大公妃が滞在することもあったので、エリーザベトにとっては必ずしも心休まる場所であるとは限らなかった。

それに対してゲデレーは、ゾフィー大公妃が大嫌いなハンガリー国内にあるため、ゾフィー大公妃がゲデレーを訪れることは絶対にあり得るはずはなかったし、ヴィーン宮廷内のエリーザベトに関する中傷や噂話も聞こえてくることもなかった。

したがって、エリーザベトにとつてのゲデレーは、ゾフィー大公妃を排除した、フランツ・ヨーゼフ及び子供たちだけに限られた、制約の一切ない家族の団欒が可能な、願ってもない場所であったというわけである。

しかも、一八四八年の革命時に、有能な政治家を死刑に処したゾフィー大公妃の所業に対する怨念が少しも消えていなかったハンガリー国民は、ゾフィー大公妃と対立しかつハンガリーに好意的であったエリーザベトに対して絶大な敬意を寄せていたので、エリーザベトにとっては、野次馬もない、バート・イシユル以上に逗留しやすい場所ともなっていたのは、当然のなりゆきであった。

ゲデレー城館の築城からフランツ・ヨーゼフ皇帝夫妻に贈与されるまでの沿革を、現地発行の「ゲデレー・王城」を参考に以下に紹介したい。(注3)

このゲデレーの城館は、一八世紀前半に最初の所有者である初代のアンタール・グラサルコヴィッチ伯爵が建築したもので、一七五一年にはマリヤ・テレジアも宿泊している。その後も、一八〇五年と一八〇九年に、ナポレオン戦争のためヴィーンから難を逃れた同じハプスブルク家のフェルディナント大公（当時。後のフェルディナント一世）も、ここゲデレーに避難している。

また、一八四九年春には、ハンガリー義勇軍がゲデレーの近くの戦闘において勝利したが、その間、城館はハンガリー軍司令部の宿泊施設となり、二階のプルンクザール（直訳すると華美の間）で、ハプスブルク王家の退位の草案を起草したという因縁もある。グラサルコヴィッチ家の第三代の時代には、第二代のときに負った債務のためこの伯爵家も没落し、その後この城館も様々な人手に渡ったあとに、ハンガリー政府が城館と領地を購入して王室領地に編入した。そのなかから、城館の建物とそれに付随する庭園をハプスブルク王家に寄贈したものである。

城館は、王と王妃のために改築及び増築された。この城における特徴的なことは、まず第一に、エリーザベトにとっては、この地がアオスグライヒに貢献したエリーザベトに対して、恩義を感じているハンガリー国民の住む土地であり、ヴィーンの宮廷におけるような堅苦しさや不愉快なことがないことである。また、ハンガリー人にとっても、中間の手續を経ずにフランス・ヨーゼフ及びエリーザベトに直接謁見できる気安さもあった。

次に、ゲデレーは、エリーザベトにとって大好きな乗馬を、伸び伸びと楽しむ機会と場所に恵まれたことであった。城館内には千五百平方メートルの大きさの室内の馬場があり、広い大理石造りの二四もの厩舎と、それに近いほどの広さの鞍置場も設備されていた。のちに、内外の著名な乗馬仲間が集うよ

うになると、小劇場などの部屋を潰してまで、厩舎付きの馬車用の倉庫等を増やさなければならぬほどであった。

エリーザベトは、ゲデレーにも乗馬用の円形劇場を設置させた。そこにあのレンツ・サーカスの経営者・監督・花形騎手を招いて、曲芸の特訓を受けている。もし同じことをヴィーンで行えば、ゾフィー大公妃からの咎めがあったであろうし、たとえなかったとしても、周囲のかまびすしい批判に曝され、訓練に熱中できなかつたかもしれない。

第三に、フランツ・ヨーゼフの家族が、ゆっくりと私的な生活を楽しむことができたことである。少なくとも、ハンガリー政府から贈与されてから一〇年の間は、家族は毎年、何週間もゲデレーで過ごすことができたのである。

多くの場合、春のほかに、秋から冬にかけて、大体はエリーザベトの誕生日であるクリスマスまで過ごすことも多かった。次の子供はハンガリーで産みたいと願っていたエリーザベトは、希望どおり一八六八年に三女のマリー・ヴァレリーをブダの王宮で産んだ。

ある伝記では、ゲデレーで生まれたとの記述もあるが、その他の幾つかの伝記ではブダで生まれたとしており、その方が正しいと思われる。マリー・ヴァレリーはここで成長し、次女のギーゼラと長男のルードルフもこの城館に自分の部屋をもっていたという。

初期の段階におけるフランツ・ヨーゼフに対するハンガリー国民の対応は、少しも好意的ではなかった。というのは、ハンガリーの有能な政治家の処刑を進言したのは侍従長のグリウンネ伯爵であり、そ

れを承認したのはゾフィー大公妃で、フランツ・ヨーゼフも皇帝として賛同したからであった。

特に、このゲデレーにおけるエリーザベトの乗馬仲間のひとり、エレメール・バッチャーニユは、処刑されたラヨシュ・バッチャーニユ首相の息子であり、フランツ・ヨーゼフに反感を抱き、最初のころは皇帝の同席を拒否したほどであった。

エリーザベトは、乗馬仲間であれば誰彼となく気軽にゲデレーの城館に招待し仲間入りさせており、乗馬技術の優れたエレメールもまた、革命時にはエリーザベトはまだハプスブルク王家の一員となっていなかったことのほか、エリーザベトのハンガリーに対する貢献に報いるため、もちろん、エリーザベトに好意的であった。

一八七〇年代後半となると、ゲデレーはエリーザベトのヴィーン宮廷からの逃避の場と化していった。エリーザベトが長く居住する場所としては、主としてヴィーンの王宮（ホーフブルク）、夏の離宮シェーンブルン宮殿、バート・イシュルのカイザーヴィラ、後述するヴィーン郊外のライントアールガルテンにあるヘルメスヴィラとコルフ島のアキレイオンがあるが、このゲデレーの城館がエリーザベトにとって最も落ちつける場所となったのではないだろうか。その結果、この城館が、エリーザベトとハンガリー国民を結び付ける最大の絆となったことはいままでもない。

フランツ・ヨーゼフも、のちの一八八〇年からは、従来慣例となつて黒と黄色の王家の旗を掲げないよう命じたという。その理由として、「客として滞在する場合にのみ掲揚する必要があるが、ここは家にいるのと同じだから」と発言しており、それをみても、エリーザベトのみならず、フランツ・ヨーゼフにとつても寛げる城館であったということが証明されるのである。

当時と現在とではハンガリーの国域が異なる（第一次世界大戦前までの方が広い）が、現在のハンガリーを東西に二分するドナオ川の西側は、中部ヨーロッパ最大のバラトン湖を中心に緩やかな大地が広がる起伏の少ない地域である。それに対して東側は、ハンガリー平原と呼ばれる低地であり、プスタと呼ばれる草原（乾燥した砂地の草地）が広がっている。

第二次世界大戦以降になると灌漑がすすみ、農耕や園芸が行われ、様相が変わってきたが、現在でもブガツ・プスタやホルトバージにその面影を残しており、ハンガリー観光の目玉のひとつにもなっている。筆者も三回にわたってハンガリーの東西北の各地をレンタカーで回ったが、北部の低山岳地帯を除いては、多少の傾斜はあるものの、ほとんど起伏のないその大平原を実感することができた。

そのうち一九八九年のときには、ある主要道路から少し引っ込んだところに、茅葺き屋根と白い壁の平屋と思われる大きな農家、その前庭にはやじろべえ式の長い横棒の井戸と水場に群がる一群の羊と思われる動物を眺める機会に恵まれた。それは、第二次世界大戦前のオーストリア映画「未完成交響楽」に出てきた、一九世紀的なハンガリーの農村の場面を彷彿とさせるものであった。

一九世紀後半のゲデレーの東は、乗馬にとっては十分すぎる大草原が広がっていたと思われ、当時のエリーザベトにとっては、遠出をする格好の地域であったことであろう。

エリーザベトの兄弟姉妹は、ヴィーンの宮廷にはほとんど顔を出したことはなかった。これはエリーザベトの意向であるようにも思われるが、ヴィーンの水とポツセンホーフエンの水とが合わないためでもあったのかもしれない。



しかし、ここゲデレーには気安く訪れていたようである。そのうち、あるとき、エリーザベトの長兄ルートヴィヒとその妻のヴァラーゼー男爵夫人が娘のマリーを連れてきたことがあった。

妻のヴァラーゼーはメンデルという元女優で、身分違いから釣り合い上男爵の位を授けられ、ヴァラーゼーを名乗っていたことから、その娘もマリー・ヴァラーゼーと呼ばれていた。二人の結婚は一八五九年であるので、その一年前に生まれているマリー・ヴァラーゼーは、ヴァラーゼー男爵夫人が連れてきた私生児だという。

マリー・ヴァラーゼーは五歳のときから乗馬を習い、乗馬が上手であったことも手伝ってか、九歳のときからエリーザベトに可愛がられていたという。そのため、エリーザベトは親戚の反対を押し切ってこの姪を自分で面倒をみることにし、兄弟姉妹その人ではないが、近親者として周囲に重用しようと思つた。

その扱いに対して、マリー・フェシュテイチは、エリーザベトと同様に最初は、はつらつとして楽しんでマリー・ヴァラーゼーを可愛くは思つた。しかし、日本流に言うならば、虫が知らせたとでも言うべきか、人の心を見抜くことに長けているマリー・フェシュテイチには、何となく引つかかるものがあり、共感を持つには至らなかつた。

しかしまさかその引つかかるものが、将来、重大なことにつながる現実になろうとは、マリー・フェシュテイチも思っていなかつたであろう。もちろん、マリー・ヴァラーゼーを信じて疑わなかつたエリーザベトにとっては、のちに、飼犬に手を咬まれるような恨みに繋がろうとは、夢にも思わなかつたことであろう。

## 第3節 イギリスでの乗馬

エリーザベトが、乗馬を目的として初めてイギリスに旅行したのは、一八七四年七月のことである。そのきっかけは、妹で元ナポリ王妃だったマリイが、この年にロスチャイルド家の援助によってイギリスに狩猟館を購入したことから、姉のエリーザベトを招待したからであった。

ユダヤ人ロスチャイルド家は、一八世紀の後半にドイツのフランクフルト・アム・マイン（マイン河畔にあることからそう呼称する。というのには、現在ではポーランドとの国境にある、オーデル河畔にあるフランクフルト・アン・デル・オーデル市と区別するため、フルネームで使われることがある）で両替商を始めたのをきっかけに、ナポレオン時代前後の激変の時代に、ドイツ、イギリス、フランス、オーストリア、イタリアの各国の支配体制に食い込みながら発展し、莫大な資産を築き上げた、当時のヨーロッパにおける一大金融業者である。

イギリスではロスチャイルド銀行を創設し、イギリスにおける対ナポレオン戦争の戦費を賄い、かつワテルローの戦捷せんしょうをイギリス政府にさきがけて入手し、莫大な利益を得たことは有名である。イタリア統一以前にはナポリ王国との関係もあったためか、イギリスに亡命したマリイに対して援助したものである。

同じ年の八月二日に、エリーザベトはイーダ・フェレンツイとマリイ・フェシユテイチをつれて、イギリス海峡を望むリゾートのワイト島を訪れている。ワイト島の北部にはイギリスのヴィクトリア女

王お気に入りノリス城があり、たまたま同女王が滞在していた。エリーザベトのワイト島滞在を知った女王は、早速、エリーザベトを表敬訪問してきた。当時五五歳でイギリス帝国最盛時の権勢を誇った元首自らの訪問である。それに対してエリーザベトは三六歳。初対面でこそトラブルはなかったが、後々ではエリーザベトはこの地においても、外交儀礼を無視してまでも従順ではなかった。

すらりとして若くて美しい皇妃に対して、ずんぐりとして小太りで精力的な女王は余りにも対照的であった。そればかりではなく、性格的にも合わなかったようであるが、流石に大英帝国を代表する女王だけあり、勝手なエリーザベトに対しても友好的で、不愉快なことは何も言わなかったと、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフに報告している。

さらに、この二、三日後にも、ヴィクトリア女王は、エリーザベトを昼食に招待した。エリーザベトは、行けばヴィクトリア女王は喜ぶには違いないと思いつつも、悪いこととは知りながら手紙で丁重に断っている。

それにも拘わらず、ヴィクトリア女王はその後もエリーザベトを宿泊先にわざわざ訪ね、口頭で招待を申し出ている。エリーザベトは、「退屈するので遠慮した」〔注4〕と母親に述懐しているように、結局はまたまた断っている。

それは、エリーザベトの頑固なまでの外交儀礼に対する徹底的な無視であり、それに対して、大国の元首としてのヴィクトリア女王は外交儀礼をあくまでも尊重し、非礼なまでのエリーザベトの断りに対して、おそらく、腹の中では煮えくり返っていたであろうが、いや、エリーザベトの非常識に呆れ、哀れに思ったかもしれない見下したかもしれないが、少なくとも表面上は寛大であったことにその度量

の大きさが読み取れるのである。

その一方で、エリーザベトは、狩猟に関しては、水を得た魚のごとく、のめり込んで行くのである。八月二六日からの二日間の狩猟は、彼女がオーストリアから連れてきた騎手たちが疲労困憊する中で、ただ一人、疲れの痕跡すら残さなかったし、再びワイト島に戻るのが残念に思うほどであった。

乗馬を趣味とする人々にとつては、自分の乗る馬が名馬であるかどうかは、重要な問題である。エリーザベトも、国内でもそうであったが、イギリスでの狩猟会に参加するようになってから、イギリスで目にした名馬が喉から手がでるほど欲しくなった。

皇帝とは言つても、当時のフランツ・ヨーゼフには私的には財政上ゆとりがなかった。というのも、皇室の私的財産はまだ、前帝であるフェルディナント一世のものであった。そのため、ゲデレー城館の入手のときも、エリーザベトの懇願にもかかわらず、購入することを断念させるような状況であった。

しかし、一八七五年六月にフェルディナント一世がプラハのフラチャニー城で八二歳で死去すると、その遺産をフランツ・ヨーゼフが相続することになった。そのため、エリーザベトが買いたいものがあれば、フランツ・ヨーゼフはエリーザベトの願いを拒むことがなくなるようになった。

第二回目のイギリスへの狩猟の旅は、一八七六年二月末から三月末にかけてであった。妹マリーの住まいの近くのイーストン・ネストンという豪壮な屋敷を借りている。エリーザベトは従者のほかにもちろん乗馬仲間も同行させている。一方のイギリス側では、エリーザベトの乗馬技術を心配して二人の優秀な騎手をエリーザベト付きとさせた。そのうちの一人が無愛想かつ傲岸不遜な三〇歳のミドルトン大

尉は、自分の流儀でエリーザベトを指導しようとしたが、エリーザベトが大胆かつ技術も優れており、さらに気品ある乗馬姿を見て取り、考えを改めている。

このときの狩猟では最大一〇〇名以上が参加しているが、完走したのは一〇騎たらずだったという。もちろんその一〇騎のなかにはエリーザベトが入っており、ここでもエリーザベトの乗馬技術の素晴らしさを証明していると言つてよい。

この間、エリーザベトはロンドンでヴィクトリア女王を訪問した。しかし、「女王様はお忙しいので謁見できません」と体よく断られている。これは、エリーザベトはすでに忘れてしまっているが、エリーザベトの前回のときの断りに対するヴィクトリア女王の仕返しであった。

エリーザベトは、さらに三月一二日にウインザーにヴィクトリア女王を訪問している。このときにもう一度、外交儀礼を無視した、エリーザベトの身勝手さが非難されるような典型的な出来事となった。ジョン・ウエルカムの著作を一部引用したハーマンの描写〈注5〉に沿って述べると、次のような状況である。

狩猟での乗馬を一日でも無駄にしたくないため、エリーザベトは不躰にも、原則として日曜日には訪問を受けないというイギリス皇室の習慣を無視して、ウインザー城にヴィクトリア女王を訪問することを一方的に決めてしまった。

それだけに止まらず、それを受けざるを得なかったヴィクトリア女王との約束の時間よりも早く着いてしまった。皇妃ひとりの単独の訪問ならともかく、随員も多くいることも手伝つて、ヴィクトリア女王はミサを中断してまで対応したが、さらに悪いことには、昼食を共にするという予定をエリーザベト

から一方的にキャンセルすると聞かされると、女王は会見を予定どおりの四五分で終わらせたという。流石のヴィクトリア女王も堪忍袋の緒が切れてしまったとしか言いようがない。

そのような無作法な訪問に対する代償として、エリーザベトは列車事故に見舞われる。それは、ウィンザーからロンドンへの帰途で、エリーザベトが乗車していた列車が、雪で立ち往生し、四時間も列車内に閉じ込められてしまったのである。

後続列車との追突事故に怯えながら、しかも昼食を摂らなかったことが災いとなり、一行は空腹を抱えたまま我慢しなければならなかった。駅長の配慮により辛うじて昼食の差し入れがあったが、それでも人数分には足りなかった。

この事件がイギリスの新聞に発表されると、昼食を摂る時間まで受け入れなかったと、逆にヴィクトリア女王が批判される始末であった。ヴィクトリア女王にとってはとんだ災難であったというべきであろう。

そのような状況にも拘わらず、ケロリとしているとでも言えようか、エリーザベトは翌日には評判の種馬飼育場を所有しているファーディナンド・ロスチャイルド男爵を訪問して、終日そこで過ごしている。これでは、女王への表敬訪問よりも自分の趣味のための訪問にウエイトを置いて、時間をかけていると非難されても仕方がないと言っほかない。

エリーザベトのこのような行動は、以前から指摘されていたことであるが、この例は、エリーザベトが、皇室典範や外交儀礼を疎ましく思う気持ち、相手に迷惑がかかってしまう程までに極端であったことに對する、配慮あるいは反省がいかに欠如していたかということを如実に示している。裏返して言

えば、エリーザベトは、あらゆる非難を覚悟で、それほどまでに自分の考えを徹底的に優先させているという典型例でもある。

イギリスへの第三回目の狩猟旅行は、一八七八年一月にノーザンプトンシャーのコッテスブルックにおいて、狐狩りと鹿狩りを中心に約六週間行われている。

前回と同様に今回もミドルトンが先導役となったが、同行するイギリスの騎手たちも身分が高く紳士的で、エリーザベトの乗馬技術についても人となり（乗馬に関しては性格の特異性は見られなかったようである）についても、称賛の的になっていた。

この時期、エリーザベトは、視察と勉強を兼ねてイギリス留学を目的とした息子のルードルフを同行させていた。エリーザベトは、皇太子であるルードルフに怪我でもされるとの考えから狩猟に参加させなかった。それには、ルードルフがエリーザベトのように乗馬が上手ではなかったことも手伝っている。むしろ、ルードルフは、今回のようなエリーザベトの狩猟に批判的でもあった。

ミドルトンは、エリーザベトが皇妃であるということで媚びへつらうような人間ではなかったけれども、エリーザベトの乗馬の技術と同時に皇妃としての凛々しさにも惹かれ、「エリーザベト皇妃は、どこからどこまでも皇妃そのもの」、また、「颯爽とした騎士であり、そのうえ馬上では、比類のない気品ある雰囲気を出していた」（注6）ことに気がついたと称賛を惜しまなかった。

一方のエリーザベトは、男性としてのミドルトンには興味はなく、あくまでも熟達した騎手としてのミドルトンを評価していた。その結果、乗馬では、あとの騎士がついて来られないこともあり、どうし

ても二人だけで同一行動をとることも出てくる。エリーザベトの妹マリーは、ミドルトンが自分の計画を思いどおりにさせてくれないことを快く思っていないかった。さらに、イギリスの社交界においても、エリーザベトのように好意的に受け入れられていないことにも不満を抱いていたのでろう。

そこで腹いせに、あるうことかロンドンで会ったルードルフに、「ミドルトンはエリーザベトにぞつこん惚れ込んでゐる」(注7)とありもしない陰口をたらし込んだ。ルードルフも一時はそれを信じ、ミドルトンを嫌ったが、それが事実でないことを知って氷解した。

陰口に慣れているエリーザベトは、通常ではあまり憤慨することはなかったが、マリーが息子にそのような陰口を吹き込んだことに怒りを表した。さらに尾ひれをつけられて、エリーザベトとルードルフが不仲であるとの陰口を耳にしてさらに憤った。

エリーザベトは、兄弟姉妹の中では最も接触の多かった間柄であった妹マリーの中傷からくる諍いさかいを機に、イギリスへの狩猟旅行に情熱を失った。元ナポリ王妃の地位を失ったマリーは、現役の皇妃であるエリーザベトに対する羨望意識からか、エリーザベトに対する中傷にまで発展し、それがエリーザベトの耳にまで入るようになったのである。そのためエリーザベトは、イギリスでの大会ではマリーを避けるようになった。

#### 第4節 アイルランドでの乗馬

エリーザベトは、妹マリーとの諍いさかいもあり、海外での狩猟の場をイギリスからアイルランドに移して



いる。そのほかにも、イギリスの場合では、滞在中にヴィクトリア女王の訪問を受けるか、自ら表敬訪問しなければならぬことが生じてくるが、アイルランドでの狩猟の場合では、帰国前に女王を訪問する程度の煩わしさを済むため、エリーザベトにとっては気が楽であるという事情もあった。

エリーザベトのその気持ちは、母ルドヴィカに宛てた一八八〇年二月二九日の手紙で「アイルランドの最大の利点は、王侯貴族による支配がされていないことである」(注8)の文面に如実に示されている。これは、自分が置かれた皇妃としての立場そのものを否定したいことの表れでもあり、さらにヴィクトリア女王訪問に関しては、「彼女には恐ろしいほど退屈した」(注9)とも述べている。

第一回目の狩猟は一八七九年二月から三月にかけてのものだった。

後述の外交問題とは別に、アイルランドの狩猟場そのものについては、イギリスのそれと比べて高い柵害壁ではなく土塁障害が中心であり、エリーザベト自身はイギリスにない素朴で荒れたアイルランドの狩猟場が気に入った。しかし、同行のマリー・フェシュテイチはそのためによりエリーザベトが怪我をし易くなるのではないかと心配している。

なお、一回目の一八七九年では、三月にハンガリーが洪水に見舞われ、多数の死者が出たことを聞くに及んで、急遽ハンガリーに戻っている。もしこれがオーストリアでの洪水であつたら、エリーザベトは果たしてヴィーンに帰つたであろうか。それはあり得なかつたと思われるのである。

エリーザベトは、その翌年に第二回目のアイルランド狩猟旅行を行っている。しかし、一八八一年に入るとイギリスとアイルランドとの政治情勢の悪化から、アイルランドではなく止むなくイギリスでの狩猟に変更している。そして、その翌年の一八八二年も。

そこで、少し協道にされるが、ここでイギリスとアイルランドとの関係を眺めてみよう。

イギリスとアイルランドとは、民族自体が異なっている。すなわち、アイルランド国民の祖先は、現在でもフランスとスペインの一部に残っている、ヨーロッパ大陸から移動してきたケルト人で、現在の住民はアイルランドの地の原住民と混血したゲール人である。

それに対して、イギリス人は、現在のデンマークのユラン半島から移住したアングル族と、ドイツ北西部から移住したサクソン族（ドイツ語ではザクセンと発音）を中心とした民族で、原住民であるブリトン族を駆逐するか支配して形成された国家である。

余談であるが、現在のアメリカ合衆国でWASP（ワस्प）と呼ばれる特権階層がいる。その支配的権力は後退しつつあるが、誇りと排他的な特権意識は健在である。WASPとは、ホワイト（白人）、アングロ&サクソン、プロテスタントの略で、イギリスからの植民者の後裔を意味する。

アイルランドは一二世紀にイギリスに侵略され、その後一進一退を繰り返したが、一六四九年にクロムウェル軍に完全に支配されて、イギリス国家の最初の植民地となった。一八〇一年にはイギリスに合併されている。

エリーザベトがイギリスに最初の狩猟旅行に出かける四年前の一八七〇年に、アイルランドは一応はイギリスから自治を獲得している。

しかし、エリーザベトが第一回のアイルランド旅行をした一八七九年とそれに続いた翌年にかけて、アイルランドは二年続けて作物の不作の年だった。

一八七九年一〇月に、北部の州で小作料が支払えない農民が、不在地主の土地管理人でイギリス人の

チャールズ・ボイコットに、小作料の引き下げを求めて土地連盟を結成し、支払いを拒否した。それに對してボイコットが、農民を追い出そうとしたが、農民はボイコットと一切の接触を断つたため、ボイコットは餓死状態にまで追い込まれた。ちなみに、ボイコット（同盟排斥）という用語はこのときの人名を語源としている。これに勢いづいた土地連盟は、小作料の引き下げや土地所有権の回復などを目指して、運動を展開していった。（注10）

それに対してイギリスは、一八八一年には土地の帰属問題に関して強行手段を講じたので、エリーザベトの旅行は、運悪くそのような時期にぶつかってしまったのである。

第一回目の一八七九年の狩猟時には、エリーザベトはヴィクトリア女王の招待を無視し手紙で取り消しをしており、そのことでアイルランドの新聞がエリーザベトの行為を自国に有利に利用した経緯もあった。そこで、オーストリアとイギリスの外交問題を懸念したフランツ・ヨーゼフの意向により、流石のエリーザベトもそれを無視することもできず、一八八〇年には予定より早めに切り上げた。さらに、一八八一年と翌一八八二年はやむなくアイルランドでの狩猟を見送り、イギリスでの狩猟に変更せざるを得なかったのであった。

イギリス狩猟旅行の場合もアイルランド狩猟旅行の場合も、エリーザベトはミドルトンを同行させている。これは、ミドルトンの馬術の腕前が優れているから常に主導役として同行を求めているからであって、男性としてのミドルトンに興味があるわけではない。

馬術の腕前から、先導役のミドルトンとそれについて行くエリーザベトは、どうしても狩猟場で二人きりになることも多く、妹マリーが妬みからルードルフに吹き込んだように、あらぬ噂が立ち上るのは

やむを得ないことではある。

その一例として、あるときエリーザベトがミドルトンにゲデレーの城館に招待したことがあった。同席したオーストリアやハンガリーの騎士達は、イギリスの狩猟場ではミドルトンも一緒の良き仲間ではあったはずであるが、この席でミドルトンにやっかみの態度を示したところ、それに反発したミドルトンは、ぶいと城館を出て行方不明となった。結局はブダペストの警察に保護されてことなきを得たという一幕であった。

それよりも、ミドルトンのフィアンセがエリーザベトに嫉妬したことの方が深刻であった。結局、ミドルトンは婚約者と一八八二年に結婚した。そのせいかどうか不明であるが、ミドルトンはこの年にはエリーザベトの狩猟旅行には不参加であった。

男女関係に関心のないエリーザベトであるから、そのため嫉妬に対して何も感じなかったとも言えるが、これをきっかけにして乗馬に嫌気が差し、エリーザベトは、イギリスとアイルランドの狩猟旅行に終止符を打つと同時に、イギリスに持っていた馬を売り払った。

その後、一八九二年四月九日の馬場で、ミドルトン騎乗の馬が突然倒れかかり、ミドルトンは前に投げ出されて首の骨を折り、即死した。ミドルトン夫人は、夫の生前にエリーザベトから夫に送られた手紙類を焼却したという。

## 第5節 乗馬との訣別

既に述べてきたように、エリーザベトは、ゲデレー、イギリス、アイルランドでの乗馬の外に、その他の国で乗馬をすることも多かった。乗馬の名手とはいえ、男性の騎手と同一行動をとり、かつ、むしろ居並ぶ男性の騎手を上回る大胆な腕前を見せていることもあつて、やはり、はらはらせるような事故もあつた。

そのひとつ。エリーザベトは、一八七五年に約六〇名の随員を従え、フランスのノルマンディー地方のサセットに城を借りて滞在している。表向きの名目は三女マリー・ヴァレリーの療養ということになっているが、本当の目的は海水浴と乗馬であつた。

フランスは、一八七一年の普仏戦争により、プロイセンに敗れたナポレオン三世が失脚して、第三共和制の真っ只中にあつた。フランツ・ヨーゼフが暗殺を恐れてエリーザベトに思い止まらせようとしたが、エリーザベトは意に介さず強行したのである。

エリーザベトは、午前中の海水浴では、野次馬を排除するため、海水浴用の小室から海の中まで長い帆布で遮蔽して泳ぎ、午後は馬で近隣の城廻りや貴族の領地廻りをしているが、その後の馬場で、あることか、落馬事故を起して周囲をはらはらさせた。

エリーザベトは、この旅行で、前年のイギリスでの乗馬で知り合ったイギリス人乗馬教師アレンを招聘していた。アレンは大胆でエネルギーな、どちらかというとな無鉄砲な騎手で、エリーザベトの前

でいいところを見せようとして、荒れ狂う満潮の波打ち際で荒技に挑んだ。しかし、ものの見事に失敗し、熟練の泳ぎ手に助けられて何とか事なきを得た。

新馬が到着したときに、アレンは調教でその馬が疲れるほど乗り回した。それが原因してか、九月一日にエリーザベトがその馬に乗り、他の跳躍に慣れさせたあと、小さな低い生け垣を飛び越えようとしたとき、馬が度が過ぎるほどの大きな跳躍をして躓き、跪いてしまい、その煽りを受けてエリーザベトは地面に投げつけられてしまった。

エリーザベトは気を失って芝生に倒れ、ベンチに運ばれたが動かなかった。この事故の知らせを聞いた医師のヴィダーホーファー博士は、海水浴場から急いで駆けつけた。結果は脳震盪で一時は意識不明だった。僅かに意識が回復したとき、エリーザベトはそれまで馬に乗っていたこと、落馬したこと、ノルマンディーにいることすら記憶になかった。

その夜エリーザベトは、激しい頭痛、冷たい体温、吐き気などに悩まされた。ヴィダーホーファーが来て、もし二四時間以内に頭が快方に向かわなかったら、髪は切らなければならぬと告げた。それを聞いたマリー・フェシュテイチは、エリーザベトの美しさの象徴でもある髪を切ることなど考えられず、ひどく心配した。また、イーダ・フェレンツィはエリーザベトの病床から離れなかった。しかし、幸いなことに髪を切ることを免れることができた。

もうひとつ。エリーザベトを描いた絵画集（一部写真も含まれている）での説明であるが、一八八三年九月に、現在のオーストリアのシュタイエルマルク州北部の宗教都市マリアツェルの南東にあるミュ

ルツ渓谷のミュルツステッグでの事故である。(注11)

エリーザベトの乗った馬が、この渓谷の「女人の死」と呼ばれる難所(?)の近くにある横幅が一メートル五〇センチ弱で、針金のような簡易な手摺りのある吊り橋で、腐ったか割れたかした横板の一枚の破れ穴に片足がはまり込み、前のめりとなったのだ。重心を失い、谷底に落ちる危険にさらされたエリーザベトを、居合わせた獵師が助けてくれ何とか事なきを得ることができた。

イラストレーションを見る限りでは、黒部峡谷に見られるような絶壁(しかし谷底はそれほど深く描かれていない)に張り出した木道は、歩行用の道なのか騎行も可能な道なのかわからないが、「女人の死」との名がついていることから、ある程度の難所であるように思われる。そのほかに、エリーザベトの後に歩いて付いている山案内人らしき男性と、後続の従者らしき馬上の男性も描かれている。

一方で、画家が想像を働かせて、多少オーバー気味に描いているのかもしれない。エリーザベトの手綱裁きとバランスのよさで、結果としては、墜落乃至怪我をするほどの危険まで到らなかったためか、各伝記作家ともサセットのときには取り上げていない。

しかし、ここでもエリーザベトは、両足を馬の背の左側に寄せて乗っており、その他、イギリスでの狩猟における藪越えでも、同じように描かれている。筆者は乗馬は嗜まないが、左右のバランスがよほどよくとれないと、このような乗馬はできないのではないだろうか。

三つ目は、一八七〇年代にゲデレー近くで起きた、エリーザベトの片足が馬のあぶみに絡まったまま引きずられたという事故である。ハンガリーの土着貴族で大地主のヤーノシユ・デ・サークが、女性の

悲鳴を聞いたので馬車から飛び下りて駆けつ、馬を取り押さえてあぶみからその女騎手の足を外し、怪我をした女騎手を屋敷の世話係に看護させたという。その女性がエリーザベトであるというのである。

〈注12〉

程なく、その事故を聞いてゲデレーから侍従武官がやってきて、エリーザベトを引き取り、この土着貴族はフランツ・ヨーゼフから感謝の印としてひとつがいの黒馬を贈られたが、この事故は絶対に口外しないでくれと条件を付けられたという。しかし、デ・サーク氏は死の直前にその約束を破り、孫娘に語ったというのである。原出典はわからないが、その孫娘が誰かに口述したものと思われるので、真相は不明である。

アイルランドでの乗馬が、政治的外交的問題から一八八一年以降中止を余儀なくされたため、その後の二年間はイギリスをその代替地として継続したものの、エリーザベトの乗馬に対する意欲は徐々に薄れていった。

エリーザベトは一八八二年には四五歳になっていたが、通常の乗馬を続けるにはまだまだ支障を来す年齢ではなかった。体力的には、一方ではたしかに体力を維持するために相変わらず熱心に体操は継続していたし、フェンシングにも精を出していた。

乗馬を止める理由としては次の二つのことが考えられる。

一つは、アイルランドでの乗馬を経験したことにより、アイルランドの自然に比べるとイングランドでの狩猟に物足りなさを感じたことと、エリーザベトの乗馬技術を知り尽くしたミドルトンが参加しな



くなつたこともある。前者については、イギリスでの乗馬を再開したときにも、エリーザベトはできれば越境してでもアイルランドで狩猟したかつた気持ちからも窺えよう。しかし、流石のエリーザベトもイギリスとの関係をぶち壊してまでもアイルランドに行くことは躊躇われたのだ。それが、乗馬に対する意欲が薄れてきた理由の第一である。

もう一つは精神的肉体的な問題からくる理由である。たしかに体力維持のために努力はしていたが、狩猟のように体力を消耗する乗馬は、年齢的に難しくなってきたことがいえよう。エリーザベトは狩猟の最初から疲れを感じるようになっただけでなく、狩猟の楽しさも失われてくるようになった。

それは、以前から指摘されていたにもかかわらず、一向に改善しようとしないう拒食症や偏食からくる身体的な不調、過労のための睡眠不足や精神の不安定さからくる精神的な消耗の蓄積が、年齢的な衰えとも合わせて、乗馬の継続を許さない状況に至つたのである。

乗馬ができなくなつてから、エリーザベトはフェンシングにもかなりの時間を割くようになった。しかし、一八九〇年代の五〇歳台に入ると、エリーザベトは痛風や座骨神経痛がさらにひどくなり、乗馬のみならずフェンシングなども断念しなければならなくなつていった。

残された行動は、孤独と自然を求める歩行に転ずるようになるのである。しかも、その歩行も、すでに一八八〇年代からピクニックなどにも出かけ経験しているが、父マクシミリアン公爵から直伝の歩行法により、強行軍と呼ばれるような歩行に変化してゆくのである。

一八八〇年代末ごろになると、エリーザベトがゲデレーに滞在しても馬に乗ることはなくなり、フラント・ヨーゼフとともに滞在するときには、夫婦でゆっくりと話し合うゆとりができるようになった。

このようにしてエリーザベトの乗馬生活に終止符が打たれたが、二〇世紀でも二一世紀でもよいが、もしエリーザベトが絶好調の時期にオリンピックに出場したらどうであつたかと、筆者は想像を逞しくしてみた。

しかもそれが、一九三二年の第一〇回ロサンゼルス大会の最終日、すなわち閉会式の直前のメインスタジアムで、日本の西竹一中尉が満場の観客の前で、大賞典障害飛越競技でその腕前を披露し、堂々の優勝を果たしたときのように、イギリスのミドルトンと覇を競い、オーストリア代表として見事に優勝したと仮定しよう。

身長一七二センチ、体重が五〇キロ弱、ウエストが五一センチで、一見華奢とも見えるエリーザベトが、オーストリア馬術連盟公認の乗馬服ではなく、あの特殊な鞍を付けて、絵画で見るような黒く長い衣装を身に纏い、左側に両足を揃え、高貴で優雅で凛々しくそして颯爽とした馬上姿を見た観客は、えもいわれぬ感銘を受けることであろう。

おそらく観客は、凛々しくも美しいその姿が臉に焼きつき、その情景を一生忘れないであろう。また一方のエリーザベトは、何万もの観客に戸惑いながらも、最高の馬術を披露するためにその場から逃れられず、優勝者の榮譽を讃えるために演奏されるあのオーストリア国歌（ハイドンが作曲した「皇帝賛歌」。第2章第6節参照）を、どのような気持ちで聴いたことになるであろう。

ロサンゼルス大会の西中尉は、その後の太平洋戦争末期の硫黄島の戦場で、オリンピック大会の優勝者として何とか助けたいアメリカ軍が、投降を呼びかけたにも拘わらず、他の兵士とともに玉砕の道を

選んだことが、惜しまれている。

それと同様に、その後のエリーザベトが、イタリアの無政府主義者に暗殺されたことを知った全世界の国民は、どんなに嘆き悲しむことであろうかと。

## 第6節 その後のゲデレー

この節も、第2節で取り上げた小冊子「ゲデレー・王城」(注13)を参考にしながら、この城館の現在までを辿ってみよう。

第10章の内容に先駆けての記述になってしまうが、一八九八年にエリーザベトが暗殺されたあと、その後にもフランツ・ヨーゼフがこの地で大がかりな狩猟を行い、城館に何日も逗留することはあったものの、ゲデレーの寂れを止めることはできなかった。

第一次世界大戦さなかの一九一六年にフランツ・ヨーゼフが死去したあと、その王座を継承したカール一世もゲデレーを訪問しているが、一九一八年の敗戦によりハプスブルク王家が崩壊したあとは、完全にハンガリーの地方の町に戻ってしまった。

しかし、ゲデレーにとっては、王家の領地であったことから利することもあった。城館の北側の道路沿いに鉄道が敷かれており、領地に作られた模範農場は、農業の進展に大いに貢献した。

一九一八年に終了した第一次世界大戦後の城館と領地は、ハンガリーの財務省の管理下に置かれ、この建物を保持すると同時に、博物館にする計画が予定されていた。しかし、一九一九年にこの国でも共

産党が政権を掌握すると、この計画は挫折した。

その後、この建物の居住者は頻繁に入れ代わった。まず初めに共産主義評議会が使用したすぐあと、一九二〇年六月に戦勝国のルーマニアとトリアノン条約が締結されるとルーマニア軍が進駐、さらに、一九三九年に勃発した第二次世界大戦中にはドイツ軍の施設として利用されている。

第二次世界大戦後にはソ連軍の宿泊所その他の目的に使用され、その間その都度、略奪と破壊が行われた。そればかりではなく、広大な公園敷地は、老人ホーム、住宅団地、企業体の建物群の利用するところとなつて行つた。

一九八〇年代初め、城館の保存と記念館としての活用についての計画が再燃した。しかし、財政の逼迫と公共的機関の移転の問題からこれまた素直に進行しなかつた。八〇年代後半、東ヨーロッパの共産主義体制の崩壊が進行する中で、一九八九年になつてやっと城館の帰趨が定まつた。

筆者がハンガリーへ単独でドライブ旅行をした際、ブダペストからゲデレー入りしたのは、同じ一九八九年九月二十七日であつた。それに先立つ八月一九日には、ハンガリー政府の手引きにより、約一〇〇人の東ドイツ市民が、ハンガリーとオーストリアの国境で行われた平和集会を利用して、ハンガリー西部のショプロンから国境を越えて、オーストリア經由で西ドイツに集団脱出した。筆者がゲデレーを訪問したのはその直後であり、ハンガリーが共産主義を放棄したのも、そのあとの一〇月七日になつてからであつた。

筆者は、事前に東京にあるハンガリー政府観光局から、ハンガリーの観光資料を取り寄せたものの、

何故東京でゲデレーの情報を蒐集しなかったのか、迂闊にも照会すらもなかったのか今となっては思  
い出せないが、一九七八年にヨーロッパ添乗の際、ヴィーンで入手したドイツ語版の小冊子のガイドブ  
ック（注14）（もちろんまだ日本のガイドブックにゲデレーが掲載されるような時代ではなかった）に  
は、下記のように簡単に紹介されているので、容易に訪れることができるとの判断からだったと思う。

ブダペストからゲデレー（二九 km）に車を駆ると、グラサルコヴィツチ伯爵のバロックスタイ  
ルの城館（一七四四年〜一七五〇年）が建っている。一八六七年〜一九一八年、王の夏の居城と  
して使用された。

さらに前泊したブダペストで、遊覧船による夜のドナオ川観光で知り合ったベルリンから来た観光客  
から、本来の城館の東側にある農業大学が城館のそれであり、ある教授を訪ねなさいと言われたことも  
手伝って、ゲデレー城館がそのまま残されていることを疑わなかった。

結果として、その教授は運悪く不在であり、対応した事務員に大学内を案内してもらったが、建物の  
造りや大きさから違和感を感じたものの、そのときはこれが城館であると自らを納得させ、写真まで撮  
ってきた。完全に別の建物であると気がついたのは、かなりずつとあとのことであった。

取材を兼ねた旅行とはいえ、あまりにもその不十分さに自ら呆れながら言い訳がましく言うのと、この  
時点では、まだ城館として復旧していなかったため、観光の施設として紹介する段階に至っていなかつ  
たので、東京のハンガリー観光局でも、現地ゲデレーの町の人々も、おそらく城館の過去を知らなかつ

たのかもしれない。もし教授に会えたら、曾ての城館を尋ね当てたかと思うのであるが。

筆者としても、城館の正式名も知らずまたハンガリー語も覚束ず、先を急ぐ旅でもあり、同市の地図も入手できなかったこともあって、市の観光案内所も当時はなかったような気がしたし、当然の帰結であったと思う。現地で執拗に調べる意図に欠けていたことを告白しなければならぬ。

一九九四年には城館は完全に空き家となった。同年に政府は、城館の復旧・復権とその利用について公共奉仕の組織の設立の提唱を行い、記念事業グループがその運営をすることになった。

一九九八年、エリーザベトの没後百年祭がここゲデレーでも行われた。筆者は、今回は日本出発前に事前に詳しく調べ、もちろんゲデレーに二泊も宿泊（前回は短時間の滞在のみで宿泊せず）する予定で再訪した。

一九九八年には城館も博物館として装いも新たになっており、東京のハンガリー政府観光局で上述の城館の小冊子の英語版のコピー（現地で上述のドイツ語版も購入）その他の資料も入手できたし、東京でハンガリー全土の詳細な地図も購入できた。

現地では、同市の地図も入手できたし、市の観光所もあったし、この城館に関する幾つかの資料も購入できたので、取材に当たってなんとか万全を期すことができた。

記念展示会は六月五日から行われており、記念フェスティバルが八月二日から九月一三日まで行われていた。九月の行事は一般観光向きではなかったし、オーストリアやスイスでの行事にも参加するため、そんなに長く滞在するゆとりもなかった。

主力は八月二日と二三日の仮装美人コンテスト、乗馬ショーなどであったが、仮装美人コンテストとダンスについては、スポンサーが付かなかつたため中止となったことは、東京を出る前に現地に直接確認して分かつていた。

博物館となり展示場ともなつた城館の主要部分の内部は、広間、居間、浴室、劇場、礼拝堂、温室、乗馬場などが復元され、主要な部屋には、バロック時代の室内装飾や調度品を配置し、フランツ・ヨーゼフ王、エリーザベト王妃、マリア・テレジア女帝の部屋を再現している。

しかし、建物全体はまだ完全に修復されていなかった。たしかに、正面玄関及び主要の部屋が並ぶ本館の中心部分は立派に修復されているが、ウイング形の後方部分は、塗り壁がはがれたままで、煉瓦が剥き出しになっていた。百年祭に間に合わせるための精一杯の復元であつたのであろう。

百年祭の祝典として、オープンの時間帯としては正面玄関前で、その後は中庭でイタリアから来た吹奏楽団が演奏していた。また、城館の後方に広がる公園となつている草地では、近辺から来たのであるうか、いくつもの乗馬グループが、少し暑く感じる日差しのもと、乗馬による競技や演技を披露していた。

博物館としてのこの城館は、建物の各部分を徐々に公に開放することを意図している。その一環として、まだ計画の段階であるが、将来は城館の一部をホテルにして、観光客に宿泊してもらうことも考えているようであつた。

この城館の近くには、エリーザベトを讃える公園があり、そのほぼ中心にエリーザベトの銅像を乗せた、高い円柱（記念塔）が聳えている。その高さで西日を背負つて影となつてのことから、エリーザ

ベトの顔の部分はよく写真に撮ることができなかった。百年祭の行事期間中ではあったが、この日の公園を訪れる外国人は筆者ひとりであった。

また、城館を訪れる外国人観光客も見かけたが、日本人はおろか東洋人とおぼしき観光客は、この日は筆者以外にいなかったように思う。

行事日程の関係でゲデレーのあとに訪問したバート・イシュルで、会場の一つとなっているトリンクハレ（鉱泉飲用館）で、観光客をゲデレーに誘致宣伝するために来ていたゲデレーの観光関係者に会った。館内でゲデレーのメンバー全員の写真を撮ってあげて、帰国後にプリントして送ったところ、礼状とともにセビア色の一八八〇年から一九二〇年までの城館と公園のエリーザベトの銅像とパビリオンの絵はがきが送られてきた。

エリーザベトが亡くなったあとの写真であるが、遙か一〇〇年ほど前のゲデレーの佇まいにちよっぴり浸ることが出来た。

二〇〇九年に改訂された日本の某社のガイドブックには、ブダペストに次いでゲデレーの城館が観光箇所として掲載されている。それによると、ホテルには変身しておらず、各部屋とも往時の姿に復元され、エリーザベト及びフランツ・ヨーゼフにゆかりの絵画・家具・食器などが陳列されているようである。また、九月には某テレビでもある番組でこの城館が紹介されていた。

この一〇年で様変わりとなったものである。



## 第7章 フユツセン

——親族との関わり合い——

### 第1節 又従弟ルートヴィヒ二世

一八六四年三月一〇日、バイエルン国王マクシミリアン二世が五二歳で亡くなると、長男で一八歳のルートヴィヒ二世が王位を継いだ。風雲急を告げる一九世紀半ば、当時のドイツ諸邦国のなかで、オーストリア、プロイセンに次ぐ第三の大国の為政者であるにもかかわらず、ルートヴィヒ二世は政治や軍事には関わりたくない性格の持ち主であり、国王としては相応しくない国王であつた。

バイエルン王国は、一八六六年の普墺戦争ではオーストリア側について敗れ、そのあとの一八七〇年の普仏戦争ではプロイセン側について勝利を味わつたが、国王としてのルートヴィヒ二世は、プロイセンの老獪な宰相ビスマルクの外交政策に反発すると同時に、内外政治に対する不満から次第に芸術に逃避していった。

個人としてのルートヴィヒ二世は、背が高く乗馬が好きなまじめな美男子であつたが、人前では臆病で内気なところがあり、孤独を愛するロマンチックな青年であつた。その反面、束縛されることが嫌いな自由人でありたいと願い、我儘で傍若無人にして常軌を逸した振る舞いに走る性格でもあつた。

その一つが城づくりである。先ず、父マクシミリアン二世が再建したホーエンシュヴァンガオ城の近くに、一八六九年にノイシュヴァンシュタイン城（一八六年）、続いて一八七四年にリンデルホルフ城（一七八年）、さらに一八七八年にはヘレンキームゼー城（一八六年）の三城を建設している。この三つの城にも、次に述べるヴァグナーの音楽のモチーフを取り入れているが、詳細は第6節で述べることにする。

もう一つ。父マクシミリアン二世に似て音楽や文学などの芸術に興味を持ち、多くの古典文学にも親しみ、シラーの劇作品の大半をそらんじるほどの教養もあった。

また、音楽家や文学者を重用したが、歳を重ねるに当たって前述のような性癖が顕著となり、作曲家のリヒアルト・ヴァグナーに傾倒し、そのスポンサーとなってヴァグナーの作曲活動に理解を示すと同時に、一八七六年にはバイロイトにヴァグナー祝祭劇場を建設している。この劇場は、現在では、毎年夏にヴァグナーの楽劇のみを専門に演奏するバイロイト音楽祭として国際的に有名であり、ドイツの観光産業に寄与している。

しかし、城と劇場の建設は、ルートヴィヒ二世のその他の浪費とともに、当時のバイエルン王国の経済を破綻に追い込んでいった。

ルートヴィヒ二世は、四〇歳で謎の死を遂げるまで、生涯結婚はしなかった。唯一、エリーザベトの妹のゾフィーと婚約したが、夢想の独身生活が損なわれるとして一方的に破談にしている。このときはエリーザベトも怒りを隠さなかったが、母のルドヴィカはその屈辱から、ルートヴィヒ二世の死まで、ルートヴィヒ二世を許すことはしなかった。しかし、婚約解消は、その後のルートヴィヒ二世の行動を

考えると、結果的にゾフィーにとつては不幸だったとは言いがたい。

即位後のルートヴィヒ二世は、エリーザベトが毎年夏に保養のため過ごすバート・キッシンゲンに向かい、エリーザベトを訪問している。それはオーストリア皇妃に対する形式的な表敬訪問ではなく、性格が似ている魅せられた美しい又従姉として、会うことが目的であった。これが、ルートヴィヒ二世がエリーザベトを追いかける始まりとなった。

と同時に、即位後の一年足らずのこのころから既に、ルートヴィヒ二世の国王にあるまじき憂慮すべき奇行が、人々に取り沙汰されるようになる。

今回、この二人だけをとってみても、ルートヴィヒ二世のヴァグナー音楽への傾倒とハイネに心酔するエリーザベトの詩作は、同じ空想的なロマンチックな世界には違いないが、その内容が異なるということが出来る。それは、エリーザベトのそれは、究極的には絶望的な境地から安心立命の上での奇行であるのに対して、ルートヴィヒ二世のそれは、夢の世界への逃避そのものであるからである。

その違いは別として、よく、ルートヴィヒ二世は、エリーザベトと性格が似ていると言われる。二人のそれぞれの奇癖と奇行からそのような指摘がしばしばなされている。その共通点のルーツとして取り上げられるのが、バイエルン王国の支配者であるヴィッテルスバッハ家における近親結婚による弊害が、この二人だけでなくそれぞれの家族にも見られるところからきている。

ここではエリーザベトとルートヴィヒ二世の血縁関係をもう一度詳しく見てみよう。

ルートヴィヒ二世は、曾祖父であるバイエルン王国のマクシミリアン一世（一七九九年以来選挙侯、一八〇六年から初代国王）の初婚の妻であったヘッセン・ダルムシュタット公国出身のマリー・ヴィル

ヘルミーネ・アオグステの曾孫である。それに対して、エリーザベトは、母方の祖母がマクシミリアン一世の再婚の妻であったバーデン大公領出身のカロリーネ公女の孫という関係にある。すなわち、一八四五年生まれのルートヴィヒ二世は、エリーザベトよりも八歳年下の又従弟に当たる。

たしかに、宮廷の束縛を嫌い、教会に対しても敬虔ではなく、風変わりなところも似ているし、好き嫌いははっきりしているところも似ている。エリーザベトが夫以外の男性に対して興味もなく、浮いた話がないこと（これまた興味本位的にはいくつかの噂が取り沙汰されていることはたしかであるが）以上に、ルートヴィヒ二世は女性に対して性的な反応が見られないものの、唯一、エリーザベトに対してのみは、敬慕を超えた感情が芽生えていたことは疑いない。

それはさておき、ルートヴィヒ二世のエリーザベトに対する執心も、異常なものがあつた。空想の世界に入り込んだルートヴィヒ二世は、人嫌いや宮廷嫌いから、似たような立場のエリーザベトに会うことによって、心が安らいだことはたしかである。エリーザベトもある程度は、ルートヴィヒ二世の心情に理解を示しながら、その執拗さに手を焼いたこともたしかである。

ルートヴィヒ二世は、様々な機会を捉えてエリーザベトに接近している。シュタルンベルク湖の東岸にあるベルク城から、西岸にあるポッセンホーフエンまで、月の夜に舟を漕がせてエリーザベトに会いに来てエリーザベトを呆れさせたり、エリーザベトと会うときには誰も同席させないという我儘を押し通そうとしたりしている。

一方のエリーザベトも、ルートヴィヒ二世のその厚かましさには辟易しながらも、ルートヴィヒ二世のよき理解者であり、周囲から疎んじられていたルートヴィヒ二世に同情的ですらあつた。そのエリー

ザベトの言動に対して、娘のマリー・ヴァレリーは、エリーザベトがルートヴィヒ二世に対する同情で自らを見失っているとすら批判している。

似た者どうしということからも、お互いに親しいことはその行動を見ても間違いないところである。しかし、男女としての二人の間の恋愛関係の有無については、実際には、面白おかしく書き立てるようなことには発展していないこともたしかである。

ルートヴィヒ二世は、一八八六年六月一三日夕、居城近くのシュタルンベルク湖畔で謎の死を遂げた。この死については、当時ドイツに留学していた森鷗外も「うたかたの記」という作品に記述している。そのほかにもさまざまな憶測がされているが、ルートヴィヒ二世と近い関係にあるエリーザベトの娘であるマリー・ヴァレリーが翌日の日記に述べている。部外者による記述よりも真実に近いと思われるので、少し長くなるが引用したい。(正しくはGuddenとあるがGurtenと記載されている)

ルートヴィヒ二世が湖に落ち、いなくなったことに八時半ごろ気がついた。ランタンで庭全体を探したが、一時ごろに踏みつぶされた茂みの奥のぬかるんだ湖の上に、ルートヴィヒ二世とグッテンの遺体が見つかった。

グッテンは、ベルク城に拘禁されていた王の世話のために委託されていた精神科医で、すでにホーエンシュヴァンガオ城で自殺未遂を繰り返していた王が先に湖に飛び込み、王を助けようとしたグッテンも飛び込んだ。二人は、一メートル五〇センチの深さの水の中でもみ合ったと思われる。

グッテンの殴られた目には引っかけ傷があり、顔には王の爪の痕があった。(中略)

いつもルートヴィヒ二世に恨みを抱いていた祖母は、非常に興奮し憤慨していた。それに対してママは、この恐ろしい事件のなかで、独創的な王としての悲劇的な死のみならず、若き友人としての死を嘆き悲しみ、同情と美しい時々思い出に満たされた。祖母に刺激され、悲しみのあまり気持ちりが混乱した。

ママは場合によっては違ったことを言うべきだった。王はバカではなく、ただ理想の世界に住む変わり者であったと。というのも、彼を精神異常者でないと説明でき、彼の大きく重大な不当行為を咎めるという意味で。彼のような可哀相な貧しい精神の持ち主に恐ろしい責任を負わせている。それは、私たちが望み、信じるような休息を彼に与えていないからである。なぜなら、四人の精神科医が彼を狂人と明言しているからである。私が思うには、人が彼を寛大に取り扱って、それによって非常にひどい結末を防ぐことができたなら、裏切りとはならなかったでしょう。(注1)

けだし、当時まだ一八歳だったマリー・ヴァレリーは、王の周囲についても、母エリーザベトについても、正しい判断を下している。

たしかに、浪費が過ぎて王国の財政を傾けるようなルートヴィヒ二世の行動に対して、周囲がそれを抑制させる努力が欠けていたと言うこともできる。その反対に、国王の権限があまりにも強く、諫言しても抑えることができなかったためか、国王を狂人に仕立てて監禁し、かつグッデンを介して死に至らしめたという見方もできる。

その国王が建設した三つの城は現在のドイツの観光の目玉の一つであり、バイロイトの祝祭劇場がヴァグネリアンにとってメッカともいべき、音楽の聖地の一つとなっていることは、歴史の大きな皮肉といふべきであろう。

## 第2節 シシーの兄弟姉妹

第1章で紹介したように、エリーザベトは四男五女の九人兄弟姉妹の四番目であった。エリーザベトを除く八人のうち、この物語に大いに関係の深い兄弟姉妹は、長女のヘレーネ、三女のマリー、五女のゾフィーであるが、その全員について、ポツセンホーフエンから巣立っていったその後の生涯について長幼の順に簡単に紹介する。

長兄ルートヴィヒ（一八三一―一九二〇）は、一八五九年五月二八日に三歳年下で美人女優のヘンリエッテ・メンデルと結婚している。身分が違うことから、家族や親類から反対を受けるが、家督相続権や財産を放棄しての結婚だった。ルートヴィヒは変わり者であり、エリーザベトはこの兄が嫌いではなかったが、性格が合わなかったようである。

ヘンリエッテは、釣り合い上ヴァラーゼー男爵夫人の称号が与えられた。二人の間にはひとりの女の子がいた。すでに紹介してあるマリー・ヴァラーゼーである。マリー・ヴァラーゼー自身が自らを「私生児」と認めているように、彼女は両親が正式に結婚する前にできた子であった。

ヘンリエッテはルートヴィヒにはでき過ぎた妻で、穏やかで慎重深く、相手に対する思いやりのある皆から好かれるタイプの女性であった。そのため、風変わりなルートヴィヒはどれだけ妻に助けられたことか。そのため、ヘンリエッテの生涯は平坦ではなかったようである。エリーザベトは、ヘンリエッテのこの性格と兄に対する献身的な支えとから、ヘンリエッテの出自に関係なく、生涯、ヘンリエッテのよき友であった。

ヘンリエッテは一八九一年に亡くなっている。

娘のマリー・ヴァラーゼーについては、別項（第6章と第8章）でも述べたが、後年、エリーザベトに関する貴重な文献を残している。生涯三回結婚し、いずれもその後離婚しているが、初回のラリッシュ伯爵との結婚から、マリー・ラリッシュ伯爵夫人とも呼ばれている。

次兄ヴィルヘルムは、一八三二年に生まれたが死産であった。

姉のヘレーネ（一八三四〜一八九〇）は、フランツ・ヨーゼフの皇妃として見合いをさせられたが、性格的におとなしすぎたことから、フランツ・ヨーゼフの意に沿わず、皇妃の座を勝ち取ることはできなかったことは、すでに見てきたとおりである。

ヘレーネは、下の四人の妹のように美人でないとの見方もあるが、現在残されている一枚の写真を見ると、多少輪郭がはっきりしていないが器量は悪くない。長女であったためも手伝ってか、姉妹のなかでは性格的にはもつとも優しいおとなしい女性であったということができる。



ヘレーネは、エリーザベトとフランツ・ヨーゼフの結婚の四年後の一八五八年八月、トゥルン・タクシス家の世子であるマクシミリアン侯爵と結婚した。このトゥルン・タクシス家は、一六世紀初期に郵便制度をつくりあげ、神聖ローマ帝国内で独占的に取り扱ってきた名門の家柄である。その結果、貴族に列せられ、一七四八年にはドイツのレーゲンスブルクに移住している。

しかし、一八〇六年に神聖ローマ帝国が解体されると、郵便事業は徐々にドイツ諸領邦に移管されて独占的ではなくなっていた。さらに、ヘレーネが嫁いだあとの一八六七年に、郵便事業の権利はプロイセン王国に金銭で譲渡されることになった。

その結果、トゥルン・タクシス家はドイツ帝国直属の貴族の家柄ではなくなり、陪臣格に格下げされたが、エリーザベトは、同家が貴族としての家柄を維持できるよう、個人的にバイエルン王に調停を依頼している。

エリーザベトの兄弟姉妹たちは、ヴィーンの社交界にはほとんど姿を現すことはなかったが、そのなかで姉のヘレーネのみは、分別ある優しい性格でもあり、落ち込んでいるエリーザベトの気分を落着かせせる効果があったことから、ヴィーン宮廷の女官たちからも歓迎されていた。エリーザベトがゾフィ―大公妃の仕打ちに耐えかねてコルフ島に長期間にわたって逃避したときにも、フランツ・ヨーゼフとの橋渡しとしてその役割を果たしている。

ヘレーネは、結婚九年後の一八六七年六月二六日に夫に死なれ、二〇年以上も寡婦として過ごさなければならなかった。その後、一八八一年に次女エリーザベトを、一八八五年六月四日に長男マクシミリアンを二六歳で失っている。ヘレーネには四人の子供（長女、次女、長男、次男の順の二女二男。長女

ルイーザと次男アルベルトは二〇世紀半ばまでの長命であった。がいたが、このときの悲しみは相当のものだったようである。マリー・ヴァレリーは、慰めに行ったエリーザベトから聞いた話として、ヘレーネは精神錯乱状態で、「悪魔がいる、悪魔が息子を殺した」と言い、すっかり心の平衡を失っていたと、日記に書き記している。

しかし、その後憂鬱性となり、エリーザベトの悲劇的な死を知ることもなく、一八九〇年五月一日にレーゲンスブルクで五六歳で亡くなっている。

上の弟のカール・テオドル（一八三九〜一九〇九）は、美男子ではなかったけれども男三人兄弟のなかでもっとも優れていたという。一八六五年にザクセンの皇女ゾフィーと結婚したが死別、その後の一八七九年にポルトガル最後のブラガンサ王朝（一六四〇〜一九一〇）の美しい王女マリア・ジョセと再婚している。テオドルの姉としてのエリーザベトはこの王女を気に入り、二人の結婚に満足したという。後年、彼は眼科医になった。

エリーザベトの三人の妹のうち、直ぐ下の妹のマリー（一八四一〜一九二五）は一八五九年一月にイタリアのナポリ王と結婚した。結婚した当時はまだ皇太子妃であったが、数カ月後にナポリ王のフェルディナンド二世が死去すると、夫のフランツ二世がナポリ王を継ぎ、マリーは一七歳で王妃となった。エリーザベトと同様に、ヨーロッパの支配者の一人であるナポリ王に嫁いだことで、ポッセンホーフエンの身内は欲びに湧いた。

しかし、花嫁マリーはイタリア語が話せず、一方の夫もドイツ語もフランス語も話せないことから、意志疎通にこと欠く始末であった。それだけではなく夫は性的不能者であったため、夫婦間の勤めも満足に果たせない状況であった。

さらに、マリーの結婚直後の同年四月二九日にイタリア統一戦争が始まったことが、マリーの不幸に追い打ちをかけた。先ず、イタリアの主力であるサルデーニャは、フランスの後押しを得てオーストリア軍を打ち破ってしまい、後にナポリ王国も戦乱に巻き込まれてしまう。

その後、サルデーニャの強大化をおそれたフランスが、同年七月一日にオーストリアとヴェイラフランカ講和を結んだことによって、サルデーニャはロンバルディアを獲得するに止まった。しかしその帰趨を見たイタリアの中部の諸邦は、サルデーニャとの合併を希望したため、イタリア中部以北の統合はほぼ達成された。

その煽りを受けて、イタリア南部のナポリ王国も、一八六〇年九月七日に、義勇兵を率いたガリバルディに占領されてナポリ王の座を追われてしまう。フランツ二世は分別もあり、「私にとっては王位は過ぎ去ったものだ」と自分の運命を従容として受け入れた。

それに対して精神的で意志強固なマリーは、弱気の性格である夫とは異なり、健気にも最後の瞬間まで戦う覚悟でいたが、オーストリアからの支援もなく、最終的には亡命せざるを得なかった。マリーが結婚しナポリ王妃となつてからその地位を失うまで、その間僅か約一年八カ月過ぎなかった。

その後マリーはベルギー人の伯爵と不倫に走り、一八六二年一月一二日には子供まで設けるが、世間の知るところとなり離別。子供は相手方が引き取ることとなり、マリーは落ち込んで、一時アオグス

ブルクの女子修道院に隠棲した。

しかし、そののちフランツ二世は性手術を行い、一八七〇年にマリーとの間にやっとのことで嫡子が生まれた。このときエリーザベトもマリーの出産に助力するためローマに赴いたが、不幸にして間もなく死なれてしまう。

やがてマリーは、イギリスの富豪ロスチャイルド家の財政援助を受けてイギリスに亡命し、貴族の社交界で活躍し始める。この財政援助がどのような意図で行われたか不明であるが、ひとつには、エリーザベトとの姉妹の間柄をとおして、オーストリア皇室との関係構築の糸口にしたのかもしれない。

さらにマリーは、ロスチャイルド家の援助によりイギリスに狩猟館を購入し、一八七四年にはエリーザベトを招待している。一連の行為から、エリーザベトとロスチャイルド家との関係が急速に深まったという記述は、諸伝記著書のなかには見当たらない。それほど短絡的かつ具体的なことはなかったものかもしれない。しかし、マリーも加わった狩猟で、マリーは、亡命者としての自分と、皇妃としての立場や狩猟の参加者がエリーザベトのみに関心を示していることを比較してのエリーザベトへの妬みから、エリーザベトに関するありもしない風評をルードルフに吹き込んでエリーザベトの不信を買ってしまった。この結果、二人の間に修復しがたい溝ができ、以後生涯にわたって回復することはなかった。

二番目の妹マテイルデ（一八四三〜一九二五）は、一八六一年六月五日にブルボン・シチリア系トラ―二家のルイジ伯爵（ドイツ語ではルートヴィヒ）と結婚した。ルイジはマテイルデの姉のマリーと結婚したフランツ二世の弟である。イタリア半島南部、アドリア海に面した港町バーリのすぐ北にトラ―

二という町があるが、その出の貴族であると思われる。ルイジは享樂的な性格だという記述もあるが、のちに憂鬱症になり一八八六年に自殺したという。

マティルデ自身は、すぐ上の姉マリーや次に述べる妹のゾフィーに比べると、あまり目立たないためか、マティルデ及び夫のルイジに関する記述も乏しい。精々、エリーザベトの三女マリー・ヴァレリーの出産のときに、姉のマリーとともに洗礼の際に代母を勤めたこととか、一八六七年にマティルデ自身が出産したときにエリーザベトが支援にきてくれたとかなどでしか話題にのぼっていない。

ただ一つ、特筆すべきことは、一八九八年にエリーザベトが暗殺されたあと、それ以前からフランツ・ヨーゼフの代理的な妻役を演じていたシュラット夫人に代わって、すでに未亡人になっていたマティルデが、フランツ・ヨーゼフの結婚相手になってくれれば、とマリー・ヴァレリーが希望したことが記録に残されている。(注2)

一番下の妹ゾフィー(一八四七―一八九七)は、エリーザベトより丁度一〇歳年下で、エリーザベトの他の妹たちと同様、エリーザベトの容姿にあやかりたいと、衣装や髪形を似せていたという。言うなればそっくりさんを目指していたようである。

ゾフィーはエリーザベトよりは背が低かったけれども、その美貌とエリーザベトがオーストリアの皇妃という関係もあって求婚者が多かった。フランツ・ヨーゼフの一番下の弟ルートヴィヒ・ヴィクトール大公もその一人であり、求婚のつもりで一八六六年三月にポツセンホーフエンにゾフィーを訪ねているが、断られている。

ゾフィーはその翌年の一八六七年に、すでにバイエルン王となったルートヴィヒ二世と婚約した。ゾフィーは音楽愛好家で美声の持ち主、さらにヴァグナーに心酔しているため、ルートヴィヒ二世とは趣味では一致しているが、ルートヴィヒ二世は結婚についてはなかなか意思決定しないため、マクシミリアン公が急かせたところ、それではと一方的に婚約を解消してしまった。

その一年後の一八六八年にゾフィーは、一八三〇年に即位し四八年の二月革命で退位を余儀なくされたフランス王ルイ・フィリップの孫で、アランソン公フェルディナント皇子と結婚している。

アランソンは現在のフランスのバス・ノルマンディー地方のオルヌ県の県庁所在地である。パリの社交界では音楽愛好家であることと美人であることとで有名であったという。四〇歳のときに既婚の医者と不倫関係に陥り、相手の夫人にスキャンダルを公開すると脅されて、別れている。のちに法律の改正で女性の姦通者は精神病院に監禁されることになるが、すんでのところ監禁を免れた。エリーザベットのゾフィーへの対応は厳しく、姉マリーのときのように擁護してはもらえなかった。

しかし、一八九七年五月五日（四日？）パリの慈善バザーに出席中に火災に遭い焼死した。四九歳であった。この痛ましい事故は、最晩年のエリーザベト（その後一年半足らずの翌年に亡くなったのであるが）をさらに悲しいものにした。

九人の兄弟姉妹の末っ子であるマックス・エマヌエル（一八四九〜一八九三）は、兄のカール・テオドールとは対照的に、かなりの男前であるがあまり賢明ではなかった。マックス・エマヌエルは、一八七五年にザクセン・コーブルク・ゴータ家のアマリエと結婚している。

マックス・エマヌエルはアマリエに恋い焦がれていた。しかし、アマリエにはバイエルン王家のレオポルト王子と婚約していた。エリーザベトは、マックス・エマヌエルとアマリエとを結婚させるため、強引に自分の娘ギーゼラとレオポルトとの結婚に成功。めでたくマックス・エマヌエルの希望を実現させている。

この画策に関してエリーザベトは、アマリエの恋を挫折させたことと、ギーゼラが「あちら側」の間であつたとしても、実の娘より実の弟の要望を優先させたことに対する、後ろめたさはなかつたのであろうか。それほど好き嫌いがはっきりしている一例でもある。

エリーザベトは、きょうだい思いであつた。たしかに、ヴィーンにいと情緒不安定になるが、故郷のポツセンホーフエンに帰つたり、兄弟姉妹に会うと陽気に戻つたりする効果があつた。これぞ、兄弟姉妹愛の賜物であつた。そのため、ゾフィー大公妃に取られたギーゼラとルードルフとの親子の愛よりも、兄弟姉妹との交流を優先するほどであつた。ただし、ルードルフが死ぬまでは、そして、マリーとのように仲違いするまでは。

エリーザベトは、イタリア統一戦争のときは妹マリーを、普墮戦争の際には兵士となつて戦争に巻き込まれるのではないかと兄弟のことをひどく心配した。しかし、姉のヘレーネが先に往き、続いてマックス・エマヌエル、そして妹のゾフィーに死なれたあと、エリーザベトは、残る長兄のルートヴィヒと弟のカール・テオドール、二人の妹のマリーとマティルデとは、昔のようなきょうだい愛は続かなかつたのではないか。

## 第3節 父マックスと母ルドヴィカ

ヴィーン宮廷内では評判の悪かったマクシミリアン公爵（一八〇八—一八八八）は、ある一面を除いて、決して蔑まれる人間でなかった。

たしかに、政治には興味はなかったし、ミュンヒェンの宮殿の隣に曲馬場を造らせて馬術に励み、貴族になつていなければ曲馬師になつていただろうとも述べていたこともあり、また、奴隸市場で黒人の男の子を買つてミュンヒェンに連れてきて響ひんしやくをかつたりしていたが、支配者の一員としての重要な公務もなかったので、公爵それ相応の収入で、好き勝手な興味にうち興じていた。

その一方で、流石、ヴィッテルスバッハ家の血筋として、学問と芸術に打ち込んだものもいる。家の図書は二万七千冊にも及ぶ読書家であり、ミュンヒェン大学で講義をしたりしたほか、詩人として、劇作家として、そして音楽家として民謡の図書も発行するなど活躍している。そのほかにも、ギリシアをはじめとして西アジアなどへの旅行も豊富である。

ただ、そのなかで、責任感が欠如していることや、素性の知れない芸術家などと交際したり、文学においてもハイネに傾倒したりし、仮象の世界に逃げ込むような性格でもあった。

そのほかにも、貴族としては稀有めづな自由主義的な考え方の持ち主であり、子供たちの家族内教育でも家庭教師が嘆くほど、好きになうにさせていた。由緒ある貴族であればこのような放任主義は許されないことであるが、旅を通じて広く他国の現状を見聞したことを糧にして子供たちに接したとすれば、必



ずしも誤ったことでないと思うくらいである。

何人かの愛人を持つていたことは、家族内では周知の事実であった。ルドヴィカは諦め、子供の将来にすべてを託すことに生き甲斐を感じ、夫の放浪癖と情事は我慢するほかなかった。

果して、このマクシミリアン公爵を非難できる品格のある貴族がどれほどいたであろうか。五十歩百歩どころか、自らの教養を高めるのではなく、帝国の将来を考へることもせず、宮廷のしきたりとなっている約束事や情事に明け暮れることで、毎日を過ごしていたのではないだろうか。

このマクシミリアン公爵の言動は、子供たちにさまざまな形で引き継がれていったことはたしかである。もちろんエリーザベトもその影響を強く受けている。だからがない父親ではあったが、子供たちは父マクシリアンを敬慕していた。

しかも、子供たちも長ずるにおよび、結婚した後でもポツセンホーフエンに集まってきた。エリーザベトもその一人であるが、ヴィーンの宮廷では、エリーザベトが皇妃としてポツセンホーフエンでのびのびと過ごすことが理解できなかった。

一八六二年、オーストリアがイタリアを失い、立場が微妙になった妹のマリーとその下の妹マテイルデが、ポツセンホーフエンに里帰りしてきた。一方のエリーザベトも大勢の従者を従えてポツセンホーフエンに泊まりにきていた。

その騒々しさからマクシミリアン公爵は、娘たちを追い出すことにした。しかしこのことは、ヴィーンの宮廷での悩み多きエリーザベトが、ポツセンホーフエンで心の安らぎを得る場を失うことであり、夫たちと夫婦生活がうまくいってなかったマリーとゾフィーが、不倫を働いたことを知ったルドヴィカ

は気が気ではなかった。まして、マリーは身ごもっていたのだった。

一八八八年九月に、マクシミリアン公爵とルドヴィカ公妃は結婚六〇周年を迎えた。しかし、マクシミリアン公は、以前から軽い卒中発作に襲われていたが、同じ年の十一月一日にそれが激しくなったとの知らせをその二日後に受けて、エリーザベトはミュンヘンに駆けつけようとした。このときエリーザベトはギリシアの島にいた。そこで、フランツ・ヨーゼフは、間に合いそうにもなく、また精神的に疲れていたエリーザベトの健康を気づかって思い止まらせた。

一月一五日の朝三時半にマクシミリアン公は亡くなった。同日の午後、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフからそのことを電報で知らされた。エリーザベトは、父からポツセンホーフエンの城館への出入りを止められてからも、毎夏のようにポツセンホーフエンのホテルを利用しながら父親と会う機会があったにも拘わらず、ほんの僅かな機会にしか会わなかった自分を責めた。(注3)

ところがハーマン女史は、「エリーザベトは、このとき父との関係は最悪の状態で、父の葬儀に行かなかった」。そして、「例によって、表向きの理由は体調が思わしくないということであった」と述べている(注4)。この表現では「意識的に」という意味合いが込められているように思える。

注3はコルティの著書からの引用であるが、同書を精読しかつ研究しているはずのハーマン女史であるので、同女史の記述は新しい資料が見つかったためなのであろうか。父の死に対してまでもそのような冷たかったエリーザベトであったのであろうか。筆者はそれ以上容喙できない。

マクシミリアン公爵その人は、八〇歳という年齢もあり、晩年は交遊関係も希薄となり、孤独に苛まされて、明るさを失い、淋しい人生の最後を閉じたのであった。

エリーザベトが母ルドヴィカ（一八〇八—一八九二）と仲違いし、疎遠になってゆくのは、二つのことが原因であった。一つはルートヴィヒ二世の死を契機とした二人の考えの相違から発するものであり、もう一つは、妹ゾフィーの娘の猩紅熱の発症に関わる事件からであった。

ルドヴィカは、狂人と見なされていたルートヴィヒ二世と、その弟で精神を病んでいたオットーとの二人の母親であるマリー皇太后には、同じ親族として同情した。しかし、当のルートヴィヒ二世に対しては、自分の娘であるゾフィーとの婚約を一方的に解消したことで恨んでいた。それに対して、ルートヴィヒ二世を真つ当な人間であると擁護していたエリーザベトとは意見が合わなかった。

もう一つの猩紅熱の問題は、エリーザベトが母ルドヴィカと妹ゾフィーに対してのみならず、故郷に對する訣別を意味するほど重大問題（もつともシュトラオホ・ホテルには一八九四年まで宿泊はしていた）であった。ルートヴィヒ二世の死の直後にはエリーザベトは、近くにあるガラツハオゼン城からポツセンホーフエンに戻っていたが、そこに妹のゾフィーが娘のルイーゼを連れてきていた。

ルイーゼは猩紅熱を病んでいた。しかし、そのことはエリーザベトには知らされないまま、エリーザベトは三女のマリー・ヴァレリーを連れてやって来たのだった。ルイーゼの病状を知ったエリーザベトは、即座にポツセンホーフエンを出発することに決めた。

エリーザベトとしては、次女のギーゼラや長男のルードルフと違って、三女のマリー・ヴァレリーは絶対に病気をうつされたくない愛娘だったのだ。のちに、義姉メンデル（ヴァラーゼー男爵夫人）が、エリーザベトにルドヴィカやゾフィーとの仲直りするよう努力したが、また、ルードルフは母のこの態

度は余りにも極端だと感じてはいたのであるが、エリーザベトは母と妹の無神経さと愚かさを許すことはしなかったのである。結局はマリー・ヴァレリーには病気はうつされなかったものの、親子の縁、姉妹の縁を切つてまでも、マリー・ヴァレリーを守ろうとしたのであった。

エリーザベトと母ルドヴィカとの最後の別れについても、エリーザベトにはちよつとした心の葛藤があった。一八九二年一月下旬はマリー・ヴァレリーの初産の予定となっており、エリーザベトはその知らせを待っていた。しかし、同時に故郷の母が熱を出して寝ているという知らせも受けた。

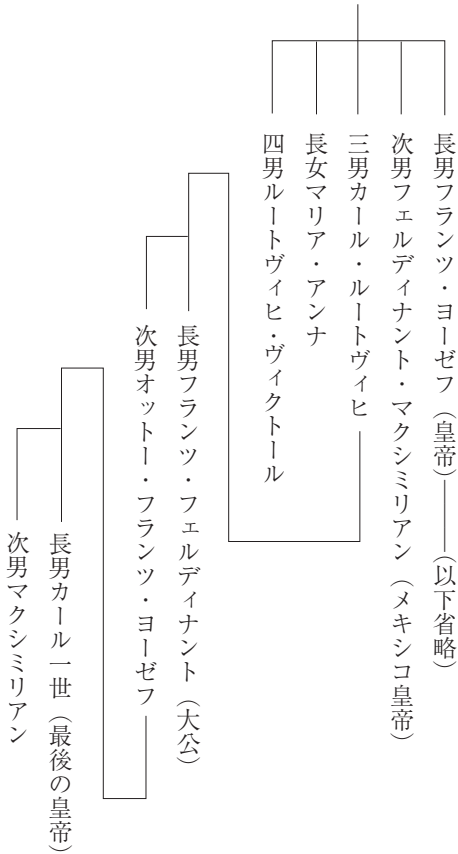
妹のゾフィーの子の猩紅熱が原因となつて不仲になつて以来、エリーザベトは母とほとんど接触しなくなつていた。さて母の病の立会いか、孫の出産の立会いか、どちらを優先させるべきかを決しかねていた。ところが、母が急に肺炎に罹り、二六日に八四歳で亡くなつたとの悲報が先に届いた。それに対して翌二七日にマリー・ヴァレリーが女の子を出産したという知らせを受けた。エリーザベトはその子に自分と同じエリーザベトと命名し、愛称を「エラ」と名付けている。

母が死の床に就いていたのはミュンヒエンであつたと思う。マリー・ヴァレリーの出産は、ヴィーンかブダペストか触れていないし、エリーザベトがどちらに立ち会つたか分らないが、孫に命名したとあれば、これまでの経緯も合わせて考えれば、マリー・ヴァレリーの出産に立ち会つたことであろう。

しかし、たとえ母と不仲であつたとしても、娘として母の死に立ち会いたかつた気持には間違いないであろう。ハーマン著にはこの件についての記述はないが、コルティは、「二つの出来事は、エリーザベトの神経をひどく衰弱させた。そこで再びコルフ島に向けて立ち去つた」と述べている。(注5)

#### 第4節 フランツィの弟たち

フランツィとはフランツ・ヨーゼフの略称。フランツィには三人の弟がいるが、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフに嫁いでは、エリーザベトとの関係で語られることはあまりないが、ハプスブルク王家の終焉に関連させて、その家系図を併記したうえで述べてみたい。



順不同となるが、先ず三男カール・ルートヴィヒ（一八三三〜一八九六）から。既に述べたように、一八四八年六月に三月革命の難を逃れるため、ゾフィー大公妃が上述の四人の息子を連れてインスブルックにやってきたとき、カール・ルートヴィヒもエリーザベトに会っている。

このときはカール・ルートヴィヒは一五歳、そしてエリーザベトはまだ一〇歳で、エリーザベトは美しいというほどまでには成長していなかったが、カール・ルートヴィヒはエリーザベトの可愛らしい目が気に入って好きになり、エリーザベトを追いかけ回したり、贈り物をしたりしていた。しかし、まだ恋愛とか結婚とかとは程遠い関係にあった。

お互いに別れてから、その後カール・ルートヴィヒは、結婚を意識してエリーザベトに頻繁に手紙を書いたり、贈り物をしている。それに対してエリーザベトは、カール・ルートヴィヒの純粋な優しさには感謝しつつも、それに十分応えていない。

そのあとの一八五三年のバート・イシユルでの再会では、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトの姉ヘレーネと見合い場であることから、カール・ルートヴィヒのエリーザベトに対する恋心が再び燃え上がった。しかし結局は、長兄フランツ・ヨーゼフがエリーザベトと婚約したため、エリーザベトに対する恋心は終幕となった。

カール・ルートヴィヒは、エリーザベトとフランツ・ヨーゼフとの結婚後もエリーザベトのよき理解者であったはずであるが、宮廷内での孤立に苦しめられているエリーザベトにどの程度協力的であったかは、大方の伝記作者はそこまで言及していないので、詳細はわからない。

カール・ルートヴィヒは、その後三回結婚している。初婚の相手は一八五六年に結婚したザクセン王

女マルガレーテであるが、二年後の一八五八年に一八歳で死別している。次の結婚相手は、両シチリア女王のアヌンツィアータである。両シチリア王国は、一一世紀にノルマン人がシチリア島に建国した南イタリア王国のことであり、一八六一年にイタリア王国に統合されている。

カール・ルートヴィヒと第二番目の妻アヌンツィアータとの結婚は、イタリア王国に統合された後の一八六二年であり、二人の間には二人の皇子が設けられた。長男は一八六三年生まれで、後に第一次世界大戦の勃発の原因ともなる、サライエヴォで暗殺されたフランツ・フェルディナント大公である。

フェルディナント大公は皇位継承第三位であったが、伯父フランツ・ヨーゼフの反対にも拘わらず身分違いのゾフィー・ホテク伯爵令嬢と結婚したこと、さらに、オーストリア・ハンガリー二重帝国の衰退を憂慮して南スラヴの諸民族を加えた三重帝国の構想を持っていたことにより、フランツ・ヨーゼフに意見が容れられず、また、その強引な性格からもフランツ・ヨーゼフに疎まれていた。

結果的には、この構想こそがセルビアの民族主義者の反感を買い、サライエヴォで夫婦ともども暗殺されたのである。この構想がなければこの暗殺もなく、これを原因としての第一次世界大戦の勃発はなかったかもしれない。序に付け加えれば、オーストリアが強硬な最後通牒をセルビアに突きつけなければ、大戦は回避できたとの歴史家の見方もある。

カール・ルートヴィヒの次男で、一八六五年生まれのオットー・フランツ・ヨーゼフ自身は、脚光を浴びていないものの、ザクセン王女出自の妻マリア・ヨーゼフとの間に一八八七年に生まれた息子のカール一世は、第一次世界大戦中の一九一六年一月二日に八六歳で死去したフランツ・ヨーゼフの後を継いで、二八歳でオーストリアの最後の皇帝になっている。

皇位継承権第三位であったフェルディナント大公が一九一四年に暗殺（その継嗣者もない）され、自らの父親であるオットー・フランツ・ヨーゼフもそれ以前の一九〇六年に亡くなっているので、カール一世が皇帝として即位した。しかし、オーストリアが一九一八年に敗れたため、二年間その地位に就いていたに過ぎない。

ブルボン・パルマ公女出身で一九一一年にカール一世の妻となったツイタ皇妃（チタと記載する著書もある）は、一九一九年に夫とスイスに亡命したあと、皇室復活に努力するが失敗し、マデイラ島に連行され、夫のカール一世は同地で死去する。その後、一九六二年に皇妃退位宣言を拒否したこと、オーストリア共和国から入国を拒否（一九八二年に六三年振りに入国が許可される）されるが、一九八九年に九七歳で亡くなるまで、ハプスブルク王家再興をかけて活躍したのでわれわれの記憶に新しい。さて、カール・ルートヴィヒの最後の結婚相手は、一八七三年に結婚したポルトガルの王朝ブラガンサ家のマリア・テレジア公女であるが、継嗣者もないようであり、詳細はわからない。

生年の序列からゆくと本来ならば先に説明すべきであるが、次男のフェルディナント・マクシミリアン（一八三二〜一八六七）は、フランツ・ヨーゼフよりも知的で自由主義的であるとも言われ、一時、フランツ・ヨーゼフを退位させては、という声上がるほどであったという。政治情勢に対する判断では、フランツ・ヨーゼフよりも、エリーザベトにより近いものがあつたと言えるようである。

一九世紀はじめに、スペインがナポレオン一世に敗れたため、同世紀前半には既にスペインの植民地であったアメリカ大陸の国々は、続々と独立を果たしていた。同じスペインの植民地であったメキシコ



もちろん独立したが、国情が安定しておらず、隣国のアメリカ合衆国との領土問題から、アメリカ合衆国の挑発を受けて一八四六年の米墨戦争（アメリカ・メキシコ戦争）にまで発展し、その結果の敗戦によって国土を割譲させられたり、買収されたりして、国土の半分以上を失っていた。

同時に、財政が逼迫したメキシコ政府は、対外債務の支払いが停止するに至って、債権者であるイギリス、フランス、スペイン三国の干渉を受けた。領土的野心のなかつたイギリス及びスペインは兵を引いたが、メキシコにカトリック帝国を建設することを夢見たナポレオン三世のフランスは、メキシコ中央部を占領する。

一八六四年にナポレオン三世は、スペイン皇室と関わり合いのあつたハプスブルク家であることからという理由で、フランツ・ヨーゼフに、弟のフェルディナント・マクシミリアン大公をその皇帝に推挙することを申し入れてきた。

ナポレオン三世やメキシコの保守勢力は、マクシミリアン大公を御しやすい傀儡政権と見なして、送り込もうとしたのであつた。これは、フランスが自らの皇帝を送り込むことに不安を感じていたことの裏返しであつたのかもしれない。

ハプスブルク家の中では、マクシミリアン大公がメキシコ皇帝になることに反対していたが、当のマクシミリアン大公、さらにはエリーザベトに対抗意識をあらわにしていた大公の妻シャルロットが大いに乗り気であつたことが、即位を決定付けた。大公夫妻は四月一四日にメキシコに向けて出航した。

エリーザベトにとってはシャルロットとはあまりよい関係ではなかつた。シャルロットは、エリーザベトよりも三歳下で、エリーザベトから遅れること三年の一八五七年に、ベルギーの皇室からマクシミ

リアン大公に嫁いできていた。

シャルロツテは自尊心が強く、上辺だけの華麗さに憧れ、体面を保つことが好きな女性であった。シャルロツテが輿入れしたときはすでに、エリーザベトはゾフィー大公妃から疎まれおり、ゾフィー大公妃はシャルロツテを意識的にエリーザベトに反目させるように仕向けた。

シャルロツテは、自分の出自がベルギー皇室ということで、自分はエリーザベトより上の立場にあるが、エリーザベトが皇妃であるのに対して自分は大公妃に過ぎないことも手伝って、メキシコの皇妃になりたいと考えていたことは間違いない。

エリーザベトは、自分の境遇を考えて、個人的にはマクシミリアン大公のメキシコ皇帝即位には反対であったが、そのような意見が受入れられないことを予測して、敢えて引き止めなかった。

ナポレオン三世が傀儡と見込んだマクシミリアン大公は、穩健路線を取り、自分を推挙した保守派と衝突する一方で、反対勢力に対しても強硬政策をとった。おそらく、母国オーストリアで、兄のフランツ・ヨーゼフ皇帝が帝国維持に汲々としていたのを見ていた大公が、メキシコにおいて自分の理想とする統治をしたいと思つたのではなかったか。

メキシコの隣国であるアメリカ合衆国は、一八六五年に内戦である南北戦争が終結したあと、フランスにメキシコからの撤退を要請した。フランスはそれに応じたが、大公は退位を拒否したため四面楚歌のまま敗れることになる。

フランスからの援助のない帝位に不安を感じたマクシミリアンの妻シャルロツテは、イタリアに出国きローマ教皇に支援を願い出たが冷たく拒否された。精神に異常を来したシャルロツテは、そのままト

リエステ郊外にあるマクシミリアン大公所有のミラマーレ城館に移された。

ヨーロッパの各皇室の助命嘆願にもかかわらず、民族主義的なインディオ出身の指導者フアレスは嘆願を押し切り、マクシミリアン大公は、一八六七年六月一九日に銃殺刑に処せられた。三四歳だった。

マクシミリアン大公が処刑された同じ年の八月に、ナポレオン三世がザルツブルクにフランツ・ヨーゼフ皇帝夫妻を訪ね、マクシミリアン大公の死に対して悔やみを述べたが、ゾフィー大公妃は生涯にわたりナポレオン三世を絶対に許さなかった。

シャルロットは、夫の死を知らされることもなく一九二七年まで生き延びた。しかし、ハプスブルク家との関係も失われており、継嗣者がいないため家系も途絶えた。

最後の四男ルートヴィヒ・ヴィクトールは、一九一九年に七七歳で亡くなったが、生涯未婚であり、伝記書では名前が上がるほどの役割を演じていない。また、一部資料によると、フランツ・ヨーゼフの妹で、三男と四男の間に長女マリア・アンナが生まれていることになっているが、一八三五年から一八四〇年までの生涯であり、説明する資料もない。

## 第5節 義母ゾフィー大公妃

ゾフィー大公妃（一八〇五～一八七二）は、若いころはかなりの美人であったようである。その証拠に、先述した美人好みのバイエルン国王ルートヴィヒ一世が集めたニンフェンブルク宮の一室「美人画

ギャラリー」には、ローラ・モンテスなどと一緒に、若き日のゾフィー大公妃の美人画を掲示しているほどであった。筆者は、ニンフェンブルク宮でこれら美人画を見る機会を持ったのであるが、残念ながらそのときは、肖像画の数も多かったこともあり、ゾフィー大公妃の肖像画がそこに掲示されているとは気がつかなかった。

エリーザベトゆかりの出版物に掲載されている肖像画集等の中の写真は、後年の限られたものが一、二枚ある程度で、それぞれの絵は年齢的なこともあり、どうみても美人とはいえないものである。

ゾフィー大公妃についてはさまざま述べてきたが、結果的には一人でオーストリア帝国を、そしてハプスブルク王家を、背負って立つ生涯であったように思える。

ナポレオンの出現でオーストリア帝国も蹂躪され、神聖ローマ帝国も崩壊させられたが、フランツ・ヨーゼフの二代前のフランツ二世（神聖ローマ帝国皇帝でなくなった一八〇六年の二年前の一八〇四年からは、オーストリア皇帝としてフランツ一世）は名君であった。

バイエルンの公女だったゾフィーが、一九歳の一八二四年にフランツ・カール大公と結婚してから、大公妃としてフランツ一世の治世のもと過ごしたことから、一八三五年に同皇帝の死去に伴って皇帝となった長男のフェルディナント一世も、次男でゾフィー大公妃の夫であるフランツ・カール大公も、頼りにできる皇帝でも大公でもなかった。為政者の一人としては、絶望的にならざるを得ないとともに、現状を何とか打開しなければならぬと、自らを鼓舞させなければならぬことを考えれば、帝国維持のためがむしろにやるしか選択の余地がなかったことは首肯できる。

一応、フランツ・ヨーゼフを皇帝に据えたけれども、ゾフィー大公妃は黒幕になって辣腕を振るうしかなかった。そこにはエリーザベトが入り込む余地はなかった。それが、エリーザベトの宮廷儀礼など皇妃としての義務を果たさなかったことも引き金となり、息子を味方につけるために、母親が嫁から息子を奪い取るような挙に出たことなど、優しい姑となりえなかったことに、結果的には、家庭内の不和が噴出した原因をつくった張本人となつてしまった責任があるように思えるのである。

家庭的には妻としては不幸であつたことはたしかであり、また母としても、メキシコで処刑された次男のフェルディナント・マクシミリアンの死が一番応えたことだろう。息子の運命を予感し、このときばかりは、メキシコ皇妃に執着するシャルロッテを嫌い、即位に反対したエリーザベトの同情に感謝したといわれている。為政者としても最終的に大ドイツ主義が実現できなかったことは最大の敗北であつた。そこにゾフィー大公妃の限界があり、悲劇があつた。

ゾフィー大公妃は、一八七二年五月に病の床に就いた。息を引き取るまで長い間苦しんだ。エリーザベトは、徹頭徹尾ゾフィー大公妃に嫌われたにも拘わらず、ゾフィー大公妃の最後の瞬間に、一〇時間もの長い間何も食わずに付きつきりでゾフィーの側を離れず看護している。そして、ゾフィー大公妃は二七日の朝六六歳の生涯を閉じた。

しかし、エリーザベトは、ゾフィー大公妃亡き後、ゾフィー大公妃の呪縛から解き放たれたにも拘わらず、政治の世界に進出したという気持ちはまったくなかった。それは、自分が考えている自由主義的な方向が実現不可能であると知っていたからであり、むしろ、政治には無関心の度を強めるだけであ

った。もう、オーストリア帝国の行く末も、ハプスブルク王家の繁栄と継続も、どうでもよかった。

それは偏に、たとえエリーザベトが宮廷儀礼を無視したなどの非があろうとも、最初から姑としての嫁に対する最初にとった行動が、あまりにも嫁の人格を無視したものであり、それが家族崩壊の根本的な最大の原因となったことも後押ししている。

いみじくも、ゾフィー大公妃が死んでから二六年後の一八九八年八月二五日にバート・イシュルで、マリー・ヴァレリーが日記のなかでこう述べている。

まだ、今年のようにここでは硬直した宮廷生活を押しつぶしているようには見えない。しかし、内々での家族関係は抑圧されておさまっている。伸び伸びとした歓びの代わりに、言いようのない重圧がこの家族関係に渦巻いている。

もしそれが、祖母のゾフィー大公妃の体制が醸し出したものであるならば、それは過ちを犯した償いをしなかったむごいゾフィー大公妃がもたらしたものかもしれません。このぞつとするような宮廷生活は、理屈抜きで伸び伸びした人間関係の交流をするための権限を、パパから意識的に奪い取ったものなのです。(注6)

マリー・ヴァレリーは、このような考えをエリーザベトと話し合ったことがあるのだろうか。七月一日にこのカイザーヴィラから旅に出たエリーザベトが、マリー・ヴァレリーが上述の日記に記した一日後に暗殺されようとは、想像だにできなかったことであろう。何か家族及びエリーザベトの不幸を

総括するような発言ではないだろうか。

## 第6節 ルートヴィヒ二世の足跡

第二次世界大戦後、当時の西ドイツでは、外国人観光客向けの「観光街道」がたくさん設定された。曰く、ロマンティッシェ街道、メルヒェン街道、アルペン街道、ブルゲン（古城）街道、エリカ街道、ゲーテ街道などなど。

一九六四年一〇月に東京オリピックが行われたその同じ年の四月一日に、日本人の海外旅行が自由化された。現在、隆盛を極め日常茶飯事ともなっている海外旅行が、この年からお金があれば誰でも行えるようになった。いくなれば海外旅行の解禁である。

そのほば一〇年あとの一九七〇年代半ばあたりから、日本の旅行者がこのうちのロマンティッシェ街道（ロマンチックとは英語読み）を、ドイツ観光旅行の目玉とした旅行商品としてそのコースに組み入れ、大当たりした。

現在でも日本人観光客の大人気となっているが、このコースはかつての大神教区の所在地として有名なヴェルツブルクを北の出発点とし、オーストリアとの国境に近いフュッセンをその南の終点とする、バイエルン州を南北に縦断する全長三三三キロメートルに及ぶドイツを代表する観光街道である。

このコースのみどころは、あらためて説明するまでもないと思われるが、その中心的存在として有名となったローテンブルク（正式にはローテンブルク・オブ・デル・タオベル）をはじめ、ディンケル

スビュール、ネルトリンゲン、アオグスブルクなどの中世紀的な面影を残す魅力的な中小都市である。多少迂回したところにあるロココ様式のヴィース教会なども、見落とせない観光箇所に入っている。

南の終点であるフェッセン近くにあるのが、このコースのもう一つの観光の目玉であるノイシュヴァンシュタイン城である。この城は、さらにこのコースとは離れたところにあるもう二つの城、すなわちリンデルホーフ城とヘレンキームゼー城とともに、この節の主人公であるルートヴィヒ二世が建てさせた城である。

筆者がこの城を初めて知ったのは、一九五六年、フランクフルトにあった当時の西ドイツ観光局から個人的に取り寄せたパンフレットに因つてであった。そのパンフレットに掲載されていた城の美しさに見とれ、いつかは是非訪れてみたいと興味が湧いた。

一九六五年にたまたま日本橋丸善で入手したヴェデガーの赤いガイドブック「南バヴァリア」（英語版）を読み、どのようなルートでそこに行き着けるのか調べたものである。

結果としては、旅行会社の添乗員として二回及び個人のドライブ旅行で二回の計四回の旅行を通してこれら三つの城を訪ねることができた。

ノイシュヴァンシュタイン城は、一八六九年に着工し、一八八六年に完成している。

ルートヴィヒ二世は、その前年にリヒアルト・ヴァグナーに文書で、約三〇年前に再建されているホーエンシュヴァンガオ城に代わって、「古来から伝わる純粋なドイツ騎士の居城を、しかもこの世のなかで最も美しい城の一つ」を建てたい、と述べている。（注7）



ホーエンシュヴァンガオ城は、中世時代のミンネゼンガー（宮廷吟遊詩人）華やかかなりしころに建てられた城であったが、この地域の吟遊詩人が絶滅したため、この城も荒廃したままになっていた。

その城をルートヴィヒ二世の父であるマクシミリアン二世が買い上げ、一八三二年から三六年にかけて再建したものである。ルートヴィヒ二世は、幼年期から一七年間をこの城で過ごしたことで、彼が建設したノイシュヴァンシュタイン城は、この建築様式に大きな影響を受けているといわれる。

岩山の上に建ち、正面玄関を前面にして、アルプゼー（アルプ湖）と小高い山と、その背後のオーストリア領のタンハイマーの連山を背景とした写真でお馴染みのこの城は、その自然の景観と見事に調和しておとぎの城のようで美しい。この角度からの景観は、筆者も登ったことがあるが、手前のロープウェイを使ってブランドルシュローフェン山の頂上近くから眺めることができる。

城の玄関までは山道を歩くか馬車を使うことになるが、その途中にある展望台から、マリーエン橋を手前にして城の横顔が眺められる。

建物の中は、玉座の間をはじめ、礼拝堂、歌人の広間（アイゼナーハ近くにあるヴァルトブルク城の「歌人の広間」を手本としている）ほか、生活に必要なさまざまな部屋がある。これらの部屋はヴァグナーの楽劇の数々（タンホイザー、ローエングリン、トリエスタンとイゾルデ、パルツイファル、マイスタージンガーなど）をモチーフとした絵画で彩られている。また、一般入場者には許可されていないが、写真で見ると、バルコニーからの眺めも素晴らしい。ここからであると、アルプゼーの右手にホーエンシュヴァンガオ城が、さらにその右手にシュヴァンゼー（白鳥の湖の意）が見える。

少しややこしい説明になるが、現在のホーエンシュヴァンガオ城はシュヴァンシュタイン城と呼ばれ

ていた城で、ノイシュヴァンシュタイン城が建っている場所には前のホーエンシュヴァンガオ城が建っていた。ルートヴィヒ二世の前に、その父であるマクシミリアン二世が、すでにその城を再建することを考えていた。それで、両者の名が入れ代わって、ノイシュヴァンシュタイン城の「ノイ」（新しいの意）の意味がわかるのである。

さらに、この城を新築する前の一八六七年は、同国に失業者が多かったことから、ルートヴィヒ二世は、彼らを救済し、生活手段を与えるために建築したものであった。

二つめのリンデルホーフ城は、一九三六年に冬季オリンピックが行われたガルミッシュ・パルテンキルヘンの町（同オリンピックの前はガルミッシュとパルテンキルヘンの二つの町に分かれていたもの）を挟んで、オーストリアとの国境に屹立するドイツの最高峰ツーク・シュピッツ（標高二九六八メートル）のほぼ真北、アーメル川のグラースヴァング渓谷に位置している。

といっても、主要道路ではないため分かりにくいだが、フェッセンから一度オーストリアのロイテに出て、東のドイツのオーベルアンメルガオ（二〇年に一度行われる「キリスト受難劇」で有名）とのほぼ中間にある。

協道に逸れるが、エリーザベトの家族とフランツ・ヨーゼフの家族が、インスブルックで初対面となった一八四八年は、このキリスト受難劇を見に来ていたルドヴィカ親子が、ついでに、当時、革命を逃れてインスブルックに避難していたゾフィー大公妃親子を訪問した時であったともいわれている。一〇年に一度行われるこの受難劇が、一世紀半以上前の一八四八年に当たるかどうか、筆者はまだ同市に確

認していないが。

この溪谷を筆者も冬と夏に二回車で通ったことがあるが、日本でいう「峡谷」というよりも「溪谷」の沿道にあり、ある地図によると、オーベルアンメルガオからは「ツーリスト・ロード」との記載もある。しかし、かなり鄙びた山間部にあるため、通常のツアーに組み込まれることは少ない。

この城も、最初から何もないと建設したのではなく、この地名も中世末期のリンデル家の名に由来している。ルートヴィヒ二世の父マクシミリアン二世が、狩猟小屋として所有する前は、エッタールのベネディクト派修道院の所有であった。(注8)

ルートヴィヒ二世は、最初フランスのヴェルサイユ宮殿を模した巨大な宮殿を建設するつもりだったが、途中で計画を変更し、建物自体はかなり小さな宮殿となっている。巨大な宮殿は、この城に代わって、後述するヘレンキームゼーの宮殿で実現している。

この宮殿の建物そのものは小さいものの、他の既存の宮殿を模倣したところはほとんどない、一八世紀のロココ様式の華美な建物であり、室内も装飾過多ともいべき絢爛豪華一色の趣がある。それらの部屋部屋も、この城の主であるルートヴィヒ二世が心酔する、ヴァグナーの楽劇の各作品のモチーフがふんだんに取り入れられている。

南に面した前庭にはその中心に噴水のある池があり、さらに、「く」の字型と逆「く」の字型のシンメトリックな階段を上り詰めた上のトロス(円形の建造物)には「ヴェーヌス」(英語のビーナス)の像が立っている。一方の宮殿北側中央の寝室のさらに北に競り上がった傾斜には、左右のアーチ状の柵の連なった花のトンネルに挟まれて、中央の階段状のカスケードから水が流れ落ちている。

宮殿を中心として一直線上に南北に配置されたこれらの建造物に対して、宮殿の左右、すなわちその東西には翼のようにフランス式庭園が伸びている。

傾斜の多い庭園内の北東の離れた位置にはイスラム式のキオスクが建っている。キオスクとは、ペルシア語の宮殿の意味から、トルコ、フランスに伝わった言葉で、「あずまや」という言葉が相応しい。現在の日本でもJ.Rの駅構内にある売店「キオスク」もこの名を使用していて、お馴染みとなっているが。

キオスクの中はもちろんオリエント風の夢幻的な内装で、ルートヴィヒ二世がこの部屋で千夜一夜の世界に耽ったであろうことは、容易に想像できる雰囲気であった。

もう一つは、人工的に作られた「ヴェーヌス」のグロット（洞窟）である。水が湛えられた洞窟内部には白鳥型の小舟が浮かべられており、楽劇「タンホイザー」の一幕の情景が再現されている。

ルートヴィヒ二世は、この鄙びた地の小さな宮殿で、世俗から離れた孤独で夢想的な、中世騎士的なヴァグナーの世界に浸る喜びを味わいたかったのである。それにしても、東洋人であるわれわれ日本人からみると、一八世紀的な華麗な装飾に囲まれた部屋部屋のなかでは、ヴァルトブルク城のような中世的な遙かな時代の雰囲気浸れるような気がしないのではあるが。

そのような思いはともかく、日差しの強い夏の昼下がりには、半袖姿の観光客で賑わっていた。筆者も冬に来たときには見られなかった噴水や、今を盛りと競う花々に囲まれながら、在りし日のルートヴィヒ二世を偲んだものであった。

ヘレンキームゼー城。この城は三つの城のうち最後に建てられた城である。

ミュンヒェンからオーストリアのザルツブルクに向かうアトバーンの途中に位置するバイエルン州の最大の湖、キームゼー（キーム湖）の中にある三つの島のうち、最も大きいヘレンインゼル（男島）にある。もう二つの島は、島内に修道院のあるフラオエンインゼル（女島）と無人島となっているクラオトインゼル（草の島。ドイツ南部ではキャベツの意もある）である。交通が便利な位置にあるが、船に乗って行かなければならないので、大方の団体バスはここを通過してしまうことになる。筆者はレンタカーを利用して訪れたので、比較的ゆつくりと見学することができた。

一八七三年に、ルートヴィヒ二世は、この島の緑を守る願いを込めてこの島を手に入れたが、同時にリンデルホーフ宮殿では実現できなかったヴェルサイユ宮殿に匹敵する大宮殿を建設する意図を持っていた。宮殿は一八七八年に着工されたが、その規模と王国の財政困難の状況から、建設は立ち往生し、未完成のままに終わっている。さらには、ルートヴィヒ二世はこの宮殿にたった一週間しか滞在したことがなく、その後あの謎の死を遂げたのである。

ルートヴィヒ二世にゆかりのそのほかの建築物のうち、シュタルンベルク湖の東岸にあるベルク城については、筆者はそばまでレンタカーで乗り入れたはずであったが、溺死の場が見つからず、次の予定の都合でついに訪れる機会がないままになっている。

バイロイト市にあるヴァグナー祝祭劇場は、一八七六年に完成され、同年八月にヴァグナーの「ニーベルングの指輪」によりこけら落としされている。一九五一年からは、ヴァグナーの作品に限定して、

毎年夏に演目を入れ換えながら上演している。最近では、日本でもヴァグネリアンと呼ばれるヴァグナー作品愛好家が増え、旅行会社主催の音楽ツアーなども催行されている。しかし、残念ながら筆者はこの劇場でのヴァグナー楽劇の公演は一度も見えていない。

## 第8章 マイヤーリング

### ——家族愛のすれ違い——

#### 第1節 ルードルフ

ルードルフは、一八五八年八月二日に、ハプスブルク王家の長男として生まれた。長女ゾフィー、次女ギーゼラの二人の姉のあとに生まれた初めての男の子であり、将来はハプスブルク家を継ぐべき皇太子の誕生である。

そこには、姉のギーゼラとは異なり、帝王学を修めなければならない重要な役割をもっていた。もちろん、彼はエリーザベトにとっても、フランツ・ヨーゼフにとっても、ゾフィー大公妃にとっても、さらにオーストリア国民にとってももっとも期待する人物であった。

もちろん、母親のエリーザベトとしては、次期皇帝というよりもむしろ頼り甲斐のある息子に育て上げたかったが、二人の姉のときと同様、いやそれ以上に後嗣として、ゾフィー大公妃という大きな壁が立ちはだかっていることを覚悟していたに相違ない。いや将来の皇帝という意味から、エリーザベトにとっては二人の娘のとき以上に、ゾフィー大公妃の壁は強力で厚いものであることを思い知らされることになる。

フランツ・ヨーゼフは、ルードルフの育児に関しても、母ゾフィー大公妃と妻エリーザベトの間に立たされ、その調停は結局は不首尾に終わってしまった。その結果、母親の圧力に屈して、皇太子としての教育に関しては、経験も豊富であるゾフィー大公妃の手で行うことの方がよいと、自らを納得させざるを得なかった。(注1)

ルードルフは、五歳にしてドイツ語のほかに、フランス語、ハンガリー語、チェコ語を話すことができ、いろいろなことに興味を示す聡明な子供であった。しかし、体質的には虚弱な子供であった。

エリーザベトは、ルードルフを教養の高い皇太子として、職務を遂行できる優れた人間に仕立て上げるというゾフィー大公妃の教育の熱心さに、妬ましさはあるものの嘴くちばしを挟むこともなく、見守らざるを得なかった。

ルードルフの幼児時代の教育は、陸軍少将で伯爵のゴンドレクルに委ねられていた。皇太子は生まれ落ちるとともに軍人になる義務が課せられており、ルードルフは華奢で虚弱であったためか、まず身体を鍛えることを念頭に置いたゴンドレクルの教育は異常で厳しいものであった。

それに対してエリーザベトは、ゴンドレクルの教育方法は「六歳の子供を水治療法で驚かせ、戦士にしようとする常軌を逸する行為である」と非難し、ルードルフを「まさに間抜けな人間」にするのかと言わせるほど、ゴンドレクルの教育はあまりにも軍隊的な馬鹿げたものであった。

このように、たとえ皇帝学とはいえ、ゴンドレクルは年端も行かぬ子供に肉体的及び精神的に高度なものを要求し、恐怖心を起こすほどまで厳しく教育した。その結果、エリーザベトから見ると、ルードルフは、体力が低下し、青ざめ、ひよろひよろとした神経過敏な子供に見えた。



それは、ゾフィー大公妃も望まぬことであったが、ゾフィー大公妃の覚えめでたいゴンドレクールは実行した。ルードルフに恐怖心を起こさせる事実を知ったエリーザベトはフランツ・ヨーゼフに訴えたが、フランツ・ヨーゼフはしり込みした。

そこでエリーザベトは、フランツ・ヨーゼフに次のような最後通牒を突きつけた。

子供たちに関わるすべての点で、無限の代理権を私に保留して残しておくこと希望します。世話係の選択、居場所、教育の完全な遂行。一言でいえばすべてのことが、子供たちが成年になるまで完全に私だけが決定できるということです。それ以外にも私の個人的な役割に関わることは、私の世話係の選択、私の居場所、宮廷内における変更等のようなことを含めて、完全に私だけで決定することができるといふことを要望します。(注2)

その結果、フランツ・ヨーゼフは譲歩し、ゴンドレクールを罷免し、新しく養育係と教育係を任命した。エリーザベトに選任されて新しく養育係となったラトゥールは、ルードルフに自由主義的なものを見方を教えた。

しかし、その結末は、ゾフィー大公妃とエリーザベトの間の関係をさらに険悪なものにさせる結果となった。そして、ゾフィー大公妃及びその追従者は、エリーザベトとフランツ・ヨーゼフの仲を引き裂く陰謀まで試みた。

エリーザベトはもう挫けなかった。しかし、今までの詰め込み主義的な教育を排除したものの、エリ

ーザベトには子供としては信じられぬほどのルードルフの早熟さに対して、計画性のある教育方針を持つていなかった。したがって、やむなく成り行きに任せざるをえなかった。

長ずるに及び、ルードルフは自意識が高く、高い知的な才能を持つようになっていた。しかし、フランツ・ヨーゼフは、ルードルフに政務に関係することを拒絶した。

それは何故なのか。

フランツ・ヨーゼフはたしかに几帳面な性格であり、政務を正面から取り組む意欲はあったが、筆者にはフランツ・ヨーゼフはそれほど優れた君主とは思えない。どちらかと言えば摂政的な立場、いや影の女帝ともいうべきゾフィー大公妃の意のままに動かされ、すべてを自分で抱え込む、実務者タイプの人間にしか見えない。本来であれば、少しずつ引き継ぎながら、ルードルフにこの大任をまかせて行かなければならない役割もあるはずである。

まして、ルードルフが愚昧な皇太子であれば、自らすべてを背負ってゆかなければならないことが考えられるが、むしろ早熟なルードルフであれば何ら問題ないはずである。

と言うことは、フランツ・ヨーゼフは、オーストリア帝国の将来に対して、長期的に考慮しなければならぬ資質に欠けていたのではないか。あるいは、ルードルフが貴族主義的な体制を拒否し、宮廷と衝突し宮廷批判をするようになるにしたがって、徐々に父フランツ・ヨーゼフと相容れない考え方に発展したためとも考えられよう。

もしそうであるとすればそれは逆ではないか。ルードルフがまだ社会の風潮に染まっていない年代か

ら、後継者としての皇太子に政務を分担させなかったからこそ、宮廷内の改革が進まず、ルードルフの憤懣（うれま）が宮廷内にその捌け口を見いだすことができなかつたのではないか。その結果が、ルードルフを反体制的な行動に走らせたと考えられなくもない。

後述するような、ルードルフの反体制的な考え方や放蕩三昧の荒れた生活に対する責任は、ルードルフに対する誤った幼児教育を容認したゾフィー大公妃と、後継者としての皇太子に対する対応を十分なし得なかつたフランツ・ヨーゼフの二人にあるとも言える。

その一例として、ルードルフが娼婦ごときに手を出していたことは、父のもとでは何も任せられず、押すことも引くこともできなかつた、やり切れなさが引き金となつたのではないだろうか。

ここに、ルードルフの人生を狂わし、ついにはルードルフをして自殺にまで追い込む最初にして最大の不幸がつけられたと言えるのだと思う。

一方で、ルードルフは別な観点からエリーザベトの影響を受けているように思われる。

ルードルフは、母親から引き離された教育を受けたにしても、ゾフィー大公妃とフランツ・ヨーゼフが進める政治の蚊帳の外に置かれたため、同様に蚊帳の外に置かれたエリーザベトと政局について話合う機会は十分あつたはずである。

エリーザベトは政治に関心がないという見方も往々にされているが、関心がないのではなく、皇妃としての立場から正規に参与する機会を与えられていないため、少なくともフランツ・ヨーゼフの前では何ら関心を示していないだけの話である。

それは、エリーザベトの性格から、子育ての場合と同様、オール・オア・ナッシングとはつきり割り切っていることによるものである。その裏返しだが、フランツ・ヨーゼフも関心のなかつたハンガリーとの協調である。たとえそれが、ゾフィー大公妃に対する対抗心からであつたとしても、デアークやアンドラーシに利用されたということであつたとしても、エリーザベトなりに徹底して一貫していたことが読み取れるのである。

少なくとも、ルードルフは、母親からハンガリー革命以降のオーストリアとの関係について、様々な話を聞かされたことは十分想像できる。同時に、ルードルフが自由主義的な考え方に傾倒した原因の一つに、母エリーザベトが親密にしているアンドラーシの影響を強く受けていることも容易に理解できるのである。

ルードルフが生まれた年に、恩赦によりアンドラーシが亡命先から帰国しており、翌年の一八五九年には、イタリア統一戦争の敗北によりオーストリアは領土を割譲するなど危機に瀕していた。

さらに、八歳の一八六六年には普墺戦争の敗北、翌年にはハンガリーとの二重帝国の実現、さらには一一歳の一八七一年には普仏戦争の結果、オーストリアがドイツ国内から完全に閉め出しを喰つたことも、次の皇帝を任されることになる早熟なルードルフにとつては強烈な体験であつた。

この頃になると、流石のゾフィー大公妃も、次男フェルディナント・マクシミリアンの死と上記の戦争結果の帰趨により神通力を失い、ゾフィー大公妃に代わつてエリーザベトがルードルフに対するリベラルな教育を行うことができるようになってきた。

ルードルフが二〇歳を過ぎた一八八〇年代に入ると、ルードルフも新しい波が押し寄せてきているこ

とを実感として体験し、何らかの形でルードルフの考え方がフランツ・ヨーゼフにも伝わっているはずである。

しかし、フランツ・ヨーゼフ自らは新しい波のうねりを感じしなかったのか、それとも感知したにも拘わらず絶対容認できないこととして無視したのか。ついに、ルードルフの死まで、二人は完全に理解し合えなかったのである。

フランツ・ヨーゼフは、最後まで老朽船ハプスブルク号と運命をともにするような発言をしており、帝国をルードルフに委ねることをせず、死に至るまで自ら統治する覚悟であったように見受けられるのである。

ルードルフは、偽名を使って自由主義的な新聞に記事を公表したり、匿名の冊子で貴族の特権を批判したり、警察による反動分子の逮捕に引っ掛かったことも経験している。

思想的にルードルフに近いエリーザベトは、ヴェーンに住んでいる限りにおいては、フランツ・ヨーゼフとルードルフの間を取り持つことがあったが、一八六八年のマリー・ヴァレリーの出生のあとは、エリーザベトとルードルフの間は次第に疎遠になり、ルードルフが成人してからは、ルードルフはエリーザベトとは別の孤独に陥ってゆく。

一八八一年五月一〇日、ルードルフはベルギー皇女のシユテファニー（ベルギーには、実はフランス系のワロン語とオランダ系のフラマン語の二つの公用語があり、どう発音するかは筆者にはわからないが、ステファニーと書くのが一般的であると思われるもの）、敢えてドイツ語でシユテファニーと記述

した。この国は、二〇世紀にドイツ語も含めて三カ国語が公用語になっている」と結婚した。またもやオーストリア皇室とベルギー皇室との婚姻である。フランツ・ヨーゼフの弟フェルディナント・マクシミリアンが、ベルギー皇女のシャルロッテと結婚したことは、既に第7章で述べたとおりである。

結婚に先立ち、エリーザベトはその前年に、ルードルフの婚約者に会うために、ブリュッセルの皇室を訪れているが、僅か四時間しか滞在していない。現地ではもっぱら四二歳のエリーザベトの方が一六歳の花嫁より美しいとの評判が立てられていた。

このように美しくもなく理知的でもないシユテファニーと、聡明で自由主義的な考えを持つルードルフが結婚したのは、あまりにも相応しくない組み合わせであったが、何故そのようになったのか。ひとつ考えられることができるのは、メキシコの皇帝となったフェルディナント・マクシミリアンが一八六七年に同地で不慮の死を遂げ、その妻で異常を来した王妃シャルロッテへの償いの気持ちを込めてなのか、同皇室との関係を継続するために、同じベルギー皇室から選んだのだろうか。

選んだのはフランツ・ヨーゼフなのか、側近なのかそれともベルギー皇室からの自薦なのか。ゾフィー大公妃の死後のことであるから、エリーザベトも事前に相談があってもおかしくないと思うが、あるいは、ルードルフは「あちら側」の人間であるからと、エリーザベトは初めから関与しなかったのかもれない。とにかく、その決定の経緯について述べられていることを筆者は知らない。

エリーザベトはかつて、ゾフィー大公妃の側近から、エリーザベトよりもシャルロッテの方が美人であると比較されたことも手伝って、新興のベルギー皇室を評価していなかった。それは別としても、少なくとも、エリーザベトはベルギー皇室も、シユテファニーも好意的に受け取っていなかったことはた

しかである。マリー・フェシュテイチは、ベルギー王室を成り金趣味とまで断じた。

どのように考えても、この選択はルードルフには相応しくなく誤ったものであり、ルードルフを追い詰める一因となったということは間違いない。

そのベルギーは、一六世紀はじめの神聖ローマ帝国皇帝のカール五世の時代にオーストリアの領有するところとなった。カール五世はカルロス一世としてスペインも統治していたため、ベルギーは次いでスペイン領となっている。その後再びオーストリアとフランスの支配を受けたあと、一八一五年のウィーン会議でネーデルランド王国（オランダがベルギーを併合）が成立、一八三一年に同王国は二つの国に分離し、ベルギー王国が独立国家として発足している。

このようにして、ルードルフは、両親にも理解されず、妻のシュテファニーとも夫婦仲がうまくゆかずに孤立し、前述したように夜の女を相手にするなどして放蕩三昧に耽るのである。その結果が淋病をうつされ、公式には膀胱疾患とリュウマチと発表されるものの、次第に鬱状態に陥ってゆく。

そのようなときに、まさに、マリー・ヴェツセラが現れた。

## 第2節 マイヤーリング事件

一八八九年一月三〇日の払暁、ヴィーン郊外南西約三六キロにあるマイヤーリングの別荘において、皇太子ルードルフが拳銃で自殺した。この自殺はルードルフ一人のそれではなく、マリー・ヴェツセラを道連れにした心中事件である。

オーストリアにとっては第一の帝位継承者に死なれたばかりではなく、カトリックでは禁じられている自殺であり、しかも愛人との情死事件であることから、ヨーロッパ中からの注目の的となった。

したがって、フランツ・ヨーゼフ夫妻の悲しみもさることながら、帝国の威信を揺るがすことになる事件として、その対応はいかばかりであっただろうか。さまざま憶測や勝手な解釈による不確定な巷間の反応はさておき、皇帝一家におけるその経緯とその後の影響についてのみ触れることにしたい。

先ず、情死現場での確認と報告の情景描写を、コルティの記述を要約して述べてみたい。(注3)

一月三〇日払暁、皇太子の近侍であるロシエックは、ルードルフを起こすべく部屋のドアを叩いたが、返事はなかった。そこで、ホヨス伯爵とロシエックで再びノックし、開けてみようとしたが返事がなかった。斧でドアの羽目板を割って入り、薄明かりの室内を眺めたところ、恐るべき光景を目にした。ルードルフはベッドの縁に前かがみとなつて座り、口から血を流し、動かなかった。ルードルフの前のナイトテーブルの上にはグラスと鏡が置いてあり、ルードルフは毒を飲み、ストリキニーネが出血の原因であることが、ロシエックには分かった。傍らのベッドの上には若いマリー・ヴェッセラの死体が横たわり、青ざめて冷たく動かなかった。

皇太子の死に驚いたホヨス伯爵は転げるように駅に駆け込み、急行列車を停車させてヴィーンに向かった。彼は宮廷で高級副官パール伯爵に会い、フランツ・ヨーゼフ皇帝に伝えるよう頼んだ。高級副官は私にはそれが出来ないで、エリーザベト皇妃に伝えるようにと大至急で皇妃の侍従長ノプチャ男爵に来てもらうよう頼んだ。ノプチャ男爵は急いで来たが狼狽しいダ・フェレンツイ



のところを走り寄り、「どのようにして皇妃に伝えたらよいか」と尋ねた。

このあとの、エリーザベトとフランツ・ヨーゼフへの報告の経緯については、イーダ・フェレンツィの口述をマリー・ヴァレリーが書き留めた記録が残されている。(注4)

エリーザベト皇妃はちょうどギリシア語の勉強の時間となっていた。教師はホメロスの部分から教えていた。唇まで青ざめていたイーダ・フェレンツィが扉を開け、侍従長が緊急に話したいと申し出ておきますと伝えた。エリーザベト皇妃は、邪魔が入ったことに苛立って、「彼を待たせ、また後で来なさい」と言った。しかしイーダ・フェレンツィはいつもと違って興奮して、ノプチャ男爵をすぐ招き入れることを主張し、遂には皇妃にそつと言った。「彼は皇太子に関する困った重大な知らせを報告しにきたのです」。

エリーザベト皇妃は目配せしてギリシア教師に席を外させると、イーダ・フェレンツィに背を押されてノプチャ男爵が入ってきた。ノプチャ男爵は気をつかいながらつらい義務を果たした。そのすぐ後に再び部屋に入ったイーダ・フェレンツィは、皇妃が涙にかきくれて、すすり泣いているのを見た。

この辛い瞬間に、部屋の外から急いで弾みの付いた足音が聞こえた。それはフランツ・ヨーゼフ皇帝だった。「まだ駄目よ！ 入らないで！」とエリーザベト皇妃が叫んだ。イーダ・フェレンツィは扉に駆け込んだ。「陛下、お願いですから暫くお待ちになってください」。フランツ・ヨーゼフ

フ皇帝は、ノプチャ男爵とともに部屋の外で待った。つらい雰囲気があたりを漂った。

その間にエリーザベト皇妃の涙が乾いた。「私の顔が見られて？ もしそうなら、おお神様、夫に入ってもらって」。足早にフランツ・ヨーゼフ皇帝が入ってきた。皇妃が夫にその重苦しさを伝えたいのは言うまでもない。打ち砕かれて、頭を垂れてこの不幸な皇帝は部屋を出ていった。

ルードルフの、マリー・ヴェッセラとの逢瀬から心中に至るまでについては、恰好のスキヤンダルとして、あるいは悲劇的な純愛物語として、フランス人作家クロード・アネの小説「マイヤーリング」をはじめ、映画にバレエに取り上げられている（巻末に「参考」(3)と(4)でひととおり取り上げている）。

ルードルフの死の真相は不明である。父フランツ・ヨーゼフの治世に嫌気がさしたためなのか、皇太子として自由主義的な考えが通らなかつたためなのか、皇太子妃シユテファニーとの仲もしくりとなないことから芽生えた叶わぬ恋としての心中なのか、マリー・ヴェッセラは単に道連れにされた情痴事件なのか、ルードルフはその理由についての遺書を残していないので真実は闇のままである。いずれにしても、自分の心が満たされない、と思い詰めた結果の自殺であつたことには間違いないと思われる。

宮廷側は、このスキヤンダルを公にしないためにさまざまな偽装を行つた。敬虔なカトリック教徒であるハプスブルク家としては、大罪である自殺までは隠しおこなつたものの、ルードルフの死因は死亡診断書では「精神均衡欠如」とし、精神的混乱の発作による自殺であると発表された。

ルードルフの死体はホーフブルクの彼の住居に一応安置されたが、マリー・ヴェッセラの死体は密かにハイリゲンクロイツに葬られた。マリー・ヴェッセラの母であるヘレーネ・ヴェッセラ男爵夫人は、

娘を返してほしいとエリーザベトに申し入れたが、マリー・ヴェッセラとの交際のために息子を奪われたと感じていたエリーザベトは、追いつきように男爵夫人に断っている。

さらにエリーザベトは、今回のルードルフとマリー・ヴェッセラとの交際は、マリー・ヴァラーゼーの手引によることが判明したことから、あれだけ可愛がつてきたマリー・ヴァラーゼーを宮廷から遠ざけるようにした。

ルードルフは、エリーザベトへの手紙で、両親への愛情と感謝の気持ちを述べているほか、エリーザベトに、自分をハイリゲンシュタットのマリー・ヴェッセラの隣に葬ってほしいとも頼んでいる。このことから、マリーを道連れにしなければ死ねなかったであろうとは判るが、マリーとのために死んだのではなかったことは間違いない。

エリーザベトは、ルードルフの死に対してどのように受け止めたのであったか。

そこには悔悟がある。すなわち、息子の死には近親結婚のヴィッテルスバッハ家の血筋が影響しているのではないか、育児を姑に奪われたままの息子との関係が修復されていなかった、始めからわかっていたシユテファニーとの不幸な結婚に反対しなかった、長じたあとも息子が困難に直面したとき助けてあげられなかった、平常時ですらあまり構わなかったり、気安く接することができなかった、などと自らを責めた。

マリー・ヴァレリーによると、エリーザベトは、「もし、ルードルフを自分の手に返してもらったことができたなら、皇太子としてではなく、娘であつて欲しい」(注5)と述べている。

皇室という血筋の問題は別としても、本来であれば、母親として当然のことながら子に対しての愛情を注がなければならなかったし、したかったことではあるが、唯一の男子として皇太子として、帝王学教育を施すことに熱心であったゾフィー大公妃の妨害工作により、エリーザベトにはそれができなかったし、させてもらえなかった。

それにしても、すでにゾフィー大公妃の死後一七年近くも経過しており、政治に関してお互いにフラツ・ヨーゼフよりも考えが近かったにも拘わらず、「あちら側」としてそれまでの冷えきった空白を素直に埋めることができなかったことは、一旦決めたことは最後まで押し通すという柔軟性の欠けたエリーザベトの性格にも原因があった。

ルードルフ死して初めて、エリーザベトは取り返しのつかない後悔に苛まれたのであった。そのためルードルフの死を境に、エリーザベトの気持ちに変化が生じた。

その一つは、ルードルフの死後、肉親等の死に直面しても動じることはなく無表情を通した。エリーザベトは、その後のすべての肉親の死は、ルードルフの死に比べると悲しくないとまで告白している。

その後の肉親の死、すなわち、一八九〇年の姉ヘレーネ、一八九二年の母、一八九三年の末弟マックス・エマヌエル、一八九七年の末妹ゾフィー（事故死）は、いずれも、自分の腹を痛めた子のルードルフには及ばなかったということなのであろう。

もう一つは、生涯にわたった黒の衣服を纏うことを頑に押し通した。これは、エリーザベトのルードルフへの偽らざる鎮魂の意志の表れである。

ルードルフはさらに、エリーザベトへの手紙のなかで、「私は、父の子として価値のない存在である

ということにはつきりしている」とも述べている。ルードルフから手紙をもらっていない皇帝フランツ・ヨーゼフに対してエリーザベトは、ルードルフのフランツ・ヨーゼフに対するその無念さを打ち明けたのであろうか。筆者はそれに言及した著書に出くわしていない。

しかし、筆者には、ルードルフは生前に口頭ではその旨を、フランツ・ヨーゼフに伝えたのではないかと思われる。皇位継承者であるルードルフから、遺書とも言える手紙をもらえなかったフランツ・ヨーゼフは、不満ひとつも言わず諦めたと言う。その内心たるや、如何ばかりであったであろうか。

ルードルフは、マリー・ヴァレリーへの手紙をも残していた。その手紙は一月三一日にエリーザベトからマリー・ヴァレリーに渡された。その中でルードルフは、自らの死の理由には触れずに、マリー・ヴァレリーに、父フランツ・ヨーゼフが死んだあのオーストリアは住みにくくなるのでと、夫（この時点ではまだ婚約中）とともに外国への移住を勧めている。

ということは、父フランツ・ヨーゼフの政治理念はルードルフの理念とは異なっているが、頑迷固陋ではあるものの実直なフランツ・ヨーゼフが皇帝に君臨している限りでは、オーストリアという国家は維持できるかも知れない。しかし、フランツ・ヨーゼフの死後は帝国は解体するのではないかと読んでいたのであろう。

事実、現代の目から見ると、第一次世界大戦に突入したことにより、オーストリア帝国はたしかに崩壊した。しかし、このような戦争に到らずとも、イタリア統一戦争と普墺戦争の敗北を教訓とせず、時代の大勢について行けない体質の老大国は、いずれ自滅の道へ転げ落ちて行くことは必至であったと

言うことができよう。

繰り返しになるが、それにしてもルードルフはフランツ・ヨーゼフには遺言状を残していなかった。父と子の個人的な反発というより、時代の変革を読み取れなかった父に対して、何を言っても無駄であると判断したのではないだろうか。

マイヤーリングは、ヴィーンの西南三六キロメートルの位置にある。この建物は、狩猟好きのルードルフが、一八八六年にハイリゲンクロイツ修道院から購入して狩猟館に改造したもので、情死の現場となったあと壊された。現在の建物は、フランツ・ヨーゼフがカルメル派の修道院と礼拝堂に建て替えて同派に寄付したものである。

エリーザベトの要請により、ルードルフの部屋のあった所は礼拝堂となった。現在では、その中に館の部屋を再現した記念室があり、ルードルフを偲ぶ肖像画が残されているに過ぎないが、それでも観光箇所として観光客が訪れている。

ルードルフの死体は、現在、その地下が諸王の霊廟となっているヴィーンのカプツィーナー教会に、フランツ・ヨーゼフ、エリーザベトと並んで同じ部屋に葬られている。

筆者は二度ほどマイヤーリングのこの礼拝堂を訪れたことがあり、ハイリゲンクロイツに葬られたマリ・ヴェッセラの墓まで足を伸ばしている。木立のなかの鉄柵に囲まれた墓は、積み上げられた左右の石に支えられるように石碑がはめ込まれ、その上に長めの十字架が乗せられている。石碑には次のような文字が刻まれていた。

墓碑銘曰く『マリイ・ヴェッセラ男爵令嬢、一八七二・三・一九誕生、一九八九・一・三〇死去、  
「人は花のようにぱつと開き、砕かれる」とある。

### 第3節 ギーゼラとヴァレリー

既に見てきたように、フランツ・ヨーゼフとエリーザベトの間には、長女のゾフィー、次女のギーゼラ、長男で唯一の息子のルードルフ、三女のマリイ・ヴァレリーの四人の子供たちが設けられた。

一八五五年三月五日に生まれた長女ゾフィーは、皇帝夫妻が一八五七年にハンガリー訪問の際に次女ギーゼラとともに連れていかれたが、ブダペスト滞在中に二歳で亡くなっている。

翌一八五六年七月一五日生まれの次女ギーゼラと、一八五八年八月二日生まれの前男爵のルードルフも、長女のゾフィーとともに、祖母のゾフィー大公妃に育てられていることもすでに述べた。

ドイツ語の著書では、ティス・ライタニエンとトランス・ライタニエンという呼び方が出てくる。それは、「ライタ川のこちら側」と「ライタ川のあちら側」という意味で、この川は、ヴィーン南西の山中を源とし、ヴィーンの南を弧を描くようにして流れ、ハンガリーに入ってからドナオ川に合流する、同大河の支流のひとつである。現在では、オーストリアのブルゲンラント州の大部分もその中に入ってしまうが、ヴィーン宮廷側からすれば、ハンガリーはライタ川のあちら側になる。それはすなわち、地域だけではなく、ハンガリーに与するエリーザベトも「あちら側」の代表者を意味する。

それに対して、エリーザベトから見れば、ゾフィー大公妃を頂点とするヴィーン宮廷は「ライタ川の

あちら側」(実際の使われ方としては「ライタ川のこちら側」であるが)となり、ゾフィー大公妃に育てられたギーゼラとルードルフは、エリーザベトの手の届かない「あちら側」の子供となる。

彼らがエリーザベトから取り上げられて、ゾフィー大公妃によって育てられたということは、エリーザベトにとってはどうすることもできないことであった。後年になってエリーザベトは、三人の子供たちはゾフィー大公妃に人質にとられたと述懐している。結局、エリーザベトは彼らを「あちら側」の子供として峻別し、彼らが成長してからも無関心とならざるを得ず、母親としての義務や愛情を放棄してしまっている。ここでもエリーザベトの性格がはっきりと示されている。

しかし、このことは、罪のないギーゼラやルードルフには気の毒な結果となった。このうち、子供にとって過酷な軍人教育を受けさせられたルードルフについては、それを見かねたエリーザベトの懇願によって、納得ゆく教育係に替えてもらったこと、そのため、ルードルフも成長するにつれて、エリーザベトに近い自由主義的な考えを持つようになったので、それほどエリーザベトに疎まれていない。

それに比べるとギーゼラは、母親代わりに育ててくれた祖母のゾフィー大公妃の死後も、エリーザベトから母親らしい愛情を受けることはなかった。したがって、次女のギーゼラは、エリーザベトに関する著作のなかでは気の毒なほど影が薄く、その人物像がほとんど浮かび上がってこないのである。

結婚についても、エリーザベトの末弟マックス・エマヌエルの希望を知ったエリーザベトによって仕組まれたものであった。一八七三年四月二〇日に一六歳のギーゼラが一〇歳年上のレオポルト皇子と結婚したことが幸せであったかどうか、まったく見えて来ない。



しかも、この結婚にあたって、エリーザベトがギーゼラの婚礼の支度に、母親としての役割を十分尽くしたとは言い難い。まだ不仲になる前であるが、ゾフィー大公妃が自分にしてくれた婚礼の支度よりも劣っていたことを非難されても仕方ない。また、あまり器量のよくなかったが初々しいはずの花嫁ギーゼラよりも、その母親である三五歳のエリーザベトの美しさがそれに優り、出席者がエリーザベトに魅了されてしまったのは、皮肉と言うしかない。

この結婚式で一四歳のルードルフが、姉ギーゼラとの別れに涙を流し嗚咽に堪え、それにつられたギーゼラも嗚咽を漏らしていたという目撃者の報告もあるが、これは、約一年前に祖母ゾフィー大公妃に死なれた後、エリーザベトの愛に飢えていた「あちら側」の幼き姉弟の切なさだったのであろうか。

翌年一月八日にギーゼラに長女エリーザベトが生まれ、エリーザベト皇妃は三六歳で「祖母」となった。美しさが絶頂で魅力たっぷりのエリーザベトが「おばあさん」というのは、あまりにも似つかわしくない事実であった。エリーザベトは初孫に会うためにバイエルンを訪れている。

その翌年には次女のアオグステが生まれたが、エリーザベトは二人の孫に対して、祖母としてあまり親身になっていない。むしろ冷たい対応をしていることが、マリー・フェシュテイチとルードルフに当たった手紙でも読み取れる。

そのようなエリーザベトの態度に対して、ギーゼラはエリーザベトに母親としての愛情は受けたことはなかったようにも見えるのである。そのためもあって、エリーザベトに対して、割り切つてごく普通に対応しているように見える。一例として、エリーザベトがサセットで落馬事故を起したあと、ミュンヒェンに立ち寄ったが、出迎えたギーゼラは冷たくおざなりの態度をとったことを見ても、エリーザベ

トへのお返しとして、冷たく無関心に近い対応していることが分かるであろう。

娘としては何とも気の毒な半生であった。

ギーゼラは、その後の一八八〇年と一八八三年に二人の息子を出産している。筆者の手許にある写真集には、この二人の孫ゲオルクとコンラートを加えて、皇帝夫妻、ギーゼラ夫妻、マリー・ヴァレリー夫妻が揃って食事しているイラストがあるが、それはともかく、ギーゼラはさらに一二人の孫に恵まれて、結果的には幸せな家庭を築き上げたのではなかったか。またそう思いたい。

三女のマリー・ヴァレリーについては、すでにさまざまな場面で言及しているので簡単に述べたい。

マリー・ヴァレリーは、一八六八年二月二日に、エリーザベトが訪問していたブダペストで生まれた。これは、ゾフィー大公妃の手が及ばないハンガリーというエリーザベトの計算が働いての出産であった。

それに対して、ヴィーンの宮廷では、エリーザベトはなぜブダペストで出産するのか、そして、もし皇子であったら、ハンガリーの守護神である聖王イシュトヴァーン（ドイツ語でシュテファン）の名が命名されるのではないかとまで恐れを抱き、怒りを隠さなかった。

さらにヴィーンでは、マリー・ヴァレリーが、エリーザベトとアンドラーシの間の子ではないかとまで、まことしやかに囁かれたほどであった。実際にはそのようなことはなかったが、ヴィーンではそれほどまでにエリーザベトとハンガリーとの結びつきに神経を尖らせていた。後年、当の本人であるマリー・ヴァレリーは一五歳のころになって、エリーザベトとアンドラーシとの噂話を知ることになる。

ここで、エリーザベトはやつと自分の意に適う「こちら側」の家族を持つことができた。その喜びは一入で、溺愛することになることはすでに述べたとおりである。またその極端さは、マリー・ヴァレリーから目を離さず、自分の同意を得ない限りは誰にも触れさせなかった。エリーザベトは五人目を設けることがなかったので、マリー・ヴァレリーは、エリーザベトの愛情を一身に受けている。

エリーザベトは、ルードルフが結婚に恵まれなかったことから、マリー・ヴァレリーに對しては、そのようなことのないよう腐心している。その結果、オーストリアでは数少ない裕福なハプスブルク家の一つ、フランツ・サルヴァートル大公と結婚させた。

フランツ・サルヴァートル大公の祖父は、ナポレオン統治時代のあと、王政復古したイタリアのトスカナ大公となったハプスブルク家のレオポルト二世である。その後のリソルジメント運動（イタリア復興運動）の結果、一八五九年に大公国は消滅してしまつたが。

マリー・ヴァレリーは、エリーザベトが暗殺される約二カ月前の一八九八年七月二日に、「宮廷生活は、人間関係をことごとく排除している」（注6）と言ひ、さらに、結婚して初めて本当の家庭生活を味わたたと述懐しているほどであり、フランツ・ヨーゼフを中心とした家庭生活が如何に味気ないものであつたかが、この発言からも窺えるのである。

マリー・ヴァレリーにとつて、エリーザベトが注ぐ愛情はときには有難迷惑のこともあつたことは想像できるが、日記を読んだ限りでは、エリーザベトの考えについて行けないこと、理解できないこと、直してほしいことは述べているが、反発するような態度は見られない。

ただし、エリーザベトとは異なり、ハンガリーやスラヴ民族は嫌いであり、ゾフィー大公妃や両親と

違い、親ドイツ民族主義で親プロイセンであるという。また、エリーザベトが全幅の信頼を寄せていたアンドラーシも嫌いである。ルードルフとは反対に、両親に対しては、心情的にはどちらかというところ、エリーザベトよりもフランツ・ヨーゼフ寄りであるという一面をもっている。

#### 第4節 夫・父としてのフランツィ

第2章第3節では、子供に恵まれないフェルディナント一世の後継者として、フランツ・ヨーゼフの父であるフランツ・カールも皇帝として即位したかったし、妻のゾフィー大公妃も一度は皇妃になりたかったことを紹介した。

しかし、それに反して、ステイーヴン・ベラーの「フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国」によると、ゾフィー大公妃は初めからフランツ・ヨーゼフを皇帝にする計画で、それに積極的であり、フランツ・ヨーゼフは幼いうちから帝王学を修めさせられているという。以下、同書からの引用を参考に、フランツ・ヨーゼフの幼少時代から青年期に及ぶ人間形成を辿ってみたい。(注7)

ゾフィー大公妃は、長男のフランツ・ヨーゼフを、六歳のときに女性の保育係の手から離し、代わって、首席傅育官による未来の君主としての教育をさせている。首席傅育官のもとで、フランツ・ヨーゼフは、六歳のときは週一三時間、七歳になってからは週三二時間の教育を受けさせられている。

その内容は、ドイツ語をはじめとする、フランス語、ハンガリー語、チェコ語、イタリア語などの語学教育のほか、書き方、地理、宗教、図画、ダンス、体操、フェンシング、水泳、軍事教練など盛り沢

山である。歳を重ねるにしたがって科目も増えていったが、何故か英語は含まれていなかった。まじめで素直なフランツ・ヨーゼフは、これらの勉強に一生懸命励んだため、一三歳のときにストレスからくる病気になるほどであった。

未来の皇帝として当然のことながら、フランツ・ヨーゼフの教育のなかで重要だったのは軍事学であった。三歳のときから軍服を着せられ、五歳のときには「私が一番好きなのは軍隊のものです」と語っている。そして、一三歳で自分の連隊を持った。

この軍隊という生活様式からフランツ・ヨーゼフは、几帳面さ、厳格さ、実直さ、責任感や義務感などの性格が醸成され、それが生涯にわたってのフランツ・ヨーゼフの頑固さにつながっているとみることができよう。

先ず夫として。フランツ・ヨーゼフは自分で選んだエリーザベトを、生涯愛しつづけた。愚直なほどまでに……。エリーザベトもちろんフランツ・ヨーゼフを愛したし、夫を裏切ってほかの男性と愛を語ることはなかったが、二人は必ずしも性格が合っていたわけではない。むしろ相違点の方が多い。しかしそれよりも、次の二つの点で、フランツ・ヨーゼフは、意識していなかったとしても、最初からエリーザベトの幸せを抹殺してしまったのである。

最初の一つは、妻に対する愛情。たとえ結婚前から皇帝という帝国の最高位に就いていたとしても、そしてたとえ政務に忙しかったとしても、また、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフのその地位のためにある程度の我慢をせざるを得なかったとしても、結婚早々から幼い妻に十分な愛情を注ぎ、愛を語り

合うことによって妻を満足させることができなかつたことは、そのことだけでもエリーザベトの不満を解消することは到底できなかった。

もう一つ家庭の面からも、ゾフィー大公妃の言いなりになって、妻を庇いきれずに孤立させてしまったことである。少なくとも育児に関してのみでも、エリーザベトにその主導権を渡していれば、エリーザベトも育児という目的を持ってそれに専念できたことは間違いない。それによって、不満も孤独感もある程度軽減できたのではなかつたか。

これら二つのいづれについても、ゾフィー大公妃という大きな障壁が立ちはだかつていたことによるもので、フランツ・ヨーゼフとしても、公私ともにマザーコンプレックスの重圧を撥ね除けることができなかつた事情に同情はできるかもしれない。

しかし、その撥ね除ける力の欠如が、エリーザベトを押しつぶし、生涯にわたってエリーザベトに不幸を背負わせることに繋がって行くのである。原因の発生源はもちろんゾフィー大公妃であるが、それを除去できなかったフランツ・ヨーゼフが第一の責任者である。

それは、たとえエリーザベトの要請に対して、それに代わる物的な面の提供で応えることをしたとしても、それでエリーザベトの心的な面での不満を償えるものでは到底なく、また、エリーザベトがハンガリーに対する肩入れすることを全面的に容認したとしても、エリーザベトにとっては、生涯にわたって拭い去ることのできない大きな衝撃だったのである。

その憤懣が、たとえエリーザベトのその後の生涯の行動を決定づけたとみても、間違いないところであろう。はじめに努力不足の誤りありきである。

そのためもあって、フランツ・ヨーゼフは一生涯にわたって涙ぐましいほどに、エリーザベトの湯治行・旅行・狩猟行等のすべてにわたって、ほとんど無条件に許したし、奇行とみていたその他のエリーザベトの行動すら、改めるよう強く要請することもなかった。健康を害することを除いては。

そこには、新婚早々からのエリーザベトが受けた苛めや、エリーザベトの欲求不満に対して、母に刃向かうこともできず、唯々諸々とならざるを得なかったことに対する自責の念があり、エリーザベトに申し訳ない気持ち脈々と心の底に流れていたからであろう。

しかしそれにも拘わらず、フランツ・ヨーゼフは、エリーザベトを愛することはできても、また、エリーザベトが要求することに応えることはできても、エリーザベトの心を癒し慰めることはできなかったし、全身で優しく受け入れる包容力がなかった。そこにフランツ・ヨーゼフの無骨さとも言うべき性格が見て取れるのである。妻が本当に求めている精神的・心理的な事柄に積極的に応える能力がなかったと言わざるを得ない。

次に家長として。皇帝一家の晩餐は退屈極まりないものだった。座るのも会話も序列どおり、フランツ・ヨーゼフへの質問は禁止されており、そのフランツ・ヨーゼフの発言そのものも、高度な内容のものでもなくまた知的なものでもなかった。皆、食事にもお互いの存在にも退屈し、フランツ・ヨーゼフが席を立てば食事は終了となったので、エリーザベトは食事中での会話を諦めざるを得なかった。むしろ終わるとほっとするような雰囲気であった。エリーザベトはそのうち、自ずと家族で一緒に食事を摂る習慣がなくなってしまうた。

これにはフランツ・ヨーゼフに責任がある。ただでさえ政務で忙しい立場であるので、この食事というまったくの私的な家族団欒の席では、少なくとも楽しい会話が交わされてしかるべきであったのに、フランツ・ヨーゼフはそのような努力はしなかった。いや、食事のときですら政務に関することで頭が一杯だったのであるうか。それとも皇帝家族の食事時の習慣を単に墨守していただけなのだろうか。

そうできなかった理由はほかにあつたのかもしれない。幼いときからゾフィー大公妃の厳しい躾により、食事のときにおいてすら皇帝としての威厳を示す必要のある（？）雰囲気の中で、楽しい会話で話が弾むというような経験がなかったのかもしれない。

ゾフィー大公妃が存命中は、一日置きにゾフィー大公妃と一緒に朝食を摂ることが義務づけられており、ゾフィー大公妃に根掘り葉掘り質問責めにあうことになっており、そのころから続いたであろう、食事中でのこのようなきくしゃくした雰囲気の中では、楽しい会話が弾むことは考えられる状況ではなかったと容易に推測できるのである。また、エリーザベト自身も、ゾフィー大公妃に躾られたギーゼラヤルドルフと、会話を交わすような気分になれなかったのかもしれない。

フランツ・ヨーゼフと三八歳も年が離れている一番幼いマリー・ヴァレリーですら、食事中のそのような雰囲気に耐えられなかったという。

そのマリー・ヴァレリーが三〇歳のときにこう日記に記している。「パパと一緒にいると、見知らぬ人と一緒にいるような圧迫を感じることは悲しいのですが、私はどうすることもできません」。しかしそれに続いて、「子供たちはかつて私がそうであったほどには感じていないように見えますし、パパも打ち解けています」とも加えているので、やはり、子供と孫に対するフランツ・ヨーゼフの対応が異なる



つていられるように受け取れ、孫にだけは軟化するようである。(注8)

食事の席では給仕する従者もいるはずであるし、それらの者の前で家庭内の全くの内輪の話や帝国のマイナス面の話はタブーであることは想像に難くない。しかし、食後であれば、親子水入らずの団欒の席は設けられたはずである。恐らく、少なくともゲレーにおいては、筆者にはそれが可能であったような気がするのである。しかし、そのような習慣は形成されていなかったのであらう。

フランツ・ヨーゼフが、食後に給仕などの従者を外した席で、まったく家庭内の内々の話として限定して、政治制度、帝国内の政局、外交問題などについて、自由主義的な傾向にあるエリーザベトやルードルフ皇太子の判断や意見を聞き、ざっくばらんに話し合う機会をつくったならば、少なくとも、帝国の将来がもう少しましな方向に舵取りできたのではなからうか。

ゾフィー大公妃が存命中の一八七二年の五月以前ならともかく、それ以降であればそのような場は、フランツ・ヨーゼフがその気であれば設けることができたはずである。結果的には、フランツ・ヨーゼフにはそのような意識は感じられず、そうする努力に欠けていたと見るべきであらう。

それが、たとえいかに慣習を優先すべき決まりであったとしても、あるいはフランツ・ヨーゼフの性格から来るものであったとしても、帝国の危機、家庭の危機に対して何ら感ずることもなく、また、家族に話すこともなく、ただ従来の家長としてのしきたりのみを徒に踏襲しただけでは、本来の家長としての役割を果たしたことになる。

子供に対して。フランツ・ヨーゼフは、できるだけ子供たちと時を過ごすことに心掛けた。しかし、

子供が長ずるにしたがってそうとも言い切れなくなっていた。

特に、自由主義的な考えに傾倒して行くルードルフとは、政治に対する考え方があまりにも乖離して行くにしたがって、疎ましく思い、さらに苦々しく思うにつれて、ルードルフの考えを受け付けなくなってしまうのが真相のようである。

一方のルードルフは、世界の趨勢について父に直接語り、父の政治姿勢に対して面前で批判したことがあったかもしれない。いや、ルードルフは早いうちからそうすることを諦めていたのかもしれない。その結果が、自由主義的な市民と交流し、いかがわしい女性との交遊を取り沙汰され、警察からその行動をチェックされるようになった。

果たしてフランツ・ヨーゼフは、ルードルフを自らの後継者として考え、そのための手だてを講じたことがあったのであろうか。逆に、自らの施政を脅かす危険な後継者と考えたのであろうか。筆者が調べた限りではどうもそのような努力がなされなかったように思えてならない。そこに、フランツ・ヨーゼフには、頑固さと全て自分でやらなければならないと気が済まない性格が窺えるのである。

それが、マイヤーリングの悲劇に繋がったとも言えるし、だからこそルードルフは、フランツ・ヨーゼフに対しては、遺書を書かなかつたと言うことが首肯できる。それと似たようなことは、メキシコ皇帝になった弟のマクシミリアンについても言えるであろう。

マクシミリアン大公は、フランツ・ヨーゼフよりも自由主義的な考えをもっており、フランツ・ヨーゼフによるオーストリアの施政に対して不満をもっており、フランツ・ヨーゼフとの兄弟仲も良くなかつたとも言われている。

ゾフィー大公妃は、フランツ・ヨーゼフよりもマクシミリアン大公の能力を買っていたように言われているが、王権神授説を固守するゾフィー大公妃とそれを一途に継承するフランツ・ヨーゼフの二人の砦を、マクシミリアン大公をはじめ、家庭内の誰も崩すことはできなかったことになる。

そこに、家庭内の面からも、フランツ・ヨーゼフは、ハプスブルク王家の悲劇を何らなすところなく作ってしまったのである。

心のゆとりと趣味。フランツ・ヨーゼフのマイナス面に追い打ちをかけることにもなるが、厳格な軍人タイプの皇帝として、フランツ・ヨーゼフには狩猟を除いては趣味らしい趣味はなかった。音楽に無感覚で文学にも無理解であった。

そのあたり、若くして皇帝になり、政権に迫られるフランツ・ヨーゼフには、趣味に時間をかけるゆとりもなかったのではと、同情したいものではある。

一方のエリーザベトも、音楽に関してはジプシー音楽を除いては興味がなかったようである。これは思い入れているハンガリーにジプシー（ドイツ語でツイゴイナーという）が多く住んでいることによるものではないかと思われる。同時にジプシーの生活が、定住せず、しかも社会に束縛されない自由な生き方であることに、エリーザベトが共感を持ったためではなかったかというような気がしなくもない。

話は逸れてしまったが、エリーザベトは、既に少女時代から詩作はしてきたし、ハイネの熱烈なファンであり、シェークスピアの「真夏の夜の夢」にも思い入れが深く、古代ギリシアの文学や芸術にも造詣が深かった。

それに対して、フランツ・ヨーゼフは、趣味とは別に、結婚六年目にして、ゾフィー大公妃とエリーザベトとの確執に嫌気がさして初めて情事に走ったという見方もされている。しかし、その相手は明らかにされておらず、それ以上詳しく触れていないため、一時的なものであったようであり、エリーザベトも皇帝の裏切りを認めざるを得なかったようである。

当時のヴィーンの宮廷の貴族たちは、政略結婚と身分重視の結婚が一般的なこと、それとあわせて情事を楽しむことは常識とされており、皇帝のそれも理解されたと言われている。余談になるが、当時作曲された数多くのオペレッタにも、アパンチュールを主題にしたものが多いことでも首肯されよう。

たとえば、「こうもり」「メリー・ウイドウ」「ヴィーン気質」などがそれである。それとは別に、皇帝が浮気をした筋書きではないが、オペレッタ「白馬亭にて」では、キャストとしてフランツ・ヨーゼフも登場している。

### 第5節 妻・母としてのシシー

エリーザベトについては、当然のことながら、本節以降の章節を含めて全章節にわたって述べているので、それによってすでに彼女の性格が読み取れていると思う。

ここではそれらを凝縮してあらためて取り上げてみると、エリーザベトの性格には、人間関係において好き嫌いが激しいこと、中途半端な妥協は一切しないこと、自分がこう思ったら徹底的に押し通すことに、その特徴があったと整理することができよう。

たしかに、エリーザベトは、人間の好悪に対する対応があまりにもはっきりしていた。自分に好意的でない人は敵のように扱い、自分を軽蔑したり侮辱した人のことは決してを忘れなかった。言うなれば正に執念深い性格ということである。自分に非がある場合でも、口実を見つけて他人のせいにすることもあり、その好ましからざる不誠実な面について、側近のマリー・フェシユテイチによって指摘されている。また、人の美醜に関しても徹底していて、自分に直接関係ない人に関しても、姿の美しい人間が好きだったり、地位の低い人に対しては見下すような態度を示した。これらについては褒められたことではないが。

その反面、自分に好意的であつたり共感を示す人や、自分に心服している人に対しては好意的であり、見捨てたり突き放したりすることはなかった。それは特にゲデレーにおいても見られることであるが、乗馬に関係ある人々がその城館に来ると、地位の上下に分け隔てなく歓迎している。

以上のような性格は、宮廷儀礼や社会通念にはまったく通用しないことともなり、それがエリーザベト自身の不幸にまで影響を及ぼすことになるが、おそらくそのほとんどについて、あらかじめ乃至その経過のなかで、その及ぼす影響について関知していた、いや自覚していたと思われるが、その結果がどうなるかと関係なく押し通した。

以下、そのような性格を踏まえたくえで、家庭人としてのそれぞれの役割を分析してみたい。

まず、皇妃として。フランツ・ヨーゼフとの婚約成立の翌日である一八五三年八月一九日に、エリーザベトは彼女の女家庭教師ロディに、泣きながら心のなかを次のように打ち明けている。

「やはり私は皇帝を愛しています。彼が皇帝でなかったらなあ！」

そのときのエリーザベトは、自分はまだ若いし、平凡な人間であり、皇帝を幸せにできるかどうか、自信がなかったと思われる。まったく予期しなかったプロポーズを受けたにせよ、短時日での邂逅かいこうの結果であつても、皇帝を愛することには変わりなかった。

他方で、確かにその時点では、エリーザベトは、宮廷内に入ってからどんなことが待ち受けているかについては、はっきりと分かっていなかったはずである。自らの見合いを予知できたかもしれない姉のヘレーネとは違い、心の準備などできようはずがなかった。

それと、従順で大人しいヘレーネとは違い、エリーザベトは、社交界や家族の祝い事などしかつめらしい会合は好きでなかった。それにも拘わらず、末端貴族の一員として、宮廷でのよそよそしいしきたりはある程度想像できたと思われ、自分の将来の立場に恐れをなして、フランツ・ヨーゼフが皇帝でなければ、との本音が出たのかもしれない。

それが、「皇帝でなく仕立屋だったらなあ！」という記述をしている伝記本もあるくらい、皇帝の妻として仕えることへの大変さを予期してか、それ以外の職業としてたまたま仕立屋が思い浮かんだのであつて、皇帝であるフランツ・ヨーゼフとの結婚を、その他のいかなる職業であつたとしてもフランツ・ヨーゼフ個人への愛とを切り離して、そのような発言となつたものと思われる。

このようなエリーザベトの漠然とした想像が、結婚直後から忽ちにして「負」の重荷として、現実のものとなつたことは既に述べたとおりである。

妻としての自覚。エリーザベトは、夫の治世に口出しするような政治好きなタイプの皇妃ではなかった。もちろん、政治に口出しすることはゾフィー大公妃から禁じられていたことである。ただハプスブルク王家の夫を支える妻として、夫と運命共同体であるオーストリアの将来について関心があったことは当然であり、さらに、帝国をよりよい方向に導くために夫に助言し、一緒に考えろという意欲があったであろうことは十分理解できる。

その顕著な例が、一八六〇年のイタリアでの敗北で、エリーザベトは実感としてオーストリアの将来の危うさと、ゾフィー大公妃の方針の誤りに気がついていた。これは政治好き云々以前の問題である。このとき、エリーザベトは妻として、フランツ・ヨーゼフに停戦とともに講和条約の締結を進言しているが、フランツ・ヨーゼフはその助言を受け入れていない。この点からも、むしろフランツ・ヨーゼフの方が事態を正しく判断していないことを読み取ることができるのである。

二〇歳を越えたばかりのエリーザベトは、若さのせいもあつてか、出自の家庭的感覚からか、このころすでに市民の感覚、いや、政治制度の趨勢について革新的感覚を掴む術を心得ていたと見ることができるのである。ただ、エリーザベトのこの革新的感覚が、支配下の他民族の庶民と違い、支配国のヴィーン市民にどれほど伝わっていたかは疑問である。

一方で、妻として、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフをいたわり励ますということがなかったわけではもちろんない。その一例として、イタリア戦線の前線へ赴いているフランツ・ヨーゼフの安否の心配がそれである。そのような危険な前線にまで行かせてくれとまで、フランツ・ヨーゼフに申し入れている。もちろん断られているが、フランツ・ヨーゼフ不在のヴィーンで、ゾフィー大公妃と一緒にいる

ことの不安な気持ちも働いていたことも否定できないが。

また、一八八二年九月にイタリアのトリエステ（もちろんオーストリアの支配下にある）を訪問した際、フランス・ヨーゼフに対する暗殺計画が未然に防がれたあと、さらに慎重を期して、馬車の中で、フランス・ヨーゼフには多少でも安全である海側の席に座らせ、自らは陸側の席を選んで座ったことである。これは明らかに、自らの身を挺して皇帝である夫を守るといふ配慮である。もう、このころでは自らの死に対する恐怖がまったくないことも手伝わっているのであるが。

そのような配慮とは裏腹に、自らも当事者の一人であり、祝福される立場にある一八七三年の銀婚式の際も、大夜会には僅かな時間しか出席しなかったし、その他の儀式はフランス・ヨーゼフに任せきりだった。これは、フランス・ヨーゼフに対する思いやりの欠如というよりは、やはり、エリーザベトにとっては、仰々しく賑やかな場が嫌いであつたことによる意思表示のひとつに過ぎないのである。

家族生活への憤懣。前節のフランス・ヨーゼフの項でも述べたが、エリーザベトも「家族が集まるとき、座る順序、会話する順序が決められており、場合によっては発言を控える人もいる。お互いの存在そのものに退屈しており、座が開くとほっとする」とも女官に述懐したという。特に、ゾフィー大公妃が同席する場合には、いたたまれない気持であることは想像に難くない。

がんじがらめの宮廷内のしきたりは、籠の中の鳥のように、エリーザベトを自由な世界への憧れを募らせるだけであつた。これは、もつとも私的であるはずの家庭の食事の場においてすら慣習に縛られ、自由に意見を交換することができなかつたエリーザベトのやりきれなさが、この場づくりに努力できな



かった。いや、しようとしなかったと言えるのではないか。

子供たちへの母性。母としてのエリーザベトは、長女のゾフィー、次女のギーゼラ、長男のルードルフの三人に対しては、自らの手で養育させてもらえなかったことから、姑のゾフィー大公妃に対して憎悪を抱くだけでなく、「あちら側」と称して三人の子供たちに対する愛情も抱くことができなかった、いや徹底してしなかった。夭折した長女のゾフィーは別として、ギーゼラとルードルフに対して素っ気なかった。この二人よりもむしろ、自分の兄弟姉妹に対する交流を優先するほどであった。

それが、三女のマリー・ヴァレリーが生まれると、今度は全面的に自分でマリー・ヴァレリーの育児ができるようになったことから、マリー・フェシユテイチに子育ての幸せを述懐すらしている。

しかも、上の三人の子育てができなかった反動でもあってか、マリー・ヴァレリーへの可愛がりようは度を越したものがあり、マリー・フェシユテイチも呆れる程であった。これは、明らかに、上の三人に対する母親としての育児の喜びを、ゾフィー大公妃に棚上げされた結果によるものであることに間違いない。と言うことは、長女ゾフィーの育児から母親としての権利を奪われたことが、宮廷内におけるエリーザベトの最大の喜びを奪い、エリーザベトの性格を大きく曲げる結果となったからである。

ギーゼラとルードルフにはまったく気の毒なこととしか言いようがないが、そこに、エリーザベトのゾフィー大公妃に対する拭い難い怨念があり、結果的にはゾフィー大公妃の大きな誤りと責任があったことは否めない。

これはさらに、政治情勢に共感を持てるはずだった、エリーザベトとルードルフの間の意思の疎通に

少なからぬ障害となったと言えることができる。もし、母と息子がこの意思の疎通を十分に行うことができたら、ルードルフも無意味な死を選ばなくても済んだであろうし、エリーザベトにとつても、ルードルフの死後、ルードルフの哀れな生涯に心を痛めることはなく、ルードルフの鎮魂のために、生涯黒い衣服でとおす必要もなかったことであろう。

## 第6節 よそ者 シュラット夫人

「よそ者」とは何か。それは、この章におけるハプスブルク王家の血族に関係のない女性が、フランツ・ヨーゼフの家庭に入り込んで来たことを意味する。

カタリーナ・シュラットは、皇妃エリーザベトがヴィーンの皇帝フランツ・ヨーゼフのもとに居つかず、旅から旅へと留守にしていることから、妻不在のフランツ・ヨーゼフの寂しさを癒すために、フランツ・ヨーゼフの女友達として、この王家の家庭の一員に近い位置づけで招き入れられた女性である。

しかし、いわゆる第二夫人でもなければ、日本の天皇や将軍や諸大名の側室のような女性でもなく、フランツ・ヨーゼフの私的な女性の友人に過ぎない。

フランツ・ヨーゼフがカタリーナ・シュラットを知ったのは、一八七三年のフランツ・ヨーゼフ即位二五周年記念の際に、皇帝夫妻臨席のもと、ヴィーン市立劇場で上演されたシェークスピアの「じゃじゃ馬ならし」に、まだ二〇歳だった舞台女優カタリーナ・シュラットが、主役のカタリーナ（英語でキヤサリン）を演じたことがきっかけだった。

しかしこのときは、フランツ・ヨーゼフにとっては好演した女優という認識だけであって、カタリーナ・シュラットとのじきじきの接触はない。その後カタリーナ・シュラットは、ヨーロッパ各地で公演活動をおこなっており、一八七九年にハンガリーの農場主であるニコラウス・キシユ・フォン・イツェベ男爵と結婚している。

フランツ・ヨーゼフは、一八八三年一月に、ブルク劇場で上演された「田舎と都会」のローレ役のカタリーナ・シュラットを気に入り、さらに、喜劇「妖精の手」のヘレーネ役の演技を見てその意を強くした。というのも、カタリーナ・シュラット夫人に典型的なヴィーン子を彷彿とさせる姿を見いだしたのである。

一八八五年八月、ロシア皇帝夫妻が同席する会議のとき、何人かの俳優が演技を披露した際に、女優カタリーナ・シュラットもその一員として選ばれ、そのあとの晩餐会にも出席を許された。その席でシュラット夫人はエリーザベトを紹介された。

エリーザベトは、シュラット夫人をフランツ・ヨーゼフの女友達として認めることにした。それは、自分がフランツ・ヨーゼフに対して妻としての役割を十分果たせないことに後ろめたさがあったことも考えられるし、また、シュラット夫人をフランツ・ヨーゼフにあてがうことにより、自分の好きな旅行や趣味に心置きなく専念できるようにとの思惑もあったはずである。

もちろん宮廷内にはさまざまな貴婦人がおり、たとえ、もしそのなかにフランツ・ヨーゼフが女友達とした意中の婦人がいたとしても、あらぬ噂や嫉妬や中傷などさまざまな障害が考えられるので、エリーザベトが同意することも絶対考えられないし、宮廷外の女性の方が無難だったのかもしれない。そ

れよりも、フランツ・ヨーゼフ自身が気に入った女性であるので、エリーザベトも抵抗なく受け入れたのかもしれない。

エリーザベトという配偶者がいるにも拘わらず、フランツ・ヨーゼフが交際する女友達として、シュラット夫人が正面から宮廷に入ることは問題があるため、表向きにはエリーザベトの友人として扱い、落ち合う場所もイーダ・フェレンツイの部屋を使っている。これもエリーザベト自身の判断であり、配慮である。

フランツ・ヨーゼフは、生涯エリーザベトを愛していることには疑いを入れる余地はないが、このころ、エリーザベトが帝国の運命にも関心を示さず、皇妃としての自分の役割を果たさないことに、自尊心を傷つけられていた。また、エリーザベト自身もフランツ・ヨーゼフにそっけなかったことはたしかである。ちょうどそのころに出現した、私利私欲の見られない、しかもユーモアもあり快活なシュラット夫人は、まさに、フランツ・ヨーゼフの心を癒し、フランツ・ヨーゼフの心を惹きつけていった。

エリーザベトは、初めのうちはシュラット夫人の存在に違和感を感じていたが、接する機会が多くなるに従って、シュラット夫人の人柄は悪くなく、親切な女性であると受け止めるようになり、その交流もごく自然に日常茶飯事のこととなっていった。

皇帝夫妻とシュラット夫人と一緒に散歩することもあり、エリーザベトが気を効かせてフランツ・ヨーゼフのためにシュラット夫人の肖像画を描かせたこともある。さらに、フランツ・ヨーゼフがシュラット夫人の別荘を訪れることの後押しすらしている。

性格的に生真面目なフランツ・ヨーゼフは、シュラット夫人との交際もはじめはぎこちなかったが、次第に慣れてエリーザベトにはない夫人の心の温かさにあらためて感激している。しかし、当然のことながら、フランツ・ヨーゼフとシュラット夫人との間に諍いさかいが起きることもあった。

このような場合には、エリーザベトがその仲介にも当たったという。同時にエリーザベトは、二人の交遊があらぬゴシップとして外部に漏れないように配慮もしている。また、エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフがいつもこまめにエリーザベトに手紙を書くことを利用して、シュラット夫人との逢瀬の報告をするようにと、マリー・ヴァレリーを通して要望している。

それに対してフランツ・ヨーゼフは、シュラット夫人と会うときは前もってエリーザベトの了解を取り付けていた。慣れるにしたがって、フランツ・ヨーゼフは何らのためらいもなく、シュラット夫人との行動をエリーザベトに報告する程にもなっていた。

このようにエリーザベトが、自分が不在のときを含めて、フランツ・ヨーゼフに女友達と交遊させることを自ら認めたこと及び二人の楽しみに協力するということは、通常では考えられないことである。

このような関係について、結婚してミュンヒェンに離れ住んでいるギーゼラはともかくとして、ルードルフとマリー・ヴァレリーは好ましいこととは思っていなかった。マリー・ヴァレリーは、シュラット夫人の手柄の良さについて日記（一八八九年六月九日）に書き留めているが、エリーザベトがそれを認め仲介の労を取っていたこともあったものの、心中は必ずしも歓迎していなかったことは、後述のように明らかである。

たしかに、エリーザベトはこの交遊関係には協力的ですらあった。エリーザベトにとっては、フラン

ツ・ヨーゼフがシユラット夫人と交際することによって、皇帝が寂しさを癒すことができることを認めたとしても、フランツ・ヨーゼフが自分を愛さなくなるということとはあり得ない、カトリック信仰の強い国として夫と自分との離婚はあり得ない、という計算が働いたと仮定できなくもない。しかし、実際にはそのような計算高い考えは、エリーザベトに関係のないことであるということの方がより正しいのかもしれない。

そうとはいっても、エリーザベトは必ずしも心中穏やかであったわけではない。フランツ・ヨーゼフがシユラット夫人と接しているときの会話や態度を何回も見るとつけ、フランツ・ヨーゼフが自分のときとは異なるほど明るく、無邪気に、生き生きとしていることに、嫉妬すら感じている。

マリー・ヴァレリーの一八八九年八月二日の日記には、エリーザベトの次のような発言が記録されている。(注9)

「今日(フランツェンとルードルフの誕生日)、ママは絶望的になり激しく泣きながら尋ねた。『何のために私は生まれてきたのだろうか、私の人生は無用だったのだろうか。私はパパとシユラット夫人の間に立っている。結婚は不条理な行事だ。一五歳の子供が売られ、何も知らないまま歩み出し、それから三〇年もの長い間後悔の連続で、そしてそれを解消することもできない』と」

原典では三人称となっているが、括弧を付けて一人称に置き換えた。フランツェンとは翌年マリー・ヴァレリーの夫となるフランツ・サルヴァートル(二三歳)であり、兄のルードルフ(生きていれば三

一歳」とは、奇しくも同じ誕生日であった。一五歳の子供とはエリーザベト自身のことを指している。なおこの日記は、コルティの書ではエリーザベトの一人称による引用句として置き換えており、筆者の手許にあるマリー・ヴァレリーの日記の「歩み」(SCHRIJT)が、「宣誓」(SCHWUR)すなわち「何も知らないまま宣誓させられ」となる」と記述されている。そのほかに「私はお笑い草の役割を演じているに過ぎない」との発言も挿入している。

それらの相違は調べようがないが、主旨としてはそれほど差はなく重要ではない。それよりも、仲介の労をとり二人の仲を結んでいるにも拘わらず、フランツ・ヨーゼフがシュラット夫人に見せた喜びの言動にシヨックを受けたことは間違いない。

エリーザベトを愛しているフランツ・ヨーゼフは、こまめにエリーザベトに手紙を書いている。しかし、その内容の大半がシュラット夫人との交際についてであれば、エリーザベトにとっても、上述のように、やりきれない気持ち立ち上がってくるのは当然のことである。

それにしても、シュラット夫人がフランツ・ヨーゼフに示したような同じような言葉遣いや態度を、果たして当のエリーザベトがそれまでフランツ・ヨーゼフにしてきたかということの反省がなかったのか、という疑問が湧いてくる。

でもそれは、生活を共にせずフランツ・ヨーゼフの傷心を癒すためだけの、一時的な交際相手としてのシュラット夫人の立場と、子供の養育をゾフィー大公妃に奪われ、自分の立場を擁護するためにゾフィー大公妃に立ち向かってくれなかったフランツ・ヨーゼフ、一族として食事中に団欒のための会話すら満足にできない家庭、後年になるにしたがって政務に関してはエリーザベトにもルードルフにも、

嘴を容れることを許さなかったフランツ・ヨーゼフに、エリーザベトもシユラット夫人がするようにはなれなかったことが、やはり最大の原因であったことは間違いないところである。

そこに夫婦の溝が埋められず、エリーザベトは自らは旅に癒しを求め、フランツ・ヨーゼフのお相手を「よそもの」のシユラット夫人に委ねざるを得なかったということが、エリーザベトの本心ではなかったか。

下世話なことになるが、シユラット夫人がエリーザベトに紹介された一八八五年における三人の年齢は、フランツ・ヨーゼフ五五歳、エリーザベト四七歳、シユラット夫人三二歳で、ルードルフの死後には、皇位継承者が誕生する可能性はなかったと言いつつ切れない。男子出生という記録がないので、フランツ・ヨーゼフはそこまで踏み込んだ関係にはならなかったであろう。

一八九八年のエリーザベトの死後では、事情が異なってくる。

エリーザベトの生前であれば、フランツ・ヨーゼフとシユラット夫人との間に「ごたごた」が起きれば、エリーザベトが仲介役として収めることができたが、死後ではその役割を果たす人物がいなかったためか、シユラット夫人も、かつてのエリーザベトのように、フランツ・ヨーゼフの側から離れてしばらく帰って来ないという手段を用いるようになってきた。

それよりも何よりも、エリーザベト亡きあと、対外的にうまく取りなすエリーザベトのような存在の人間がいなかったため、シユラット夫人は正面から宮廷に入入りすることができなくなった。同時に、フランツ・ヨーゼフとシユラット夫人の交際を知っている宮廷内の人々は、従来のエリーザベト公認ともい



うべき二人の交際を黙視していたことが、エリーザベトの死後では皇帝の信用失墜にも繋がりがねないと判断する事態となった。

それらも予測してか、生前のエリーザベトは、自分の死後、フランツ・ヨーゼフとシユラット夫人を結婚させるようにと、マリー・ヴァレリーに述べている（一八九〇年五月二八日の日記）。エリーザベトは、二人の関係について妬いてはいない反面、自分が死んだらフランツ・ヨーゼフにとって都合がよいのではないかと自嘲気味に言い、フランツ・ヨーゼフの怒りを買ってでもいた。

エリーザベトは、自分の死後の遺産相続に関する遺言書の中に、ギーゼラとマリー・ヴァレリーの二人の娘たち、イーダ・フェレンツィやマリー・フェシユテイチなどの女官に対すると同様に、シユラット夫人に対しても金のゲオルグスタール貨によるブローチを、形見分けとして贈ることを忘れていなかった。

さて、その後のフランツ・ヨーゼフとシユラット夫人との関係はどうか。というのも、エリーザベトの生前中においてもフランツ・ヨーゼフは、エリーザベトとシユラット夫人がともに不在の場合、気がふさぎ悲しくなってくるということを、その都度手紙のなかで告白しているくらいであったのである。

エリーザベトの死後もフランツ・ヨーゼフがシユラット夫人と散歩しているのを目撃せざるを得なかったマリー・ヴァレリーは、エリーザベトの死の一〇日後の一八九八年九月二〇日の日記で次のように述べている。（注10）

（エリーザベトが自分の死後、フランツ・ヨーゼフとシユラット夫人と結婚してほしいと述べた

ことに對して）、私はいずれにせよ受け身の態度をとりたい。パパのシユラット夫人に對する眞の友情を考慮すると、夫人に對して冷たく振る舞うことはできない。パパからこの慰みを奪うことはよくないことだし残酷でもある。——しかし、それに力を貸すことは私の義務だとは思わない。

シユラット夫人の立場が正当に評価がされないため、シユラット夫人はエリーザベトの死後身を引く決断をし、スイスに引きこもった。その後、フランツ・ヨーゼフの落胆を目の当たりにした周囲の人々が、シユラット夫人の復讐を呼びかけている。

しかし、マリー・ヴァレリーの一八九九年七月六日の日記によると、マリー・ヴァレリーは、シユラット夫人にフランツ・ヨーゼフの相手の座を再度奪われぬためにも、エリーザベトの妹で、トラニ伯爵の未亡人であり、マリー・ヴァレリーにとっては叔母に当たるマティルデと結婚するようにと、フランツ・ヨーゼフに説得している。〔注11〕

またマリー・ヴァレリーは、前述の日記の五日後の七月一日の日記では、「父はシユラット夫人との關係を絶つことは断じてしないでしょう。そうであっても、シユラット夫人が適法の結婚をしているので、父は彼女と結婚することはできないのです」と述べている。〔注12〕

そのシユラット夫人の夫であるニコラウス・キシユ・フォン・イツテベ男爵が、一九〇九年に死去した。ということは、この時点でエリーザベトを失ったフランツ・ヨーゼフと未亡人となったカタリーナ・シユラットとは結婚できる状況は整ったことになる。

それ以降にも、フランツ・ヨーゼフとカタリーナ・シユラットが結婚したという噂話がまことしやかに

に流れたことがある。しかし、ある著作では、シュラット夫人と夫の男爵は、男爵の生前に離別していると記述している。その時期がいつごろであるのか、はたして本当に離別したのか、筆者には確認のしようがない。

しかし、いずれにしても、噂話はあつたにしても、フランツ・ヨーゼフとシュラット夫人がその後結婚することはなかった。



(カイゼリン・エリーザベト・ホテルの座像。1984年・筆者撮影)

## 第9章 コルフ島

### ——漂泊の時代——

#### 第1節 ヘルメスヴィラとアキレイオン

ヘルメスヴィラは、ヴィーン市の中心から西南西、市の西端に位置する現在のライントツ動物公園の中にある。このヴィラは当初、狩猟好きのフランツ・ヨーゼフがヴィーンの森の狩猟の拠点として、一八一年末に建設が計画されたものである。

しかし、フランツ・ヨーゼフは、断続的に旅を続けるエリーザベトを何としてもヴィーンに繋ぎ留めておくための手段として、ヴィラを建設することを主目的として、一八八三年に建築を開始し、内装を含めて完成を見たのは一八八六年のことである。

このヴィラの東にはほぼ隣接した位置に夏の離宮シェーンブルン宮殿があるが、すでに一八七二年にゾフィー大公妃が亡くなっているにも拘わらず、エリーザベトがこの宮殿に居つくことを嫌ったため、フランツ・ヨーゼフはエリーザベト専用の隠逸の館として、このような至近距離の位置に建てることにしたのだった。また、その費用についても、一八七五年に亡くなった前皇帝フェルディナントから遺産を相続しているので、このような余裕ができたことも後押ししたものと思われる。

この建築に付随して、乗馬教習所や厩舎などのほか、エリーザベトのための散策路、乗馬や体操などに必要不可欠な設備をも併せ設けている。一八八八年には、建物に向かって前庭の正面にはこの別荘の象徴である「ヘルメス」の大理石像が設置され、さらにそれに先立つ一八八二年から一八九〇年にかけて、別荘の周囲には公園も設計・造成されている。

ヘルメスヴィラのヘルメスとは、ご存じのように、ギリシア神話に出てくるオリンポスの一二神の一神で、牧畜・商業・旅人の守護神である。古代ギリシアに憧れを抱いていたエリーザベトは、後述のアクレイオンのアクレスとともに、この守護神（旅人の守護神のつもりかどうかかわからないが）の名をこのヴィラに命名したものである。

このヴィラは、ハンガリーのゲデレーに次ぐ、エリーザベトの第二のヴィラとなった。

このヴィラには三〇近くの部屋があり、そのうち、現在では一階の幾つかの部屋がレストランとして使用されているが、一、二階の約二〇程の部屋を見ることができ、就中、注目に値する部屋は、二階のエリーザベトの寝室である。寝室は有名なシェークスピアの「真夏の夜の夢」の絵画や天井画、そのほか部屋全体が装飾過多といえるほどの贅を凝らした造りとなっている。

マリー・ヴァレリーはこの建物を評して、美しく近代的であるが居心地がよくないと漏らしたのに対して、フランツ・ヨーゼフは、少し自嘲気味に、ヘルメスヴィラ建設の計画がその目的を果たさないことを一番恐れていると答えたという。

結局は、エリーザベトは、この環境の冷涼さと湿度の高さを嫌い、この別荘にあまり滞在する機会をつくらず、暖かさと南の雰囲気を楽しまず、第三の別荘アクレイオンを造ることになる、コルフ島に関

心が移っていった。

エリーザベトにとって、ヘルメスヴィラに滞在したときの最初にして唯一の喜びは、次女ギーゼラの次女、即ちエリーザベトの孫娘であるアオグスタが、一八九三年五月にこの別荘で婚約をしたことだといふ。

それに対して、フランツ・ヨーゼフにとってこのヴィラは、僅かな年月ではあつたが、晩年のエリーザベトと一緒に過ごした最後の日々の名残りの象徴であり、エリーザベトが海外で静養している間は、少なくともかけがえのない思い出探しのために、出かける場所でもあつたのである。

筆者は、一八九三年一〇月と一八九八年八月の二回、ヘルメスヴィラを訪問している。一回目は小雨降る公園の木々や草原の間の小径を通り抜けて正面玄関に立つた。人影はまばらでヴィラ内部も森閑としていた。ヴィラの正面のヘルメス像も淋しそうに見えた。二回目はエリーザベト没後百年祭の期間中であり、それなりの特別展示は行われていたものの、主な展示物はホーフブルク宮やシェーンブルン宮殿に集中しているため、それほど見るべきものは多くなかった。前回の訪問時よりも観光客は多かったが、やはり日本人を見かけることはなかった。

コルフ島は、ギリシアの西端部と対岸のイタリア半島の南端部とに挟まれた、イオニア海東部に浮かぶイオニア諸島の北端に位置するギリシアの島である。島の北半分は、東の狭いケルキラ海を隔てて、ギリシア本土の北部及びその北に国境を接するアルバニアが目睫もくしやうの間に迫っている。

同島は、一九世紀初めから約六〇年間イギリスに支配されていたことから、コルフ島と呼称されてい

る。ドイツ語による各文献においても、イニシアルをCからKに変えただけで同じ呼称となっている。しかし現在では、島名と同名の主都を含めてギリシア語の「ケルキラ」と呼称されることが一般的である。

既に述べたように、エリーザベトがこの島を最初に訪れたのは、一八六〇年十一月から翌年にかけて療養のために滞在していたマデイラ島から、その帰途に立ち寄った一八六一年四月のことである。

そのときエリーザベトは、この島の気候風土が非常に気に入るとともに、島の中南部の海岸から少し入った、小高い丘の上に位置するガストゥーリを馬車で通過したとき、丘の頂上近くにあるペトロス・ブライラ・アルメニスの別荘に惹きつけられた。そのため借用してそのまましばらく滞在したあと、五月一日に一旦フランツ・ヨーゼフが待ちわびているヴィーンに戻った。

しかし、咳がぶり返すとそれを口実に一カ月後の六月には再び訪れ、この別荘を借り上げ、それからまたそこに一〇月まで長期に滞在している。その間、八月には姉のヘレーネが、一〇月にはフランツ・ヨーゼフがコルフ島を訪れている。

エリーザベトはこの機会に、夫のほかにギーゼラとルドルフにも会いたがり、ヴィーンではゾフィー大公妃に邪魔されるおそれがあるため、一月にはこの島から直接ヴェネツィアに向かい、そこに呼び寄せた子供たちと合流している。

その後、翌年の一八六二年に訪れたほか、さらに一四年後の一八七六年九月にもコルフ島を訪れている。このように、それ以降、同じ島に何回も滞在するということは、最初はこの島がヴィーンのゾフィー大公妃と顔を合わせなくても済むということから、次第に第一の心の安らぎの場所となっていくた



である。

それは、エリーザベトにとつては、療養のために何度も訪れるドイツのバート・キッシンゲン、里帰り先としてのポッセンホーフエン、一八六七年にハンガリーから贈与を受けて乗馬の基地としたゲデレーとはまた異なつた、新しい安住の地であつた。

エリーザベトが、この地に自らの別荘を建てようと具体的に構想したのは、初訪問から二七年あとの一八八八年一月で、その翌年にその土地と周辺の土地を購入している。

建設の構想までに何故これほどまでの年月の間隔が空いてしまつたのか。それは、その間に、時間的に心身共に打ち込める、ハンガリーへののめり込みや乗馬への情熱があつたからではないだろうか。二重帝国が成立し、さらには身体的な病因により乗馬ができなくなり、最大の関心事が旅に移つたことも大きな理由ではなかつたか。

別荘の建築は、当時、在コルフ島オーストリア領事のヴァルスベルクが発起人として指示し、イタリヤ人のラッファエーレ・カリートとアントニオ・ラデイによる設計で、二年後の一八九一年一〇月に完成している。

古代ギリシアの文学に造詣の深いエリーザベトは、ホメロスの叙事詩「イリアス」に出てくるトロヤ戦争時のギリシアの英雄アキレスに傾倒していたことから、別荘の名を「アクレイオン」（ギリシア語で「アヒリオ」と名付け、部屋構成や装飾、ベランダや庭園の造作にいたるまで、かなり心を砕いている。

三階建ての白亜の建物の二階の踊り場の壁には、オーストリア人の画家フランツ・マルツに描かせた

「アキレスの勝利」と題する大きな絵画が掲げられており、三階の東面の回廊にはギリシアの哲人や文学者の胸像が並んでいるほか、柱の外側には等身大の彫像群が立っている。

その前（二階の一部の屋上部分に当たる）は広いテラスとなっており、テラスの東側の端には大理石製の半円形の小さなベランダがあり、その前のサイプラス（糸杉）の間の見通しから、海を挟んでギリシアとアルバニアの国境の町々を望むことができる。のちにエリーザベトは、マリー・ヴァレリーに向かって、「私はこの場所に葬りたい」（注1）と述べている。

北に細長く広がる庭園の中心には、「瀕死のアキレス」の石像が建てられており（現在の位置とは異なる。第6節参照）、段差を下げたその先の庭園からは、現在ではその一部が空港となっているハルキオポウロスの潟とその東のカノニの町、ポンディコニシ島、さらには主都ケルキラを望むことができる。また別の庭園内には、エリーザベトが熱心に賛美するハイネの胸像が設置された。

しかし、この別荘も、エリーザベトは完成二年後の一八九三年の時点でもう手放すことをフランツ・ヨーゼフ皇帝に相談している。その手放す理由をエリーザベトは、自分の死生観とともに、次のようにクリストマノスに呟いている。

人は人生で、他人と折り合うためには、要するに他から隔絶された場所を作っておかなければなりません。というのも、人はものごとくに酷い仕打ちを加えているからです。それは孤独なだけではありますが、永遠の美しさを維持しようとしてできるのです。

人は百年あとには我々の時代の人間は誰も居なくなってしまう。一人たりとも。恐らく皇帝

の玉座さえも。新しい人間、新しいケシの花、新しい時代の波が繰り返されるのです。そのようなことは私たちと同じように見えますが、私たちはもはや存在しなくなっているのです。

私が初めてコルフ島にきたとき、私は別荘「ブライラ」をしばしば訪ねました。それは素晴らしいものでした。というのも、別荘は大きな木々に囲まれて荒涼としていたからです。それが私をその別荘に惹きつけたので、その別荘を建て替えて「アキレイオン」を造らせました。今では本当にそれを後悔しています。私たちの夢はいつまでも美しいのです。なぜなら、私たちはそれを実現しないからなのです。(注2)

これを読んで筆者は、中学時代にたしか国語の授業だったか、今は亡きO先生が口ずさんだ、中国の詩「年々歳々、花相似たり、歳々年々、人同じからず」を思い出した。エリーザベトの心の中に、何か東洋的な諦念を見たような気がするのである。

エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフに述べているように、ヴィーンを離れていても、どこかに留まらなければならぬが、しかしそれが楽園であったとしても、自分にとってはやがて地獄になってしまう。エリーザベトの心は、次第にさすらいの境地に向かっていくのだろうか。

アキレイオンは、新たに建てられた今となっては、エリーザベトの不安な精神そのものと結びついてしまつて、断ち切りたいが断ち切れない鎖になってしまつているが、そのような場所による拘束は、もうエリーザベトの心情としては耐えがたいものとなつていった。

あれだけ注文を付け、贅を凝らしたアキレイオンであったが、もはやエリーザベトには未練はなかった。そこでエリーザベトはフランツ・ヨーゼフに手紙を書いて、アキレイオンを売却することの了解を取り付けようとした。それで得た金はマリイ・ヴァレリーの家族の生活に資するつもりであった。

フランツ・ヨーゼフは、完成する前からエリーザベトから売却話を聞いていたが、アキレイオンをもっと有効に使うよう、エリーザベトに翻意を促すよう手紙で忠告している。そこでエリーザベトはフランツ・ヨーゼフの意向にしたがって、売却計画を当分引っ込めた。しかし、この別荘に束縛されることから自らを解放したいという考えは残した。

後述するように、エリーザベトの死後、アキレイオンはギーゼラが遺産相続している。それに対してマリイ・ヴァレリーは、ヘルメスヴィイラの家屋敷の全てを遺産相続として引き継いだ。子供が大勢いるマリイ・ヴァレリーは、このヴィイラを家族が団欒できるように改装している。マリイ・ヴァレリーは、父フランツ・ヨーゼフにこの建物を維持することを約束したので、フランツ・ヨーゼフも後年、エリーザベトの生存中ときと同じように、好んでヘルメスヴィイラに頻繁に滞在するようにしていた。

このことは、公務の場でありエリーザベトの嫌うホーフブルク宮やシエンブルン宮殿ではなく、またのちに売却したアキレイオンでもなく、さらにヴィーンから離れたハンガリーのゲデレーでもなく、ヘルメスヴィイラは、フランツ・ヨーゼフにとつては、バート・イシユルに次いで、在りし日のエリーザベトを思い出す、最適の場となったのではなかったか。

それに対して、四人の子供の母のギーゼラにとって、ミュンヒェンから遠いだけでなく、建物はヘルメスヴィイラよりも豪華であるものの、家具や調度品も搬出されたいわばからつぽのアキレイオンは、マ

リー・ヴァレリーに比べて割りの合わない遺産となった。

## 第2節 散策と称する強行軍

エリーザベトは、特に中高年になってから、実に多くの都市内やその他の山野で、異常と思えるほど長時間、強行軍とも言える散策を行っている。それは第三者から見れば、ただひたすらに歩くだけの、奇妙な行動に思われるものである。何故歩くことなのか。

乗馬ができなくなったから歩行に切り換えたという見方もある。たしかに、この行動は乗馬に代わるものとして、「直接地に足を付けた早足の徒歩による行動」と言うこともできるのではないか。それともかく、乗馬のようにとでも早く「走れる」（言い換えれば歩ける）ものではないが、距離と時間の長さど歩く速さを考えれば、その見方もあながち誤りではない。

別の見方をすれば、目的地（ゴール）に向かって速く歩くオリンピック競技の競歩に似ているとも言えなくもない。ただ、競歩は、必ずどちらかの足を地につけて早く歩かなくてはならないというルールがあり、そのような制約もない似て非なるものである。

早いということの例としては、エリーザベトとマリー・フェシュテイチがあまりにも早く歩いたので、途中で目撃した警察官が、犯罪者に追いかけられているものと勘違いして後追いつてきた。警察官も途中から歩いているのが皇妃であることに気がついたが、護衛を兼ねてホーフブルク宮まで付いてきたという。

また、似たような例として、秘密警察もついて行けないほどの速さであったとの記録もあり、さらに一緒に付いて来られない女官をあとから馬車で付いて来させるといふ一幕もあったようである。

それではその速さと長時間歩いても疲れない秘密はなんだろうか。エリーザベトがギリシア語講師のクリストモノスに語ったことによると、子供のころに父マクシミリアン公爵が雇った教師から教わった歩き方で、これは妹のマリーやゾフィーも教わり、パリでも珍しがられていたという。

その歩き方とは、一歩一歩踏み出す際に、その前の一歩は忘れて元気を回復すること、少なくともなるべく地面の上を引きずるような感じで歩くことであり、そのためには、何かあることを思い浮かべて歩くようにすることが秘訣であるとのことであった。(注3)

これは、初期の段階では、ほぼ同年代のマリー・フェシュテイチもついて行くことができたので、訓練次第では容易に可能であったとみることができる。

しかし、エリーザベト自身の脚力が衰えてくると、流石に歩き方が緩慢になり、歩行距離や歩行時間も短くなってくる。同時に条件の厳しい強行軍から、温泉地や市内の買い物などの事実上の散策に移行して行くことになっていった。

ときには時間帯も選ばず、あたかも軍隊の行軍の様相を呈しているので、筆者は、あえて、この節のタイトルを「散策と称する強行軍」と名付けたわけである。

それでは、何故そのような行動に走ったのか。それを考える前にそれらの顕著な例をいくつか紹介したい。

その一。一八八五年に四七歳のエリーザベトは、真夜中に、女官一人と数名の山岳ガイドを従えて、

ランタンを下げながら、オーストリア国内の海拔七五七メートルのツェル・アム・ゼーの町から、町の西方に聳える標高一九六五メートルのシュミッテンヘーエ（ヘーエとは高原の意）に登っている。昼間であれば頂上からは眺望をほしのままにできるにもかかわらず、何の目的でこの視界のきかない時間帯に登ったのかは不明である。そして何故山なのか。少なくとも野次馬となる市民を避けるために夜中を選んだこともその理由のひとつではないかと思う。

その二。一八九一年一月二三日にカイロ駐在のオーストリア代理公使が、エリーザベトの強行軍の実績は一日平均八時間にも達したとオーストリア外務省に報告している（注4）。一月とは言えもちろんカイロの日中は暑く、日蔭も十分ないあのエジプトを何日も歩く（日数の報告は記述されていない）ことは、ナイル川に沿って観光旅行したのであったとしても、一二月にエジプトを航空機とバスで旅行したことがある筆者の体験（昼は暑く夜は寒い）からも、驚くべき忍耐力である。

その三。プロイセンのヴィルヘルム二世と親しいフィリップ・オイレンブルク侯爵が、エリーザベトとルートヴィヒ二世との共通点について述べた件に、エリーザベトがポツセンホーフエンのあるフェルダフィングから首都ミュンヒェンまでの五〇キロを歩いたことに触れ、やんわりとその奇行ぶりを批判している。（注5）

その四。一八九〇年九月には、ポルトガルの首都リスボンで、午後一時から夕方八時までほとんど休みなく、買い物などを含めて市内を歩き回っている。同行したマリ・フェシュテイチは、疲労困憊から宿舎に戻るとベッドの上に崩れるほどだと、イーダ・フェレンツイに報告している。（注6）

このとき、リスボンの郊外ではコレラが猖獗しており、流星にそれ以上の外出を断念せざるを得なか

ったが、エリーザベトは、自分は最悪の場合には死に至っても恐れないが、従者の生活に責任を負っているので旅行は止めにしたと語ったという。〈注7〉

その五。そのあとスペイン内のイギリス領ジブラルタルの町で、初日に八時間、二日目に一〇時間、その翌日にはモロッコのタンジールに渡って、さらに同市で七時間散策している。エリーザベトが、同行したマリー・フェシュテイチに向かってまだ歩けるかと尋ねたところ、マリー・フェシュテイチが仕方なしに「はい」と答えたところ、更に数時間歩いたという。〈注8〉

この年、エリーザベトは五三歳、フェシュテイチは五二歳、それに九月とはいえ、暑い国の暑い時期であることを考えると、相当な労力である。

その六。エリーザベトの行軍はまだ続く。九月にスイスのルツェルンで市内を九時間半以上歩いていたという記録も報告されている。エリーザベトの行軍は雨であろうと嵐であろうと関係なかった。傘が裏返り、帽子が吹っ飛び、身体全体がずぶ濡れになって宿舎に戻るといふことも、しばしば起きている。

第三者からすればただ歩くだけの無意味なように見える強行軍に、生命を賭してまで続行したいというエリーザベトの意図は果して何だったのであろうか。

以上のように、この強行軍の行動としての傾向は、さらに多少の補足を加えると、次のようになる。

エリーザベトの出で立ちには、ウエストを絞った上着を着て、実用的なスカートを穿き、ハイキング用の靴で足拵えをし、日焼けを防ぐと同時に、野次馬に覺られないように大きな革製の傘をさしている。



野次馬が大嫌いなエリーザベトは、当然のこととして、極力匿名を守り、知らぬ人に遭遇した場合には、恥ずかしげに小走りですの場から逃げ去ることまでしている。

何処へ行くのかについては、エリーザベト自身も分かっていないのかもしれないし、決めていないのかもしれない。そのため、その場その場での思いつきか行き先変更もしばしば行われている。

同行者は、初めはマリイ・フェシュテイチが多かったが、マリイ・フェシュテイチが体力的について行けなくなると、若い二五歳のヤンカ・ミケス伯爵令嬢がマリイ・フェシュテイチに代わって、エリーザベトの強行軍に同行することになる。

しかし、ヤンカ・ミケスが結婚することになる一八九五年になると、ヤンカ・ミケスに代わって三十一歳のイルマ・スターライ伯爵令嬢が同行することになった。彼女は後年、暗殺されたときのエリーザベトに付き添っていた唯一の従者である。

エリーザベトがギリシア語を勉強し、ギリシアゆかりの地などに旅行する場合を含めてギリシア語講師を同行させるようになっていった。

いずれにしても、この強行軍は歩くのが早くて長時間に及ぶので、若い行動力のある同行者が必要であった。

さらに、同行者にとってさらに酷なことは、エリーザベトは、食事についても自分の都合だけで判断し、同行者が食事をしたい都合も考えないことまでであったという。

この強行軍は、エリーザベトの判断によって、軍隊並みに悪天候をもとめせずに強行された。それはもちろん、強雨も吹雪ものともせず行われたが、それらについては次節に譲ることにする。

この強行軍に対して、同行者はどう見ていたか。

マリー・フェシユテイチは、このようなエリーザベトの独善的な考えや奇妙な考えにぞっとしたと述べているが、それでもなおエリーザベトに対する良き理解者であった。

ヤンカ・ミケスは、同行をとおして、エリーザベトが誰にも理解されずに不幸であること、エリーザベトを助ける人は誰もいないと述懐しており、歩くというエリーザベトの過酷な要求があまり意味のないことを知っていたが、その要求を満たすよう努力した。

イルマ・スターライは、女官になる前からエリーザベトの行動に批判的な人々が多いことを知っており、最初からエリーザベトの意向に添えるよう決心を持って仕えた人物であった。

このように、右に挙げた三人が三人とも、この強行軍そのものに関して懐疑的であったにも拘わらず、その同行者としての職務を善く遂行したことは、いずれもハンガリー人であり、ハンガリー国のために尽力したエリーザベトに対して、誠実であったからであることは言うまでもない。

ここに取り上げていないギリシア語講師たち（すべて男性だけのようである。その他の章節参照）も、祖国ギリシアの文化に対して造詣の深いエリーザベトに対して敬意を表していたからこそ、弱音を吐かずに行方を継続したのであると思う。

六〇歳になり、人生最後の年ともなる一八九八年には、エリーザベトは肩と腕に神経炎を患い、いつもの体操もできなくなり夜も寝られなくなった。また、体力も蝕ばまれるようになって、流石に歩行にも勢いがなくなってきた。

あるときフランツ・ヨーゼフに、「私は八〇歳になったように感じる」(注9)とも述べていたが、それでもエリーザベトは歩く習慣を止めようとはしていない。

エリーザベトは、同行者の疲労の度合いにも気にかけるものの、同じ所に留まることはせずに、必ずしもはつきりとした目的地があるわけではなくとも、次の場所に移動することが習慣になっていった。

ゾフィー大公妃が死んだあとであっても、宮廷儀礼の煩わしさや、とかく噂話に明け暮れる宮廷に戻る気持ちもなく、新しい時流に取り残された社会も国民も考慮することなく、そして目的を成就したハンガリーに対する情熱も冷めていたし、溺愛したマリー・ヴァレリーも結婚を果すと、全てが疎ましく、自分以外のことに無関心となっていたことは容易に想像できるのである。

さらに、それに加えて、もはや自ら望んだわけでもないヘルメスヴィラも、自らの好みで建てたアキレイオンも、かつては乗馬で夢中になったハンガリーのゲデレーも、心が休まる「場所」ではなくなっていたからでもある。ということは、今までのような一つの場所一つの建物に落ちつくという習慣が、もはや究極的な心の安寧の場にはならなくなっていたということである。

それでは、この散策と称する強行軍で、エリーザベトは何を求め、得たのであろうか。それは、何も見ず、何も考えずに、徒に時を過ごしたいだけと言えるのだろうか。

容色は衰え、色が黒く、皺が深くなることすら厭わないこの強行軍によって、美容上失った代償は大きい。たしかに、その相貌には内面的な陰鬱さや冷めた感覚が表れていた。また、健康上からも、過度のダイエツトや、このような過度の運動により、肉体的にも神経的にも蝕まれる結果に繋がったことはたしかである。しかし、目の輝きや、高貴ですらりとした誇りある容姿、それに足取りの軽さは失われ

ていなかった。

エリーザベトは、一八九五年の五八歳直前の時点ですら、身長一七二センチに対して体重は五〇キログラムであり、腰回りも生涯ほぼ同じ五一センチでほとんど不変だった。

これは、一種の拒食症と強行軍の成果でもあるが、通常、この身長であれば痩せ気味の体重であるにも拘わらず、太りすぎているという固定観念から、一日に三回も体重を計るという、神経の使いようであった。

それは異常とも言うべき極端な拒食にも表れている。カルルスバート（現在のチェコの温泉地カルロヴィ・ヴァリ）での行軍中には何も食べなかつたので、めまいを起こし、二、三日後には失神するほどであった。それを改めるようにフェシユテイチが忠告したにも拘わらず、一時的には励行したもののまた元の木阿弥に戻ってしまった。

つまり、死を恐れないエリーザベトは、生命の危険よりも容姿（終局的には体形だけ？）の維持の方がより大切という選択肢を選んだことになる。それにしても、フェシユテイチが言うように、彼女が忠告しなければ、エリーザベトは空腹で死ぬことになっていたかもしれない、という言葉が真実味を帯びていることも納得できよう。

幾つかの例を列挙しただけでもわかるように、エリーザベトが徒歩で踏破した距離の総キロ数は驚嘆に値する数値である。そこに、エリーザベトにとって、精神的な安らぎと歩行を達成した満足感があったのかもしれない。いや、満足感はなかったといった方が正しいはずである。というのは、歩いた場所

や距離が初めからどうしても達成したいという目的地や目標距離とは見えないからである。また、精神的な安らぎについても、その過程で何らかの安らぎが得られたようにも見えない。

そこで考えられることは、死を恐れぬエリーザベトは、この強行軍に精神的な「無」の境地を求めていったのではないか。すなわち、余計なことは何も考えない、ただ歩くことのみが、目的そのものだったような気がする。

意外に思われるかもしれないが、筆者には、この行動に仏教の道を求めるための荒行や行脚僧のようなものと共通するものが見いだされるような気がするのである。これは、本論だけでなく、次節で述べる「自然との対話」にも当て嵌まると見ている。

それはまた、この時代のキリスト教徒には理解もできなければ及びもつかない行動を、意識してか、無意識的にか、エリーザベトは思いついたということが言えるのではないだろうか。いや、考えに考えた末に、そうせざるを得ない立場に自らを追い込んだのではないかとも思う。

### 第3節 自然との対話

エリーザベトが、もともと自然に接することが好きだということは、幼いポツセンホーフエン時代からその行動に表れており、さらに、フランツ・ヨーゼフとの婚約時代には、バート・イシユル周辺の山野を散策していることでも容易に理解できる。

それが、ヴァイン宮廷内での採めごとが原因で旅を続けることが習慣になったしまったことは、第5

章での説明でもおわかりのことと思う。その旅も後年、ヴィーンから離れた保養地や観光地での長期滞在のパターンから、移動を続けるパターンに変化していった。前節の散策と称する強行軍では野次馬に覺られずに市内を観光することもあるものの、行き交う人には目もくれずに山野を歩くことも屢々だったが、人のいない自然を対象に旅行をすることがその特徴である。

さらに、エリーザベトが生きた一九世紀は、産業革命のあと、科学技術の著しい進歩に伴い、生活のさまざまな分野で便利となり、エリーザベト自身も旅に列車を使用するなど（船舶は古くからあったものの、これまた動力において進歩していた）その恩恵に浴しながらも、必ずしもそれを心から受け入れたとは限らない。別の言い方をするならば、時代の変化について行けない、いや、ついて行こうとしない感覚から抜けきらなかったということでもあろう。

翻つて言えば、科学万能の世界に引きずり込まれる時代に反抗して、自らの来し方を振り返つて、孤独の世界に閉じこもりながら、もともと信仰に熱心でなかった両親の影響もあり、その反対に、宗教心の篤いゾフィー大公妃や、国家を従属させるような教会の権力にも反発するような、教会不信の感情も手伝つて、自分の思考の世界に浸るための傾斜を強めていったと言えるのかもしれない。

なにしろ、自然は、自分を真つ正面から受けとめてくれる包容力の大きさと、もちろん一切の妥協を許さない厳しさも併せ持っているものの、人間のように偽ることも裏切ることもないことから、エリーザベトに安らぎを感じさせていたのではなかったか。

一八七二年二月と三月のマリー・フェシュテイチの日記による、マリー・フェシュテイチとエリーザベトの話のやり取りを見ると、エリーザベトの気持ちがさらに鮮明に浮かび上がってくる。マリー

・フェシユテイチは前年の一二月に女官としてエリーザベトに召し抱えられたばかりであり、エリーザベトもまだ三四歳であった。

「私が世捨人のように生活していることに驚きましたか」

「はいたしかに、皇妃様。しかし、皇妃様はまだ余りにもお若くていらつしやいます」

「そうね、しかし、私がこの生活を選んだときから、私にはこれ以外の生き方は残っていないの。この大帝国内では皆は私に注目し、否定的に批判し、中傷し、私の感情を傷つけ、気を損ねているのよ。神様は私の心をご存じます。私は悪いことは何一つしていませんわ。そこで、私に安らぎを与え、私の邪魔をしない、そして私に喜びを与えてくれる仲間を探すことにしたのだけ。私は自分自身に戻りたいのよ。自然に向き合いたいよ。森は誰も傷つけたりはしないでしよう。もちろん、一人で生活することは非常に厳しいものです。しかし結局人間はすべてのことに慣れるものです。私はそれを味わいたいのよ。自然は、人間よりも感謝すべきものなのです」

(一八七二年二月三日) 〈注10〉

「フェシユテイチ、貴女は世捨人になりたいですか」

「いいえ」

「しかし、安らぎは非常に価値があるものです。世間から離れ、人間から離れて手に入れるものなのです。言うまでもなく沈黙考するためです」

「残念ながら、皇妃様は実際は思案することですべての時間を浪費する必要はないのです。皇妃様は、精神的に緩慢さの傾向にあり、あれこれの制約を恐れる余り自由に対する欲求が高いのです。皇妃様が好感がもてないという要素がなければという前提で、こじんまりとした宴席に出席なさる皇妃様は魅力的です。もしそうであれば皇妃様の周りも堅苦しくならないのです」

(一八七二年三月一七日) 〈注11〉

エリーザベトは海の荒々しさに憧れていた。その幾つかの例をあげると、エリーザベトの気持ちがかかるのではないか。

一八七四年に、ワイト島からフランスのブローニュ港に戻ったとき、巨大な台風が港を襲った。無謀にも、エリーザベトとマリー・フェシユテイチは、その光景を身をもって体験しようと海岸に向かった。忽ちにして傘はめくり上がり、二人は砂浜に叩きつけられた。やっとの思いで立ち上がったが、歩いて戻る事ができなかつた。

幸いにも近くにいた浜の監視員が助けにきてくれた。監視員は怒りながらも二人それぞれと腕を組み、安全な場所まで連れてきてくれた。彼の話によると、このような日には海岸に出ることは禁止されており、もし彼がそれを阻止できなかったことが警察に見つかったときは、彼は監視員を罷免されるとのことであった。

理知的なマリー・フェシユテイチが、どうしてそのような危険を予期できなかったのか疑問が残るのであるが、エリーザベトの性向を知っていたので、思わず同調してしまたのではなかったか。しかし



フェシユテイチにとっては不覚であつたと言えるのではないだろうか。

もう一例は一八九〇年八月のこと。一本マストの帆船に最初に乗船したとき、船員たちも経験したことのないような嵐に遭遇した。しかし、船酔いしないことに自信のあつたエリーザベトは身の危険をも省みず、あろうことか、自らの身体をマストに縛りつけさせてもらい、デッキに立つた。泡立って荒れ狂う波に完全には濡れになったが、猛威を振るう自然の力に興奮したという。

そのことについて、エリーザベトは「航海を終えて、それは恐ろしいものだった」と語つたという。このときエリーザベトは五二歳。それに対して、フェシユテイチは「我々が岸に着いたことは驚きであり、それがどんなことであつたか、誰も言い表すことができない。私は、初めの一八時間で苦しんだことは言葉で表わしようがない。再び船に戻るといふ考えは恐ろしいことです。私は力がなくならないことを祈ります。すべてのことは、私にとって力を超えています」と日記に書き残している。(注12)

さらに同年の九月にフェシユテイチは、アフリカの港からもう一つの体験をイーダ・フェレンツイに手紙で報告している。「嵐がこの小さな港を襲つてきました。ここで苦難の瞬間が続いています。船では日一日と耐えがなくなり、…船は小さいので嵐から逃れることはできません」(注13)。

この手紙の中ではエリーザベトの反応が書かれていないが、死をおそれないエリーザベトは、平然としていたのではないだろうか。

またそれ以外にもエリーザベトは、海岸に沿って長時間歩いたり、海岸に向かって荒れ狂う波をじつと観察するなどの行動を通して、精神的に安らぎを得たことはたしかである。しかし、その反面、当然のことながら身体的にはずぶ濡れとなり、その代償として、神経を病み、神経痛性の痛みに悩まされる

ことになった。

最後に、一八九六年一二月に、スペインとの国境に近いフランスのビスケー湾内のビアリッツに逗留したときのことを取り上げたい。その間、大抵の日は悪天候であったが、エリーザベトは朝早くから夕遅くまで海岸に留まって海を眺めており、「この海は何と雄大なのか、そのことは誰も理解していない。しかし、この暴風雨の中ではほとんど前進することができない。昼に夜に、風と海がこのようになりをあげていると、頭がすっかり混乱してしまう」(注14)と、そのときの様子を書き留めている。

以上のように、それらの海岸や航行中の船の中で、エリーザベトは何を感じたのか。

恐らく、人間にとつてまったく抗あらがいがたい自然の力の偉大さに感動したかったのか、それとも無心の境地に浸りたかったのか、目に見えない自然の啓示を受けたかったのか、はたまた酷しい自然に己が身を投げ出して委ねたかったのだろうか。そのことについては語られていない。

このように、エリーザベトは、大海原を船で航行することを好んだ。航行中に嵐に遭遇しても少しも不機嫌にはならなかった。むしろ、海においてさまざまな経験をしていくうちに、海や嵐という自然現象に教えられることが多かったに違いない。

これは、森についても同じことが言える。コルティはその著書の中で、「海と森とはひとけのないところなので、エリーザベトにとつては、今では(筆者注：一八九〇年代。エリーザベトの晩年)この世で一番好きなおところである」(注15)と述べている。

エリーザベトは、ヤハウエ(ユダヤ教の唯一神)のような偉大な神に自分の在るべき道を求めている

が、それは、聖書や説教や祈りなどで代表されるキリスト教という宗教に限界を感じ、人間が作り上げた宗教や神ではなく、自然というもっと大きな力を通して、自分の進むべき道や在るべき姿を求めたいように、筆者には思えるのである。

論理的であり、合理的であろうとし、「自然は対決するもの、そして自然は征服するもの」であると  
する一般的なヨーロッパ人が、上述したようなエリーザベトのそれらの行動を奇癖と見なし、理解を示さなかつたことは、自然と一体感をもつ東洋人のように、エリーザベトが悪天候を衝いてまで自然と向き合うという考えに、一般のヨーロッパ人はついて行けなかつたのではないか。いや、そのような発想そのものをも考えつかなかつたのではないかと、筆者には思えるのである。

話が飛躍するかもしれないが、エリーザベトのこれら一連の行為は、仏教における滝に打たれたり、崖から吊るされたり、その他極限まで生死を彷徨うほどの荒行をしたりして、無心になったり道を究めることと一脈通ずるものがあるように、筆者には思えてならない。既述したように、もちろん、エリーザベトは、日本において古くからそのような「行」を行っていると知らないと思われるが、筆者の考えは的外れなのだろうか。

これらのことは、エリーザベト伝記の過去の第一人者であるコルティも、現在の第一人者であるハーマン女史も、いや、現代の大方のヨーロッパ人も依然として、このような東洋的な考えの埒外に置かれた人々たちであるように感じるのである。

#### 第4節 心の世界と死生観

オーストリアが絶対帝政から立憲帝政に移行したものの、共和主義的な考えを持つエリーザベトは、ゾフィー大公妃の死後も、皇妃としての義務を果たそうとしなかった。

それは、ゾフィー大公妃の意を継承した頑迷なフランツ・ヨーゼフが、エリーザベトの考えを受け入れる意志がありえなかったため、エリーザベトは君主としてのフランツ・ヨーゼフに失望したからであつた。

フランツ・ヨーゼフが、メキシコで非業の死を遂げた比較的自由的な考えを持っていた弟のフェルディナント・マクシミリアン大公のようであつたならば、エリーザベトの考えもある程度受け入れられ、宮廷の民主化に向けて政治的に自らの活路を見出し、もう少しましな結果を導くことが出来たのかもしれない。

しかし、当初から皇妃としての義務を果たすことを放棄し、もはやそのような政治的な改革の意欲もなかったエリーザベトは、あれだけ好きだった乗馬すらもできなくなつてしまつてからは、自分の世界に閉じこもるしか選ぶ道はなかつたのである。

エリーザベトが人間の死について最初に考えたのは、フランツ・ヨーゼフと見合いをするために、姉ヘレーネと一緒にバート・イシユルに向かう四カ月前の一八五三年四月、友人の弟の死に遭遇した一五

歳のときであった。お転婆だった少女エリーザベトは、感傷的になるとともに、このとき死に対するかすかな憧憬を感じていたのであった。

そののち、一八六四年にバイエルン王マクシミリアン二世が没し、その直後に、同王の妹でありアルブレヒト大公の妻であるヒルデガルトがその後を追ったことがあった。そのとき、エリーザベトは療養先のバート・キッシンゲンから駆けつけて、ヒルデガルトの最後を看取ったが、そのあと同じ地で療養して友人となっていた、半身不随のイギリス人ジョン・コレットに次のような手紙を書いている。

私は大人の方が亡くなるのをはじめて見ました。それは私に恐ろしい印象を与えました。私は死ぬということがそんなに重大であるということ、死との戦いがそんなに恐ろしいとは考えても見ませんでした。だれしもがそれを経験しなければならぬということを考えることを！ 子供時代の無知により、悲しみがこの世から消えてゆくことが、どんなにか羨ましかったことか。死以上にたしかでない生とは惨めなことなのです。〔注16〕

当時まだ二六歳だったエリーザベトは、イーダ・フェレンツイを雇う七カ月前で、義母やヴィーン宮廷内での苛めに対して孤軍奮闘していたときであり、自らの惨めな立場と重ね合わせていたと思われるが、まだ死を願望するまでには至っていなかった。

また、ジョン・コレットに宛てたこの手紙は四月一六日付けになっているが、その六日前にフランツ・ヨーゼフの弟であるフェルディナント・マクシミリアン大公が、メキシコの皇帝に即位するという

事態と重なっており、死についてそれ以上考えることは当面棚上げされた形となった。

しかし、その三年後の一八六七年に、フェルディナント・マクシミリアン大公の非業の死を聞いて、再び人間の死について考えるようになったのかもしれない。しかし、遠い異国の出来事であるので、それほど悲しみが伝わってこなかったとも考えられよう。大方の伝記作家の著作ではそのときの死についてのエリーザベトの考えは伝えられていない。

ハーマン女史はその著書の中で、エリーザベトは一八八〇年半ばから何度も自殺を口にしてしていると述べている。〈注17〉

エリーザベトは、この時点ではすでに、皇帝として夫としてのフランツ・ヨーゼフに愛想を尽かし、一八八五年八月にはシュラット夫人を夫にあてがっており、その間、一八八六年六月にはルートヴィヒ二世、一八八八年一月には最後には仲違いしたもののエリーザベトの第一の理解者である父のマックス公爵、一八八九年一月には息子ルートルフ皇太子を失っている。更に、一八九〇年二月にはジュラ・アンドラーシ伯爵に、同年の五月には最も頼りになる姉ヘレーネに相次いで死なれている。

このような状況のなかで、エリーザベトが自殺を含めての死を願望していたことは、十分考えられることである。

その一方で、エリーザベトが母としての愛情を一心に注いだ三女のマリー・ヴァレリーが、一八九〇年七月に結婚した。母として娘が良縁を得た安心感と同時に、結婚後もマリー・ヴァレリーは母エリーザベトと行動を共にする機会も多く、時には直言したり批判したりしてはいるものの、母のよき理解者

でもあった。しかし、そのマリー・ヴァレリーですら、ぼつかりと空いたエリーザベトの心の空白を埋めることはできなかった。

エリーザベトはマリー・ヴァレリーに次のように述べている。因みにマリー・ヴァレリーの日記に記されたこの日は、エリーザベトの死の約三カ月前である。

ママは今日、自分はときどき死に憧れ死を恐れないと、繰り返して言うのです。

「なぜなら、ある大きな力が、もし残酷であるとしても、生きる悩みを与えるだけでなく、さらにそれ以上苦しめるために、肉体から精神をもぎ取るかもしれないとは、信じるつもりはないのだから」と。

(一八九八年六月一七日) 〈注18〉

そもそも、神の存在についてあれこれ思案するには、人間はあまりにも小さく惨めだ。そのため、エリーザベトがマリー・ヴァレリーに包み隠さず述べたように、そして、次に述べているように、それについて考えることは以前から諦めていた。

「希望する」ことと「喜ぶ」ことの二つの言葉を、私は永久に私の生涯から放棄しているのだよ。

〈注19〉

これらの発言は、人間の生命と死、幸不幸、神の存在などについて真剣に考え、宮廷の諸事、民族、

戦争、その他俗世間の煩わしさから超越しようともがいている、エリーザベトの、人間としての道への追求とは読めないものであろうか。

エリーザベトのこのような考え方の背後には、マリー・ヴァレリーが言うように、母エリーザベトは「理神論者(Deistisch)」(注20)ということが正しいかもしれない。

理神論(Deismus)とは、「世界の根源として神の存在を認めはするが、これを人格的な主宰者とは考えず、従って奇跡や啓示の存在を否定する説」(「広辞苑」第二版)であり、また、別の言い方をすれば、「神が世界の出来事に関与することは信じないという宗教哲学」(小学館「独和大辞典」第二版)である。

すでに述べてきたように、エリーザベトは、信仰心の薄い両親の影響もあり、また、宗教が皇室を上回る権威を持っていることに疑問を感じてきたこと、さらに、ルートヴィヒ二世やルードルフの死に直面して、ヤハウエが信じられなくなったことによるものである。

カトリックの信心篤いマリー・ヴァレリーにしてみれば、エリーザベトが「個々の人間は、この無数の世界を創り上げた神の目から見れば、無に等しいとの見方をしている」が、「それではあまりにも救い難く、また、キリスト教の信仰からあまりにもかけ離れている」(注21)と、そのやる瀬なさを吐露している。

「自分は一人で死にたい」(注22)とイルマ・スターライに語っているように、フランツ・ヨーゼフより長く生きることを望まず、また、死の際には夫と子供たちが側に居てほしくないという気持ちは、俗世間の人間関係のすべてのしがらみから解放されたい、そのようなことに一切関わりたくない、とい



う気持の表れではないかと思われる。

前々節で述べた散策と称する強行軍は、仏教でいう「心を無にする」行動の現れではないだろうか。また、前節で述べた自然との対話も、何かを求める「求道」の世界に浸りたいあらわれではないか。筆者はそう思えてくるのである。

自分の世界に閉じこもるとしても、エリーザベトの行く至るところ、常に同行する従者が多く、また地元住民の好奇心も高く、瞑想に耽ることも、ひたすら道を求めることもできはしない。まして、カトリック教徒であることから離婚して皇妃をやめることは不可能であり、したくもないであらうし、はたまた尼僧になって神の教えに従い、神に祈り、縋るといったこともしたくはなかった。

その一つの解決策が、超人的で無謀ともいえる強行軍により何も考えずに自らの肉体を痛みつけることであり、嵐を厭わずに自然に向き合うことであった。そのためには、奇人であり、奇癖があり、奇行をすると非難され呆れられても、一向に頓着しなかった。

贅を尽くして建設したアクレイオンも、エリーザベトは僅かな年月で手放そうとした。いや、結果的には家財類を処分し形骸化したあとに、次女のギーゼラに相続遺産の一つとして与えてしまっている。何度も訪れたアクレイオンにしてからがそうであるように、また、それが飽きっぽいと言われようとして、エリーザベトにとっては、どこに旅をしても、心が休まる地を遂に発見できなかったのである。

「私はカモメになりたい」という気持ちは、人間の世界に止まらずに、この地球という世界のなかで好きなように何処にでも羽ばたきたい、と言うさすらいの気持ちが込められている。逆に言えば、エリ

ーザベトにとつては安住の地は世界のどこにもなかったのである。

「アメリカに行つてみたい」という気持は、憧れの自由を体験したいという希望と、そこが安住の地かもしれないという期待があつたのかもしれない。

一方で、アケレイオンのテラスにある一三の胸像のうち、ホメロスなどの古代ギリシアの文学者やイギリスのシェークスピアとともに、プラトン（ソクラテスのものではないが）の胸像があるのをみると、古代ギリシア哲学にも何らかの知識はあつたものとは思われるが、それが生かされていないように思われる。クリストマノスたちは、エリーザベトに哲学についてもっと進講しなかつたのであろうか。それともエリーザベトがあまり気が進まなかつたのであろうか。

中近東と呼ばれている地域にも一部であるが足跡を記しているが、しかし、アメリカ以上にヨーロッパに知られているはずのインドや中国には関心がなかつたのか。多少の物珍しさも手伝つて、一時的には関心を持つことはあつたとしても、当時のヨーロッパでは、古代インドや中国に発達した東洋思想の研究が十分でなかつたことから、エリーザベトも関心を持つに至らなかつたのであろうか。（注23）

いや、その一方で、ドイツの哲学者ショーペンハオエルの書を読んでのことであるので、その厭世観えんせいに共感を覚えたのではなかつたか。

彼の基本的な考えはすなわち、「幸福といつたものは存在しない。なぜなら満たされざる願望は苦痛を惹起し、成就是飽満をもたらずにすぎないからである」（注24）るといふ。

「キリスト教を嫌つた彼（ショーペンハオエル）は、インドの諸宗教、すなわちヒンドゥー教と仏教との双方を好」（注24）み、そのなかに一つの救いを見いだした。その「神話のうちのもつとも優れ

たものは、「ニルヴァーナ」(注24)であるという。シヨーペンハオエルはその用語を「消滅」の意と解釈したが、仏教用語で「涅槃<sup>ねはん</sup>」の意味である。

シヨーペンハオエルが仏教をどの程度理解していたか、そして、エリーザベトが、シヨーペンハオエルに倣ってインド古典をどの程度研究していたか、それがエリーザベトの生き方にどれほど活かされていたかいなかったか、さらには、果たしてエリーザベトは、「涅槃」にまで研究が進み、その境地を理解したであろうか。それらは筆者の調べる域を越えており、説明する資料も能力もない。

なお蛇足であるが、中近東や中東という呼称は、トルコのアナトリア半島を小アジアと呼ぶのと同じように、ヨーロッパから見ての呼称で、残念ながら現在でも日本においても使用されているが、関係ある学者の間では「西アジア」という呼称が使用されている。筆者が高校時代、地理上の「発見」(現在は「大航海時代」と改められている)のように、ヨーロッパ的な感覚から卒業したいものである。

筆者は先程エリーザベトを「求道者」に見立てたが、それは必ずしも的外れな見方ではないと思う。ただ、エリーザベトについて語るドイツやオーストリアなどの多くの伝記作家は、エリーザベト自身はじめ、フランツ・ヨーゼフ、マリー・ヴァレリー、マリー・フェシユテイチ、クリストマノスなどの様々な日記や書簡に基づいて記述しているが、エリーザベトがそれらの行動をとるに至った理由については、著作者の判断をほとんど述べていない。

また、多くの伝記作家は、エリーザベトは「死」を願望していると書いている。たしかに、エリーザベトから直接聞いているマリー・ヴァレリーやマリー・フェシユテイチの証言(日記)によると、結

果的にはそうであることは間違いない。

しかし、エリーザベトの「死」という観念について、ヨーロッパの伝記作家は踏み込んで分析していない。離婚も叶わず、自殺は許されないカトリック教のもとでは、死を願望することは神への冒瀆であり、信ずることによってのみ救われるという教義からは、エリーザベトの心情を理解できず、仏教で言う「道」を窮めて「悟り」を開くという観念がないのではないか。いや、伝記に著者の私見を加えずに事実（皮相的なものも含めて）のみをもって語らしめる手法に徹しているのかもしれない。しかし、筆者のように「評伝」という方法もあり、私的な推測も許されない訳ではない。

エリーザベトは、たしかに、偉大なヤハウエの力に身を委ねたり、幼馴染みのイレネ・バウムガルテン伯爵夫人の主催する心靈主義に迷い込んだりしている。そのような試みは、エリーザベト本人が気がついていたかどうか確証は得られないが、自分の気持ちを理解してくれる相手がいなかったため、自分で道を開くための一手段として、何か解決が得られる方法はないか、手探りで片っ端から体験したかったとも、模索していたとも考えられなくもない。

求める道が開けなかった結果、エリーザベトは、これからの自分の生涯を、「肯定的」ではなく「否定的」に捉えることが結論だったのかもしれない。

自然とは征服するものであり、アニミズムを信じている未開人に、キリスト教を信じさせることは正しいことであり、キリストを信じることよってのみ人間は救われる、という宗教心のヨーロッパ人には、「禅」的な考え方を理解することは難しく、また受け入れたくない思想なのかもしれない。

果して、エリーザベトが、どこまで自分の心の中でもがき模索していたのか知る由もないが、心を空

にして自己に向き合えたとすれば、救われたのではないだろうか。唐突に思われるかもしれないが、ここで鈴木大拙著の文庫本「禪」に収録された「禪指導の実際的方法」（原文は英語。工藤澄子訳）から左記の一文を抜粋してみたい。

自分の所存では、禪は一切の哲学および宗教の究極するところである。すべての知的努力は、もしそれが何か実際上の効果をもたらすものであるとするならば、ついには禪に到らねばならぬ。否、むしろ禪から出発せねばならぬ。一切の宗教的信仰もまた、もしそれが、いやしくもわれわれの實際生活において、有効に、かつ生き生きと働き得るものであることを立証しようというのなら、禪から生まれ出でねばならぬ。だから禪は、必ずしも仏教徒の思想と生活の源泉であるにとどまらない。それはキリスト教の中にも、回教の中にも、道教の中にも、そしてまた実証主義的な儒教の中にさえも、多分に生きている。（注25）

上述の引用部分は一九五六年にニューヨークで出版された著作に掲載されていたものであり、次のように一つの論文（一九五八年発表のもの）でもわかるように一九世紀末のヨーロッパでは「禪的な」思索は考えられないことであるような気がする。（筆者注：引用文のカッコ内の「征服する」と「友とする」は、訳文では傍点の「、、、」による強調となっている）

この力の誇示のもっとも顕著な一例が、西欧の人々の自然に対する態度にみられる。かれらは自

然を「征服する」といって、けつして自然を「友とする」とはいわない。かれらは高い山に登っては、山を征服したと公言する。(注26)

すなわち、キリスト教の世界では、今でも、「人間は自然と友になり、自然に溶け込む」ことはできないのではないかと思う。繰り返しになるが、エリーザベトは、古代ギリシアの文物のうち、文学作品はかなり読み込んでいると思われるが、果して、キリスト教文化以前の古代ギリシアの哲学書を読み、思索し、悩みを解決しようとしなかったのであろうか。

それらとはともかく、皇妃としての立場から逃れることはできないまでも、皇妃としての義務はかなり以前から放棄していることでもあり、かなり自由に旅行することができるので、縦横に「思索に耽ふける」ということは不可能ではなかったはずである。お手本がなかったのか、初めから深く考えるということ諦めてしまったのか、結果的には、消極的であったということができよう。

そこにエリーザベトが、安心立命の境地に到達できなかつた、最大の理由があるような気がする。

筆者の結論として、エリーザベトがこのような行動をとらざるを得なかつた理由としては、信じるものがない、生きるべき精神的拠り所が見つからない、打ち込めるものがない、心が満たされていない、心を打ち明けることのできる相手がいらない、との判断から、誰も入り込めない独自の世界をつくり、自らの心を鎖していると思えるのである。

賢明で判断力にも優れているマリー・フェシユテイチを相手として、心を割って打ち明けることが

できたら、幾分かは心が癒されるのであると思われるのであるが、果たしてマリー・フェシユテイチが同じ人生観を共有できるほどエリーザベトの心の中に踏み込めたか、という問題と、もしできたとしても、所詮マリー・フェシユテイチは女官に過ぎないから心を開くことはできないと、エリーザベトは思ったからかもしれない。

## 第5節 シシーの世界観

現代の我々から見ると、エリーザベトの死は、まさに、専制君主制という前時代的な崩壊寸前の老大国の渦中にあつて、それに逆らう近代的な感覚をもつて現れた人物が、報われることなく葬られてしまつたとみることができる。

まず、同じ貴族とは言つても、がんじがらめに縛られている宮廷や上級貴族社会ではなく、末端の貴族として、しかも自由放任主義的な両親のもとに育てられた環境から、因習にとられずに当時のヨーロッパの社会情勢を見ることができ背景が備わっていた。

もちろん、結婚するまでは幼くもあり、そのような社会事情を積極的に見聞し、それに対してはつきりした考えがあつたわけではなかつたはずであり、皇妃となつてから必要に迫られて、考えざるを得なかつたというのが正しいかもしれない。

皇妃となつたエリーザベトは、当初は政治・外交については蚊帳の外に置かれ、口出しはできなかつたけれども、王家の一員として、その実情については否が応でももろに体験せざるを得なかつた。そし

て、一八五九年のイタリア統一戦争の敗北のころから、帝国の将来及び夫や子供の将来が危ういと感じはじめた。

当初は王権神授説に固執する姑ゾフィー大公妃に対して、嫁としての単純な反発も手伝わっていたとも考えられるが、妹マリーの嫁いだナポリ王国の敗北、ミラノやヴェネツィアにおいて直接体験した屈辱などから、帝国としてのハプスブルク王家の崩壊ということよりもむしろ、フランツ・ヨーゼフ一家族の妻ならびに母親として、将来に不安を感じていたというべきであろう。

為政者としてのゾフィー大公妃の、軍と貴族中心の専制君主政に対して、エリーザベトはこのときにしてはじめて反対の立場をはっきりと打ち出しているが、ゾフィー大公妃と同じ穴のむじなの立場にある夫フランツ・ヨーゼフに対しては流石に手加減をしている。

とは言うものの夫に対して停戦を提案したが、軍人皇帝としてたき上げられたフランツ・ヨーゼフの考えを変えることはできなかった。ただ、流石のフランツ・ヨーゼフも後年になって、帝国の行く末とは別に、家族の将来の生きるべき方向を示唆している。

エリーザベトがハンガリーに接近したことは、最初は、ゾフィー大公妃の側近で固められたヴィーン宮廷での孤立無援から脱却するために、ゾフィー大公妃からもっとも遠い存在であったハンガリー出身の女官等を身邊に置きたかったことが第一の理由である。

しかし、イタリアを失いプロイセンに敗れたあと、帝国のためには、ベーメン（ボヘミア）と並んで大きな属領であるハンガリーを、二重帝国の相手として、オーストリアの味方につける必要があるとの判断もあった。



たしかに、一部で批判されているように、筆者も、エリーザベトがデアークやアンドラーシをはじめとするハンガリーの指導者に籠絡されたという一面をも否定しないし、また、必ずしも高度な政治的判断による行動であったとも思えないが、ハプスブルク王家のさらにはオーストリア帝国の置かれた状態から、何とかしなければならぬという一念からの行動であり、単なるハンガリーの走狗ではなかったと言いたい。

エリーザベトが、結婚前のポツェンホーフエン時代に、ヨーロッパの政治情勢や社会情勢について、父マクシミリアン公からどのような知恵を授かったか窺うことはできない。もし知っていたとしても、貴族の一員としてそれに対してどのような行動をとるべきかなどは、一〇歳代前半の少女としては考えられないと言うのが正しいのかもしれない。

ただ、身近な問題ではなかったとしても、一七七六年のアメリカ合衆国の独立、一七八九年のフランス革命、その後のナポレオンの台頭、近くでは一八四八年のヨーロッパ各地で発生した革命などについての知識はあったことはたしかであろう。一八四八年のオーストリア三月革命により、フランツ・ヨーゼフの一家がインスブルックに難を逃れた際に、同地で会っていたことは、当時まだ一〇歳だったエリーザベトも、その重大さはわからないものの、何かしらは感じていたに違いない。

しかし、身近な問題として考えるようになったのは、やはり皇妃になってからであることは間違いない。その最たるものはやはりハンガリーから入ってくる情報であろう。ヨーカイ（一八二五年～一九〇四年）のようなハンガリーの作家などとも接触しており、オーストリア宮廷に入ってくる保守的で一面的な情報以外の情報も入手している。

これらの情報は、オーストリア帝国にとって不利を通り越した危険な情報であり、摘発されるべき発禁文書であるにも拘わらず、それを告発せず宮廷内に私蔵しかつ読んでいたことは、単なる好奇心ではなく、やはりオーストリア帝国の安泰よりも社会情勢のよりの確な判断を求め、ひいては家族の安全を第一に考えていたことの証左である。

例えば、エリーザベトは、反政府系左翼新聞の編集者でもあったヨーカイの著作を読んで、国民理想主義の精神を覚醒させられている。ヨーカイと対面したときに、ヨーカイから「国民の心を勝ち取ることはもっとも高度な政治なのです。陛下はそれを完全にご理解されています」と告げられ、「私はあなたを王妃としてみておりません。女主人ではなくわが国の守護神です」(注27)と称賛されている。

これは単に阿諛としてヨーカイから持ち上げられているのではなく、民主的理想主義的な理解者として評価されているということもできるのである。

このほかにも、第4章第4節でも述べたように、ハンガリー語の勉強と称して、新聞記者ミシヤク・ファルクを講師として雇い、政治問題一般からハンガリーの政治問題について情報を得たほか、発禁文書となっているイシュトヴァーン・セイチエニの著書まで入手している。

この記者は当然、デアークやアンドラーシとの接触もあり、エリーザベトの洗脳的役割を果たしている。ただこのことは、エリーザベト自らがファルクを講師として、ハンガリー人でありながら、反ハンガリー主義者でもある女官長のケーニクスエッグ伯爵夫人に、その仲介を要請すらしているのである。

この伯爵夫人は、エリーザベトがフランツ・ヨーゼフの協力を得て、ゾフィー大公妃の信任厚かった前任の女官長エステルハージー伯爵夫人を解任しての後任であるので、エリーザベトもケーニクスエツ

グ伯爵夫人を信頼していたことは間違いないが、同伯爵夫人はフランツ・ヨーゼフにこの事実をご注進に及ばなかったことは流石である。

また、エリーザベトは、自らも知っている皇帝に仕えていたある官吏の息子が、一八六七年に発刊した発禁本「オーストリアの崩壊」という本も読んでいる。その本の締めくくりに「オーストリアの崩壊はヨーロッパには不可欠である」(注28)と結んであった。

これも、もしエリーザベトがゾフィー大公妃側の人間であればもちろん看過しなかったはずであり、それ以前の問題として、エリーザベト自身がその本を隠し持っていたということは、正に皇妃としてはあるまじき行動であり、ゾフィー大公妃側の人間に見つかれば糾弾されてもおかしくない。

しかし、イタリヤ領土の喪失、メキシコ皇帝で次男フェルディナントの処刑、普墺戦争の敗北などのダメージから意気阻喪したゾフィー大公妃は、もはやエリーザベトに睨みを利かせる神通力がなくなってしまったからでもある。

そのため、エリーザベトは、皇妃としての立場を離れてでも、それがたとえオーストリアにとって不利なことであっても、社会の様々な情報を蒐集して正しい理解をするという努力をしていたということもできるのである。

このようにして、一八七〇年代になると、エリーザベトといい、ルードルフといい、フランツ・ヨーゼフに一番近い妻であり息子である肉親が、フランツ・ヨーゼフが統治しているオーストリア帝国という政治形態を見放しているとしたか考えられないのである。

おそらくそれは、エリーザベトの声にもルードルフの声にも耳を傾けることをしない、いやしたくて

もできないフランツ・ヨーゼフの、いやオーストリアという国家の悲しい運命なのかもしれない。おそらく、フランツ・ヨーゼフとしても、特に多民族国家であるが故にも、この政治形態が時代の趨勢と相容れないが、しかも打つ手が不行き詰まりを痛切に感じていたことであろう。

フランツ・ヨーゼフが即位した以降でも、フランスのように共和制と帝政が交互に敷かれている国の例もたしかにあるが、立憲君主制はとれるものの、フランスは別として、ましてやヨーロッパの大国の統治者としては、他の君主国より先に帝国を崩壊させるわけにはゆかなかったこともたしかである。

逆に言えば、エリーザベトも、ルードルフも、もうとつくにオーストリアという国家に愛想を尽かしてしまった、諦めの境地にどっぷりと浸かってしまったのかもしれない。

エリーザベトは、「古き朽ちた幹は病んでいる」(注29)と述べ、複数言語併用国家は瓦解するとまで断じている。これはもちろん、一二七三年にハプスブルク王家による帝国が誕生してから、政略結婚その他で領土を広げかつ多くの異民族をその支配下に置いてきた、老大国オーストリアそのものを指していることはいまでもない。

また、エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフはハプスブルク帝国の終焉から一つ前の皇帝であるとも述べている。これは、「この帝国は誇りあるひとりのルードルフから始まり、ひとりのルードルフで終わる」(注30)という古くからの予言を引用しての思いである。

上述したように、一二七三年に綿々と続くハプスブルク王家の基礎を築き、大空位時代後の神聖ローマ帝国の皇帝に就任したのはルードルフ一世(在位一二七三年～一二九一年)であり、軍国的なフラン

ツ・ヨーゼフの時代を経て、息子のルードルフ皇太子が最後の皇帝として共和主義的な政体へ移行すると予測しての思いであったのであろう。

エリーザベトは、それほどまでにハプスブルク王家の命運はそう長くはないと判断したと見ることができる。それは、エリーザベトにとつて、夫のフランツ・ヨーゼフよりも自分の考えに近いルードルフ皇太子が、ハプスブルク王家の将来、いや、オーストリア帝国の将来を好ましい方向、おそらくは無血により共和制に移行することによって、終焉させることを夢見ていたのかもしれない。

しかし、まさか、その最後の皇帝となるべきはずのルードルフ皇太子が、あろうことか一八八九年に自殺するとまでは思いも寄らなかったのである。そこに、エリーザベトの希望を託すべきオーストリアの将来が消滅してしまつたのではないだろうか。そこで、エリーザベトは益々この国に未練を残す理由もなくなり、また、翌年には溺愛してきたマリー・ヴァレリーも嫁いだことも手伝つて、完全に自らの死をも厭わなくなつて行つたのではないか。

フランツ・ヨーゼフの治世は第一次世界大戦さなかの一九一六年のその死まで続き、フランツ・ヨーゼフの二番目の弟カール・ルートヴィヒの孫に当たるカール一世に引き継がれたが、一九一八年の敗戦とともに皇帝の地位を失い、オーストリア皇帝としてのハプスブルク王家は終焉を迎えたのである。

## 第6節 その後のアキレイオン

エリーザベトが、アキレイオンを建設後、程なくして売却を仄めかしていたが、その後どのような

ったか、現地で購入した資料「アヒリオ 歴史と伝説」（ドイツ語版）を参考に、以下箇条書き的に要約する。（注31）

一八九八年にエリーザベトが暗殺されたあと、アキレイオンはギーゼラが相続しているが、皇帝家基金に売却されて約一〇年間空いたままとなっていた。

その後、一九〇八年になって、ドイツ皇帝のヴィルヘルム二世（いわゆるカイゼルと称していた。日本でもこの皇帝の髭の形から、カイゼル髭という言葉が流行った）が購入している。

これまた余談となるが、カイゼル（＝カイザー）とは、古代ローマ帝国のユリウス・カエサル（英語でジュリアス・シーザー）の名を取ったドイツ語で皇帝の意味である。同時に、ロシア皇帝のツァーリも同じカエサルの名から取ったロシア語の皇帝の意味である。

一九一四年に入ると第一次世界大戦が勃発し、ヴィルヘルム二世もこの別荘の所有どころではなくなってきた。第一次世界大戦二年目の一九一五年には、フランス軍とセルビア軍が占領し野戦病院として使用されているが、このとき建物はかなり破損している。

一九一八年にドイツが敗北すると、アキレイオンは再び無人の建物に戻ったが、一九一九年のヴェルサイユ条約によって、戦勝国のギリシア政府の所有となった。

更に、一九三九年に第二次世界大戦が始まると、四五年の敗戦まで、枢軸国であるイタリアとドイツの占領部隊の司令部及び野戦病院として使用されている。

戦争終了後は、ギリシア国家のさまざまな施設として使用されたのち、一九六二年には二階と三階がカジノの施設として、一階はエリーザベトとヴィルヘルム二世の記念品を陳列した博物館として現在に

至っている。

さて、筆者は、一九五五年にその存在を知って以来、一度は是非ともアキレイオンを訪れたいとの長年の願望を、約半世紀振りの二〇〇三年夏にやっと実現することができた。

それまでに、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、スイス、イタリアなどにあるエリーザベトゆかりの地は一再ならず訪れてきたが、コルフ島は実に四八年後となった。

七月一八日にアキレイオンの門を潜った。入口近くの庭の一隅にプレートが立っている。ドイツ語表記の銘を日本語に訳すと、曰く、

アレクサンダー・フォン・ヴァルスベルク

一八三六―一八八九

在コルフオーストリア領事、ギリシア愛好者にして、アキレイオンの建築発起人を記念して

一九九一・五・三一

後から考えると、この一九九一年五月三二日がどのような記念の日であるか、聞く機会を失したため分らないのが残念であった。

前庭から見上げる三階建ての白亜の建物は十分復元されたものか、エリーザベトの美しさを象徴するかのような優雅な造りであった。見上げる建物の三階のバルコニーの隅に立つ青銅製の人物像を見てい

ると、抜けるようなギリシアの青空に映えて、一九世紀時代の別荘の佇まいが感じられるような気がした。

さらに、一階の玄関右脇の壁の下部にも嵌め込みの銘版があった。曰く、

オーストリアのエリーザベト皇妃は、一八九〇年〜一八九二年に、  
アオグスト・ブコヴィツチ男爵の監督の下にアキレイオンを建てさせた

この銘には日付が入っていないため、建築時に銘記したものであろうか。

この名板と反対側の玄関左脇には、エリーザベトの大理石の立像が立っていた。台座には、制作者名と製作年が彫られてあった。

建物の内部は、博物館として開放されている一階は陳列品を見ることはできたが、二階以上（カジノと事務室などとして使用）は入ることができない。ただし、二階に上がる階段とその上の踊り場を見上げると、優雅な内装が施されており、十分に復元されたのであろうか、往時を偲ばせる（？）雰囲気を感じられた。一階の陳列品には、エリーザベトと第二代の所有者であるヴィルヘルム二世ゆかりの品々も展示されている。

二階以上は入れないので、建物右端の外の階段とその上のV字型になった登り道を歩いてゆくと、L字型となった三階の建物、二階の屋上となるテラス、庭園に出る。

L字型のその角の大きな窓から、ガラス張りの天井の下の二階内部を眺めると、階段踊り場の壁に掲



示されているフランツ・マルツ作の四メートル×一〇メートルの巨大な「アキレスの勝利」の絵画をガラス越しに眺めることができる。

この絵は、ホメロスの叙事詩イリアスの一光景を題材にしたもので、戦車の上に立ったアキレス（ギリシア語でアヒリス）が、戦死した友人パトロクロスの仇であるトロヤの敵将ヘクトルの死体を、戦車にくくりつけてトロヤの市民の前で引きずり、見せしめに行っている図である。

三階のL字型の建物には同じ型の廊下が張り出しており、その前に石畳のペランダが広がっている。廊下の屋根を支えるイオニア様式のそれぞれの列柱の前には石像が立っている。これらの石像（ギリシア神話のミューズたち）や廊下に置かれた胸像（哲学者・雄弁家・詩人など）やペランダにある小さな噴水池にある銅像は、いずれもエリーザベットの古代ギリシアへの郷愁の表れである。

三階のペランダの横から東北東方面に向かって、細長く広がる庭園がある。ペランダから段差のある次の庭園に下りる手前の低い塀の上に「攻撃する格闘者」と呼ばれるブロンズ像があり、その左右の像の間の先には、二段の段差に下がった広い庭園があり、さらにその先に広がるこの島の北東部分の光景が素晴らしい。

その中位置には「瀕死のアキレス」の石像が立っている。この別荘の名の由来となるアキレスに対するエリーザベットのもう一つの熱狂的な思いが、この石像にも表れている。この石像は、アキレスにとっての唯一の弱点とされていた、いわゆるアキレス腱に刺さった矢を抜こうとしてもがき苦しんでいるアキレスの像で、エリーザベットは、この像を人間の愁嘆の象徴として、造らせたものである。

庭園の先端からは、右手にバルカン半島のアルバニアとギリシアの国境周辺の陸地が、正面には、現

在ではその一部が空港の滑走路となっているハルキオポウロス潟とその奥に主都のケルキラ市が眺められる。

庭園の先端部分には、ヴィルヘルム二世が造らせた矛と楯を持つて立っている「勝利するアキレス」の巨大な銅像が設置されているが、もともとはそこには「瀕死のアキレス」が設置されていたものが、現在の位置に移動させられたものという。

さらに、ユダヤ人嫌いのヴィルヘルム二世は、エリーザベトがこの別荘の森の中にあるペリスタイル（円形列柱廊様式）の中に設置したハイネの胸像を撤去させている。現在では、その像のあとにエリーザベトの立像が設置されているというが、筆者が訪れた二〇〇三年にはその区域には入ることが許可されていないので、見ることはできなかった。

さて、目をつぶって約一一〇年前の別荘を想像してみる。

建物や戸外の彫像については、復元は十分なされたように思え往時の雰囲気は出ているが、エリーザベトゆかりの展示品は、ヴィーンその他で十分見てきた筆者には訴えるようなものが見つからないし、部屋のいくつかは、ヴィルヘルム二世ゆかりの陳列品等で占められているので、エリーザベトが住んでいたというイメージが湧いてこない。

庭園についても同じで、ヴィルヘルム二世が造らせた勝利するアキレス像とそれを取り巻くように植えられた椰子の木々は、地域内を散策するエリーザベトの面影に思いを馳せる筆者にとっては、雰囲気をおち壊す以外の何者でもなかった。

アキレイオンに滞在して、この庭から海を眺めても、彼方に同島内のケルキラ市内（現在よりは素朴

な竹まいであったとしても）を目の当たりにし、遙かバルカン半島の地を望むとき、少なくともそこに住む俗世間の人々の生活を、否応なしに感じざるを得なかったのではなかっただろうか。そう感じたのであれば、いっそのこと、それらを望まなくても済む海しか見えない土地に建てた方が、エリーザベトにとつてはより相応しかったのではないか。別荘内を一巡した結論として、ふとそう思った。

世間の煩わしさから離れ、孤独を愛しギリシアの古典を愛したエリーザベトが、最良の地としてガストゥーリを選び、自らの別荘として贅を尽くして思いのとおり建物及び庭園を造らせ、さまざま彫像・絵画・家具調度品を配したにもかかわらず、何故、数年強の年月しか利用しようとしなかったのか。

それには、心境の変化があると思う。ルードルフを失った晩年のエリーザベトにとっては、もはやアキレイオンを含め、安住の地は無くなってしまったのだと思う。如何に好きな地とはいえ、大勢の廷臣を従えた大名行列のような旅行には、孤独を愛するためには限界が生じてしまったのであろう。

特に、さしたる目的もなく闇雲に歩くような強行軍や、暴風雨のさなか海岸に身置くことにためらいもなく、荒れ狂う波にもめげずに船酔いもせず、カモメになって自由に空を飛びたいという願望にまでたどり着いたエリーザベトには、もはやだれも理解できない世界に突入してしまったのではないか。

エリーザベトのこの思い入れの激しかった瀟洒なアキレイオンを後にして、つくづくと虚しさを感じざるを得なかった。



(アキレイオン。2003年・筆者撮影)

## 第10章 ゲンフ（ジュネーヴ）

——永遠への旅立ち——

### 第1節 最後の旅への出発

ゲンフとはジュネーヴ（フランス語）のドイツ語名である。ご承知のとおり、スイスには、憲法上の国語として、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レト・ロマン語（又はレト・ロマンス語ともいう）の四つの言語がある。そのうちドイツ語圏が約四分の三を占めているが、西部地域は主としてフランス語が話されているので、世界的にもそのフランス語の使用が一般的で、日本でもジュネーヴで統一されている。

一八九八年六月末、エリーザベトはマリー・ヴァレリーとバート・イシユルを訪れ、カイザーヴィラに滞在した。

七月に入ると、エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフとともに庭園を散歩しり、近郊へハイキングに出かけた。エリーザベトは疲れていたが、心なしかいつもの悲し気な表情から、二人の楽しかった時期を思い出して明るい表情に戻り、フランツ・ヨーゼフに合わせながらゆっくりとかなり長く歩いた。

七月一六日、エリーザベトは、駅までフランツ・ヨーゼフ、マリー・ヴァレリーとその夫サルヴァートル大公の見送りを受け、スイスに向けてバート・イシユルを出発した。

まずその前に、ドイツのバート・ノイハイムに向かいしばらく滞在して、それからスイスに入った。同日と思われるエリーザベト宛の手紙で、フランツ・ヨーゼフはこう述べている。

あなたは、ここにいる私から限りなく去ってしまった。私は悲しい気持ちでわれわれを引き離している時について考えている。

特に、あなたの部屋にあなたがいないことは私を悲しい気分させている。（注1）

当時、ヨーロッパの主要国のほとんどが君主国であるのに対して、それらの国々に囲まれるようにその中央に位置するスイスだけが共和国であった。そのためスイスは、現行の社会秩序を変革して、新しい国家建設を夢見るさまざまな国の社会主義者や無政府主義者が集まる、恰好の隠れ家を提供した感があつた。

ということとは、保養その他でスイスを訪れる各国の要人にとっては、自分を付け回し狙う刺客が暗躍するということでもあり、その危険性が十分考えられた。

そのような刺客の中に、イタリア人の無政府主義者ルイジ・ルケーニがいた。彼は「俺は誰かを殺したい。しかし、名声のある人物でなければならぬ。といひのは、そうすれば新聞が書き立ててくれるから」（注2）と。そのようなことで、ルケーニは、自分ひとりで目的を果たし名をあげるつもりで、他

の暗殺グループに参加する意図はまったくなかった。

もともと生まれが貧しく職業を求めて流浪していたルケーニは、暗殺に必要な本格的な武器は持つことができなかった。たまたま、自由市場で見かけた赤っぽい尖った鉄やすりを入手することができた。それは柄もついておらず、匕首あいくちというには十分な武器ではなかったが、身の回りにある薪を柄として、手元にある小刀とドリルで何とか武器らしいものに仕立て上げた。

今度は暗殺する相手を探すことである。当地の新聞は、エリーザベトが八月二日から二八日の間、コーに滞在することを報じている。しかし、ルケーニは、九月一〇日の新聞記事で、エリーザベトの投宿ホテルを知ったと思われる。

このコーは、レマン湖畔の東部に位置するモントルー市の東、登山電車で登り、眺望の素晴らしい終点ロツシエ・ド・ネーに行く途中の標高一〇五〇メートルの位置にある。

エリーザベトは、九月三日にそのロツシエ・ド・ネーに登り、レマン湖の俯瞰とベルナーオーバースント（ユングフラオが主峰）やヴァリス（マッタホルンが有名）の山々の眺望を楽しんだ。

九月五日には対岸にあるフランスのエヴィアンを訪れているが、期待を裏切られ失望している。しかし、帰路に訪れたテリテの市街に満足した。この町はレマン湖に突き出た有名なシヨン城と、その北のモントルー市のほぼ中間にある。

この日さらに、エリーザベトは、男性の従者なしのイルマ・スターライと必要な召使とだけで、ゲンフへの散策をやってみようと話し合った。同行のベルツェヴィツキー将軍はエリーザベトに警告すると

ともに、少なくとも一人の召使だけでも同行させるようエリーザベトに要請し、エリーザベトもそれを了解している。

それ以前の問題として、スイス警察はエリーザベトの警護を申し入れているが、エリーザベトはその必要性がないと丁重に断っている。

同じ九月五日、エリーザベトはフランツ・ヨーゼフから一通の手紙を受け取った。

私は、外の空気を吸うためにヘルメスヴィラに来ている。ティアガルテン（動物公園）の門の前には、沢山のツバメが集まっていた。見たところ旅立ちの準備をしているのだろう。大いにそして物悲しい気持ちで、私は君の窓を見上げている。そしてこの好きな別荘で、二人はどれほど一緒に過ごしたのだっただろうかと、あの日々の思いに浸っている。夜、私は君の酪農場から届いた酸味のあるミルクと甘いミルクを飲んだ。君の恋人。（注3）

この手紙でエリーザベトは里心が刺激されて、フランツ・ヨーゼフに会いたくなくなり、スイスに来るよう頼んだ。しかし、副官から予定の詰まった皇帝の行動計画表を見せられて諦めざるを得なかった。その四日後の手紙で、フランツ・ヨーゼフは次のように書いている。

もし私が、君の願いに応じて、長い別離のあとに君と再会して、君と一緒にスイスでくつろぎの時間を享受することができたら、どんなに幸せなことか。しかし、残念ながら今、私は一人でその



ことについて考えることができない。

というのも、重要な国内の政治情勢と、即位五〇周年記念祭の準備のために、九月の後半のほとんどをそれに当てなければならぬからだ。教会への献納、展示への視察などで手間を取らされている。（注4）

フランツ・ヨーゼフは、一八四八年一月二日に即位しているので、この年の一月でちょうど即位五〇周年に当たる。しかし、エリーザベトは、そのような行事に興味を持つこともなく、フランツ・ヨーゼフに協力することもなく、さすらいの旅に出ているのだ。

そのようなエリーザベトであっても、フランツ・ヨーゼフは一方的にエリーザベトを愛し続けた。それは前掲のエリーザベト宛の手紙の最後に、長年使用していた結語であるにせよ、間もなく六八歳になるうとしている皇帝が、「君の恋人」とまで記しているのである。

しかし、このようにして、エリーザベトとフランツ・ヨーゼフとのスイスでの再会は、実現されることはなかった。二人とも、よもや、再び会う機会が永遠に失われるとは思ってもみなかったであろう。恐らくフランツ・ヨーゼフは、たとえ政務で忙しいとはいえ、悔やんでも悔やみきれなかったであろうことは想像に難くない。

九月九日に、エリーザベトは、プレニーにあるロスチャイルド男爵夫人の別荘を訪問した。プレニーはジュネーヴの少し北にあるジュネーヴ湖畔にある小さな町である。

エリーザベトの妹で元ナポリ王国の王妃であったマリーが、経済的に援助を受けている関係から、マ

リーをおしてロスチャイルド男爵夫人から、再三招待を受けていたことによるものであった。

ロスチャイルド家からの帰り、エリーザベトは同行の信心深いイルマ・スターライと信仰と死について話し合っている。イルマ・スターライの記録により、二人の会話を再現してみる。

エリーザベト「私は、あなたほどではないかもしれませんが、信仰に厚いつもりです。しかし、私は自分の性格を知っています。あなたが、私をもっと極端に信心深いとみても否定しません。あなたがこわがらない死を、私は、しばしば待ち焦がれているものの、恐ろしいと思っています。死の世界への移行、その不確かなものが私を興奮して震えさせるのです」

スターライ「しかし、あちら側には安らぎと浄福さがあります」

エリーザベト「あなたはそれをどこから知ったのですか？ その世界から帰ってきたひとはまだ誰もいないというのに」〈注5〉

そして事件は、この会話のなされた翌日の一八九八年九月一〇日に起こった。

## 第2節 歴史的瞬間

エリーザベトの運命の一八九八年九月一〇日の昼過ぎに事件が発生したときの状況を、コルティは以下のように述べている。筆者が臨場感をもってその状況を記述するほど筆力がなく、また、参考文献を

なぞるように記述することも許されるべきではないため、本節ではほぼ全文をコレイの文献からそのまま紹介することをお許し願いたい。

なお、かなり長くなるため、本来であれば、参考資料として別掲することが相応しいと思われるが、本書の重要な部分でもあり記述の流れからも、本節の本文とすることにしたい。(注6)

この他に、翻訳本となったG・ブラシュル・ビツヒラーがその著書「皇妃エリーザベートの真実」の中でも、このときのエリーザベートの同行者であり、暗殺時に唯一立ち会ったイルマ・スターライ伯爵令嬢の著書「晩年の皇妃エリーザベト」から引用した日本語訳もあるので、ご参考にされるとよいと思う。

出発の時間がやってきた。行動は予定よりかなり遅れていた。召使とコロマー博士は既に先発していた。スターライ伯爵令嬢は出発をせき立てていた。彼女は皇妃が遅くなるのを心配していた。エリーザベトは、伯爵令嬢に自分のミルクの味見をさせた。それからやっと、二人の女性は船の出発五分前にホテルを出た。

道すがら、スターライ伯爵令嬢は二本のカスターニエンの木々に花が咲いているのに気がついた。それを見ていたエリーザベトは、ハンガリー語で「そうね、皇帝が、今、秋のシェーンブルンやプラーターでもそれぞれのカスターニエンが花を咲かせていると手紙で書いてよこしたわ」と言った。船の出発の汽笛が鳴り、二人の女性は歩を早めた。しかし、エリーザベトは気がついた。「私たちは時間どおりだわ。見てご覧、乗客はゆっくりと楽しそうに乗船しているではありませんか」。

ルケーニは、皇妃の召使が荷物を船に持ち込んでいるのを、しっかりと観察していた。そして、

皇妃は一時四〇分の船に乗船するだろうと見て取った。彼は、右手でポケットに匕首を確かめた。彼がもう一度、皇妃と伯爵令嬢がホテルから出るのを見、モンブラン埠頭を船に向かって行くのを認めた。

ルケーニは少し後ずさりした。というのも、二人の女性の周囲にはまだ多くの人々がいたからだ。ホテルの経営者やポーターが深々とお辞儀をし別れを告げると、やがてホテルに戻った。お昼どきでほとんど人けのない埠頭は、二人の女性が歩いているだけとなった。

今やその時がやってきた。ルケーニは、飛び跳ねるようにして車道を渡り、急ぎ足でエリーザベトが歩いている歩道を、湖に沿った手すりまで斜めに走った。鋭角に向きを換えて素早く二人の女性に突進した。二人の女性はぶつかることを避けるため、空間を開けて立ち止まっていた。そのとき、ルケーニはスタージェイ伯爵令嬢の前で、躓いたかのように辛うじて立ち止まった。それから、右手を振り上げ猫のようにエリーザベト目がけて走り寄った。日傘の下のエリーザベトを見ようとして身を屈め、力を込めて三面角の凶器でエリーザベトの胸を刺した。

エリーザベトは、一撃の勢いのもとに悲痛さの一声を発することもなく、折れた木が仰向けに大地に倒れるように崩れた。後頭部が地面に触れたが、彼女の豊かな髪が転倒を軽いものにした。このとき何が起こったのか、正気を取り戻していないスタージェイ伯爵令嬢は——急がなければならぬという思いから——叫びを発し急いで駆けつけてくれた御者に手伝ってもらいながら、皇妃を立ち上がらせるよう努力した。その間、暗殺者は急いで走って逃げた。

エリーザベトはまた立ち上がった。興奮から顔を赤らめ、乱れた髪を自分で整えようとした。皇

妃が拳で打たれたことだけを見ていたスターライ伯爵令嬢は、皇妃に尋ねた。

「陛下、何が起こったのですか？ どこか痛みを感じるところはございませんか？」

側にいたイギリス人も同じことを尋ねた。

「いいえ、いいえ、ありがとうございます。何もなかったわ」

ホテルのポーターが駆け寄り、ホテルに戻るよう皇妃に頼んだ。

「いいえ、わが身にはなにも振りかかっていないわ」

「陛下、驚かれませんでしたか？」

「たしかに驚いたわ」

エリーザベトは自ら帽子を正し、衣服の塵を払ってから、ハンガリー語で伯爵令嬢に尋ねた。

「あの男は一体何をしようとしたのかしら？」

「ポーターですか？」

「いいえ、あの別の恐ろしい男よ」

「私は知りません、陛下。しかし、私は何かをやったのはあの下劣な男に違いないと思います。陛下、本当に何も起こらなかったのですか？」

「ええ、何も」

それから、二人の女性は急いで暗殺の現場から汽船へ向かった。今や、突然皇妃の顔から赤らみが消え失せて、死者のような青ざめた顔に変わった。皇妃はそれを感じたかもしれないなかった、と言うのも一度、皇妃は驚きから気分が悪くなったことを心配して、皇妃に腕を絡ませて支えた伯爵令

嬢に尋ねた。

「私は青ざめた顔になっていないかしら？」

「はい、陛下。青ざめていらつしやいますが、どこか痛みませんか？」

「胸が少し痛むのだけれど」

この瞬間にポーターがもう一度走ってきて、遠方から叫んだ。

「悪者が拘束されました」

エリーザベトは、柔軟な足取りで幅の狭い上陸用棧橋にまで到着した。スターライ伯爵令嬢は一瞬皇妃の腰から手を離さなければならなかった。エリーザベトはゆっくりと歩いていった。しかし、彼女が甲板に踏み込むやいなや、彼女は突然同伴者に振り向いた。

「私を腕で支えて、早く！」

伯爵令嬢は皇妃を抱きしめた。一人の召使が急いで近づいてみたが二人はもう皇妃を真っ直ぐ立たせることはできなかった。エリーザベトは滑るようにゆっくりと床に崩れた。意識を失って、頭を跪いた女官の胸に傾けた。

この女官は、叫んだ。

「水を、水を！ それに医者を！」

伯爵令嬢はエリーザベトの顔に水を吹きかけた。エリーザベトは眼を開いたが、その目は死者のそれのように見えた。医者は側にいなかった。看護婦だったダルダレという夫人だけが、病人の看護に当たった。船長のルーが歩み寄ってきた。汽船はまだ出帆していなかった。彼は女性が気絶し

ていたと聞いていたので、何も知らずに、スターライ伯爵令嬢に皇妃をすぐに汽船から運び出し、ホテルに戻さなければならぬと勧告した。しかし、まだ納まっていない恐怖が原因で気絶したのだからとの答えが返ってきた。

辛うじて機械室の横に場所が与えられた。しかし、そこは非常に暑かった。船長は予約された船室を提供したが、風通しのよいところを選ぶことにした。三人の男性が皇妃を上甲板にまで運び、皇妃をベンチの上に横たえた。ダルダレ夫人が人工呼吸を行った。スターライ伯爵令嬢は皇妃の上着を開き、コルセットを切り裂き、一かけらのアルコールで浸した砂糖を皇妃の口に押し込んだ。聞き取れるほどの嘔む音が聞こえた。エリーザベトは目を開き立ち上がるうとした。

「よくなりましたか、陛下？」

「そうよ、ありがとう」

皇妃は上半身を起こし、深い眠りから目覚めたかのように周囲を見渡し、高貴な面持ちで限りなく感激的な表現で尋ねた。

「そうよ、一体全体何が起こったのでしょうか？」

「陛下、何か気分がすぐれなかったようですが、今ではもうよくなりましたか」

皇妃から返事はなかった。エリーザベトは後ろに倒れ、もう目覚めることはなかった。急に声が掛けられた。

「陛下の胸をさすってくださいい！」

上着のリボンが引き裂かれた。スターライ伯爵令嬢は死んだような恐怖にかられながら、萋色を

したバティスト下着（訳者注：…高級な薄地の平織り亞麻布の下着）に、オランダのギルダ―貨幣ほどの大きさの褐色がかつたシミがあり、その真ん中には小さな穴があいていたのを見た。同時に、固まった血のついた左胸の上にごく小さな切り傷があつた。

スターライ伯爵令嬢は言った。

「後生ですから！ マダム。ご覧になりました、陛下は暗殺されたのです！」

その間に汽船は出帆し、進路を東に向けた。スターライ伯爵令嬢は船長を呼ばさせた。

「後生ですから、早く着岸してください！ あなたがご覧になっておられるお方は、オーストリア皇妃でいらつしやるのです。陛下は胸に傷を受けていらつしやいます。私は医者もなく司祭もいないところで陛下を落命させるわけにはまいりません。お願いですから、ベレビユーに着岸してください。私は、プレニーのロスチャイルド男爵夫人のところに陛下をお連れしたいのです」

船長は答えた。

「そこには医者もいないでしょうし、車を探すことも難しいでしょう」

結局は、汽船はゲンフへ戻ることに決定された。その間に、二つの權と大きなデッキチェアから即製の担架が造られた。船内には正規のものはまったくなかった。スターライ伯爵令嬢は女主人のそばで絶望的に跪いた。大理石のような青白い顔は乾ききり、玉のような汗が滴り落ちた。まだ息苦しうに喘いでいた呼吸は止まった。

エリーザベトは、彼女から妹のトラ―ニと名付けられたマントをかけられて、担架の上に横たわつていた。六人の人々が担架を運び、一人の男性がエリーザベトの頭の上に日傘を掲げた。心に懊



悩をもってスターライ伯爵嬢は寄り添い、目を閉じた皇妃が頭を落ちつきなく一方から他方に曲げているのを、恐ろしく不安の気持ちで見入っていた。皇妃はまだ生きていた。また、まだ希望があった。

エリーザベトは、前夜を過ごしたホテルに再び戻ってきた。彼女はベッドの上に寝かしつけられた。寝息の喘ぎは聞き取れていたが、やがてそれもなくなった。深い静けさが立ち込めた。医者がその場にいた。ゴーライ博士ともう一人はタイセットと呼ばれる紳士だった。博士は手に導管（カテーテル）を取り、傷口の中に挿入することを試みた。不安が一杯の気持ちのスターライ伯爵嬢が尋ねた。

「まだ希望はありますか？」

「ありません、マダム、まったく」

という絶望的な答えが響いてきた。

「あー、ひよつとして。あらゆる手をつくしてください。陛下が命を取り戻すことができるように試みてください！」

衣服と靴が取り除かれた。ホテルの女性経営者であるマイヤー夫人と一人のイギリス人ナースがそばで手助けをした。しかし、全ては無益だった。その間に一人の司祭が現れ赦免が与えられた。皆が跪き祈った。新しく到着したもう一人の医者はエリーザベトの死去を立証することができたのだった。

右手の腕の動脈を切開し、一滴の血も露にされなかった。それは終焉だった。安らかに幸せに皇

妃はそこに横たわっていた。頬には薄く赤らみがさしてきた。かすかな微笑みが唇に漂っていた。そこには、生涯において数えきれないほど魅惑してきたような繊細さと優雅さをみることができた。

ボー・リヴァージュ・ホテルのドアマンが、エリーザベトが乗船するまでをホテルから見届けていたので、急いで逃げるルケーニを取り押さえることができた。その状況を述べた記述が見当たらないが、恐らくルケーニは、暗殺者として名を残すために、容易に捕まることを望んだのかもしれない。

ここで、死者となつて物言わぬエリーザベトの死体の処置の経緯について、ふたたびコルティの著書から引用することをお許し願いたい。（注7）

すらりとした美しいエリーザベトの肢体は裸にされ、上に軽いリネンを覆われているだけだった。顔は青ざめ、黄色みを帯びていた。長い立派な髪はその周囲に広がっていた。灰色がかつた青色の目の瞼はおろされた。

医者は、もはや、この身体がエリーザベトとは見做さなかつたし、皇妃でもなかつた。ただ一つの死体に過ぎなかつた。事実、彼らは死体を検査した。素晴らしい歯並びを確かめ、身長一メートル七二センチを計り、傷口近くを調べた。

左の鎖骨の下一四センチ、左の乳頭の上四センチのところにVの形をした傷が認められた。次に心臓があばかれ、軽い肥大が確認され、八センチ五ミリの深さに凶器が突き刺さり、第四列の肋骨

が折れていた。肺と心臓の左心室に孔があいていた。

しかし、導管は細く、傷は微かであり、血はゆっくりと心室から心房へ滴り落ちるように、達していた。心臓の機能は徐々に活力を奪われていた。

今や、エリーザベトは、その類稀なエネルギーを結集して、感嘆に値する意志力をもって、汽船まで一二〇歩を歩くことができ、その場で崩れ落ちたことがわかった。

エリーザベトは、かなり以前からかねがね自分の死について、フランツ・ヨーゼフやマリー・ヴァレリーその他周囲の女官に漏らし語っている。それらについては本書でもそれぞれの章節で触れてきた。

それらを総合すると、エリーザベトは、他人から見れば気の毒な正に悲劇的な死ではあるが、殺人者から見れば専制君主主義を葬る象徴的な快挙と言えるかもしれないし、本人のエリーザベトにとってはお門違いの暗殺と言いたいところかもしれない。

しかし、家族に看取られることもなく、長患いをすることもなく、苦しい思いをすることもなく、結果的には、エリーザベトにとっては、自分が望んでいたもつとも理想的な死に方を、神から与えられたということができるのである。

一つ、上述のエリーザベトの「素晴らしい歯並び」という表現であるが、他箇所における記述と矛盾するようにも思える。別の記述における表現では、前歯が少し前に反っていることを意味しているようにも思えるので、それを除けば、全体の歯並びはよいと考えてもよいのではないだろうか。ここでは、あまりケチをつけるようなことは考えたくない。

## 第3節 家族の反応

エリーザベトの死は、家族にも直ぐさま伝えられた。その直後の家族の動向とその他の状況を、マリイ・ヴァレリーの日記を中心に追ってみることにする。

九月一〇日、マリイ・ヴァレリーは外出から戻ると、義姉のマリアから、「イタリアの国際的な無政府主義者に暗殺され、ゲンフのホテルで亡くなられた」と、エリーザベトの死を聞かされた。マリイ・ヴァレリーは、その時のことを振り返って考え、両手が震えた。同時に、母の大きな愛に対して、素直でなくしか報いることができなかつたことへの後悔と、それにも増して、年老いた、心配余りある傷心の父に対して、言いようのない同情の念を禁じえなかつた。次いで、フランツ・ヨーゼフには「明朝五時半に伺う」と電報を打っている。（注8）

九月一日に、エリーザベトの遺体を引き取るための特別列車が、マリイ・フェシユテイチ等に乗せて出発、一三日にゲンフで清祓式、せいばうしき一四日、悲しみの列車がゲンフ出発。一五日、特別列車、ヴィーンに到着。柩と対面。一六日、ミサ。一七日葬儀。

この葬儀の日に、ルードルフにヴェツセラを手引きしたあのヴァラーゼーの父であり、エリーザベトの兄であるルートヴィヒが来ている。怒りを解いていないフランツ・ヨーゼフも、「私は哀れな悪魔が来ることを差し止めることはできない」と仕方なしに受け入れているが、マリイ・ヴァレリーも自分に

近づいてきたルートヴィヒを拒むことができなかつたが、その間、一心不乱にエリーザベトの心に届くように祈って、雑念を振り払っている。

フランツ・ヨーゼフとその子供たちは、墓所の柩の前でむせび泣いた。そのときマリー・ヴァレリーは、エリーザベトが生前マリー・ヴァレリーに書き送つた、窓から差し込んでくる光と緑の場所に葬りたいという墓所の情景を思い出した。マリー・ヴァレリーは、外で囀る鳥の声を聞きながら、「母が望んでいた安らぎの場所に葬られることが、今や正に実現した」と思った。(注9)

最初は海に葬ってほしい(これにはフランツ・ヨーゼフが反対した)、次いでアキレイオンに葬ってほしいと願っていたエリーザベトは、マリー・ヴァレリーの言うように、最後は、落ち着くべき廟墓に落ち着いたのであつた。

一〇月三日、手紙の整理をしている。エリーザベトの重要な手紙と、ルードルフの最後の手紙は処分している。これは後述するような、エリーザベトの言いつけにより、イーダ・フェレンツイが処分したものであるかどうか触れていない。一八九一年以降の手紙はほぼ残され保管している。

一〇月七日、エリーザベトによつて守られてきたイーダ・フェレンツイやマリー・フェシュテイチは、エリーザベトの死後、敵意ある勢力に仕返しをされ、困窮していた。マリー・ヴァレリーはある程度、仲介の労をとっているが、子供たちに悪影響を及ぼすことを恐れて、中立の立場をとっている。

十一月二六日、マリー・ヴァレリーは、マリー・フェシュテイチの死後、彼女の日記類をマリー・

ヴァレリーの家族に譲渡するよう約束を取り付けている。これは、マリー・フェシユテイチの手記が何の問題もなく公表されるためには、十分真実どおりであると信じなかったことを理由にあげている。

さて、家族ではないが、長年エリーザベトに忠誠を尽くしてきた、イーダ・フェレンツイとマリー・フェシユテイチは、エリーザベトの死をどのように受け止めていたのか。

もっとも信任厚いイーダ・フェレンツイは、エリーザベトの指示どおり、ルードルフがエリーザベトに宛てた最後の手紙を始め、すべての書簡を処分した。

イーダ・フェレンツイは、

私はすべてのものを失いました。私の夫、私の子供、私の家族、私の幸せ、私の平和な心を。私の邪心のない王妃様は、私にとつてすべてだったからです。（注10）

イーダ・フェレンツイのこの言葉は、エリーザベトに仕えたことによつて、結婚も、出産も、家族も、自らの完全な自由も得られなかったことに対する、エリーザベトへの恨みではなく、悔いはあつたかもしれないが、祖国ハンガリーのために、そして、そのためにアンドラーシの意を受けてエリーザベトに仕えることが、それらに代わるすべてであつたと言いたかつたのであろう。

しかし、実際には、一八六四年一〇月に二三歳でエリーザベトに仕えてからほぼ三四年間を経て、五七歳にして主を失つたイーダ・フェレンツイにとつて、その後に残されたものは、職務の完了によるほ

つかりと穴のあいた喪失感と、空虚な心の安らぎだけではなかったか。

一方のマリー・フェシュテイチは、

私たちはもつと悲しみましょう、イーダ。それが私たちにとって一番なことですもの。私たちは陛下の魂と心を長く長く享受しましょう——それは誰も私たちから取り上げることのできない宝石なのですから——私たちはいつも陛下を愛してきました。しかしそれは、何回もとかというのではなく、短刀が陛下の心臓を突き刺したときに、初めて思い至ったのです。〔注11〕

マリー・フェシュテイチも、三二歳でエリーザベトの女官になってから二八年間弱エリーザベトに仕え、その間、ロシア人貴族と真剣に結婚を考えたこともあった。しかし、エリーザベトの強い要請によつてエリーザベトの許に残ることを選んだため、婚期を逃した今、五九歳になったこの女官は、果して満足した人生を送ってきたのであろうか。

二人とも、結婚を諦めてでも己が身をエリーザベトの女官として、生涯の大半を過ごしたことに後悔の念は残るとしても、ハンガリー国の地位を高めた功労者としての自負なり誇りが、生きる支えになったことは間違いないことであろう。

最後の最後において、イーダ・フェレンツイとマリー・フェシュテイチとともに、エリーザベトが死の危険に遭遇したときに、エリーザベトのそばにすることができなかつたことを非常に残念がった。これは偽らざる心境であるということができよう。

エリーザベトの遺産は、二人の娘、ギーゼラとマリー・ヴァレリーに五分の二ずつ、残りの五分の一はルードルフの唯一の子供エリーザベト（通称エルジー）に与えられた。そのほかに、ギーゼラがアキレイオンを、マリー・ヴァレリーが一〇〇万グルデンの現金とヘルメスヴィラを相続した。

しかし、この時点ですでに、アキレイオンの大部分の展示物はヘルメスヴィラに移されており、アキレイオンは、補修しなければ住める状態ではなかった。それらを考えると、建物としてはアキレイオンの方が価値があつたが、実質的な価値としてはヘルメスヴィラの方が高かつたように思える。

マリー・ヴァレリーには、建物のほかにギーゼラには与えられなかつた一〇〇万グルデンの現金を与えられているので、ギーゼラはエリーザベトの死まで、マリー・ヴァレリーよりも厚遇されていなかったことがわかるのである。

このことは、マリー・ヴァレリーの九月二〇〜二三日の日記（まとめ書き？）によると、ギーゼラはマリー・ヴァレリーの方が相続内容が多いことに対して、嫉妬しなかつたと述べている。おそらくギーゼラは、そのような結果になることは、最初から諦め、あらかじめ想像していたと思われる。

また、女官たちやシユラット夫人に対してもエリーザベトは遺産を与えている。その筆頭は何といつても、もっとも忠実であつたイーダ・フェレンツイであり、毎年四〇〇〇グルデンの年金と高価な装身具（金のハートにハンガリー風の色調の宝石を散りばめたもの）を、それに対してマリー・フェシユテティチは、毎年三〇〇〇グルデンの年金を、それぞれ遺言によって贈られている。（注12）



#### 第4節 オーストリアの反応

エリーザベトの死の報道を聞いたヴィーン市民は、九年前に心中事件で亡くなった皇太子ルードルフの死のときよりも衝撃や悲しみは少なかったし、残されたフランツ・ヨーゼフへの同情の方が勝っていた。それは、皇妃として公務も満足に遂行せず、気儘に旅に出たり、オーストリアよりもハンガリーに肩入れたエリーザベトに対する、ヴィーン市民の率直な反応であったとすることができる。もちろん暗殺者であるルケーニに対する憎しみも大きかったことはたしかであるが。

フランツ・ヨーゼフは、九月一六日にシェーンブルン宮殿から、国民に向かって次のようなメッセーヂを送っている。文中、強調されている部分がかかなりあるが、その区分は省略する。(注13)

わが国民へ！

重大なぞつとするような試練が私と私の家族を襲った。

王家の誇りであり、貞節な伴侶であり、私の生涯の困難な時期のなかで私にとって慰めであり支えでもあった私の妻を、私は失ってしまった。私が語りかけることができるときには、もういないのである。恐ろしい運命が妻を私とわが国民から引き離してしまった。

魅力ある社会秩序の破壊を目標と定めて、途方もない狂信の手段である殺人者の手は、最も高貴

な女性の行く手を阻み、盲目的かつ無目的な憎悪によって、憎しみを知らず、善行に対してのみ鼓動してきた心臓を刺してしまったのである。

私と私の家族を襲った極度の痛みの真つ只中で、まったくの道徳的な世界が、戦慄に陥る信じ難い行為に直面して、今回のわが親愛なる国民の声が、私の心を和らげてくれた。私を襲った重大さかつ不可解さを起こさせた神の摂理に従順に膝を屈することによって、苦しみよのときのなかで、私と私の家族を包んでくれた、百万人の人々の愛と真実という私の残された貴重なもののために、天意に感謝しなければならぬ。

無数の職業のなかで、近き者も遠き者も、貴賤の如何に拘わらず皆が、神に召された皇妃に対して、皇妃の苦痛や悲しみのために哀悼の意を述べてくれた。感動的な国民の共感のなかで、その嘆きは、計り知れない喪失を越えて、私の胸を打った忠実な反響として、皆の心に響き渡った。

私は、最後の瞬間まで、熱愛する妻の記憶を大切に維持していくように、わが国民の感謝と尊敬のなかで、彼女のために永久に不朽の記念碑を築いてゆく。

私は、この新しい負担に対して献身的な国民諸君に、私の悲しき心の奥底から感謝したい。

今年予定している祝祭（筆者注：：一月二日は、フランツ・ヨーゼフ皇帝の即位五〇周年）の響きが鳴りやまないとするれば、私にとっては愛着ある数多くの証への思い出を記憶に残すことと、私に捧げられた価値ある贈り物に、暖かい共感を残すことになる。

我々の苦悩の共通点は、王家と祖国への新しい内的な絆の結びつきである。わが国民の不変の愛国心に対応して、私は、私に与えられた使命を維持するための義務の強固な感性のみならず、成就

するための希望を手に入れることである。

私は、私を深く思い悩ませていた全能なるものに、その彼から私が授かった役割を実現させるために、また力を与えてくれるよう祈りを捧げる。また、私と協調への道を見いだすわが国民が、繁栄し幸せになるよう祝福し、光明を与えてくれるよう、全能なるものに祈りを捧げる。

シエーンブルン、一八九八年九月一六日

フランツ・ヨーゼフ（自筆で）

オーストリア国民ではないが、エリーザベトの詩友でもあるルーマニア王妃エリーザベト（ペンネームはカルメン・シルヴァ。一八四三年～一九一六年）は、一九〇八年二月二五日付けの新聞「ノイエ・フライエ・プレッセ」に、エリーザベト（シシー）の生涯について回想記を寄せている。興味深い内容なので、マルタ・シャート著「皇妃エリーザベトの生涯」から引用したい。（注14）

（エリーザベトの死に触れ）「世間一般にとってはシヨッキングだったかもしれませんが、エリーザベトにとっては、愛する大自然を眺めながら安らかに死ねたのだから、本望だったでしょう」  
「この女性にあつてはすべてが立派でした。歩きぶりも、髪も、考え方も、眼差しも。深く柔らかない声の響きはごく控えめながら、情熱の波が内にこもっているようでした。ほかの人が彼女について書いた文書を、私は一度も読む気になれませんでした。わたし独自のエリーザベト観を大事に取っておきたかったし、ほかの人の見方によって自分の心酔を醒ましたくなかったからです」

カルメン・シルヴァは、自分でも「心酔を醒ましたくない」とも述べているように、彼女の考え（ハーマンはあまり評価していない）は少数派であることがわかる。これは当時のヨーロッパではエリーザベト（シシー）を風変わりな人とか奇癖の人という見方が一般的になつてゐるためである。

それは、エリーザベトのセンチシヨナルな行動に目が向かつてゐることが原因で、一般の人には見えないようなエリーザベトの行動や思考については、論じることが少ないからであり、筆者が別の節で引用してゐるように、たとえ客観的及び中立的な立場を欠いたとしても、もつと別の面からエリーザベトの人間像を捉えることも必要だつたはずである。本書の意図もそこにある。

## 第5節 ハンガリー国民の追悼

皇妃の死後、ハンガリー国民は繰り返し、エリーザベトのハンガリーに対する政治的態度に立ち返つてゐる。エミール・ニーダーハオザーの著書に引用された当時のハンガリーの四つの新聞記事を掲載したい。原文はハンガリー語、引用原典はドイツ語。〈注15〉

一つは、暗殺された翌日の一八九八年九月一日付「ペスト・ロイド」(Pester Lloyd)紙。

ハンガリー国は、わが国民が絶対主義の強権により重く沈み、国民の生活が無気力となり瘦せこ

けて、張り詰めた氷の下に葬られると思われたあの時代に、神から遣わされた天使であるエリーザベト王妃を失い、嘆き悲しんでいる。長い気掛かりな年月のあとハンガリーを解放するための女神がバイエルンの公女を連れて、ヴェーリンのホーフブルクに入り込んだかのように、その予感も彼女の心情どおりに行つた。この予感に偽りはなかった。エリーザベト王妃が、突然一つの呪文でもつて、われわれの上のしかかつていた災難を脅すことによつて追ひ払うのではなく、この王妃の有り余るほどわれわれに降り注いでくれた忍耐と愛とが必要であつたのであり、彼女に際立つていた女性としての優しさの全面的な助力と、類稀たぐひまれな知的才能の発露が必要であつたのである。この高貴なお方は、その不動の信念の力によつて奇跡をなし遂げられたのであつた。自分自身に、次第に夫に伝えている、変革への政治的な事件と動向にどのように関与したかであらうか。もしエリーザベト王妃が、ハンガリー国民に対する君主としての信頼に目覚めていなかったならば、また強めていなかったならば、このような完全な見込みのある結果になつたであらうか。

二つ目は、同じ九月一日付「祖国」(Hazánk)紙。

屈辱を受け、彼女の血のなかに宿っている、胸が張り裂けるような国家の苦痛の叫びと窒息するような嘆息は、空中に満ち満ちており、聖なるミサのパイプオルガンの響きに混ざり合い、彼女の結婚式の通り道に振り撒いた薔薇は、ハンガリー国民の肉体を血まみれに引き裂く茨であることを思い出させるのみである。血に染まつた薔薇はもしかすると忘れられている。

そして、そこには、一人の端整なよい若き君主の真実の愛によって、玉座に座らされた優雅で美しく若い乙女がいた。その後、彼女が熱望していた薔薇が彼女とともに勝利の街道を飾るのではなく、彼女の涙とともに、ゴルゴダの丘の上でやつれ果てている一つの国家の心から迸り出る血の滴りを洗い清める茨のみが残された。

三つ目は、翌々日の九月一二日付「ハンガリー国」(Magyar Allam)紙。

心痛は過ぎ去った過去のなかで、悲しみに沈んだ日々のなかで、われわれを勇気づける希望をもたらしただあの気高い夫人、彼女のその愛に満ちた心が、心痛から国家を引き離させ、苦悩に満ちた暗い夜から太陽の光を取り戻し、王に国民を、国民に王を取り戻させた。

最後のもう一紙は、三日後の九月一三日の「ペスト日刊新聞」(Pesti Hirnap)紙。

彼女の優しい両手が新しいハンガリーを世界に登場する手助けをしてくれた。彼女は、その若い心で大地に横たわっていた国家の誇りを掘り起こしてくれた。彼女は伝統の正義を、不幸なときにおいてすら、尊敬している。彼女は、体制の大事業に関心をもっていた。

## 第6節 一九九八年の没後百年祭

既に述べたように、筆者は、エリーザベト没後百年の一九九八年に、エリーザベトゆかりの地で行われる行事に参加するために、オーストリア、ハンガリー、スイスを訪ねた。日程の都合により、ドイツのポツェンホーフエン訪問は割愛した。

オーストリアのヴィーンやバート・イシュルそのほかの会場、及びはハンガリーのブダペストやゲデーリーについては、別の箇所で説明してあるので、ここでは、スイスのゲンフ（ジュネーヴ）の体験を少しく説明する。

ゲンフには、旅程の都合によりエリーザベトが暗殺された九月一〇日ははずしたものの、エリーザベトが暗殺される前夜に宿泊し、暗殺後に最後の治療を受けるために運ばれた「ボー・リヴァージュ」ホテルには、八月三十一日に一泊した。

あらかじめホテルに宿泊する目的を伝えてあったため、特別にエリーザベトが宿泊した二階の部屋を見せてもらうことができた。もちろん、その部屋は百年前のままではないはずであるが、レマン湖（ジュネーヴ湖）が望める立派な部屋であった。特に展示用として供されておらず、一般の宿泊が可能な状態になっており、今にして思えば、出費を考えずに利用してみたかった思いがする。

ホテルでは、エリーザベト及びルケーニのゆかりの品々を陳列した部屋を臨時に設けていたほかに、「シシー——美と悲劇」と命名された別の会場には、九月一〇日夕にオーケションを行う予定にしてい

るエリーザベトゆかりの品々が陳列してあった。

前者の陳列した部屋では、エリーザベトが宿泊した当時の大きな宿帳（エリーザベトの名も記載されている）や、ルケーニの獄中日記などが展示されてあったが、その日はたまたま、地元ジュネーヴの新聞社が取材に来て、私の知らない間に私が展示を閲覧しているところを写真にとったと見えて、私の帰国後、ホテルからその写真の入った新聞記事のコピーを私の自宅に送付してくれたことで分かった。そのコピーは現在大切に保管してある。（四七一ページ参照）

後者の会場に陳列してあるそれらの衣装その他の品々は、競りの価格も筆者の懐具合では手が届かないと思われたので、食指が動かなかった。それよりも何よりも、九月一〇日前には、バート・イシユルでエリーザベトに関する行事が行われ、その日程に参加することになっていたので、レンタカー利用の筆者としては日程上無理であり、簡単に諦めがついた。また、このときホテルで入手したプログラムはフランス語で記述されているので、フランス語が読めない筆者としては、残念ながら参考資料としては使っていない。

筆者にとってゲンフは、一九六二年に仕事で訪問して以来二度目の訪問であった。前回はエリーザベトの生涯について詳しく知る以前（エリーザベトについては一九五五年から関心はあったのだが）のことであり、またお客様をお連れする初めての添乗の仕事での訪問であったので、エリーザベトが暗殺された場所を確認することもなかった。

それに対して今回は、エリーザベトの足跡を辿る目的による私的の旅行であるため、暗殺現場も確認した。湖畔には歩道と湖を隔てる柵があり、そのあるところに横が二〇センチ強、縦が一〇センチのプ



レートが掲げられてあった。そこにはフランス語で左記のように刻まれてあった(筆者訳)。

Ici fut assassinée le 10 septembre 1898

S.M. ELISABETH

Impératrice d'Autriche

ここで一八九八年九月一〇日にオーストリア皇妃エリーザベトの暗殺があった

この物語は、エリーザベトの終焉の地であるゲンフのポー・リヴァージュ・ホテル二階のエリーザベトが宿泊した部屋からレマン湖を眺め、湖畔のプレートを見入ったあと、ヴィーンのカプツィーナー教会のカイザーグルフトで花で飾られたエリーザベトの柩を思い浮かべながら、コルティの次の文章を引用しつつ幕を閉じたい。

コルティは、一八七二年から一八七三年のマリー・フェシュテイチの日記記録や考察の古文書を参考にして次のように述べている。少し長いが全文を掲載したい。(注16)

「マリー・フェシュテイチは、エリーザベト皇妃の女官としてその影響下にあつて、全身全霊を打ち込んで皇妃の手足となり、皇妃の顔を察知するだけで、皇妃がしてもらいたかったことのす

べてを成したかったが、皇妃の誤りについて盲目ではなかった。

フエシユテイチは、とりわけ、依然として目に感じられる皇妃のある種の安逸さを嫌った。しかし、一番の誤りは、エリーザベトが、皇妃に対する非難、皇妃としての位階の自覚や支配者としての誇りと喜びの欠如、皇妃であることを理解していなかったことであつた。

何故なら、それらは、この皇妃自身の資質であり、物の考え方であり、性格に根づいたものであり、ヴィーンの宮廷のそれと同様に、変えられるものではないのである。皇妃はそれどころか多くの点で、精神的と同様に肉体的にも世紀に先んじていたのである。皇妃のほつそりとした体型はスポーツや体操によって鍛えられたものである。

エチケット、慣習的な儀礼、貴族としての誇りや特権階級であること、それらは、皇妃が余りに自由に制約を受けずに教育されたことから、決して馴染むことはできなかったものである。というのも皇妃は内面的な感性の生活をもっており、それが、もちろん本質的でないどうでもいいことの牙城である宮廷の雰囲気の中で、効果を發揮できなかったのである。皇妃は、周囲や派閥的考慮等の階級的偏見に対しては、絶えず反抗しているのである。

妖精のように森や藪の中を彷徨い、制約を受けずに自由に、太陽の輝きや月の光、花の香りや木々の靈気の妖精を目指して生きてきた皇妃のシユタルンベルク湖畔の詩的な少女時代は、皇妃をして何者をも寄せつけない自由欲求へと成長させた。

『私はカモメになりたい』と皇妃は常々言っていたが、それにしても、強大な権力をもつ大帝国の王座や、家族や、国民のための職務を持った統治者として、そして権力者としての皇帝の妻なの

である。その安定を維持することは重要である。皇妃はすべての国民が満足し幸せであることを見たかったにも拘わらず、夢想者であり、思索することを止めなかった。それは危険なことだった。

皇妃はすべてのことを徹底的に究めようとし、多くのことをあちこちと調べようとした。皇妃は仕事をしたかった。皇妃としてのそれらの仕事は、皇妃にとって性格に反しているものであったので、その才能が発揮されなかったのである。

しかし、皇妃が何かに向かって全身で取り組もうとすると、全力で打ち込むことになる。決して中途半端にはしないのである。皇妃は、最初の二人の子供たち（筆者注：二歳で亡くなった長女ゾフィーを除く、次女のギーゼラと長男のルードルフ）から引き離され、そのときから皇妃は多かれ少なかれ二人の育児を諦めた。しかし、自分の手元に引き寄せ、自分の心を完全に満たしたヴァレリーには、有頂天になって育児に励み、『特別な女の子』と呼ばれた。2番目の愛称は『ヴァレリー様』で、すでに語り口からして心配に耐えないような母親の愛の状態にあった。

ハンガリーとのアオスグライヒ（著者注：第4章第4節参照）に対しても、皇妃は完全に尽力し貢献した。どんなに愛さなければならぬかということを知っていても、どこか愛されなかったり理解されなかったりという感情に走ると、皇妃は小心翼翼々として、不安気な蝸牛のように自分の家の中に引き籠もってしまう。

エリーザベトは、活動的な性格なので仕事を求めていた。皇妃は周囲の大方の人々よりも明確な判断力を持っていたし、その時々々の事態を正確に把握しており、すべての功名心に長けた人々や虚栄心の高い人々よりも優っていたけれども、宮廷では何も貫き通さなかったし、支配しようという

意志もなかった。

皇妃は、功名心がなかった、国民に好まれるような意志もなかった、皇妃の権力や立場を利用しようとは思わなかった。しかし、夫の守り神でありたかつたし、夫の幸運と善意を願望した。夫はしかも、誇りある立場を相続すべき強大な帝国の息子ルードルフの父親である。

妖精のような美しいエリーザベト皇妃ではあったが、人はその僅かな怠慢の罪や気難しさを越えた、計り知れないほどの美德と長所を見落とすか、多くの場合には故意に見落とそうとしたのである」

このエゴン・カエサル・コンテ・コルティの記述をとおして、六〇年の生涯を終えたエリーザベトの真の姿が浮かび上がってきていけないだろうか。何度も繰り返すようであるが、伝記作家を含めて大方は、そのうちのマイナスの方向にしか目を向けていないように、筆者には思えるのである。

## 終章 シシーの生涯は何だったのか

筆者は、第10章までの本文の中ですでにエリーザベトの生き方についてその都度、筆者なりの判断を加えて述べてきた。エリーザベトに対する賛同や同情など、少なからず公平性に欠ける憾みは承知のうえで、ここで筆者の結論としてあらためて取り上げてみたい。

### ある代表的な批判と評価

筆者の判断の前に、ハーマン女史の批判と評価を取り上げたい。

女史は、大著「エリーザベト」の最後で、次のような総括をしている。〈注1〉

---

一八五四年から一八九八年の約半世紀の間、エリーザベトは、没落しつつある困難な事態に直面した帝国の皇妃であり王妃であった。彼女は、この没落を少しでも歯止めをかけるための何の努力もしなかった。彼女のあとに皇妃となり、帝国の瓦解を身をもって体験しなければならなかったツィタとは異なり、努力する女性ではなかった。諦め、個人生活への逃避、それは詩作に打ち込むことであり、挙げ句の果てには孤独に浸る——それが、彼女の夫であるフランツ・ヨーゼフが皇帝と

して要請される義務遂行のために、如何に倦まず弛まず家臣の範となる生活をしてきたことに対する、皇妃としてのエリーザベトの答えであったのだ。

狂気なのか？ 正気なのか？ お定まりの分別なのか？ それとも単純な安楽や気分なのか？

ドナオ帝国の世紀の終焉は正にエリーザベトという個人の終焉であった。彼女は皇妃として生きることを拒み、その代わりに妖精の女王（テイタニア）として生き、次のような詩を謳いあげる……

テイタニアは人間の住むところに行つてはならない

誰も理解してくれないこの世界へ

何百何千の傍観者がテイタニアを囲み

好奇心から囁く「ご覧なさい、お馬鹿さんよ、ご覧なさい！」

悪意が様子をうかがいながらテイタニアに妬ましげにちよっかいをだしているから

それらの妬みが彼女の振る舞いを歪めてしまう

そこで、テイタニアは自分の世界に戻つて行く

そこは、彼女にゆかりの美しい魂が宿っている世界

このなかの本文でハーマン女史がエリーザベトを厳しく批判しているのは、エリーザベトが「公人」としての役割をまったく果たしていないことである。公正に考えて、正鶴を得た批判であり総括であることは筆者にも異論はない。たしかに、エリーザベトは皇妃としては失格だった。

最後の詩は、エリーザベトが一八八八年に書き残した「第三の本」という詩集に収録されているもの

で、同氏はエリーザベトがこの世に住めない人間であることを引き合いに出したかったのであろう。

ただ、ツイタ皇妃を引き合いに出して、それと比較することは、筋道が違うような気がする。それではツイタはどのような皇妃であったか。

ツイタは、第一次世界大戦の途中の一九一六年に亡くなったフランツ・ヨーゼフの後を継いだ、最後の皇帝カール一世の皇妃であり、ハプスブルク王家最後の皇妃である。

カール一世は、フランツ・ヨーゼフの弟であるカール・ルートヴィヒの次男オットー・フランツ・ヨーゼフの長男である（第7章第4節参照）。オットー・フランツ・ヨーゼフの兄が一九一四年サラエヴォで暗殺されたフランツ・フェルディナント大公で、これが第一次世界大戦勃発の直接の原因であった。カール一世は、大公亡きあとフランツ・ヨーゼフの後を受けてオーストリア最後の皇帝となった。

しかし、それも一九一八年にオーストリアとドイツが負けると、ハプスブルク帝国は崩壊したため、カール一世は二年間しか皇帝になれず、一九二二年に亡命先のマデイラ島で亡くなっている。

その妻ツイタ皇妃は、ハプスブルク帝国皇妃の退位宣言を断固拒否したため、その後発足したオーストリア共和国に入国することを認められなかった。しかし、一九八二年に、九〇歳の高齢を理由に、六三年振りにオーストリアへの入国を認められている。一九八九年、九七歳でスイスで死去。その後、ヴィーンのカプツィーナー教会の霊廟の葬られた。第二次世界大戦敗戦の一九四五年には、アメリカ合衆国とカナダに講演旅行し、多量の救援物資をオーストリアに送り、祖国に貢献している。（注2）

ツイタは、第一次世界大戦後に、縮小されたドイツ民族だけのオーストリア国土のなかで、現在のベネルックス三国（ベルギー、オランダ、ルクセンブルク）やスカンディナヴィア三国と同じように、国

民に愛される皇室を夢見ていたのであろう。その気持もわからぬでもない。

後年、東洋の某国が、敗戦後も皇室の存続が可能となった例もあり、また、一旦共和国になってから王政復古したスペインの例もある。しかし、時代の潮流やその時代の国際情勢のタイミングとにより、覆水盆に返らずの譬えのように、国家がそれを認めぬオーストリアにおいては、それが実現を不可能にしたとみることができよう。

それにしても、瓦解したあとの世界と、異民族を抱えていて、民族自決の風潮が進行するなかに置かれたエリーザベトの時代と単純に比較することは、適切ではないと思われるのである。

女史は、たとえ帝国が崩壊しても皇妃としての地位を捨てず、外国から救援物資を祖国に送ったその健気さに、エリーザベトと異なるツイタを称賛したものであろう。

皇室という特殊な環境のなかでは、個人の自由が大幅に束縛されることは、やむを得ないことであろうし、理解できることである。しかし、そのような環境のなかにあっても、エリーザベトが、ひとりの人間、ひとりの女性、ひとりの妻、ひとりの母としての幸せを求めるのは、当然すぎる欲求である。

たしかに、ツイタ皇妃のように崩壊し消滅する帝国を守ろうと、それこそ由緒ある家系を継続させようと、夫と共に、いや夫の死後も必死で涙ぐましい努力をしたことは評価できる。しかし、フランス帝国はナポレオン三世の死と共に消滅し、ドイツ帝国とその帝国に君臨するホーエンツォレルン王家も、第一次世界大戦敗戦後、ヴェルヘルム二世のオランダ亡命（本人は帝位に留まると主張したが、叶わなかった）と共に滅びた。オーストリア帝国のハプスブルク王家のみが生き残ることは、たとえ多民族国家を手放したとしても、例外的な戦勝国のイギリスのように帝国を維持することは土台無理であった。



新オーストリア共和国は、ハプスブルク王家によるオーストリア帝国の復興の虞れがないように、退位宣言を求め、国内在住を拒否したのも時代の趨勢であることを考えれば、当然のことである。むしろ、ツイタの行為は時代錯誤と受け取られても仕方ないことである。

もう一つ。ハーマン女史は同じ著書の「はじめに」の最初のくだりで、次のようにも述べている。

「エリーザベトは強い自意識をもって、婦人運動が二〇世紀になってやっと『自我の実現』というスローガンの下に目指していたことを、先んじて到達してしまった」（中略）「彼女は個人の権利を主張するとともにこれを達成したが、この『自我の実現』は幸せを齎さず、彼女の生涯を悲劇に追いやってしまった」（注3）

同氏はエリーザベトの『自我の実現』ということの評価しているように見える。ここに上述した四行のほか、六ページに亘る全文を掲載することはできないので、以下、要点のみ取り上げてみる。

エリーザベトが、皇妃としての「自分の身分に相応しい生き方を拒絶」し、「上流階級を挑発する効果を図（beabsichtigen）していた」だけでなく、「心情的な共和制論者」であり、「これらをハイネから学んだ」と決めつけている。むしろ、直接的にはハイネにも心酔した父親からであろう。

果たしてエリーザベトがその思想を楯に、一六歳の最初から大多数の海千山千の守旧派の貴族に対し、ひとり敢然として立ち向かうことができたであろうか。『意図』するほど挑発的であったのであ

うか。同氏の言う「逃避」(Flucht)とどう説明がつくのであろうか。

また、「民主主義思想の信奉者である特殊性 (Kuriosum, 「珍しいもの」の擬人化＝変わり者)」、「行き過ぎた貴族制度を糾弾し (geißeln)、王侯貴族を嘲笑した (verhöhne)」と述べ、さらに大仰にもさも悪いことのように「近代的な思想に感染された (infiziert) 貴族たちは」とも述べている。

出版された一九八一年にあつてなお、一八世紀に先行したアメリカ合衆国の独立やフランス革命を念頭に入らずに、一九世紀当時の革新思想を否定するかのような考えが読み取れるのである。

エリーザベトは、最初から「美しくありたい」と願い、「後世に名を残す女流詩人」として認められることを前提に詩作したのであろうか。後者については著者の決めつけのように思えるのである。

女史は、一九三四年に「エリーザベト」を出版したコルティが、「帝国報道 (Hofberichterstattung) の時代」(邦訳文では、「コルティの時代は——権力におもねる研究の時代は」とある)の作家で、エリーザベトの問題点を意識的に取り上げなかっただけでなく、その後のエリーザベトの伝記作家もすべてコルティの作品に立脚している (Aufbau) のでそのことは言及されていない、と述べている。

たしかに、筆者がエリーザベトの伝記に関する諸著書を読んだ限りにおいては、エリーザベトの行動について積極的に「非」とする言及は見当たらない。そのとおりであると思う。そこで女史は、自ら調べ上げた膨大な古文書を基に、エリーザベトの公人としての失格さを、自らの著作で縷々取り上げていく。それはそれでよいと思う。しかし、コルティをはじめとする各著作者が「権力におもねて」筆を枉げたともしえない。少なくとも筆者の引用した限りでは、そのような内容は見当たらない。

また、コルティに代表されるような「古き帝国を誹謗(Verunglimpfung)する時代」は終わった、としているが、そのような顕著な誹謗があったのだろうか。コルティの著作は一九三四年の発刊であり、ドイツではヒトラーがその前年に政権を獲得したときであり、オーストリアでは同年にドルフス首相が独裁権を握ったところである。

イタリア名を持つコルティが、イタリア系ドイツ人なのか、それともイタリア系オーストリア人なのか筆者には分からないが、コルティが書き進めていたころは一九二〇年代の不穏な情勢にあるにせよ、両国とも共和国であった。この時代にハプスブルク帝国への反発は考えられるが、それだからこそフランス・ヨーゼフについても自由に調べる事ができたはずである。

それが「誹謗」に繋がったとみることはできなくもならないと思われるが、それならば、エリーザベトの行動についても批判ができたはずである。いや、二〇世紀にもっとも相応しい「自由主義的な」エリーザベトは、批判の対象外であったのだろうか。

しかし、「古き帝国を誹謗する時代も過ぎ去った」という表現は妥当と言い難い。オーストリアは、第二次世界大戦後に植民地を手放したイギリス、オランダ、フランス、ベルギー、スペイン、ポルトガル、イタリアなど、本国から離れた海外植民地を持っていた国々（現在でもなお持ち続けている国々もある）と同様、他民族を抱える帝国主義時代の支配国側であったことは間違いない。

さらに、「冷静沈着で義務に忠実な『官吏』」であるフランツ・ヨーゼフは、果たして時代を読み取る冷静沈着な『皇帝』であったであろうか。後述するように歴史家の批判は厳しい。

著者が多方面に亘り『膨大な』文献を渉猟されたことは敬意を表すしかない。そのようなことが不

可能で、同氏が駆使された文献を一方的に利用させてもらい、一冊の本をものにした筆者は、ただただ感謝あるのみである。しかし、エリーザベトに関する大半の文献の提供者は、エリーザベトに批判的な当時の体制派の方々であり、エリーザベトの言動を見聞した結果だけで、エリーザベトの内面まで突き詰めたくて記録を残したとは思えないし、そのことも考慮に入れなければならないであろう。

結論としては、著者のスタンスを考慮する必要がある。筆者からみると、女史の著書は、全体をとおしてエリーザベトを肯定的に捉えている文章がほとんど見当たらず、どうみても中庸とは言い難く、皮肉を通り越して、悪しき煽動者のようにエリーザベトのみを糾弾し、時代の趨勢や、ゾフィー大公妃及びフランツ・ヨーゼフの側の問題を看過すると同時に、著者はハプスブルク帝国に郷愁を感じているようにも思えるのである。

エリーザベト研究の第一人者が、新しい文献も掘り所にし、過去の研究者の記述に修正を加えたものの、エリーザベト糾弾の急先鋒であるかのようにみえることは、筆者にとっては何ともやり切れない気がするのである。この感覚は、その翻訳者にも感染しているように思えるのである。(注4)

### シシーとハプスブルク王家——筆者の総括

それでは、エリーザベトは、どうしてこのような生涯を送らなければならなかったのか、そして、何が誰が彼女にこのような行動に駆り立てたのか。

第一に、エリーザベト自身の思考と性格とによるものである。

ヴィッテルスバッハ家というどちらかというと芸術性豊かな家柄で、しかも比較的自由的な境遇に育った公女エリーザベトが、もつとも歴史が古く由緒ある、王権神授説を墨守する堅苦しいハプスブルク王家とは相容れなかったことである。たしかに、姑のゾフィー大公妃も同じ出自であり、また、もしフランス・ヨーゼフの結婚相手がエリーザベトではなく、姉のヘレーネであったなら、宮廷儀礼も恙なくこなし、ゾフィー大公妃にも従順であり、フランス・ヨーゼフにも素直についていったかもしれない。

そこに、もつとも父親似であり、結婚前にすでに形成された意志の強いエリーザベトの性格は皇妃に相応しくなく、ハプスブルク王家に嫁ぐべきではなかったのである。しかし、次項以降は、結婚後にエリーザベトに大きな影響を与えた外的な要因である。

第二は、姑としてのゾフィー大公妃の性格と行動に起因するものである。

たしかに、エリーザベトが宮廷儀礼をあくまで拒み続けた行動が、その引き金になったことは間違いない。しかし、夫や前帝の性格から、自分が王権神授説を守らなければならないという気持と、それを引き継いでもらわなければならないフランス・ヨーゼフに対して子離れできず、嫁を取らずに母を取る選択をフランス・ヨーゼフに強要したことにある。

また、皇太子妃でなく皇妃として公務を遂行させるためには、育児からある程度解放させることが妥当と考えたということだけであれば、首肯できるかもしれないが、「引き離す」というやり方は、非難されても仕方ない仕打ちではないか。

さらに、諸国の宮廷では当然のことかもしれないが、また、とくにルードルフに関しては帝王学を学ばせるために、育児をエリーザベトから取り上げたことも、エリーザベトの反発の大きな要因となつて

いる。これは、自由主義的なエリーザベトの考えに染まらせないために、意識的に「引き離し」たとも考えられなくもないが、あまりにもエリーザベトの心情を無視した行為である。

また、腹心をしてエリーザベトを孤立無援に追い込むなど、総じて嫁に対して意地悪で、エリーザベトをして不服従・離反を増幅させるなど、姑として失格である。

第三に、フランツ・ヨーゼフの皇帝・夫・父親としての資質に欠けていたことである。

フランツ・ヨーゼフは、ルードルフに譲位する切り札を持っていなかったのか。いや、したくなかったのである。あくまで自己で帝国を完結したかったのであろう。ルードルフの死もエリーザベトの死への願望も、フランツ・ヨーゼフの決断の欠如に起因していると言っても誤りではないであろう。

もちろん、異民族に国家を解放すれば、政治的・経済的混乱は必至であり、ドイツ系の守旧派は鎮圧に乗り出すであろうし、英・仏・普・露も拱手傍観してはいないであろう。そこで、熟して落ちるのを俟つしかなかったのが、フランツ・ヨーゼフにとって最善の方法だったのかもしれない。

勤勉はいい。しかし、為政者として内政も外交にも、また軍の最高司令官としても、時代の要請や国民の期待に沿う手腕すら発揮できなかった。改革に対して頑固だった。座して不可避的な崩壊を自然に委ねる結果につながった。これが、自由主義的な考えを持つエリーザベトとルードルフをして、夫をそして父を見限る原因となった。

マリー・ヴァレリーが結婚後述べているように、食事を中心とした家族の団欒における味気なさと、家長としてのフランツ・ヨーゼフの振る舞いについて不満を述べている。ゾフィー大公妃が生存中からすでにエリーザベトは、この雰囲気には堪らなく嫌気がさしていたことも見逃せない。

ただ、実直に皇帝としての職務をこつこつと遂行している「そとづら」に対して、国民やヴィーン市民には、その誠実さのみが映っているため、フランツ・ヨーゼフの評価はよいのであるが。

第四に、ヴィーンの宮廷の居心地の悪さもエリーザベトを、ヴィーンから遠ざける原因を醸成した。

貴族の格式と遊びと噂話に終始した、時代の変化に対応しようとしめないヴィーンの貴族の無知と嫌がらせに反発し、ヴィーンに「滞在」することを極力避けたことは、たとえそれが「逃避」と呼ばれようと、エリーザベトにとってはそこが精神的に落ち着くことができな、生理的にも堪えられない世界であつたのである。

第五に、以上の要因の背景として、オーストリア「帝国」が、命脈が尽きようとしている、救い難い末期的状況に置かれていたことである。

少し長くなるが、二、三引用したい。

フランツ・ヨーゼフが三三歳の一八六六年のとき、ゾフィー大公妃に、「できるかぎりのあいだ栄光を続け、最後まで務めを果たし、最後は立派に死ぬ、私がしなければならぬのはこれだけです」と書き送っており、また、それとは別の機会のことと思われるが、「遺言状に『仮にも王冠がわが王家を離れる』場合に備えた取り決めを書きおき、皇女ギーゼラには『ウィーンよりドイツの方が安全だから』私が死んだら相続権を主張しなさい、と教えた」(注5)との記録がある。

翌年に第三代ドイツ皇帝となるヴィルヘルム二世が、一八八七年(このときはまだ皇太子だった)に述べたといわれる次の文言を、情死事件の二年前となるルードルフが書き残している。

「……殿下はこう仰せられた。うまくいっているのはプロイセンだけで、オーストリアはすべてが朽

ち果てる寸前だ、オーストリアはやがて崩壊し、ドイツ諸州は熟しきった果実のようにドイツのひざに落ちるだろう。(オーストリアは)二流の公国として、かつてのバイエルンよりもっとプロイセンに頼るようになるだろう、と」。さらに、「オーストリアの皇帝はもし望めば、つまらないハンガリー王として生をまっとうすることができる。プロイセンが何か手を打って、その実現を急がせることはないだろう。どのみち放っておいてもそうなるのだから」(注6)

ヴィルヘルム二世の一刀両断に切り捨てる傲慢さを、ルードルフはどう感じたであろうか。さらに、ルードルフは、死ぬ前に、マリー・ヴァレリーに宛てて次のように述べている。

「『パパがあゝの世に行ったら』オーストリアから出た方がいい、『どんなことになるか、パパにはわかるのだ』」と。(注7)

しかし、このような状況のなかで、フランツ・ヨーゼフは何もできなかったのだろうか。自ら「ハプスブルク帝国」を「オーストリア共和国」に変身させることはできず、革命かクーデターか、戦争により敗戦となるかの外的なはずれかの方法に委ねるしかなかったのかもしれない。そしてそれは、自らが仕掛けた最後通牒により勃発させた第一次世界大戦のさなか、戦争の帰趨が決まらない一九一六年に死期を迎えたときに、帝国崩壊を薄々感じたのかもしれない。

ハプスブルク帝国の最後については、巻末の参考(1)「わき役たちのその後」で歴史学者の説を引用しているの参考にしていたきたい。

一方のエリーザベトが皇妃として求めたのは、因習的でないもつと開かれた帝国、いや共和国であつ



たかもしれない。帝国の最後を夫に期待できないという絶望的な気持で、フランツ・ヨーゼフに代わって、ルードルフにもっと開明的な皇帝、いや、終局的には共和国の大統領になってもらいたい、ならせたいという願望であつたのであろう。ルードルフにもそのような願望もあつた。(注8)

たしかにルードルフはエリーザベトにとって「あちら側」の人間であるが、エリーザベトは自分の考へに一番近い人間であるとみていた、いや期待していたと想像できる。ルードルフの死を聞いて、エリーザベトは苦悶し、フランツ・ヨーゼフは不満すら言わずに諦めたという。エリーザベトは、おそらく誰よりもルードルフへの一番の理解者であつた。

ルードルフと命名したのはゾフィー大公妃であつたが、エリーザベトは、息子のルードルフでオーストリア「帝国」を終わらせ、オーストリア「共和国」を夢見ていたのではなかつたか。

ルードルフの死後、一、二の例外を除き、すべて黒の衣装でとおしたのも、期待が実現できなかつたことと、ルードルフの生前、息子を満足に愛することができなかつた気持を込めての、ルードルフに対する鎮魂の気持を持ち続けたかつたことの表れではなかつたか。

以上のような経緯から、エリーザベトは、ゾフィー大公妃が死んだあとも、オーストリア帝国の皇妃としての役割をまったく果たさなかつた。命運の尽きようとしている帝国を何とか維持しようという意欲がまったくなかつた。このことから、ツイタ皇妃と比較するのは無意味であると筆者は考える。

エリーザベトは、フランツ・ヨーゼフと一蓮托生で帝国の終焉を見届けるまで共にできるだけのことをしようとすることを放棄した。もはや帝国の将来に関心のなくなつたエリーザベトは、個人としてど

のように生きて行くかにしか関心がなかったものと思われる。

たしかに、王妃として金銭的には何も不自由しなかったし、皇室儀礼を無視すればいつでも好きなことができ好きなところに行くことができた。しかし、何をやっても満足することはなかった。ほつかりと大きく空いた胸を満たす心の安らぎを得ることはできなかった。

旅行も強行軍も、「何も考えない」ためのひとつの手段に過ぎないものかもしれないなかった。ヘルメスヴィラもアキレイオンも瞑想に耽り思索するには、最後の恰好の場所ではなかった。食事をしたり行動したりするために必要な大勢の従者も安らぎを得るためには邪魔だったのかもしれない。

偉大なヤハウエすらエリーザベトを救うことができなかった。そこで、荒れ狂う自然に身を置き、その猛威に打ちひしがれるところに、何かを見いだそうと努めたのかもしれない。そのようなことは誰も理解できなかった。おそらく、マリー・フェシュテイチを除いては。それが、奇癖、奇行のレットルを貼られた「風変わりな女性」と受け止められ、理解されなかったのではないかと思う。

筆者は、そこに信仰によって心の救済を求め、キリスト教的ヨーロッパの思考の限界があるのでないかと思う。こじつけの誹りは免れないことを覚悟で述べると、エリーザベトは、「無」になって、何かを会得したかったのではなかったか。筆者の暴論であるが、只管打座しかんたざの禅の境地に入れたならば、いくらからでも曙光が見えるようになったのではないだろうか。そのきっかけがつかめないまま死への願望が心の中を埋めつくしたのではなかったか。

ルケーニによる暗殺は、僅かな痛みを感じただけで、その願望を成就させてくれた、ある意味では救いの一撃だったのかもしれない。

最後に、オーストリア帝国の統治者としての命運に関して端的に述べると、ハプスブルク王家は、株式を公開していない、時代に取り残された大きな老舗の個人会社に擬せられよう。

本店（ハプスブルク王家自体の領土）及び直営店（ドイツ民族統治の公国等）のほか、属領の土地として吸収合併した店舗（イタリア、ハンガリー、ペーメン、メーレン等）を傘下に収め、若いオーナー社長（フランツ・ヨーゼフ）と、大きな権限を持った母親である会長（ゾフィー大公妃）との二人三脚経営的な圧力のもと、古くからの役員はたいした建設的な意見もなく、前時代的な商売を行っている。

会社外では、急速に勢力を伸ばしてきた親戚の商店（プロイセン）に喧嘩（普墮戦争）を売られ、負けた挙げ句に親戚全体に対する主導権を奪われて、親密な関係にあった親戚（神聖ローマ帝国の諸国及び諸領邦）も失い、締め出されて（小ドイツ主義）しまった。

会社内では、従業員幹部は、会長の指示を受けて、社長の商売の邪魔をさせないよう、また、子離れしない会長に対抗させないよう、若い嫁（エリーザベト）を監視し、その一挙手一投足を報告させて、嫁いびりしている。また、会長は、大勢いる従業員の前に威厳を維持するために、古い格式の家憲としたりを、口を酸っぱくして嫁に守らせようとしている。ある店舗（イタリア）は外部（フランス）の力を借りて離反し、ある店舗（ハンガリー）は会長と仲違いをしている嫁の力を借りて子会社（親会社の社長が兼務、嫁は別格の副社長）として発言権を増してきた。

家庭内では、姑は嫁に対して、後継者としての子供たちの養育も、経営にも口出しさせず、忙しい息子の社長が嫁の言いなりにならないよう牽制している。社長は、次期社長となる一人息子（ルートル

フ)に、徐々に経営を引き継がせる教育(帝王学)を行わず、かつ時代に沿った新しい経営感覚の息子の意見も取り入れずに、一人で問題を抱え込む。そして、時代の流れに抗することもなく、反抗する傘下の店舗(セルビア)に強圧的な態度(第一次世界大戦)をとり、その支店に加勢した他の大企業(イギリス、フランス、最後にはアメリカ合衆国)の圧力のもとに、後れをとっていた世界規模の経営戦略遂行を意図して協力を得ていた親戚(ドイツ)とともに倒産(敗戦)し、親族だけの規模に縮小させられて、経営者交代を代償に新経営者(オーストリア共和国)に引き継がされるのである。

筆者にはそのような図式が思い浮かぶのである。

さて、読者の皆さんは、エリーザベトの生涯をどのように受けとられたのでしょうか？

## 参考(1) 主な脇役たちのその後の生涯

### (1) フランツ・ヨーゼフ

フランツ・ヨーゼフ皇帝は、一九一六年一月二日、第一次世界大戦のさなかに、八六歳の生涯を終えた。このときはまだ戦局はそれほど劣勢に立ってはいなかったが、帝国の行く末を案じながらの最後であった。しかし、敗戦を見なかったことがせめてもの慰めであろう。

フランツ・ヨーゼフ治世の六八年間のオーストリア帝国の衰亡と、ヨーロッパにおける帝国時代の終焉については、そののちの歴史学者がさまざまな解釈をしているが、それらについては本論から離れるので、一部の評価についてのみ簡単に取り上げたい。

イギリスの歴史学者ステイブン・ペラーはその著書『フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国』の日本への序文で批判している。「この帝国の運命にとって決定的だったのは、支配者であるフランツ・ヨーゼフが、自分の国を相変わらず自分の《世襲財産》と見なしていて、その国家のために自分自身のアプローチや自分自身の目標を修正してゆくことができなかったことだった」、さらに「彼はいろいろなやり方で自分の帝国を近代化しようと試みました。しかしこれらの努力の背後にはいつも、自分の目標は《余の諸民族》——彼はそう呼んでいました——の一般的利益よりも、自分の皇帝＝国家権力と自分の王朝の利益を維持強化することだという考量が働いていたのです」と。(注1)

さらにペラーは、アラン・スケツドの『ハプスブルク帝国衰亡史』から要約引用して、次のようにも

述べている。「帝国の加速された崩壊は民族紛争によるものでなく、オーストリア＝ハンガリー帝国の権力の中枢に名誉と威信という封建的価値観が生き続けたことよって惹起された」。〔注2〕

以上の批判を含め、オーストリア帝国の崩壊は避けられないものであった。結果的にフランツ・ヨーゼフ体制は、第一次世界大戦の勃発という最悪の事態を原因として、自爆を遂げたのである。この戦争の間接原因は、植民地政策で遅れを取ったドイツと、先行したイギリスや宿敵フランスとの角逐であるが、直接原因は、一九一四年六月二八日のフェルディナント大公の暗殺である。オーストリアから突きつけられた最後通牒に対して、セルビアは誠意を尽くして回答したが、フランツ・ヨーゼフは強硬派に押されて、バート・イシュルのカイザーヴィラから宣戦布告を発したのである。

以上に指摘されたように、フランツ・ヨーゼフは、時代の波の大きなうねりのなかで、弱冠一八歳で皇帝の位に就いたこと、公私ともに力強い母親に引きずられたこと、国内に他民族を抱えていたことなどさまざまな悪い条件のうえに、彼自身が時代の流れに適切に対処することなく流され、そのうねりに飲み込まれてしまったとみることができるのである。

エリーザベトがあと二〇年ほど生き、敗戦を見届けていたとしたら、この潮流をどのように感じていただろうか。締め付けられていた専制主義（のちには立憲主義にはなったが）という帝国の桎梏から解放された喜びを感じたであろうか、それとも帝国の崩壊を嘆き悲しんだのであろうか。

## (2) 兄弟妹・娘・嫁・姪・孫娘

エリーザベトの八人の兄弟姉妹のうち、エリーザベトより長生きしたのは、長兄のルートヴィヒ、す

ぐ下のカール・テオドール、三女のマリィ、四女のマティルデであるが、ルートヴィヒは一九二〇年に八九歳で、マリィとマティルデは揃って一九二五年に八三歳と八一歳で、いずれもドイツとオーストリアの敗戦を体験したあとにこの世を去っている。それに対して、カールは第一次世界大戦勃発前に七〇歳で亡くなっている。

フランツ・ヨーゼフの三人兄弟のうち、一番下の弟ルートヴィヒ・ヴィクトールのみは、兄たちに代わって、第一次世界大戦の敗戦を見届けて、一九一九年に七二歳で亡くなった。

エリーザベトの二人の娘のうち、次女のギーゼラの方が三女のマリィ・ヴァレリーより長生きし、何と筆者の生まれる二年前の一九三二年まで生きていた。ギーゼラは、祖国がナチによって併合されるのを見届けなかっただけでもましであったと思う。ギーゼラ七六歳、マリィ・ヴァレリー五六歳。

ルードルフとシュテファニーの一粒種であり、エリーザベトにとつてただ一人の内孫となるエリーザベト（愛称エルジー）は一八八三年九月二日に生まれたが、そのエルジーはオーストリア帝国崩壊後、時代の波に翻弄される。その生涯については、塚本哲也氏の著書「エリーザベト（ハプスブルク家最後の皇女）」に詳しい。

ルードルフの妻であったシュテファニーは、ルードルフとの結婚の際にエリーザベトの反対を受け、ルードルフの死後もエリーザベトの冷たい仕打ちに会い、生涯エリーザベトに嫌われ続けた。シュテファニーのルードルフに対する愛情の足りなさがルードルフの自殺の原因であると、皇室内部や一般市民にも受け取られ、シュテファニーの立場は辛いものがあった。シュテファニーは、周囲の反対を押し切つて身分の違うハンガリーの伯爵と再婚することを決めた。この結婚は、同情的になつていたフランツ

・ヨーゼフは別として、実父のベルギー国王、エリーザベト、娘のエルジーから反対された。しかし、シユテファニーは結婚を強行した。この結婚は、フェルディナント大公と同様、近親者からは祝福されなかった。この結婚により、シユテファニーはハプスブルク王家と無縁となった。

エリーザベトの長兄ルートヴィヒの娘マリー・ヴァラーゼーは、ルードルフにマリア・ヴェッセラとの交際を手引きしたことから、エリーザベトに嫌われた。一九一三年に『私の過去』と題した本を上梓したが、エリーザベトと直接接していた人物であるにも拘わらず、エリーザベトに恨みをもっているかのような、虚実をないまぜにした悪意に満ちた小説のような内容であったので、逆効果となり、社会に受け入れられなかった。〈注3〉

マリー・ヴァラーゼーは、一九三五年にも『皇妃エリーザベトと私』という本を発行しており、これを参考文献としている伝記作家もいるが、ここでも馬脚をあらわしている。すなわち、エリーザベトのサセットの落馬事故について、イギリスのある伯爵夫人が落馬ではなくエリーザベトが密かに子供を産んだのだという本を出した。マリー・ヴァラーゼーはそれに悪のりしてこの二冊目でもこのデマを取り上げているが、さまざまな検証から落馬が疑いない事実であることが証明されている。〈注4〉  
彼女は、三度結婚し、三度とも離婚している。〈注5〉

### (3) イーダ・フエレンツィ

シシーの忠実なハンガリーの女官たちは皆、センセイショナルな暴露記事や回顧録を書くこともなく静かな余生を送っている。



最初のイータ・フェレンツイは、若々しさ、明るさ、正直さ、感受性のある性格、健全な良識、正しい感覚、簡潔で洗練された考え方（限らない真実さ、つましさ、忠誠心）から、エリーザベトの一番信頼の厚かった女官で、エリーザベトの最後の要望を恙なく処理している。エリーザベトの遺言により、四千グルデンの年金を受け、さらに高価な装身具を形見として贈られている。

G. P. ビツヒラーが、その著書『皇妃エリザベトの真実』で引用しているフリツチの『オーストリア宮廷及び社会生活の絵画集』によると、イータ・フェレンツイについて、次のように述べている。「亡き皇妃の講書係イータ・フェレンツイは、シェーンブルン宮廷園の飛び地をなすヴィラ・シユライニツツに引きこもったが、彼女もやはり特定の日を友だち仲間との談笑にあてた。皇妃の全面的信頼を得ていた彼女のサロンは、貴き妃殿下の思い出がいっぱい詰まった博物館、という趣があった。ただしイータ・フェレンツイは、名前こそ広く知られているものの、人となりはほとんど知られていない。きわめて控えめで欲もなく、世のせわしさから常に離れていたせいだ」と。（注6）

彼女は、第一世界大戦をも見届けたあと、一九二八年に八六歳で没している。

#### (4) マリー・フェシユテイチ

一八七三年のヴィーン万国博の際に、ロシアのツァーリ（皇帝）アレクサンドル二世に同行したドルゴルキ皇子がマリー・フェシユテイチに夢中になり、求婚された。当時三四歳だったマリー・フェシユテイチ自身もその気になった。しかし、エリーザベトは二人の結婚を許さなかった。

エリーザベトはマリー・フェシユテイチにこう言っている。「話し合うことは許します。しかし惚

れてはなりません。結婚できる可能性は少ないでしょう。私は、よその人のために貴女を手放すことはしません」(注7)。エリーザベトのこの言葉に、マリリー・フェシユテイチは同意したくはなかったに違いない。おそらく、彼女にとって人生で一番の悩みであったことは想像に難くない。しかし、デアークやアンドラーシの期待する「祖国のために」の意向を無視することもできず、またエリーザベトを悲しませたくないという気持で、断腸の思いで諦めたのであろう。その後も再三再四結婚させてほしいとエリーザベトに申し出ているが、その都度断られている。

エリーザベトにとって二歳年下のマリリー・フェシユテイチは、イーダ・フェレンツイとは別の意味で、腹藏なく話し合い、ときには批判すらできる聡明な女官であり、鋭い観察力と卓越した知的才能、さらには頭の切れる女性であったことから、必要不可欠な友人でもあった。

マリリー・フェシユテイチは、エリーザベトの遺言により、イーダ・フェレンツイに次いで多い三千年グルデンの年金を受けている。金額面からの評価の尺度から見ると、イーダ・フェレンツイに劣るが、これは、イーダ・フェレンツイが、エリーザベトがまだ四面楚歌にあった孤立無援のときに最初に任官された女官であり、マリリー・フェシユテイチよりも七年も早くからエリーザベトの側近として仕えたことが、マリリー・フェシユテイチよりも高く評価されたのであろうと想像したい。

マリリー・フェシユテイチは、結局、生涯独身を通した。上述のフリツチエの記述によると、「彼女は夏はハンガリーのシェイテルの城館に住み、冬はヴィーンに滞在して毎日サロンを開いた。興味深いことをたくさん体験したので、サロンに出入りする人は多かった」と言う。(注8)

マリリー・フェシユテイチは、第一世界大戦の帰趨も見届けたあと、一九二三年に八四歳で没してい

る。どのような感慨に浸ったのであろうか。

### (5) その他の女官たち

サロルタ・マイラート伯爵令嬢。エリーザベトの散策と称する強行軍には、最初、マリー・フェシュテイチが同行していた。しかし、マリー・フェシュテイチがだんだんとエリーザベトについて行けなくなるにつれて、エリーザベトはもっと若い女官が必要になった。

そこで採用となったのが、一八五六年生まれで同じハンガリー出身のサロルタ・マイラートである。いつからという記録は見つからないが、一八八〇年代の半ばからかと思われるので、三〇歳ごろからであったであろう。エリーザベトの相手を十分果たしたことが窺える。彼女は、「のちにホーヘンロー工家のクロートヴィヒ公爵と結婚し」(注9)、一九二八年に七一歳で亡くなっている。

エリーザベトが、一八九八年にジュネーヴで暗殺されたときに、ただ一人お供をしてエリーザベトの最後を看取ったイルマ・スターライ伯爵令嬢。彼女は、エリーザベトの暗殺時の一部始終を見届けた唯一の証人であり、一九〇九年に『晩年の皇妃エリーザベト』を出版している。筆者は、この書は残念ながら入手していないが、G・P・ピッヒラーの上述の著作の日本語版で、暗殺時の詳しい叙述が紹介されている。(注10)

彼女は一八六四年生まれで、エリーザベトの最初の旅行にお供をしたのは、まだ臨時女官であった一八九四年、三〇歳のときであった。エリーザベトの最後の旅行のときは三四歳。「エリーザベトの没後は社交界から退き、余生はもっぱら老母の世話にあて、ウィーンで静かな隠遁生活を送ったが、夏だけ

はハンガリーのスターラで過ごした」(注11)と言う。

第二次世界大戦の勃発も体験し、一九四〇年に七六歳で亡くなっている。

## (6) ルケーニ

エリーザベトを暗殺したルケーニに対して、最終的には「終身刑」の判決が下った。ルケーニは模範囚として服役した。その後、監視員が抜き取るのを忘れて入手できた鍵を自殺を図る武器に仕立てた。

一九〇〇年二月に刑務所長がそばを通り過ぎたときに痲癩をおこして、その鍵を使って襲いかかった。現場に急行した看守に鍵を取り上げられ、一〇日間の独房入りとなった。

その後の一九一〇年一〇月に、酒乱の監視員と言い争いとなって刑務所長に訴えられたが、ルケーニに非は認められなかったものの、喧嘩両成敗となり再び独房入りとなった。正邪を厳しく問い詰めるルケーニがわめいたので、真つ暗な独房に入れられたあと、ルケーニは同日の夕方に革製のベルトに首を吊って死んだ。

筆者が、一九九八年のエリーザベト没後百年祭の最後に、ジュネーヴのポー・リヴァージュ・ホテルに宿泊したとき、同ホテルでのさまざまな展示物のなかに、ルケーニの日記類も展示されてあった。ルケーニは、無政府主義者を自認し、誰でもいい、高名な王侯貴族を暗殺することによって、名を残すこととで敢えて逃げ出すこともなく捕まった人物である。筆者にとっては、その生涯を研究するほどのこともない人物であることから、その内容にはまったく関心が沸いて来なかった。

## 参考(2) 年表及びその歴史背景

〔注〕 国名等の略称（奥〃オーストリア、普〃プロイセン、洪〃ハンガリー、仏〃フランス、伊〃イタリア、独〃ドイツ、露〃ロシア、土〃トルコ、維〃ヴィーン）

西 曆	エリーザベト及び家族の動向	父母兄弟姉妹及びヨーロッパ情勢
1830	8・18 フランツ・ヨーゼフ誕生 (以下、F・ヨーゼフと略す)	4・4 姉ヘレーネ誕生
1834	ポツセンホーフエン建設	2・22 パリ、二月革命
1837	12・24 エリーザベト誕生(22時43分) (以下、シシーと略す)	3・13 奥、三月革命(メッテルニヒ退陣)
1848	シシー、詩を書きはじめる	3・15 ハンガリー反乱 3・18 イタリア反乱 4・25 奥、欽定憲法発布

1854	1853	1852	1851	1849
6・9 夫妻、ペーメン(ボヘミア)初訪問	4・24 シシーとF・ヨーゼフ結婚	8・18 シシーとF・ヨーゼフ婚約	F・ヨーゼフ、ベルリン訪問	12・2 F・ヨーゼフ即位
10・16 クリミア戦争(56年3月)	12・2 仏、ナポレオン三世即位	5・1 ロンドン万国博(10・15 世界初)	11・30 普墺協定(ドイツ連盟原状回復)	1・5 ハンガリー革命失敗
		8・13 ハンガリー、オーストリアに降伏	5・4 ハンガリー、ブダ解放	3・4 墺、基本法制定(三月憲法)
			4・22 ハンガリー、ペスト解放	4・14 ハンガリー臨時革命政府設立
				6・ 墺皇帝一家、インスブルックに避難 (シシーと初対面)
				10・6 墺、十月革命(皇帝一家、モラヴィアのオルミュッツに避難)

1860	11・17 シシー、マデイラへ転地療養	1855	3・5 長女ゾフィー誕生
		1856	5・15 F・ヨーゼフ、パリ万国博出席
		1857	7・15 次女ギーゼラ誕生 11・17 夫妻、イタリア歴訪（57年3月） 5・ 夫妻、ハンガリー初訪問 （5・29 長女ゾフィー死去）
		1858	8・21 長男ルードルフ誕生
		1859	1・  シシー、トリエステ滞在
			5・15 パリ万国博（11・15）
			2・17 ハイネ死去
			8・  姉ヘレーネ結婚
			1・  妹マリー、ナポリ王と結婚
			4・29 イタリア統一戦争
			5・28 兄ルートヴィヒ結婚
			6・11 メッテルニヒ死去
			6・24 塙軍、ソルフェリーノで敗北
			7・11 塙仏単独講和
			11・10 チュエーリヒ条約
			（塙、イタリアの国土喪失）
			10・20 塙、絶対王政廃止（↓立憲王国）

1866	1865	1864	1863	1862	1861
1・ 夫妻、第二回ハンガリー訪問	10・ イーダ・フェレンツイ講書係登用 シシー、ゾフィー大公妃と軋轢最高			6・ シシー、バート・キツシンゲンへ	6・ シシー、マデイラからコルフ島へ 5・ シシー、ヴェネツィアへ
6・16 普墺戦争(8・23)(墺敗北)	5・1 維、リング(環状道路)開通	4・10 墺のフェルディナント大公、 メキシコ皇帝即位	3・10 バイエレン、ルートヴィヒ二世即位	9・24 普、ビスマルク宰相となる	1・2 普、ヴィルヘルム一世即位
			2・1 普墺、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争(対デンマーク)	8・16 独、フランクフルト君侯会議	2・26 墺、憲法発布
					3・17 イタリア独立



1873	5・27ゾフィー大公妃死去	1・1洪、ブダとペストが合併
1872	12・21マリー・フェシュテイチ、 シシーの女官となる	3・15奥洪の二重帝国成立
1871	11・17F・ヨーゼフ、スエズ運河開通出席	6・19メキシコ、フェルディナント皇帝を 処刑
1870	4・22マリー・ヴァレリー誕生 (以下、M・ヴァレリーと略す)	8・22チェコ、独立王国建設主張
1869	5・25維、国立歌劇場こけら落とし	5・25維、国立歌劇場こけら落とし
		11・17スエズ運河開通
		7・19普仏戦争(71年1月28日)
		9・2仏、ナポレオン三世捕虜となる、 フランス第三共和国成立
		9・20イタリア王国成立、ローマ占領
		1・28ドイツ帝国成立
		3・18パリ・コンミュン(5・28)
		7・2ローマ、イタリアの首都となる
1868	6・8夫妻、ハンガリー王戴冠式出席	

	1878	1877	1876	1875	1874	
	1～2月シシー、第三回イギリス狩猟	シシー、イギリス旅行	2～3月シシー、第二回イギリス狩猟	7～9月シシー、第一回イギリス狩猟	1・8シシー、祖母となる (ギーゼラに長女誕生)	4・20次女ギーゼラ結婚
義父フランツ・カール大公死去						
	9・9シシー両親の金婚式	ヘルツェゴヴィナを領有	7・13ベルリン会議(塙、ボスニア・)	1・28洪、デアーク死去	6・29塙、フェルディナント1一世死去 (F・ヨーゼフ遺産相続)	1・9仏、ナポレオン三世獄死
			4・24露土戦争(～78年1月3日)			5・1ヴィーン万国博(～11・2)
						12・2F・ヨーゼフ即位25周年

1889	2月3日シシー、第一回アイルランド狩猟	
1888	4・24夫妻、銀婚式	
1888	2月3日シシー、第二回アイルランド狩猟	
1888	3・10ルードルフ婚約	
1888	1月3日シシー、第五回イギリス狩猟	
1888	5・10ルードルフ結婚	
1888	シシー、イギリス訪問	
1888	9・2シシーの内孫エリーザベト誕生	
1888	(愛称・エルジー)	
1888	8・25シシー、シュラット夫人に会う	
1888	10・5シシー、東地中海の旅	
1888	5・ヘルメスヴィラ完成	
	F・ヨーゼフ、シュラット夫人	
	と交際開始	
		6・13独、ルートヴィヒ二世死去
		8・6独、ヴィルヘルム一世、 バート・イシユル訪問
		11・シュラット、ブルク劇場で公演
		5・20独墺伊三国同盟

1891	1890	1889	1888	1887
10 アキレイオン完成		12・24 M・ヴァレリー婚約 1・30 マイヤーリング事件 (ルードルフ心中自殺)	11・シシー、アキレイオン建設計画を F・ヨーゼフに打ち明ける	7・シシー、イギリスのワイト島海水浴 9・シシー、ハイネの生地訪問
3～4月シシー、ギリシア旅行	7・31 M・ヴァレリー結婚 8～9月シシー、地中海・大西洋の旅	11・シシー、地中海旅行 2・7シシー、カプツィーナー教会へ	3～5月シシー、M・ヴァレリーとイギリスへ	3・8独、ヴィルヘルム一世死去 6・25独、ヴィルヘルム二世即位 11・15父マックス公死去
	5・16姉ヘレーネ死去 3・20独、ビスマルク引退 2・18洪、アンドラーシ死去			

1898	11月12日 シシー、南フランス旅行	1891	秋 シシー、エジプト旅行
7・16	シシー、バート・イシユル出発	1892	1・27 M・ヴァレリー、長女誕生
9・9	シシー、ジュネーヴのボー・ リヴァージュ・ホテル宿泊	2月5日	シシー、コルフ島へ
		12月	シシー、スペイン旅行
			シシー、アキレイオン売却を考慮
		3月4日	シシー、地中海旅行
		1月2月	シシー、マルティン岬へ
		2月4月	シシー、アキレイオン最後の滞在
		6・8	夫妻、ハンガリー建国千年祭臨席
		2・18	シシー、遺書の書き換え
		5・5	妹ゾフィー焼死
		4・6	第一回近代オリンピック開催
		5・2	ハンガリー建国千年祭
		1・26	母ルドヴィカ公妃死去
		7・30	独、ビスマルク死去

参考(2) 年表及びその歴史背景

1998	1989	1963	1932	1924	1922		1919	1918	1916	1914	
1999年シシー没後百年祭		3・16孫エリーザベト(エルジー)死去	7・27ギーゼラ死去	9・6M・ヴァレリー死去	9・10オーストリア帝国解体	↑		11・11オーストリア帝国崩壊	11・21F・ヨーゼフ死去	12・2F・ヨーゼフ、即位50周年	9・10シシー暗殺さる
	3・14奥、カール一世皇妃ツイタ死去			4・1奥、カール一世、マデイラで死去	9・10サン・ジェルマン条約(対奥)		1・18パリ講和会議	11・11第一次世界大戦休戦	11・21奥、カール一世、皇帝となる	6・28奥、フェルディナント皇太子暗殺	9・17シシー、カプツィーナー教会に埋葬される
					3・24奥、カール一世夫妻、スイスに亡命				7・28第一次世界大戦勃発		

### 参考(3) シシーを取り上げた芸術作品

#### (1) さまざまな芸術作品に取り上げられている

エリーザベトについて取り上げた書籍のほか、その他の分野ではどのように取り上げられてきたの  
であろうか。王妃エリーザベトを主人公にしたもの、彼女の唯一の息子であり若くして自殺したルー  
ルフ皇太子を主人公にしたもの、エリーザベトのいところで国費を浪費した挙げ句に謎の死を遂げたルー  
トヴィヒ二世を主人公としたものなど、映画・演劇・オペレッタ・バレエなどは、本国のオーストリア  
や彼女が出生したドイツをはじめ、ヨーロッパ各国ではかなり以前から制作・上演されており、さらに  
最近ではミュージカルにより、日本でもかなり周知されるようになった。

一九九三年に、オーストリアのヴィーンの東に位置するマルヒフェルト平野の二つの城でエリーザベ  
ト展が催されたが、その際に入手した小冊子（注1）などを参考にしながら取り上げてみる。

エリーザベト自身を主題としたものは、若き王妃としてのロマンチックな物語、悲劇的な終焉を迎え  
るハプスブルク王家における一主役としての物語、人生の後半をさすらいに明け暮れたエリーザベトの  
内面をえぐる物語とに分けられよう。

エリーザベトのただ一人の息子であるルードルフの情死行を主題としたマイヤーリングの物語のなか  
では、母として脇役で登場する。ただし、この物語はあくまでもルードルフとマリー・ヴェツセラが主  
役なので、作品によってはあまり強い印象を与えない場合が多い。最後のルートヴィヒ二世の物語では、

奇行が多く、周囲からほとんど理解せず、厄介者扱いされているルートヴィヒ二世にとって、エリーザベトは数少ない理解者として、あるいは恋人に擬して描かれている。

いずれの場合も、エリーザベトの一面を捉えているに過ぎず、また作品によっては誇張され、歪曲され、あるいは揶揄されているのは残念である。

以下、少し詳しく取り挙げてみたい。

## (2) 演劇に描かれたエリーザベト

第一の演劇でも、ヨーロッパではよく知られた作品として下記のようないくつかの作品が制作・上演されたようであるが、日本では一度も上演されたことのない作品ばかりである。

- 一九三〇年に書き上げられた喜劇「シシー、花嫁としての門出」(原題 *Sissys Brautfahrt*)
- 一九三七年にヴィーンのドイツ国民劇場で初演されたドラマ  
「エリーザベト、オーストリア皇妃」(原題 *Elisabeth, Kaiserin von Österreich*)
- 一九七二年にヴィーン芸術週間で初演された戯曲「キング・コング・マイヤー・マイヤー・リング」(原題 *King-Kong-King-Mayer-Mayer-Ling*)
- 一九七二年にヴィーン芸術週間で初演された戯曲「シシー(ルドルフの愛)」  
(原題 *Sisi & Rudolfsliebe*)
- ジャン・コクトーの演劇「双頭の鷲」(フランス語原題 *Taigle à deux têtes*)
- 戯曲「鉛占」(原題 *Bleigießen*)



○ ドラマ「廃位」(ハンガリー語原題 A Tronfosztott)

原典には ' Lustspiel, Drama, Stück, Schauspiel, Theaterstück と書き分けており、一応、喜劇、ドラマ、戯曲、演劇、劇場用戯曲と訳してみたが、どのように異なるのかドイツ語の辞書だけではわからない。実際に見てみればわかるのであるが、そこまで調べるまでもないので省略する。

このうち、ジャン・コクトーの演劇「双頭の鷲」については、後述するように日本でも同名の映画が上映され、筆者が見たときに入手したプログラムの「かいせつ」(「参考(4)映画に描かれたシシー」の項参照)に、つぎのような記述があるので紹介したい。

コクトオは一九四六年に、エドヴィージュ・フィエールとジャン・マレエのために戯曲を書いた。アメリカ、イギリスでも上演されたが、パリではこの二人を主演者として、一九四六年一二月に初演され、特に好評を博した。ジャン・コクトオがマレエにした注文は、第一幕では沈黙し、第二幕では随喜の涙を流し、第三幕で階段からまっ逆様に転落する芝居、というのであった。コクトオはフィエールとマレエの姿を脳裡に描きつつこの二人の俳優を生かすための芝居を書いた。

前述の映画は、この演劇をそのまま映画に生かしたものであることがうかがえよう。したがって映画を見ることによって、この演劇の内容も容易に想像できるとはいえないだろうか。

なお、因みに、この「双頭の鷲」はハプスブルク王家の紋章である。

(3) オペレッタに描かれたエリーザベト

第二のオペレッタではどうか。

エリーザベトを取り上げたオペレッタとしては、筆者の知るかぎりにおいては、一九三二年にオーストリアの作曲家フリッツ・クライスラー（後にアメリカに帰化）が作曲した「シシー」一本であり、シシーの誕生日の前日に当たる同年二月二三日にヴィーンで初演されている。しかし、僅かに言及している文献も触れていないので、日本では未だ上演されていないはずである。

筆者がこのオペレッタ（ドイツ語では *Shisied* と表記されたものもある。直訳すると「歌う演劇」——辞書には「輕歌劇」との訳もある）の存在を知ったのは、一九八一年に発行された文庫クセジュの『オペレッタ』（ジョゼ・ブリユール著、白水社発行）であるが、マイナーのオペレッタのためか、オーストリアのオペレッタの項の記述の中では、最終頁に二行で次のように紹介されている。

これでもまだ十分ではない！ そう、フリッツ・クライスラー（一八七五―一九六二）を加えなくては。彼は魅力的なヴァイオリニストであったが、他方『シシー』（一九三二）の魅力的な作曲者でもあった。

幸い、筆者がその翌年に入手したオペレッタの輸入盤レコードの中に、いくつかある有名な曲のさわり（の曲の一つとして、この「シシー」のアリア "Ich wär' so gern einmal verliebt"（私も一度でいいから恋に夢中になりたい）があり、それを聴くことができた。

歌うのは女性歌手のヒルデ・ギューデン。それを聴いているうちに、なにかかつて聴いたことがあるような錯覚に陥った。あるいは、日本でも浅草オペラで上演されたことがあったのだろうか。それとも過去に聴いたクライスラーの他の曲（「愛の喜び」「愛の悲しみ」は特に有名）とともに、聴いたことがあったのだろうか、今はその記憶がない。

次いで、筆者は、このオペレッタが、一九九二年八月二六日にオーストリアのバート・イシュルで上演されることを知り、これと後述のミュージカル「エリーザベト」（初演）との二作品を見ることを主目的とした一人旅を計画し、現地に出かけて全曲を聴くことができた。

当日入手したプログラムを要約したあらすじは次のとおり。（注2）

内容は事実と異なつて、ヘレーネが失恋しない筋書きとなつてゐる。まず、第一幕の場面ではシシーの母がルドヴィカではなくルイーゼとなつており、バート・イシュルでの見合いでは、フランツ・ヨーゼフのお相手の本命であつたヘレーネ（ネネ）は、後に実際に結婚することになるトゥルン&タクシスの王子に思いを寄せており、フランツ・ヨーゼフとの結婚話は有難迷惑であつたと、ネネが見合いのための銀色の宮廷服を忘れたため、シシーがその箱を持ってきているのを見たフランツ・ヨーゼフがシシーに一目惚れしたものの、シシーを仕立屋の娘であると勘違いした件が違う。

第二幕では、フランツ・ヨーゼフとヘレーネを引き合わせる祝宴の場に、礼服を持ってきたシシーがフランツ・ヨーゼフとばったり会う。フランツ・ヨーゼフにひそかな思い寄せているシシーは

姉のことを気にかけるあまり、二人の婚約についてフランツ・ヨーゼフに尋ねる。この時点でフランツ・ヨーゼフは母ゾフィーのお膳立てした婚約に従わずにシシーとの結婚を考える。そのことを喜びながらシシーはネネーに話すが、それを立ち聞きしたルイーゼは、姉の婚約を妬んでいるとシシーを非難すると同時に、入れ知恵して邪魔だてしたと夫マックスをのしる。温厚なマックスは妻に対して怒るが、その家族の喧嘩の最中にフランツ・ヨーゼフが現れ、シシーが仕立屋の娘でなくネネーの妹であり、自分とネネーとの婚約が仕組まれたことを知る。やがて祝宴が始まるが、フランツ・ヨーゼフはシシーとしか踊らず、シシーと婚約することを発表する。ネネーは希望どおりトゥルン&タクシスの王子との幸せが約束される。めでたし、めでたしで幕となる。

さらに同じ作品を、一九九八年のエリーザベト没後百年祭の際に、ヴィーンのシェーンブルン宮殿内の庭園「レーミッシュ・ルイーネ」（ローマの廃墟。本物の廃墟を移築したものではなく、それらしく真似たもの）を背景とした舞台でもう一度見る機会があるはずであったが、残念ながら直前に上演中止（モーツアルトの「後宮からの誘拐」に変更）となり実現しなかった。

このオペレッタ「シシー」は、地元のオーストリアでも全曲を収録したレコードやCDは発売されていないとみえて、遂に見つけることはできなかった。シシーの見合いの場所となったバート・イシユルで、一九六一年から続いている「オペレッタ週間」においても、一九九二年までの三二年間の上演記録を見た限りでは、同じ地元ゆかりのフランツ・レハールの作品が圧倒的に多く、「シシー」は一九八〇年、一九八七年、一九九二年の三回だけ上演されたに過ぎない。したがって、余程のことがないかぎり

見る機会はほとんどないといってよいかも知れない作品である。

筆者がヴィーンで入手したオペレッタ・アリア集のCDに、ファル作曲の「皇妃」(Kaiserin)という作品の中に、“Du mein Schönbrunn” (汝、わがシエーンブルンよ)というアリアが収録されていたが、歌っている女性歌手の配役がマリア・テレジアとなっているのでエリーザベトでないことはたしかだ。しかし、その曲が気に入ったので、ストーリーを調べたいと思ったが、筆者が音楽の諸事典を調べた限りでは分からない。そこで、ヴィーンのフォルクスオパーに問い合わせたところ梨の磔であった。

#### (4) バレエに描かれたエリーザベト

第三に、バレエでは二作品で取り上げられている。

その第一は、英国ロイヤル・バレエの首席振付師のケネス・マクミランが一九七八年に創作した「マイヤーリング」である。マクミランの依頼により、ジョン・ランチベリーがフランツ・リストのいくつかの作品をもとに編曲、ジリアン・フリーマンが台本を書いたものである。

その九年後の一九八七年には日本でも上演されている。筆者もその最終日の四月二九日に鑑賞する機会を得た。物語として取り上げた内容については後述するが、基本的には映画と同様な物語である。ただ、このバレエは他の有名な古典的な作品に比べると、上演される機会は極端に少ないといってよいだろう。

筆者はこのバレエを鑑賞した時の感想の記録は残していない。しかし、同じイギリスのロイヤル・バレエにより、一九九四年に本拠地のコベントガーデン王立歌劇場で行われた公演をNHKが放映したも

のを、たまたま収録した手許のビデオを再生した結果の感想を述べてみたい。

物語については本論で既に述べてきたが、古典的なバレエの名作と比較してみても、バレエの演出としては愛と憎しみの愛憎の表現が濃密で、舞踊そのものもかなり動きの激しさが伴っている。ルードルフが政略結婚について母エリーザベトに不満を述べる場面（実際にはエリーザベトが選んだのではないのだが）、ルードルフの妻シユテフアニーに対する嫌がらせや拒絶を示す仕種、それに対するシユテフアニーの不満の爆発、自由主義的なルードルフの行動に対する皇帝の否定的な態度、ルードルフのマリー・ヴェツセラに対する愛の表現など随所に表れている。そのほかにも、平家物語の冒頭にある「会者定離」を思わせるような「別れ」を歌いあげる、バレエとしては異色ともいえる歌の入る部分があったことは、この異色のバレエを象徴的なものとしているように思えた。

一九八七年五月一日付けの朝日新聞の「五」氏の批評では、バレエにおける表現として次のように述べている。（一部のみ抜粋）

その振り付けの中には過去のバレエの常識を超えた手法さえ散見される。女性の踊り手を人形のように振り回したり、時には、怒ったような表情で飛びつき、突き放し、頭から逆さ落としにする。抱擁のシーンもなかなかで、愛憎の極点を求め、これでもかこれでもかという濃厚なからみあいがある。演じられる。

王室社会のしがらみの中で疲れ果て、自ら命を絶たねばならなかった主人公・ルードルフ皇太子の、粗暴な反面、愛に飢えた性格を描くため、必然的に編み出された表現なのであろう。

作品はパントマイムがほとんどなく、すべてが踊りで構成されている。主役・ルドルフ皇太子の踊りも、各幕を通じてデュエットが多い。……

皇太子役、(中略)その行動は荒々しいが、肉親から疎外された男の人間的なひ弱さを描いた作品ともいえよう。

第二には、世界的に有名なモーリス・ベジャール振付による「シシー」がある。この作品は、一九九三年三月二五日にロンドンで初演され、日本では一九九五年に東京で初公開され、さらに一九九九年に横浜でも再演されている。筆者は東京公演を鑑賞(六月二八日)している。

このバレエはシシーの精神的な内面を当代屈指のバレリーナであるシルヴィ・ギエムの独演により表現した作品である。東京初演の際のプログラム『The Tokyo Ballet』で、振付師モーリス・ベジャールは、シシーについて次のように述べており、少し長いが引用したい。

ジュネーヴのポー・リヴァージュ・ホテル前においてイタリア人アナーキスト、ルイジ・ルツチエーニの手で暗殺されたエリザベート。バイエルン王国の貴族ヴィッテルスバッハ公爵家に生まれた彼女は、ルートヴィヒ二世のいとこであり、フランツ・ヨーゼフの妻である。そして、オーストリア皇妃であり、ハンガリー王妃であった彼女は、人の心を惹きつけてやまない、魅力に満ちた歴史上の人物である。彼女のイメージを和らげるような映画の存在にもかかわらず、あまり評価を認められていないのだが。

国民と芸術家と詩人の友であり、女ハムレットとでも呼ぶべき孤独と無理解の犠牲となった皇妃エリザベートは、世界中を彷徨した。彼女が狂気の世界に引きつけられていったのには、遺伝的な要素と、ハプスブルク家における非人間的ともいえる不条理で束縛された日常生活が因をなしているようだ。

シルヴィ・ギエム：彼女は、皇妃シシーなのだろうか？ それとも、その狂気ゆえに自ら迫害された支配者と思い込んでいる病者なのであるのか？

そもそも、彼女を理解していなかった暗殺者ではなく、愚かにも暗殺されてしまったエリザベートこそが、真のアーキストだったのではないだろうか。

また、この主人公である皇妃エリザベトを演じたシルヴィ・ギエムは、一九九七年に日本で出版された『バレリーナは語る』（新書館発行）で、聞き手・三浦雅士氏との対談で次のように述べている。（関係ある部分のみ抜粋。ただし、三浦氏の発言部分は省略）

——私とは属している社会は違いますが、つねに戦っていて、拒否したり、規則に従わなかったりする。強くて、孤独な女性ですね。

——普通の女性なら持たないような責任を与えられていた彼女は、欲しいものを得るためには、いつも規則などと戦わなくてはなりません。だから、彼女はいつも孤独で、死ぬときもひとりです。



——シシイは自分から外の世界に出て、遠くに離れていったけれど、死ぬときは平和だったと思います。たぶん、彼女は人生に別のことを求めていたはずですよ。彼女と皇帝フランツ・ヨーゼフとの結婚生活には、つねに結婚に反対だった夫の母親がつきまとっていましたが、彼女には耐えきれないものでした。彼女は普通の女性としての人生を送ることができなかったのです。

——普通のフランス人にとっては、ロミー・シュナイダーが映画で演じたプリンセスシシイのイメージしかないんです。それで私も、あまり魅力がなく、怒りっぽく、頭がおかしいというような人物を描いていました。ですから興味もなかったのですが。

——モリスが彼女のことをくわしく語ってくれました。それから、自分でももっと彼女について知りたいと思い、本を読んだりして研究したのです。ヨーロッパでは、シシイのことが誤解されていて、多くの人がつまらない人物だと思っているのは残念なことですよ。

——シシイについて、彼女の人生について、もっと知りたいと思うでしょう。ただ、残念なことに、ヨーロッパ人の十人に九人ぐらいは、ロミー・シュナイダーの役のイメージを持っているんです。このイメージは、全然事実とは違って、ほんとうはずっと素晴らしい人生の物語を、偽り、表面的なものにしている。恥ずべきことです。

さらに、シルヴィ・ギエムは、一九九九年の横浜公演に先立って、このバレエ公演の主催者である財団法人日本舞台芸術振興会の機関紙『NBS News』第一五一号紙上で、バレエ「シシイ」について、次のように語っている。

……六年前から踊っている「シシー」は、振付のベジャールがかなりの部分をまかせてくれたので、もともと私自身がたくさん詰まっている。台詞を話し、狂気を表現し、しかもパーソナルな表現も込めなくてはならないので難しいけれど、やはり自分と一緒に成熟を重ねている作品ですね。  
……

この二人の発言に関連して、筆者は一九九九年に、シシーをどのような人物だと思っているのかもっと詳しく聞くために、モーリス・ベジャールとシルヴィ・ギエムに手紙を出したが、残念ながらこの世界的に有名で忙しい二人から返事をもらうことができなかった。それは、筆者があらゆる情報をもとに自ら調べるべきであるという回答をもらったものと、受け取ることにしてあきらめた。もっとも、その後、モーリス・ベジャール氏は二〇〇七年一月二二日に亡くなられてしまったが。

#### (5) ミュージカルに描かれたエリーザベト

最後に、二〇世紀の終わりに、ヨーロッパならびに日本で何回か上演されていたミュージカル「エリーザベト」を取り上げる。

その要点を二〇〇〇年に帝国劇場で公演された際に発行されたプログラムのデータを参考に紹介すると、このミュージカルは、ドイツ生まれのミヒャエル・クンツェによる脚本・歌詞と、ハンガリー生まれのジルベスター・レーヴァイの音楽によって制作され、一九九二年九月三日にヴィーンのアター・

アン・デア・ヴィーン（劇場）で初演され、途中一部中断があったものの一九九八年の四月の時点で一二七八回を数え約一三〇万人を動員し、ロングランの金字塔を打ち立てた作品である。

その後、ハンガリー、オランダ、スウェーデン、ドイツでも上演されたようである。日本では、一九九六年に三本、一九九七年に一本、一九九八年に一本、一九九九年に一本と宝塚歌劇団の雪組・星組・宙組の三組で上演され、二〇〇〇年には東宝により帝国劇場でも上演されている。宝塚歌劇団及び東宝でそれ以降も上演されているがそれ以上は追わない。

日本で何人の観客が動員されたか筆者には不明であるが、これら二つの日本国内での公演によって、エリーザベトの日本における知名度が嫌がうえでも高まったことは否定できない。

筆者は、前述のオペレッタ「シシー」を見るために一九九二年にオーストリアを訪れた際に、初演の第三日目の九月五日に公演を併せて見る機会を得た。次いで一九九三年だったか、ヴィーンを訪れた際に同公演をもう一度見ている。日本の公演としては、宝塚では一九九六年六月一七日の雪組の第二回目の公演を、東宝では二〇〇〇年六月一六日の公演をも見てきた。

筆者の見た感じでは、同じ原作によるミュージカルであるが、三者三様でそれぞれ趣が異なるように思う。ヴィーンでの公演は舞台装置も前衛的でハプスブルク王家をシニカルに描く手法が前面に出ているのに対し、宝塚の公演は観客対象が女性であることを意識してか甘くいささかロマンチックに描かれている。また、東宝の演出は、舞台装置なども併せて評すると当時のオーストリアの歴史あるいは政治的背景をかなり意識して、それを観客に理解してもらおうと意図しているように見えた。前者と後二

者を比較してみると、前者が当時のオーストリアやハプスブルク王家などの歴史的な背景について、ヨーロッパ人である観客がある程度の子備知識があるということとを前提としているのに対して、後二者は日本人である観客がそれらの予備知識がほとんどないことを意識して、解説的な要素をかなり取り込んでいるように見受けられた。

このミュージカルではルケーニという刺客は準主役であるが、実際にはエリーザベトの生涯の最後の日にたまたまエリーザベトを刺殺したというだけで、エリーザベトの人生にとっては重要な人物ではない。また、トート（ドイツ語で「死」の意）という死神も、ハプスブルク家の運命とエリーザベトの運命を左右する主役として描かれているが、死を願望していたとも見られているエリーザベトにつきまとう、目に見えないメフィストフェレス的な存在としては首肯できるものの、あまりにも前面に出すぎていて、筆者にとっては好ましい内容ではない。もともと、このトートが存在しなければこのミュージカルは成立しないことになるのでやむを得ないものであるが。

このミュージカルは、ヨーロッパならびに日本でかなりの観客数を動員したことになるが、筆者からみれば、シルヴィ・ギエムが上述しているように、ロミー・シュナイダー主演によるエリーザベト一連の映画が、エリーザベトに対する不十分な（敢えて誤ったとは言うまい）先入観をヨーロッパの観客に植えつけたことと同じような結果を、このミュージカルの観客に植えつけたことになるのではないかと思うと、誠に残念な作品である。

日本公演はいずれも小池修一郎の潤色及び演出による。小池はこれら二つのミュージカルの宝塚版の

小説化として「エリザベート（愛と死の輪舞）」を発刊（巻末の出典及び参考文献参照）している。

その「あとがき」の中で、この本の執筆に当たって、原作の表現を捉えきれず、変更せざるを得ない部分について原作者のクンツェ氏に相談したところ、「これはあくまで自分のファンタジーであり、あなたはあなたの想像力で膨らませるように」と励ましてもらった。したがって、舞台とこの著作と相違点があれば、それは小池のファンタジーであると、述べている。

ヴィーン版の原作と日本版の潤色版とは演出が微妙に異なっていること、及び宝塚版の小説化とでも相違は見られるというものの、このミュージカルのあらずじを、筆者があれこれ要約するつもりはないので、お知りになりたい方は前述の著作を読んでいただくとしよう。

このミュージカルの大成功は、歌が入る楽しさのほか、エリーザベートの行動の「特異性」を揶揄し、ロミー・シュナイダーの映画と同じように、ヴィーン宮廷のきらびやかさに惹かれた観客が、ヨーロッパでも、日本でも、一種の郷愁のように感じるからであろう。

基本的な事実はともかく、それを膨らませた脚本には、エリーザベートの本当の生涯を知るのには不十分である。観客は「ミュージカル」として楽しめばよいのである。

その書は書として、公演について、いずれも筆者が見たときのものではないが、たまたま著者が切り抜きしておいた朝日新聞掲載の書評を取り上げてみたい。長いので要点のみ。カッコ内は引用部分。

宝塚歌劇月組の『エリザベート』（二〇〇五年四月三〇日の評論家天野道映氏）は、見出しが「ジェンダー巡り新時代開く」とある。主役のトートは男性を表しているが、タイトルロールは女性のエリー

ザベトであるため、「真の主役は自由のために闘う女性である」とした。

「宝塚の文化風土では、主演男役の権威は絶対的なので、トートは男性社会の象徴として登場する。その時皇后は、自由な気質という個人的動機を越え、男社会の制度それ自体に抗議する者」として捉えている。しかし、「宝塚は様式として主演男役を必要とするので、トートをふくらませて、皇后と連れ舞を舞わせた」。

それが見出しにあるように「ジェンダー（社会的な性の役割）をめぐるドラマ」にして、「演出家は宝塚に新しい時代を開いた」と評した。ただし、「エリザベトは『ベルサイユのばら』のオスカルの後継者である」ものの、「彼女はもはや男装しない」と。

そこには筆者の気がつかなかった宝塚の事情があることが分かった。

それに対して帝国劇場の『エリザベト』（掲載日は筆者の記録漏れのため不明であるが、評論家山口宏子氏）は、「甘さ削ぎ落とし物語鮮明に」との見出しで、まず、「自由を渴望する美しい皇后と、彼女を愛する死の帝王トートを軸に、滅亡間近いハプスブルク帝国の運命をからめたドラマチックな作品」と捉え、前二度の公演との比較で論じている。

出演者の演技に触れて、「なにより一路真輝が演じるエリザベトの輪郭が大きくなり、くつきりした。束縛だらけの宮廷で、苦しみながらも、したたかに自我を貫く女性を、強さと安定感の増した歌と演技で描き出す」とともに、トート役の内野聖陽は、「人間の女を愛するという禁忌を犯した死の帝王の甘美な思いとおののき、彼女を死へと手招きしつつ、生きている姿をいとおしむ矛盾した内面を、官能的に見せる」と、いずれも評価している。

## 参考(4) 映画に描かれたシシー

### (1) 第一次世界大戦後の映画

「参考(3)」で取り上げた小冊子(注1)によると、まず第一次世界大戦終了の翌年の一九一九年に、オーストリア映画「マイヤーリング」が制作されたとある。第一次世界大戦の終了とともに支配者としてのハプスブルク王家も崩壊しており、帝国から共和国に政治体制が移行したことからか、検閲により上演禁止と記されており、当時のフィルムも残されておらず、詳しい資料に欠けているため、エリーザベト役の俳優が登場したかどうか不明である。

次いで、一九二〇年にドイツで「皇妃エリーザベト」、一九二二年に同じドイツで「ルートヴィヒ二世」以下、第二次世界大戦前の一九三一年までに、九本の映画が制作されているとある。ただし、日本には公開されていないことと、筆者の手許には上述の小冊子以上の資料がないので詳細はわからない。ある著作では、一九二〇年に制作された映画の一場面を、スチール写真として使用している例があるので、現地には現在でもその映画が存在しているのか、それともスチール写真だけが残されていて貸出していたのかも知れない。本書ではそこまで追いかけていない。

### (2) 「つたかたの恋」 Mayerling (一九三五年)

日本人にとっては、一九三五年の制作で、戦後の一九四六年に日本で初公開されたフランス映画「う

たかたの恋」(原題は「マイヤーリング」)。アナトール・リトバク監督)が最初の映画といってよいだろう。この映画はその後もテレビで放映されたり、ビデオやDVDに録画され販売されているので、ご覧になった方も多いことと思う。

可憐なマリイ・ヴェッセラ役にダニエル・ダリユー、ルードルフ皇太子役にシャルル・ボワイエ。しかしこの映画では、ガブリエル・ドルジアが演じる王妃エリーザベトは、プログラムの配役リストにも掲載されないほど目立たない存在である。もともとは舞台女優であり、映画出演を拒んできた遅咲きの映画女優で、この作品が初出演から三本目の作品のようである。

前述のバレエ「マイヤーリング」の日本公演のプログラムに寄稿した映画評論家の小森和子は、シャルル・ボワイエを「気品あるセクシーさ」、ダニエル・ダリユーを「かれんに美しい」と表現し、作品を「激しいけれど、それは水面に浮かぶ泡のごとくにも儂い宿命の恋」として評している。

この映画を観た筆者の感想では、物語が歴史的事実に忠実であったかどうかについては既に本論で述べているので詮索はしないが、悲恋として描いており、白黒の画面であり、戦前の映画ということでもあるためか、また、現在の映画のように画面における人物その他の輪郭がくっきりとしていないことも手伝ってか、白痴美女優ともまた一方ではお転婆娘ともいわれているダニエル・ダリユーの清楚で儂い姿が印象的であった。

### (3) 「晩鐘」 Kronprinz Rudolfs letzte Liebe (一九五六年)

同じ内容の映画はその後も制作されている。第二番目は一九五六年に制作され、日本でも一九五八年



に公開されたオーストリア映画の「晩鐘」（原題は「皇太子ルードルフの最後の恋」。監督はルードルフ・ユージェルト）である。皇妃エリーザベト役は往年の名女優リル・ダゴファー。マリー・ヴェッセラ役はクリステイアーネ・ヘルビガー、ルードルフ皇太子役はルードルフ・プラックである。

筆者は当時東京都内で上映されていたことは知っていたが、残念ながらこの作品の日本公開では見逃してしまった。その後、オーストリアで入手した同映画のビデオを見る限りでは、若干の解釈の違いは別として、物語は前出の作品と基本的には同じである。

この映画は、戦前の名画であるあの「会議は踊る」に妖艶な美貌で出演した女優リル・ダゴファーを知る老映画ファンは別として、あまり日本人に馴染みの薄いキャストのためか、ご存じの方は少ないと思われる。

キネマ旬報社の『ヨーロッパ映画作品全集』によると、「皇太子ルードルフは政略結婚の犠牲者で生活は荒れ、男爵の娘メリーと盲目的な愛に陥り、八方ふさがりの状態で、一八八九年一月、雪のマイヤーリングの狩猟館で心中する」と解説している。

また、同全集では、男爵令嬢を「メリー・ヴェッセラ」としているが、英語読みではこのような発音の仕方もあるが、ドイツ語ではマリーが正しい。また、クリステイアーネ・H・ヴェッセリ（ビデオテープの配役上では、クリステイアーネ・ヘルビガー）の記述については、一九三四年に「たそがれの維納」（原題は Maskerade。「仮装」「仮面舞踏会」の意）で主役デビューし、日本でもファンの多かった女優パウラ・ヴェッセリが、同じ映画俳優のアッティラ・ヘルビガーと結婚して設けた子であるとすれば、ミドルネームのHが父親のヘルビガーの姓で、ヴェッセリが母親のヴェッセリの姓であると推

測できる。同全集に記載のルドルフ・ブラックはブラックの誤りである。

(4) 「うたかたの恋」Mayering (一九六九年)

上述の『ヨーロッパ映画作品全集』によると、第三番目としては、オーストリアで作成された「マイエルリングの秘密」とあるが、制作年も不明でありまた日本未公開であるため、筆者もそのヴィデオ化の有無については知らないこともあり、説明を省略せざるを得ない。さらに、第四番目としては、一九六九年制作で、同年に日本公開のフランス映画「うたかたの恋」(原題は「マイヤーリング」)。監督はテレンス・ヤング)となる。この映画はご覧になった方も多いことと思う。マリー・ヴェッセラ役はカトリーヌ・ドヌーヴ、ルードルフ皇太子役はオマー・シャリフ、皇妃エリーザベト役はエヴァ・ガードナーである。

映画評論家の小森和子が上述し寄稿したバレエのプログラムにおける評によると、スペクタクルが得意な監督のこの作品は、「悲恋の密度は薄められ、(主演の)ドヌーヴの玲瓏美も溶けん恋の情炎に殉ずる情熱まではほど遠し、の感で」とある。またキャストについても、カトリーヌ・ドヌーヴを「たしかにういいういしく気品もあつたけど、情熱におほれる、といった情緒といとしさはイマイチ」と評しているが、もう一人の主演者であるオマー・シャリフの演技については特に触れていない。それに対して、準主役のエヴァ・ガードナーについては、「貫祿も魅力もたつぷり」と述べている。

筆者の感想をいえば、ストーリーは戦前の「うたかたの恋」と同様に悲恋物語ではあるものの、アメリカの観客を意識したせい、小森和子と同様、たしかに儂い「うたかた」としての味わいに欠けるこ

とは首肯できる。皇妃エリーザベト役のエヴァ・ガードナーは、妖艶なタイプの女優としてその魅力には惹かれるものの、本来のエリーザベトは痩せ型で、その魅力はエヴァ・ガードナーのそれと異なるものである。因みに、エリーザベトも、エヴァ・ガードナーも、奇しくも誕生日は同じ二月二四日である。ガードナーは一九九〇年に六七歳で没している。

(5) 「双頭の鷲」 *L'Aigle à deux Têtes* (一九四七年)

一九四七年に制作されたフランス映画「双頭の鷲」(原題も同じ。監督はジャン・コクトー)は、物語は直接はエリーザベトの生涯とは関係ないが、皇妃エリーザベトに擬した映画として、既述の小冊子にも一連の映画の中の一つとして名を連ねている。日本公開は一九五三年で、市販のビデオも作製されているのでご覧になった方も多いと思う。女王役はエドヴィージュ・フィエール、相手の男性役はジャン・マレー。現在では絶版かも知れないが、この映画のビデオも市販されていた。

双頭の鷲とはハプスブルク王家の紋章である。あらずじは、夫を暗殺された女王エリザベトが国を治めているが、警察に追われた無政府主義者スタニスラスが女王の部屋に飛び込んでくる。女王はスタニスラスが亡夫に似ていることから部屋にかくまい愛してしまふ。スタニスラスも女王を殺す使命を忘れ、女王を愛するようになり、人民に愛される女王にしたいと願うようになる。女王を亡き者にしようとする企む警視総監は、城内にいることを突き止めたスタニスラスに、女王を殺すか逮捕されるかの取り引きをする。女王暗殺を迫られたスタニスラスは女王手持ちの毒薬を盗み自ら服毒するが、先に死ぬことをなじられ、女王から愛していないといわれて怒りの余り女王を刺して、二人は共に息絶える。実は、

スタニスラスが死を免れないことを知った女王は、愛するスタニスラスに刺されることを望んだのだ。た。

これは、前述のジャン・コクトーの戯曲を本人が映画化し監督したものである。物語全体としてはシシーの生涯には関係がない。筆者が一九五三年七月五日と鑑賞日を書き込みしたときの有楽座のプログラムの解説（筆者不明）から抜き書きしてみると、

「美女と野獣」以来、コクトーの映画はすべて古典に取材して、そのロマンチックな、永遠性と運命観を、新しい知性と話術によって大衆の中によりみがえらせることであった。

「双頭の鷲」はユゴオ原作の「ルイ・ブラス」に似通っているが、はるかに独創的であり且つ新しい思想を持つ作品である。筋の運びそのものは非常に単純で、ギリシア古典悲劇の復活を見るような感じがするが、台詞はコクトー一流の奇智にあふれ、人物の心理は、直截、近代的に表現されている。……

とあり、以下は割愛したが、ここでは皇妃エリーザベトとの関連については一言も述べていない。また同プログラムに寄せた映画評論家の山本恭子の「双頭の鷲について」の所感によると、

昔、バルザックの「カトリイヌ・ド・メヂチス」を愛読しましたが、私の狭い読書範囲では、中世の宮廷陰謀物語としてこれほど面白い小説はちよつと他に類がないように感じました。……

と、自分の読んだ小説を引き合いに出しており、そのあともその小説と関連させて述べているが、皇妃エリーザベトについてはここでも一言も触れていない。

この稿を執筆するに当たって、手許にある「双頭の鷲」のビデオテープをもう一度見直したが、皇妃エリーザベトとの関連は見当たらない。それどころか、原作者のジャン・コクトーは、映画の巻頭の日本語による字幕で次のように述べている。

「双頭の鷲」は史実ではなく虚構であり、すべて作者の創作によるものである。何か思い当たる事があつても、それと混同なさらぬように

女王名がエリーザベト（フランス語ではこのように書くのが正しいようだ）とエリーザベトと同じ名前であること、無政府主義者が登場したこと、エリーザベトが死を願望していたこと、などが物語としては共通するものの、実際のエリーザベトは、暗殺されるまで面識もなかった無政府主義者ルケーニを愛していることは皆無であり、また「彼に」殺されたいと願っていたこともありえない。

筆者が見たところでは、画面の上ではエリーザベトの美しさと、エリーザベトに似せた髪飾りやコスチューム、室内でブランコに乗る、雷が鳴り嵐のような夜に、女王に「このような時こそ馬で山を駆け降りたい」との台詞を言わせるなど、エリーザベトと共通するところがある。それらのところからヨーロッパの観客はそれを意識して、さらに上述の小冊子の執筆者は、エリーザベトと関係ある作品の一つ

として取り上げているのであろう。

しかし、コクトーがように述べていることは、コクトーがエリーザベトの生涯を念頭に意識してこの作品を創作し、それを誤解される可能性が高いことをも意識したからこそ、このような前言を敢えて挿入したのではないだろうか。

映画評論家も含めて、日本ではともかくそのような見方はしていないようだ。その詮索はさておき、筆者にとっては、この映画は、主役で名女優のエドヴィージュ・フィエールは、当時三九歳か四〇歳になつていたものの年齢を感じさせないその美しさと、悲劇であるがロマンチックで絵画的な画面のこの作品は非常に好きなものの一つである。

#### (6) 「シシー」三部作（一九五五〜一九五七年）

第一部 「プリンセス・シシー」 Sissi（一九五五年）

第二部 「シシー〈若き皇妃〉」 Sissi 〈Die junge Kaiserin〉（一九五六年）

第三部 「シシー〈皇妃運命の年〉」 Sissi 〈Schicksalsjahr einer Kaiserin〉（一九五七年）

しかし、皇妃エリーザベトを主役にした映画に関して何といつても特筆すべきは、一九五五年にオーストリアで制作（キネマ旬報の「ヨーロッパ映画作品全集」によると、オーストリア\*エルマ/西独\*ヘルツォーク\*映配55-59とあるが、封切りされたニュー東宝のプログラムによると、西独エルマ・フアルプフィルム作品とある）され、一九五九年にその第一部作が日本で初公開された「シシー」シリーズ（ただし、第二部及び第三部は日本未公開）であろう。

第一部作の「プリンセス・シシー」（原題は「シシー」。副題がついていないことから、最初は三部作の予定ではなかったようである）は、エリーザベトの生い立ちから、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世との結婚直後までのストーリーで、日本では、日本初公開の一九五九年の同じ年に、ちょうどタイミングよく行われた当時の皇太子（現天皇）のご成婚ブームにあやかっただけでもあった。

さらに細かく言えば、現在の天皇の成婚は一九五九年四月一日、それに対してエリーザベトとフランツ・ヨーゼフとの結婚は一八五四年四月二四日であり、一〇五年の隔たりがある。本書執筆中の二〇〇九年は天皇の結婚五〇周年に当たり、四月には新聞やテレビで特集したことをご記憶の読者も多いと思う。さらには、東宝がそれにあやかっただけか、五〇年前のこの映画のDVDを発売している。

もう一つ付け加えると、これまたタイミングよく二〇〇九年に、LaLa TVが、有線放送JCNテレビの放送を通じて、二月に「シシー」三部作を日本語の字幕付きでいずれも初放送を行っている。とくに、第二部及び第三部は、映画に先駆けてテレビによる日本初公開となったので、ご覧になった方もおられると思う。その後、第2部、第3部のDVDも発売されているようである。

さて本題に戻ると、美しくかつ初々しい主人公のシシーを演じたのはロミー・シュナイダーで、皇帝フランツ・ヨーゼフ役は、世界的に有名なドイツの指揮者故カール・ベームの息子、カールハインツ・ベームである。母親のルドヴィカ公妃役は、ロミーの実の母親であるマгда・シュナイダー。

当時の一九五九年八月月上旬号のキネマ旬報では、映画評論家の山本恭子は、「この第一部を見ただけでは、作品的には至極安易なものというほかなく」、興行価値は「ご成婚ブームに乗せての封切りだっ

たが、ドイツ映画はまだなじみが薄く期待はずれ。封切成績も凡調」としている。

しかしその一方で、「ウイーン華やかなりしころの面影を画面に再現しようというのが」作成意図のようであるとし、「ロミイ・シュナイダーの新鮮な魅力」とカルルハインツ・ベームの「風貌も演技も仲々すぐれてよい味をみせて」おり、「舞踏会から結婚式へと、華やかな場面が展開して行って、見た目をたのしませてくれる」画面の楽しさも評している。

日本の映画評論家の辛口の批評に対して、ヨーロッパでは、観客動員数が、第一部が六五〇万人、第二部が六四〇万人、第三部が五八〇万人という大好評であった。

特に独逸では、敗戦からまだ約一〇年しか経っていない厳しい時代にあつて、ナチス時代を越えた古きよきオーストリア帝国の絢爛たる時代絵巻への憧憬と、それにシシーの破格的な人生に対する興味、さらにはロミイ・シュナイダーの清純さとシシーの美しさを重ね合わせるほどの人気で、この作品でロミイ・シュナイダーは一躍有名な女優となった。

この人気はフランス、スペイン、ギリシアなどに波及し、さらには、アメリカ合衆国でも三部作を一本に縮めて大当たりをとっている。

ただし、シルヴィイ・ギエムも述べているように、果たして観客がシシーの真の姿を捉えているとは言い難い。そこに娯楽映画の限界がある。

筆者の感想としては、当時は若かったせいもあるが、ロミイ・シュナイダーの美しさに魅せられた。



そのとき既にシシーの悲劇的な生涯を知っていたが、若者向きの一つの「青春映画」には違いないものの、汚れもない初々しい処女としてのシシーがドナオ川を船下りする幸せな情景に、シシーとロミー・シュナイダーの双方の美貌を重ね合わせて満足したものであった。

この時点では、筆者はまだ、のちの一九六四年にヴィーンの友人から贈られたコルテイの著書「エリーザベト」を読む前であり、また一九六八年に初めてヴィーンを訪れるまでヴィンターハルターの有名なシシーの肖像画も見る前でもあった。したがって、津田正夫の著作（「あとがき」参照）によるシシー像に、ヴィジュアルなシシーを加える貴重な参考映画でもあった。

後年、ヴァツハオ溪谷をレンタカーで巡り、崖の上に建つメルク修道院を眺めたとき、往時を彷彿することができた。また、ヌストルフへも市電で訪れたが、こちらはその面影はなかった。

日本未公開の第二部と第三部のドイツ語版のビデオテープ（PAL方式）を持っている筆者が、それらを見た感想をいくつか述べてみたい。

第二部作の「シシー〈若き皇妃〉」は、出産からハンガリーとの二重帝国成立までを描いている。しかし、行われたことの年代の順序が入れ代わっていたり、姑であるゾフィー大公妃との確執が十分描かれていなかったりしているが、第一作の正当たりを受けた続編としては、甘くかつ豪華な内容にしくはならない青春映画の限界なのである。

第三部作「シシー〈皇妃運命の年〉」は、乗馬と狩猟に明け暮れから、アンドラーシとの恋愛関係的な描写、療養、ギリシアへの旅、そして最後はイタリアのミラノとヴェネツィアで不本意な敵意的対応

を受けるが、サンマルコ広場でのギーゼラとの再会のいじらしさでヴェネツィア市民の笑みを誘うところで幕となっている。ここでも年代が大幅に入れ代わっている。

三部作で合計五時間一八分の長さになるが、その生涯のすべてを描くとしたら、この調子で行くとあと五本近くの続編が必要となろう。このシリーズの成功に気を良くした映画会社は、ロミー・シュナイダーをエリーザベト役にした映画のさらなる続編の制作を企画したが、これ以上にお姫様役の映画を撮ることを嫌ったロミー・シュナイダーに断られ、実現しなかった。

実人生ではエリーザベトは、このあとさすらいの旅を続けることになるのであるが、この青春映画は続編が可能であったとしても、果たしてエリーザベトの精神的な内面を描き切れることができたのだろうか。

興行的に考えると、おそらくそうはしなかったのではないだろうか。瑣末なことになるが、親衛隊長が道化的に振る舞うシーンが三作全編を通じて何回も出てくるが、下手な漫才師が無理に笑わせようとするようなわざとらしさが見苦しい。これは、一部のドイツ映画やオーストリア映画にみられる、子供だましのような稚拙さの表れであろう。

序章でのべたように、一九九八年のエリーザベト没後百年祭に、この映画でロミー・シュナイダーが着用した豪華な衣装の何点かが、シェーンブルン宮殿の会場に展示されていた。

(7) 「ルートヴィヒ・神々の黄昏」 Ludwig (一九七二年)

そのほか、一九七二年に、エリーザベトと親しい関係にあるルートヴィヒ二世を主役とした独・仏・

伊三国の合作映画「ルートヴィヒ・神々の黄昏」（原題は「ルートヴィヒ」）。監督は巨匠ルキノ・ヴィスコンティ）が制作され、一九八〇年に日本でも公開されている。主役のルートヴィヒ二世はヘルムート・ベルガーで、皇妃エリーザベト役には映画「シシー」で主役の若き皇妃を演じたロミー・シュナイダーが中年になったエリーザベト役として出演している。

岩波ホールで日本で初公開された時のプログラムからいくつか引用させてもらう。歴史的事実などについては本論で既述してあるので、作品としてのその取り上げ方について「解説」（筆者不明）から引用させてもらう。引用文は英語読みであるので、ヘルムート・ベルガーはヘルムート・バーガーに、ルートヴィヒ二世はルートヴィヒ二世となっている。

「私は絶えず際立った人物に惹かれてきた。そして、私は常にドイツの歴史と文化に特別な関心を抱きつづけてきた。従って、ワグナーの賛美者、ピスマルクの支持者となり、最後には臣下に侮られ、全く孤独で、精神異常を宣告された若く強健で、途方もなく美しいばかりの王、バイエルンのルートヴィヒ二世を私が選んだのは、全く必然なことだった。彼は四十歳の時、ミステリアスな溺死を遂げた。私の考えでは、ヘルムート・バーガー以上にこの役を理解して演じられる者は誰もいないだろう」とヴィスコンティ監督は語っている。

ここで登場するエリーザベトについては、同プログラムの「物語」（筆者不明）では、

……：ルードヴィヒは（中略）従姉のエリザベートに再会する。ルードヴィヒはオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの妃である、この勝気で奔放な、年上の従姉に魅せられていた。……：慕われることを知っていたエリザベートは、この自己逃避的なルードヴィヒに、王族としての宿命に耐え、夢を捨てて自分の現実を創りだすようさとす。彼女は後年アナキストに暗殺されるのだが、その運命さえ既に受け入れたかのように毅然としていた。

またエリーザベートについて同じプログラムで、映画評論家の白井佳夫は、

白馬にのったロミー・シュナイダーの勝気で美しい従姉エリザベートと、ルードヴィヒとの、ひと気のないサーカスのテント小屋の中での密かな再会と、広大な雪景の中での語らい。

さらに同じプログラムで、映画評論家の淀川長治は次のように論じている。

……：ルードヴィヒは十六歳でワグナーの「ローエングリン」に傾倒し即位のあとはワグナーのパトロンになった。ワグナーはこの国王からむさぼり取った。しかし、ワグナーを愛しつづけたのはこの三十三歳年上のワグナーにルードヴィヒは〈父〉を求めたのではあるまいか。そして八歳年上のフランツ・ヨーゼフ皇帝の妃たるエリザベートには〈姉〉を求めたのではあるまいか。

筆者の感想としては、主役のルートヴィヒ二世についてヘルムート・ベルガーは上手に演じている。一方のロミー・シュナイダー演じるエリーザベトは出番が少ないが、恋愛関係を思わせぶりの場面が出てきているものの、史実に近い描き方をされているように思えるのである。

## (8) その他の映画

上述の小冊子では、エリーザベトが登場する映画として、一九一九年の「マイヤーリング」から一九九〇年までの間に、オーストリアやドイツのほかに、フランス、イタリア、ハンガリー、アメリカなどの国々の合作映画やテレビ用映画を含めて、三十二本の映画を紹介している。

マイヤーリングあるいはルドルフ皇太子、皇妃エリーザベト、ルートヴィヒ二世などを主題として再映画化されたものが大半であるが、いかに多いかということが分かる。

そのほとんどは日本に公開されていないので、個々についてはここでは触れることができないが、それらをタイトルから主題別に取り上げてみると、皇妃エリーザベトのもの映画は一三本で、その内訳はドイツ映画三本（うち一九三二年の作品ではリル・ダゴファーがエリーザベト役で出演している）、オーストリア映画七本（うち最も古いものと思われるが、制作年代が不明の数分間の影絵映画が一本、「シシー」の三部作三本、テレビ映画二本を含む）、ハンガリー映画一本、フランス映画一本（「双頭の鷲」）、イタリア映画でテレビ用が一本（フランスの「双頭の鷲」のリメイク版）である。

次いで、マイヤーリング関係は七本で、オーストリア映画三本（うち、年代が確定して一番古い一九一九年のものも含む）、フランス映画二本、英・仏合作映画一本、オーストリア・ドイツ・ハンガリー

合作映画のテレビ映画一本となっている。

三番目のルートヴィヒ二世に関するものは六本で、オーストリア映画二本、ドイツ映画三本、イタリア・フランス・ドイツ合作映画一本（ヴィスコンティの作品で、日本ではイタリア・西ドイツ合作となっている）が挙げられる。

そのほか、題名からだけでは内容は分からないが、ハプスブルク王家の悲劇を扱ったドイツ映画一本（一九二八年のこの作品では、のちにドイツの女性映画監督となり、ベルリン・オリンピックの記録映画の監督として一躍有名となったレニ・リーフェンシュタールが出演しているが、まだこのころは女優としては端役だったためか筆者の手許にある彼女に関する何冊かの資料では何も言及していない）、「皇帝円舞曲」が四本（ドイツ映画一本。そのほかに、原題で *Königs-walzer* とあるドイツ映画が一九三五年ものと一九五五年ものと二本ある。うち後者は前者のリメイク版である。直訳すると「国王円舞曲」となるが、フランス映画の *Valse Royale*（「皇帝円舞曲」の意）は前者のフランス版となっている。ドイツ版がなぜ「皇帝」でなく「国王」との題名となっているか分からないが、同じ「皇帝円舞曲」と扱って差し支えないであろう。

さらにオーストリア映画で「二千年四月一日」（*Erster April* 2000）一本と、ドイツ映画で「その日のあと」（*Der Tag danach*）とつうテレビ用映画一本とが挙げられている。原題だけでは内容がわからないが、これらの映画にもエリーザベトが登場しているようである。

以上は、一九九三年に取り上げた作品であるので、それ以降に新しく上映乃至放映されたものも数多くあるのではないか。ドイツだったかオーストリアだったかも記憶にないが、筆者がたまたま宿泊し

たホテルでもテレビの週間番組表で見つけた（宿泊日とは別の日）こともあった。しかし、筆者にはそれらを追いかける余力もそのつもりもない。

結論として。

ロミー・シュナイダー主演の映画やマイヤーリングを主題とした映画が、一部の限られたDVD所有者によって私的に鑑賞される機会はあっても、リメイク版を含めて、映画館で再上映されることはまずないであろう。

それに対して、バレエは上演の機会は少ないであろうし、また、オペレッタの公演は日本では皆無と思われるが、ミュージカルのみは、宝塚歌劇を中心に再演されることは十分あり得るし、新しい観客を増やすことによつて、エリーザベトに対する関心は継続されるであろう。

それはさらに、ヴィーンやブダペストをはじめ、バート・イシユル、ゲデレーへの観光客が増えることに繋がって行くように思えるのである。

まさに、「シシーは蘇った!!!」。

そのことから、ミュージカル「エリーザベト」に感謝しなければならないのではないか。誰が?!

## Le souvenir de Sissi revit au Beau-Rivage

Un siècle après sa mort, l'impératrice fascine à nouveau, le temps d'une exposition, dans le palace où elle vécut ses derniers jours.



sculpteur retrouve l'atmosphère de la cour austro-hongroise, sans oublier d'évoquer l'assassinat de l'impératrice, en anarchiste italien qui vit le symbole de la monarchie.

Sissi, c'est un mythe qui avait besoin d'être révisé, s'exclame Jacques Cr, directeur de l'hôtel Beau-Rivage et président de l'association qui s'y tient actuellement. Depuis qu'elle fut poitée le 10 septembre 1889 e quai du Mont-Blanc, cette intruse hors normes a eu le temps d'être déshabillée et déifiée. L'exposition se propose de rendre justice à femmes en robes avec son, qui ne fut pas que la dé décolorée qu'en a fait le écran. a milieu d'une riche collection d'effets personnels et de nits recréant l'atmosphère

de la cour austro-hongroise, les photos et écrits de l'impératrice permettent au visiteur de glisser un oeil dans son jardin secret. Et on découvre une femme intelligente, assoiffée de liberté et d'indépendance, aux rêves imbibés d'un romantisme noir, prisonnière de son siècle et de son rang.

### Assassin anarchiste

Une douzième salle est consacrée à l'assassin, pauvre diable dont la société italienne fit un anarchiste et qui visait le symbole de la monarchie lorsqu'il endossa son potopon dans le cœur d'Elisabeth d'Autriche. Ironie du sort, ses Mémoires

présentent un parallélisme surprenant avec les écrits de l'impératrice, qui les légua à la Confédération en demandant que les bénéfices de leur vente soient versés aux descendants des victimes de l'Empire austro-hongrois.

### Nombreux visiteurs

Plus de 3500 visiteurs ont déjà admiré l'exposition, la plus complète jusqu'à ce jour, avec des pièces provenant de Budapest, Vienne, Munich et Paris. Celle-ci est ouverte tous les jours de 10 h à 18 h jusqu'au 13 septembre. A voir aussi au Beau-Rivage, des sculptures du Britannique Philip Jackson, qui

a été choisi pour créer le statue de Sissi qui sera installée bientôt sur le quai du Mont-Blanc.

Le programme des manifestations organisées pour l'anniversaire de la mort de Sissi est riche: outre l'inauguration de cette statue, le 9 septembre à la retraite des Alpes (gratuit) en présence de l'archiduc et de l'archiduchesse Margarete d'Autriche ainsi que du couple royal de Roumanie, il prévoit un colloque qui aura lieu le 10 septembre. Intitulé «Sissi, beauté et tragédie», il fera intervenir des spécialistes de la vie de l'impératrice et de son époque. Renseignements et inscriptions au 716 08 17. A. Th. □

## Les Verts champions | RCG: haro sur la «nolitique»

(ボー・リヴァージュ・ホテルでの展示を報じた新聞〈フランス語〉。新聞の見出しは、「シシーの思い出、ボー・リヴァージュで蘇る」。右の男性は筆者)



## あとがき

筆者のエリーザベトとの最初の出会いは、一九五五年一月二十四日に購入した津田正夫著『ウィーン物語』（河出新書）を読んだことがきっかけであった。そのなかの「エリザベト皇后」の一節の記述が、筆者をして半世紀以上も、エリーザベトにのめり込ませることになった、宿命の書ともいえるべきものである。

筆者はこの日ヴィーン少年合唱団の公演を聴きに行くことにしていた。会社勤め以前からドイツやオーストリアに興味のあった筆者は、少し幼稚っぽい気もしなくはなかったが、日本と両国との文化交流がまだほとんどなかった当時としては、恰好の音楽鑑賞のつもりであった。因みに、このときのヴィーン少年合唱団は日本初公演で、一月二十二日から翌年二月六日まで全国各地に公演したが、筆者が鑑賞した二四日はクリスマス公演として、他のプログラムとは異なった演目であった。

そこでオーストリアに関係ある何か記念の本をと、たしか東京日本橋の丸善であったと思うが、探していたところ、たまたま目に止まったのがこの本である。奥付によるとこの初版本の発行日が購入日の翌日の一月二十五日となっていた（出版業界ではそのようなことは日常茶飯事である）できたてほやほやの本であったこと、のちに知ったことになるが、購入した日が奇しくもエリーザベト生誕一一八年後の誕生日と同日であることなど、因縁深いというほかない。

筆者が何故、そんなにまでエリーザベトに惹かれ、その後、会社の仕事ではヴィーン観光でホープフ

ルクとシェーンブルン宮殿を四回訪れたほかに、私的にエリーザベトの足跡をたどるために、ヴィーンに八回も訪れたのか、そのルーツを『ウィーン物語』からその一部を引用（一二七ページ）することに、説明したい。

ウィーンの王宮で初めてエリザベト皇后の肖像画をみた時、外国の皇后にこんな美しい人がいたことを初めて知った。流石当時欧州で最も美しい皇后といわれただけに、日本式に言えば丈なす黒髪といたい光沢のある栗色の長い髪の毛は金色の星がついた薄いヴェールで包まれ、ギリシア型と思われる理知的な額とノーブルな鼻は、美しい栗色の眉と睫毛の下の蠱惑的な眼と唇と共に何ともいえぬ優美な面影をみせていた。ところがこの美貌の皇后が華やかな婚儀を終えるや否や直ちに夫君との性格的な不和、ウィーンの王宮の空気になじみ得ない儘に孤独を求めて常に国外を旅行し、終生淋しい生活を送って終に兇刃に倒れたという悲運の主人公だったとは想像出来ないことである。

次いで筆者は、一九五九年に、序章で述べたロミー・シュナイダー主演による映画「プリンセス・シシー」を見て、エリーザベトに対する関心が深まった。ただし、津田正夫氏の本を読み、この映画を見ただけでは、エリーザベトに対する理解はもちろん十分ではない。

筆者自身は、一九六二年に、ある業界のヨーロッパ視察旅行の添乗員として、初の海外旅行をした。しかし、その旅程にはヴィーンは含まれていなかった。さらに、その二年後の一九六四年に海外旅行が

自由化されても、旅行会社社員が長期の休暇をとって私費で海外旅行する（現在のように一週間や一〇日でヨーロッパ旅行するような時代ではなかった）ことも許される状態ではなかった。

そこで、それ以前から筆者が会員となっていた日墮協会（日本人と在日オーストリア人との間の友好団体）の斡旋により紹介された、ヴィーン在住のオーストリア人夫妻と文通を始めた。たまたま彼らが一九六四年一〇月に行われた東京オリンピックの最中に訪日する機会があった際に、幸いなことにあらかじめ購入するよう頼んでおいたエリーザベトの伝記本を入手することができた。その本がコルティ著『ELISABETH—Die seltsame Frau』である。初版本の発行年が筆者の生誕年と同じことも奇遇であった。当時、独和辞典を片手に、理解不十分ながらも、かなりの時間をかけてむさぼり読んだものである。

筆者がエリーザベトに惹かれた理由は、まずその美貌である。古今東西、美人といわれる女性はそれほどにも沢山挙げることができようが、彼女に関する幾多の肖像画や写真を集めた「写真集」を見て、その念を深めることができるのである。

第二に、快活で幸せになるべきはずであった少女が、一六歳で結婚し、歴史や社会や家庭の試練に翻弄され、一人の人間として幸せな家庭生活を送ることもできず、悲劇的な生涯を閉じたその悲劇性に対する関心によるものである。これは、何も無政府主義者と呼ばれた一介の平凡な人物に暗殺されたという悲劇を指すのではない。

どうも、筆者には、人生の成功者に対する関心よりも、不本意な生涯を送らざるを得なかったか、不

本意な終わり方をした人物に対する関心の方が強い。その原点は、国民学校一年生の遠足で世田谷区の松陰神社を訪れて知った吉田松陰の生涯であった。

最後に、エリーザベトがあの時代に、人生を、世界を、人間を、どのように感じ取ったのかということに大きな興味があったのである。彼女の心には、西欧的な天国か地獄かというキリスト教的な世界よりも、無意識的に、東洋的で仏教的な「無常の世界」に彷徨っていたのではないだろうか。筆者にはそう思えてならない。

もちろん、あの時代では、そのような仏教的知識も入ってこなかったであろうが、そのような世界を求めたにもかかわらず、見出し切れなかったのではないのだろうか。無理に結び付けるつもりはなく、また共通点もないかもしれないが、筆者には、西行法師、松尾芭蕉、種田山頭火などの世捨人の世界と通ずるものがあるのではないかと思うことがある。

筆者は、一九六八年に添乗員として初めてヴィーンを訪れ、六月一五日にホーフブルク宮殿で、津田正夫氏が紹介したあの有名なヴィンターハルター作のエリーザベトの肖像画に初めて対面することができた。その後も仕事で何度かヴィーンを訪れる機会があったが、やはりエリーザベトの足跡を丹念に辿るには、自費により私的に旅行するしかない。

そこで、一九八四年を第一回として二〇〇三年まで一〇回にわたり、一部はその他の観光をも兼ねてレンタカーによりエリーザベトゆかりの地、即ち、ポツセンホーフエン、バート・イシユル、ザルツカンマーグート全域、ヴィーン、ブダペスト、ゲデレー、マイヤーリング、ミュンヒェン、ノイシユヴァ

ンシユタイン城、コルフ島、メラノー、ジュネーヴなどに取材旅行することにした。ただ残念ながらポルトガル領のマデイラ島はまだ訪れずに残っている。

この旅行の中には、エリーザベトに関する、ヴェーンその他の都市で行われた展示会、ミュンヘンのエリーザベト博物館やブダペストの国立博物館の訪問から、オペレッタ、ミュージカルなどの鑑賞なども含まれている。その他にも、旅行中に購入したビデオソフトによる映画や東京でシルヴィ・ギエム独演のバレエ公演（「シシー」）も鑑賞している。もちろん、そのほかにもエリーザベトに関する著作をオーストリア、ドイツ、ハンガリー、日本で目につく限り集めたが、それらは巻末に参考文献として列挙したものである。

筆者は、エリーザベト伝記の古典ともいべきコルティ本（一九三四年の初版以来、筆者が所持している二冊目の版です）に三八版、総発行部数は二四万九千冊を数えている）や、現在のエリーザベト伝記の第一人者といわれているハーマン女史（この著者はエリーザベトに関してその他にも何冊か上梓している）に伍して書き上げるような力量も、また当時の当事者の記録や日記等（これら二人の伝記作家その他の作家の原書から引用させていただいたことを併記したい）を直接調べる手だてもない。また、それらの本をなぞるような安易な伝記を書いたのでは出版する意味がない。

筆者のエリーザベトの執筆に対する原点は、主題のように彼女の心の「世界」に踏み込み、また、副題を「私のオーストリア皇妃エリーザベト像」としたように、彼女の生い立ちからその死に至るまでの彼女の生きた時代背景をクローズアップさせながら、彼女の人生なり行動なり思考なりについて知ることであり、それを自分なりに表現することが本書の目的である。

エリーザベトは、落飾（出家）して修道尼僧になるようなことはできなかつたけれども、家庭を捨て夫や子供たちから離れて旅することにより、自分の人生、人間の生と死を模索するためにさすらった。それはエリーザベトの後半の人生のすべてであった。しかし、その回答を見つけ出すことができないまま、生涯を閉じたのである。

すでに類書がかなり多く出版されている。これらの先達の著書を参考に、特に彼女の内面に迫りたいというのが筆者の意図である。しかし、それについてどこまで踏み込めたかは自信がない。

しかし、それらの多くの先達の著者たちのドイツ語による原書（および一部その邦訳書も含む）では、この伝記の背景となる一九世紀のヨーロッパの歴史、神聖ローマ帝国の歴史、オーストリア帝国およびハプスブルク家の歴史などは、ヨーロッパ人にとっては自明の知識であるとの判断から、あまり詳しく述べられてはいない。本書はそれらを意識して、読者には少し煩わしく思われることも覚悟して、その背景となる歴史について、比較的詳しく書き加えたことも特色である。

なお、筆者は一九八一年八月に、津田正夫氏が氏の著作において思い違いされておられた箇所があったので、それを手紙で指摘したところ、目黒のご自宅に招かれる機会を得た。そのとき津田氏はご自身もシシーの伝記を書いてみたいと仰っておられたが、ついに実現されずに、一九八八年五月一七日に九〇歳のご高齢で死去されておられます。

筆者は、津田氏ご存命（駐アルゼンチン大使、日本新聞協会事務局長等を歴任）の間に、もし筆者がこの書を上梓できたら、序文又は推薦文を書いていただきたいと、もともと不可能に近いことと承知し

ているものの、そのような不遜な考えを持っていたが、それも実現できなかった。

また、同じ日墾協会の会員として、例会その他ハイキング等で理事の塚本哲也氏ご夫妻とも接触させていただいていた。塚本氏は既に『エリーザベート―ハプスブルク家最後の皇女』の著作で、大宅賞をお取りになっておられる。この同名のエリーザベトは、ルードルフとシユテファニーの間に生まれたエリーザベト直系の孫（一八八三年―一九六三年）であるが、時代の波で、最後には平民と結婚して七九歳の生涯を閉じている。

塚本氏は、エリーザベトに関して、書籍や雑誌やプログラム等に解説文その他数多く執筆され、左記に引用したブリギッテ・ハーマン著『エリーザベト』の邦訳本の「解説」で述べられておられるようにエリーザベトの伝記の執筆もなさっておられた。

（ハーマン女史に）お会いした時、この本の翻訳も話し合ったが、その時日本人には日本語で日本人向けに書いた方がいいのでは……と笑っていた。それぞれ歴史的背景がちがうので、わかりやすく書く工夫が必要だという意味だと解釈したが、いかにも歴史家らしい発言であった。私のエリーザベトは七合目ぐらいにさしかかったがまだできていない。

このように途中まで筆が進んでおられたが、その後、ご健康上の理由で中止されたことを直接伺い、上梓されることができなかったことは甚だ残念というほかない。

実は、エリーザベトを主題にした伝記は、邦訳されたものも何冊があるが、日本人の著者による伝記

については、一九九四年発刊の南川三治郎著『皇妃エリザベート（その名はシシー）』（八七ページ）  
だけであったが、二〇〇八年に藤本ひとみ女史が『皇妃エリザベート』（四一〇ページ）を出版したの  
が大部の最初のものとなった。同書と対等に論じるのはおこがましいが、自費出版とはいえ、津田正夫  
氏も塚本哲也氏も果たせなかつた一番乗り、筆者の本書が少し遅れをとつたのは残念であつた。

筆者は藤本氏の同書は購入したものの、敢えて意識してまだ一行も読んでいない。もつともこのとき  
には本書もすでに九割以上も筆が進んでおり、したがって、その影響は受けていない。本書は筆者の主  
観がかなり入っていると同時に、ルポルタージュ的な要素も加味したものであり、視点が異なると思  
うので安直な類書ではない自信はある。（増刷追記：筆者の〈評伝〉とは異質の〈歴史小説〉であつた）  
もともと独学ではじめたドイツ語であるが、正直なところ、この著作を執筆するに当たり、もつとド  
イツ語がスムーズに読めたらと、つくづく勉強不足を痛感せざるを得なかつたことを告白しなければな  
らない。力不足のため、折角集めた持てる資料のすべてを駆使することができなかつた憾みは残るが、  
不十分とは言え、そしてまた、自己満足に過ぎないかもしれないが、長年の願望が実現し、書き終えた  
充実感があることもたしかである。読者のご批判をいただければ幸いである。

最後に、執筆に当たって、在日オーストリア政府観光局（カパー写真の提供）及びハンガリー政府観  
光局（ハンガリー語についての助言もいただいた）にご協力いただいたことに深く感謝いたします。

二〇〇九年一月二四日、シシーの一七二年目の誕生日に

勝岡 只



- < 4 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」の巻末の「出典及び参考文献」のうちの一つとして掲載されているほか、B.Hamann の "Elisabeth" の Anmerkungen (注) にも散見される。後半は、B.Hamann, "Elisabeth", S.632 (脚注)。ハーマンはコルティの遺稿集からの引用とともに、ある伯爵夫人の『王妃の秘密』(1914年、ロンドン)とヴァラーゼー夫人の『エリーザベト皇妃と私』を取り上げている。同時に落馬事故のいくつもの傍証も列挙している。
- < 5 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.368 (脚注)
- < 6 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.228  
(フリッチェ、S.363 以下)
- < 7 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.215 (Festetics-Tagebuch, 5. Juni 1873. F.F.A.)
- < 8 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.228  
(フリッチェ、S.363 以下)
- < 9 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.231
- < 10 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.200-209
- < 11 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.233

## 参考 (3)

- < 1 > ・ "Elisabeth — Erzsébet" (Marchfeld Schlösserverein)
- < 2 > ・ "Operetten Wochen Bad Ischl 1992"

## 参考 (4)

- < 1 > ・ "Elisabeth — Erzsébet" (Marchfeld Schlösserverein)

本書では「ツィタ」(Zita)と表記した。

< 3 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.11

< 4 > ・ 他人の翻訳をあれこれ言うべきではないし、まして、翻訳が未熟な筆者がベテランの翻訳者の内容に嘴を挟むべきでないとは承知しているが、それにしてもあまりにも非情な意識ではないか。以下3件。邦訳文のページ、(原典のページ)、[状況説明]、「翻訳者意識」、(ドイツ語原文・筆者の逐語訳)の順。

①下巻 256(556) [フェシュテティチがエリーザベトをかばう場面] 「いろいろと言いつをでっち上げるのを聞いて、」( die vielen Entschuldigungen hörte, die sie für Elisabeth bereit hatte エリーザベトのために用意した言いつを聞いて、) / ②下巻 310 (602) [エリーザベトの死後について] 「彼女が亡くなったところで、困るようなことはなかった」( deren Weggang kaum eine Lücke hinterließ 彼女が亡くなっても、空白が埋まらないことにはならなかった) / ③下巻 312(603) [エリーザベトの埋葬場所について] 「エリーザベトの希望など、歯牙にもかけられなかったのは言うまでもない」( Selbstverständlich war keine Rede davon, Elisabeths Wunsch zu erfüllen エリーザベトの願いを実現することは、当然のことながら話題とならなかった)

< 5 > ・ アラン・スケッド「ハプスブルク帝国衰亡史」S.253-254  
(引用した原典の注は長いので省略)

< 6 > ・ アラン・スケッド「ハプスブルク帝国衰亡史」S.253  
(Goerg Marks "Der Fall Redl.")

< 7 > ・ アラン・スケッド「ハプスブルク帝国衰亡史」S.254  
(注5に同じ。引用した原典の注は長いので省略)

< 8 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.528 20歳になったルートルフが、意見を異にする連中と自由と平等について雑談したとき、貴族の悪口を言い口走ったときの言葉として、ケーヴェンヒュラー侯爵が記録している。

#### 参 考 (1)

< 1 > ・ S. ベラー「フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国」S.4-5

< 2 > ・ A. スケッド「ハプスブルク帝国の衰退と崩壊」S.253-254  
ベラーの邦訳書における引用では「～帝国の衰退と崩壊」とあるがスケッドの邦訳書のタイトルでは「～帝国衰亡史」となっている。原典は "The decline & fall of the Habsburg Empire"

< 3 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.367-368 (脚注)

< 29 > ・ E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.340 この発言の依って来る所は述べていないが、その前の文章にエリーザベトからマリー・ヴァレリーへの言として、1887年3月4日のものがあるので、このころの発言と思われる。

< 30 > ・ ibid. S.340 同上

< 31 > ・ Lola Chadio, "Achillio(Geschichte und Legende)"

## 第10章 「ゲンフ」

< 1 > ・ E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.437

(Franz Joseph an Elisabeth, Ischl, 17. Juli 1898. E.A.S.W.)

< 2 > ・ ibid. S.443 (Zeugenaussage Jacques Sartoris in Lausanne, A. G.G.)

< 3 > ・ ibid. S.445 (Franz Joseph an Elisabeth, Schönbrunn, 1. September 1898. E.A.S.W.)

< 4 > ・ ibid. S.446 (Franz Joseph an Elisabeth, Schönbrunn, 9. September 1898. E.A.S.W.)

< 5 > ・ ibid. S.448-449 (Gräfin Sztáray, aa.O.S. 231-232)

< 6 > ・ ibid. S.451-455

< 7 > ・ ibid. S.461 (Berichte der Ärzte Prof. August Reverdin und A. Megévand, Akt Nr. 23 und Nr. 23 b, vom 11. und 12. September 1898, A.G.G., sowie das Gutachten des Hofrates Dr. Ritter von Bielka über die Krankheitsgeschichte der Kaiserin, Wien, Staatsarchiv.)

< 8 > ・ M.Valerie,"Das Tagebuch", S.309

< 9 > ・ E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.463 (M.Valerie の日記そのものには記載がない)

< 10 > ・ ibid. S.463

< 11 > ・ ibid. S.463 (Marie Festetics an Ida Ferenczy, Söjtör, 22. Oktober 1898. Farkas-Archiv)

< 12 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベトの真実」S.225

< 13 > ・ B.Hamann,"Elisabeth", S.604 フランツ・ヨーゼフ声明文の写真コピーから引用。

< 14 > ・ マルタ・シャート 「皇妃エリザベトの生涯」S.128-129

< 15 > ・ E.Niederhauser "Attentat auf Elisabeth" S.79-80

< 16 > ・ E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.209-210

## 終章

< 1 > ・ B.Hamann,"Elisabeth", S.609

< 2 > ・ グリセール・ペカール 「チタ」S.366-367

- < 3 > · C. Christmanos "Elisabeth von Österreich, Die Tagesblätter" S.77
- < 4 > · B.Hamann,"Elisabeth", S.577  
(HHStA.P.A. Kairo, 23. November 1891)
- < 5 > · ibid. S.414 (Philipp Fürst zu Eulenburg-Hertefeld, Das Ende Ludwigs II . und andere Erlebnisse, I, Leipzig 1934, 96)
- < 6 > · E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.397 (Marie Festetics an Ida Ferenczy. 1. September 1890. Farkas-Archiv)
- < 7 > · ibid. S.398 (Freiherr von Nopcsa an Ida Ferenczy. Oran, 23. September 1890. Farkas-Archiv)
- < 8 > · ibid. S.398 これは出典が記載されていないが、前後の引用からマリー・フェシュテティチがイーダ・フェレンツィに当てた手紙を、Farkas-Archiv に記録したものであると思われる。
- < 9 > · ibid. S.434-435
- < 10 > · ibid. S.199-200 (Festetics-Tagebuch, 23. Februar 1872. F. F.A.)
- < 11 > · ibid. S.199-200 (Festetics-Tagebuch, Meran, 17. März 1872. F.F.A.)
- < 12 > · ibid. S.396 (Marie Festetics an Ida Ferenczy, Paris, 27. August 1890 <Poststempel> . Farkas-Archiv)
- < 13 > · ibid. S.398 (Marie Festetics an Ida Ferenczy, Tenéz, Afrika, 25. September 1890. Farkas-Archiv)
- < 14 > · ibid. S.427
- < 15 > · ibid. S.421-422
- < 16 > · ibid. S.112 (Kaiserin Elisabeth an John Collett, Wien, 16. April 1864. E.A.S.W.)
- < 17 > · B.Hamann,"Elisabeth", S.437
- < 18 > · M.Valerie,"Das Tagebuch", S.306
- < 19 > · E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.436
- < 20 > · M.Valerie,"Das Tagebuch", S.198. Mai 24. 1889
- < 21 > · ibid. S.224. Juni 17. 1990
- < 22 > · E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.433 (Irma Gräfin Sztáray, a.a.O.S.179)
- < 23 > · 峰島雄旭 「西洋は仏教をどうとらえるか」 S.172-174, 182-184
- < 24 > · バートランド・ラッセル 「西洋哲学史 ( 下巻 ) 」 S. 229-236
- < 25 > · 鈴木大拙 「禪」 S.127
- < 26 > · 鈴木大拙 「禪」 S.199
- < 27 > · E.C.C.Corti,"Elisabeth", S.178 (A. Roland, Kaiser Franz Joseph und sein Haus, Wien 1879, S. 48, und Jókai Mór, Emlékeim, 1875)
- < 28 > · B.Hamann,"Elisabeth", S.253

< 13 > ・ Cartographia, "Gödöllö — königliches Schloß"

< 14 > ・ Polyglott-Reiseführer "Ungarn" S.56

### 第7章 「フェッセン」

< 1 > ・ M.Valerie, "Das Tagebuch", S.78 この書では、ルートヴィヒ二世と共に溺死した医師の名をグッテン ( Gutten ) としているが、グッデン ( Gudden ) が正しい。

< 2 > ・ B.Hamann, "Elisabeth" S.520-521 (M. Valerie "Tagebuch", 6. Juli 1899) 第8章注11を参照。

< 3 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.360

< 4 > ・ B.Hamann, "Elisabeth" S.451

< 5 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.407-408

< 6 > ・ M.Valerie, "Das Tagebuch", S.308

< 7 > ・ 「ノイシュヴァンシュタイン城とホーエンシュヴァンガウ城」(日本語版)

< 8 > ・ "Schloss Linderhof" S.3

### 第8章 「マイヤーリング」

< 1 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S. 92, 119-121

< 2 > ・ ibid. S.121 (Eigenhändiger Brief der Kaiserin ohne Aufschrift, datiert Ischl, 24. August 1865. E.A.S.W.)

< 3 > ・ ibid. S.368

< 4 > ・ ibid. S.369 (長すぎるため脚注省略)

< 5 > ・ M.Valerie, "Das Tagebuch", S.172

< 6 > ・ ibid. S.306

< 7 > ・ S. ベラー 「フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国」 S.42-44

< 8 > ・ M.Valerie, "Das Tagebuch", S.307

< 9 > ・ ibid. S.204

< 10 > ・ ibid. S.314

< 11 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.521 (M.Valerie, "Das Tagebuch", 6. Juli 1899) 筆者所有の "Das Tagebuch" は1899年4月16日までの分しか掲載されていないため、ハーマン書から借用。

< 12 > ・ ibid. S.521 (M.Valerie, "Das Tagebuch", 11. Juli 1899) 借用については同前。

### 第9章 「コルフ」

< 1 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.401

(Elisabeth an Valerie, Gasturi, Korfu, am 22. April 1891. E.A.S.W.)

< 2 > ・ ibid. S.408 (Christomanos Tagebuchblätter, S.228,253,254und 267)

- < 13 > ・ Marie Valerie, "Das Tagebuch der Lieblingstochter von Kaiserin Elisabeth", S.156  
(以下 M.Valerie, "Das Tagebuch" と略す)
- < 14 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.239 (Elisabeth an ihre Mutter, Ventnor, 15. August 1874. Abschrift E.A.S.W.)
- < 15 > ・ ibid. S.426
- < 16 > ・ "Kaiserin Elisabeth <Das poetische Tagebuch>" (Herausgegeben von Brigitte Hamann)
- < 17 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.403 (脚注)  
3つあるうち、2番目の引用原典は、C.Christomanos, "Elisabeth von Österreich <Die Tagebuchblätter>" による。
- < 18 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.289
- < 19 > ・ ibid. S.573,576,578,582,590. (ハーマンの諸語)
- < 20 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.247 (Festetics-Tagebuch, 5. August 1875. F.F.A.)
- < 21 > ・ ibid. S.202 (Festetics-Tagebuch, 29. Juni 1872. F.F.A.)
- < 22 > ・ ibid. S.200 (Festetics-Tagebuch, Meran, 17. März 1872. F. F.A.)
- < 23 > ・ ibid. S.273-274 (Festetics-Tagebuch, 14. September 1979)
- < 24 > ・ ibid. S.221 (Festetics-Tagebuch, Meran, 13. Jänner 1874. F.F.A.)

## 第6章 「ゲデレー」

- < 1 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.119 (Crenneville, Ofen, 9. Mai 1857)
- < 2 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.243
- < 3 > ・ Cartographia, "Gödöllö — königliches Schloß"
- < 4 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.237 (Elisabeth an ihre Mutter, 15. August 1874. E.A.S.W.)
- < 5 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.343 (John Welcome, Die Kaiserin hinter der Meute, Wien 1975, 99)
- < 6 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.255 (Festetics-Tagebuch, 14. März 1876. F.F.A.)
- < 7 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.347-378
- < 8 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.279 (Elisabeth an ihre Mutter, Summerhill, 29. Februar 1880. Abschrift E.A.S.W.)
- < 9 > ・ ibid.
- < 10 > ・ 「クロニク世界全史」 S.853
- < 11 > ・ B.Hamann, "Elisabeth, Bilder einer Kaiserin", S.124-125
- < 12 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.82-85

- < 3 > ・ ibid. S.196 (Tagebucheintragung der Gräfin Marie Festetics vom 21. Dezember 1871)
- < 4 > ・ ibid. S.202 (Festetics-Tagebuch, Ischl, 29. Juni 1872. F. F.A.)
- < 5 > ・ ibid. S.127
- < 6 > ・ ibid. S.127-128
- < 7 > ・ ibid. S.126
- < 8 > ・ Brigitte Hamann, "Elisabeth", S.226  
(以下 B.Hamann, "Elisabeth" と略す)
- < 9 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.392 (Tagebucheintragung vom 18. Februar 1890. T.E.V.S.)
- < 10 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.594
- < 11 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.424 (Elisabeth an Valerie, Ofen, 3. April 1896. E.A.S.W.)。原典では引用の日付が<sup>4</sup>4月3日となっているが<sup>5</sup>、手紙の内容からすると4月30日が正しい。
- < 12 > ・ ibid. S.424-425 (Nach dem im <Pesti Hirlap> am 10. Juni 1896 erschienenen unsignierte Artikel)

#### 第5章 「マデイラ」

- < 1 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.155 (Grünne, Funchal, 19. Dezember 1860)
- < 2 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.101
- < 3 > ・ ibid. S.116 (Königin Marie von Sachsen an Prinzessin Mary Hamilton, Dresden.14. Februar 1865. F.F.A.)
- < 4 > ・ ibid. S.220 (Festetics-Tagebuch, Wien, 3. Dezember 1873. F.F.A.)
- < 5 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.311 (Festetics 23. April 1873)
- < 6 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.241-242 (Festetics-Tagebuch, 10. Jänner 1875. F.F.A.)
- < 7 > ・ ibid. S.217. <Mon Dieu, qu'elle est belle!>  
(原典ではフランス語で記述)
- < 8 > ・ ibid. S.218 (Festetics-Tagebuch, Schönbrunn, 9. und 12. August 1873. F.F.A.)
- < 9 > ・ B.Hamann, "Elisabeth", S.374-375
- < 10 > ・ ibid. S.375
- < 11 > ・ "Schwalbe, lieb' mir deine Flügel — Die Reisen der Kaiserin Elisabeth", S.129
- < 12 > ・ G.P. ビヒラー 「皇妃エリザベートの真実」 S.163

## 【注】

- ・ 出典として参考にした文献のうち、ドイツ語の原典からの引用については、筆者拙訳による。
- ・ 原典が引用している当事者等のオリジナルの書簡等については原典のあとにカッコ内に明記した。
- ・ 発行年及び発行出版社については、「出典及び参考文献」のページ要参照。
- ・ 下記注のうち、著者の「名」及び「ミドルネーム」等については二回目以降イニシアルに省略した。
- ・ 「S.」(Seite) はページを表す。
- ・ 資料 Egon Caesar Conte Corti, "Elisabeth" については、第 38 版から引用した。

## 序 章

(な し)

### 第 1 章 「ポッセンホーフエン」

(な し)

### 第 2 章 「バート・イシュル」

< 1 > ・ 矢田俊隆 「ハプスブルク帝国史研究」 S.2

< 2 > ・ Egon Caesar Conte Corti, "Elisabeth", S.31-32

(以下, E.C.C.Corti, "Elisabeth" と略す)

< 3 > ・ Eder Gaa, "Die Sommerresidenz der kaiserischen Familie"

### 第 3 章 「ヴィーン」

< 1 > ・ E. Niederhauser "Attentat auf Elisabeth" S.54-55 ほか

### 第 4 章 「ブダベスト」

< 1 > ・ 伯爵令嬢の原文用語は Gräfin である。伯爵 Graf の語尾に -in を付すと伯爵夫人 ("a" はウムラウトする) となる。大方の翻訳書では未婚であることが分かっているにもかかわらず「伯爵夫人」と訳している例をみるが、それではおかしいので本書ではあえて「令嬢」とした。なお、戦前の日本でも授与されていた「公・侯・伯・子・男」爵などの爵位は、後例でも見られるように、当時のドイツやオーストリアにおいては、正規のものとは別に容易に授与(?)され、呼称されることもあったようである。(「ハプスブルク家とウィーン百科」 S.35)

< 2 > ・ E.C.C.Corti, "Elisabeth", S.192 (Tagebucheintragung der Gräfin Marie Festetics vom 16., 17. und 18. März 1871)



- 劇場プログラム "Elisabeth" (Theater an der Wien, 1992 年)
- 劇場プログラム 『The Tokyo Ballet <Japan Tour 1995>』  
 (財団法人 日本舞台芸術振興会、1995 年)
- 劇場プログラム 『エリザベート<愛と死の輪舞>』  
 (宝塚歌劇雪組公演、東京宝塚劇場、1996 年)
- 劇場プログラム 『エリザベート』  
 (帝国劇場、東宝株式会社演劇部、2000 年)
- リーフレット "Golf Hotel Kaiserin Elisabeth" (同ホテル発行)
- リーフレット "Passauer Glasmuseum" (同博物館発行)
- ビデオ・映画 『双頭の鷲 = L'aigle à deux têtes』  
 (フランス映画、ソニー、1947 年)
- ビデオ・映画 『うたかたの恋 = Mayerling 』  
 (フランス映画、個人収録、1936 年)
- ビデオ・映画 『晩鐘 = Kronprinz Rudolfs letzte Liebe』  
 (オーストリア、Taurus Video、1956 年)
- ビデオ・映画 『うたかたの恋 = Mayerling 』  
 (フランス映画、個人収録、1969 年)
- ビデオ・映画 『プリンセス・シシー = Sissi 』  
 (オーストリア・西ドイツ、Taurus Video、1955 年)
- ビデオ・映画 『シシー = Sisi <Die junge Kaiserin>』  
 (オーストリア・西ドイツ、Taurus Video、1956 年)
- ビデオ・映画 『シシー = Sisi <Schicksalsjahre einer Kaiserin>』  
 (オーストリア・西ドイツ、Taurus Video、1957 年)
- ビデオ・バレエ 『マイヤーリング = Mayerling 』  
 (英国ロイヤルバレエ、個人収録、1994 年)
- ビデオ・ミュージカル 『エリザベート』  
 (宝塚歌劇星組公演、宝塚クリエイティブアーツ、1992 年)
- ビデオ・『Kaiserin Elisabeth <Die Griechin> 』  
 (Stürgkh Film Vienna, Ein Film von Hans Dichand)

注 = ① [注 1] の第 35 版と第 38 版とでは 1 行の字数幅が異なるため、第 38 版を原典とした。② [注 2] の第 7 版と第 11 版はページ割りが同じ。[注 5] はその英語版。[注 7] は [注 2] の翻訳版であるが、構成は [注 5] と同じ。③ [注 3] は、同名の上の書と編集内容が異なる。④ [注 4] は、その次の書とまったく同じ内容であるが、出版社が異なる。[注 6] は [注 4] の翻訳版。

『皇妃エリザベートの真実』

(ガブリエレ・プラシユル=ピツヒラー、集英社・新書、1998)

『皇后エリザベートの生涯』

(マルタ・シャート、集英社・文庫、2000)

『エリザベート<栄光と悲劇>』〔注6〕

(マルティン・シェーファー、刀水書房、2000)

『フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国』

(ステイーヴン・ベラー、刀水書房、2001)

『エリーザベト<美しき皇妃の伝説>上・下』〔注7〕

(ブリギッテ・ハーマン、朝日新聞社、2001)

『ウィenna・ワルツ<ハプスブルク帝国の遺産>』

(NHKブックス、加藤雅彦、2003)

『映画都市ウィーンの光芒<オーストリア映画全史>』

(瀬川裕司、青土社、2003)

『「うたかたの恋」の真実』(仲晃、青灯社、2005)

『マリー・ルイーゼ』(塚本哲也、文藝春秋、2006)

『種田山頭火』(村上護、ミネルヴァ書房、2006)

『西洋の哲学・東洋の思想』(小坂国継、講談社、2008)

『ヴェルサイユ条約』(牧野雅彦、中央公論社・新書、2009)

『皇妃エリザベート』(藤本ひとみ、講談社、2009)

『ノイシュヴァンシュタイン城とホーエンシュヴァンガウ城』

(日本語版。Verlag Kienberger)

<そ の 他>

雑誌『キネマ旬報』(第238号、1959年8月上旬号、キネマ旬報社)

映画プログラム『双頭の鷲』(有楽座、東宝株式会社、1953年)

映画プログラム『プリンセス・シシー』

(ニュー東宝、外国映画出版社、1959年)

映画プログラム『うたかたの恋』

(ピカデリー、松竹株式会社事業開発部、1969年)

映画プログラム『ルードウィヒ』

(岩波ホール、岩波ホール、1980年)

劇場プログラム“The Royal Ballet”

(英国ロイヤルバレエ団、日本舞台芸術振興会、1987年)

劇場プログラム“Operetten Wochen Bad Ischl 1992”(Operettengemeinde, Stadtgemeinde und Touristemusikverband)

- 『ハプスブルク家の人々』（菊地良生、新人物往来社、1993）
- 『歴史のなかのウィーン』  
（増谷英樹、日本エディタースクール出版部、1993）
- 『ハプスブルク家の謎』（新人物往来社、1994）
- 『ハプスブルク家の女たち』（海野弘、学習研究社、1994）
- 『皇妃エリザベート＜その名はシシィ＞』  
（南川三治郎、河出書房新社、1994）
- 『ハプスブルク歴史物語』（倉田稔、日本放送出版協会、1994）
- 『フランツ・ヨーゼフ＜ハプスブルク「最後」の皇帝＞』  
（江村洋、東京書籍、1994）
- 『クロニク「世界全史」』（講談社、1994）
- 『図説・ハプスブルク帝国』（加藤雅彦、河出書房新社、1995）
- 『チタ＜ハプスブルク家最後の皇妃＞』  
（グリセール・ペカール、新書館、1995）
- 『白い道』（瀬戸内寂聴、講談社、1995）
- 『西行花伝』（辻邦生、新潮社、1995）
- 『ロミー・シュナイダー事件』  
（ミヒャエル・ユルクス、集英社、1996）
- 『わが青春のハプスブルク＜皇妃エリザベートとその時代＞』  
（塚本哲也、文芸春秋、1996）
- 『ハプスブルク帝国衰亡史＜千年王国の光と影＞』  
（アラン・スケッド、原書房、1996）
- 『エリザベート＜愛と死の輪舞＞』〔原作＝ミヒャエル・クンツェ〕  
（小池修一郎、角川書店、1996／同文庫版、1998）
- 『総集編・ハプスブルク家とウィーン百科』（新人物往来社、1996）
- 『皇妃エリザベート』  
（マリールイゼ・フォン・インゲンハイム、集英社・文庫、1996）
- 『皇妃エリザベート＜ハプスブルクの涙＞』  
（マリールイゼ・フォン・インゲンハイム、集英社・文庫、1996）
- 『皇妃エリザベート＜ハプスブルクの美神＞』  
（カトリーヌ・クレマン、創元社・双書、1997）
- 『ウィーン＜「よそもの」がつくった都市＞』  
（上田浩二、筑摩書房・新書、1997）
- 『ハプスブルク帝国を旅する』（加賀美雅弘、講談社・新書、1997）
- 『バレリーナは語る』（ダンスマガジン編、新書館、1997）
- 『ワスプ (WASP)』（越智道雄、中央公論社・新書、1998）

- 『世界大戦原因の研究』(鹿島守之助、鹿島研究所、1934)
- 『世界外交史(中巻)』(田村幸策、有斐閣、1951)
- 『ドイツ国民に告ぐ』(J.G. フィヒテ、法政大学出版局、1953)
- 『ウィーン物語』(津田正夫、河出書房・新書、1955)
- 『西洋哲学史(下巻)』  
(バートランド・ラッセル、みすず書房、1956)
- 『会議は踊る』(江上照彦、南窓社、1967)
- 『ウィーンはなやかな日々』(M. プリヨン、音楽之友社、1972)
- 『ヨーロッパ映画作品全集』(キネマ旬報社、1972)
- 『ウィーン<都市の詩学>』(池内紀、美術出版社、1973)
- 『世界映画人名辞典・男女優編』(キネマ旬報社、1974)
- 『ハプスブルク帝国史研究』(矢田俊隆、岩波書店、1977)
- 『王冠と恋』(加瀬俊一、文芸春秋、1980)
- 『ルートヴィヒ』(村田経和、劇書房、1981)
- 『ハプスブルク家<ヨーロッパの一王朝の歴史>』  
(アーダム・ヴァントルツカ、谷沢書房、1981)
- 『ルートヴィヒⅡ世』(須永朝彦、新書館、1982)
- 『ハプスブルク帝国史入門』(ハンス・コーン、恒星社、1982)
- 『王の夢・ルートヴィヒⅡ世』(篠山紀信・多木浩二、小学館、1983)
- 『世紀末ウィーン<政治と文化>』  
(カール E. ショースキー、岩波書店、1983)
- 『麗しの皇妃エリザベト』(ジャン・デ・カール、中央公論社、1984)
- 『黄昏のウィーン』(須永朝彦、新書館、1986)
- 『ハプスブルク帝国 - 1809 ~ 1918』  
(A. J. P. テイラー、筑摩書房、1987)
- 『西洋は仏教をどうとらえるか』(峰島旭雄、東京書籍、1987)
- 『ウィーンのホーフブルク王宮』(ウィーン王宮管理局、1988)
- 『西行』(白州正子、新潮社、1988)
- 『ハプスブルク家』(江村洋、講談社・新書、1990)
- 『ウィーン物語』(宝木範義、新潮社、1991)
- 『ブダペストの世紀末』(ジョン・ルカーチ、白水社、1991)
- 『エリザベト<ハプスブルク家最後の皇女>』  
(塚本哲也、文芸春秋、1992)
- 『ウィーン<世界の都市の物語>』(森本哲郎、文芸春秋、1992)
- 『ハプスブルク家の女たち』(江村洋、講談社・新書、1993)
- 『ハプスブルク物語』(池内修・南川三治郎、新潮社、1993)

- “Sissi <Das legendäre Leben einer Kaiserin>”  
 (Nicole Avril, Droemersch Verlag, München, 1995)
- “Auf Sissi Spuren in Madeira <Eine Reiselektüre>”  
 (Doris Falkenau, Verlag Österreich, Wien, 1996)
- “Gödöllő <Königliches Schloß>” (Cartographia, Budapest, 1995)
- “Sisi <Die geheimen Schönheitsrezept der Kaiserin und des Hofes>”  
 (Chris Stadlaender, Wilhelm Heyne Verlag, München, 1995)
- “Sisi's Wege <Baden erlebt seine Kaiserin>”  
 (Katalogblätter des Rollett-Museums Baden, Nr.13, Baden, 1998)
- “Der Sissi Almanach” (Daniel Baumann, Eichborn, Berlin, 1996)
- “Sissi Melodien <Die Musik der Kaiserin Elisabeth>”  
 (G. Bruckner / G. Praschl-Bichler, Leopold Stocker Verlag, Graz, 1998)
- “The reluctant empress <A biography of empress Elisabeth of Austria>”  
 (B. Hamann, Ullstein Buchverlag, Berlin, 1982)  
 ※注1の英語版。ドイツ語版より一部割愛されている。〔注5〕
- “Sissi <The tragic empress=The story of Elisabeth of Austria>”  
 (Ludwig Merkle, Bruckmann Verlag, München, 1996)
- “A Gödöllői kastély <Das Schloß von Gödöllő>”  
 (Faludi Ildikó, Gödöllői Királyi Kastélymúzeum, 1998)  
 ※洪・英・独・仏の4カ国語による説明
- “Sissi <Beauté et Tragédies 1898-1998>”  
 (Médiacom S.A. / SAM S.A., Genève, Suisse, 1998)
- “Reiseführer <Ungarn>” (Polyglott, München, 1977/1978)
- “Southern Bavaria” (Karl Baedeker, Hamburg, 1953)
- “Elisabeth = Erzsébet <Majestät, Mensch und Mythos>”  
 (Marchfelder Schloßerverein, 1993)
- “Sisi-Museum <zum Gedenken an Kaiserin Elisabeth von Österreich>”  
 (Zentrum für Aussergewöhnliche Museen, München)
- “Erzsébet <Ausztia császárnéja – Magyarország Királynéja>”  
 (Georg Kugler, Bonechi Verlag Styria, 1999)
- “Schloss Linderhof” (Bayerische Verwaltung der Staatlichen Schlösser,  
 Garten und Seen, München)
- “Achillio <Geschichte und Legende>” (N. Papathanaciou)

<初版発刊年順> (翻訳書の訳者名は省略)

『世界地理風俗大系・15 <中歐諸国>』(新交社、1929)

- "Elisabeth <Schönheit für die Ewigkeit — Die Zeitschrift zur Ausstellung>"  
(Vernissage Verlag, Heidelberg, 1997)
- "Sophie <Die heimliche Kaiserin>" (G. Holler, Amalthea Verlag, Wien, 1993)
- "Franz Joseph" (E.C.C.Corti, Verlag Styria, Glaz, 1979)
- "Die Sommerresidenz der kaiserlichen Familie"  
(E. Gaa, GAA Verlag, Nürnberg)
- "Ischl unter Kaiser Franz Joseph I "  
(P. Huemer, Blick Verlag, Bad Ischl, 1980)
- "Hermesvilla <Lainzer Tiergarten>"  
(Im Eigenverlag der Museen der Stadt Wien, 1986)
- "Diana & Sisi <Zwei Frauen — ein Schicksal>"  
(Renate Daimler, Deuticke Verlagsgesellschaft, Wien, 1998)
- "Sissi <Glanz und Tragik einer Kaiserin, Eine Bildbiographie>"  
(Martin Schäfer, Wilhelm Heyne Verlag, München, 1997) [注 4 ]
- "Sissi <Glanz und Tragik einer Kaiserin, Eine Bildbiographie>"  
(Martin Schäfer, Tosa Verlag, Wien, 1998)
- "Die letzte Griechin <Kaiserin Elisabeth auf Korfu>"  
(Robert Holzschuh, Eduard Krem-Bardischewski Verlag,  
Aschaffenburg, 1996)
- "Sissi, Das Ungarmädel <Tatsachen - Irrtümer - Vermutungen>"  
(Anni Stern-Brandenberg, Verlag Österreich, Wien, 1998)
- "Elisabeth <Kaiserin von Österreich, Königin von Ungarn>"  
(H. Seemann & C. Lunzer, Album, Wien, 1998)
- "Kaiserin Elisabeth <Mythos und Wahrheit>"  
(Gerti Senger und Walter Hoffmann, Verlag Carl Ueberreuter, Wien,  
1996)
- "Elisabeth <Das Buch ihres Lebens>"  
(Johannes Thiele, Paul List Verlag, München, 1996)
- "Sisi <Tagebuch einer Kaiserin>"  
(Angeles Cano, Wilhelm Goldmann Verlag, München, 1995)
- "Kaiserin Elisabeth von Österreich 1837-1898 (Der Hahnbaum<Spezial>)"  
(Dieter Neumann, Kurverband Bad Ischl, 1997)
- "Elisabeth <Stationen ihres Lebens>"  
(B. Hamann und E. Hassmann, Verlag Christian Brandstätter, Wien,  
1998)
- "Sissi" (B. Hamann, Benedikt Taschen Verlag, Köln, 1997)

## 出典及び参考文献

以下はすべて筆者が所蔵するもので、出典文献として使用していないものも含む。

<順不同>

"Elisabeth <Die seltsame Frau>"〔注1〕

(Egon Caesar Conte Corti, Verlag Styria, Glaz, 1934. 35.Auflage & 38. Auflage)

"Elisabeth <Kaiserin wider Willen>"〔注2〕

(Brigitte Hamann, Amalthea Verlag, Wien, 1981. 7. Auflage, 1982 & 11.Auflage 1992)

"Das Tagebuch der Lieblingstochter von Kaiserin Elisabeth von Österreich"

(Marie Valerie, M. u. H. Schad, F.A. Herbig Verlagsbuchhandlung, München, 1998)

"Elisabeth von Österreich" (Joan Haslip, Biederstein Verlag, München, 1964)

"Kaiserin Elisabeth <Das poetische Tagebuch>"

(Herausgegeben von Brigitte Hamann, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 1984)

"Elisabeth von Österreich <Die Tagesbuchblätter>"

(Constantin Christomanos, Insel Verlag, Frankfurt a. M., 1993)

"Sissi <Die Geschichte der Kaiserin Elisabeth von Österreich>"

(R. Chevriér / P. Waleffe, Amalthea Verlag, Wien, 1970)

"Elisabeth <Bilder einer Kaiserin>"

(B. Hamann, Amalthea Verlag, Wien, 1982)

"Elisabeth <Bilder einer Kaiserin>"〔注3〕 (B. Hamann, Amalthea Verlag,

Wien, 1986 & 1992)

"Attentat auf Elisabeth, Königin von Ungarn"

(Emil Niederhauser, Druckerei Franklin, Budapest, 1990)

"Sissi <Das Leben der Kaiserin Elisabeth von Österreich>"

(R. Chevriér, Parkland Verlag, Stuttgart 1987)

"Die Reisen der Kaiserin Elisabeth <Schwalbe, Lieb' mir deine Flügel>"

(Peter Müller, Jugend & Volk Verlag, Wien, 1991)

"Elisabeth von Österreich <Momente aus dem Leben einer Kunstfigur>"

(Julaine Vogel, Verlag Christian Brandstätter, Wien, 1992)

### 【著者略歴】

勝岡 只 (かつおか ただし)

1934年東京生まれ。1953年日本交通公社入社、国内・海外・添乗業務のほか中央研修所講師、1996年退社。

講師歴：日本旅行業協会・指定講習、国際観光文化学院（常勤講師）、（株）交通公社教育開発（講師兼務）、立教大学観光研究所・公開講座、NHK生涯学習、東京交通短大（非常勤講師）、帝京大学・集中講義など。

著書：『旅行業入門②<手続実務編>』『旅行業入門③<添乗業務編>』『旅行業入門④<商品企画編>』『海外観光資源ハンドブック』『国内観光資源ハンドブック』（いずれも中央書院刊）

### 【表紙カバー写真説明】

ハンガリー王妃戴冠式の衣装を着たエリーザベト（ジョルジュ・ラップ画 1867年）

写真提供：オーストリア政府観光局・撮影者=Trumler

## シシーの世界

〈私家版〉評伝 私のオーストリア皇妃エリーザベト像

発行日 2009年12月24日発行

2014年12月24日増刷（一部修正・追記及び再校正を行なった）

2022年8月24日改訂（Kindle Direct Publishing用）

著者 勝岡 只

制作 Kプランニング

〒306-0023 茨城県古河市本町 4-7-1-1-305